

山口大学大学院東アジア研究科
博士論文

中国と日本の社会的問題解決方略
に関する発達心理学的研究

2008 年 3 月

羅 蓮 萍

学 位 論 文 要 旨

人間は、社会生活の中で常に様々な他者と関わり、種々の社会的葛藤場面に直面しつつ、それらの葛藤を解決しながら生きている。

社会的問題解決とは、社会的相互作用の中で「自己の人格的目的を達成するための自己主張及び自己抑制の過程」である（東・野辺地，1992）。自己主張及び自己抑制に関する比較文化的研究は、主として日米間とか日英間といった東洋と西洋の文化的枠組みの中で展開されてきたが、同じ東洋文化圏に属する国間における比較研究はあまり行われていない（徐，2004）。また、従来、こうした比較文化的研究はほとんど横断的なものであり、縦断的な視点で考察したものはあまり見られない（羅・堂野，2005）。

本研究は、幼児期、児童期、青年前期、青年中期、青年後期という発達段階に位置する、中国と日本の幼稚園年長児、小学校4年生、中学2年生、高校2年生、及び大学3年生において、日中それぞれに、各発達段階において約500人（幼稚園年長児は約300人）を対象に、仮想的な対人葛藤場面を設定し、各発達段階における社会的問題解決方略について比較分析した。子どもの社会的問題解決方略に影響を与える文化的社会的背景要因として、親子関係、学校生活（幼稚園生活）と葛藤解決目標についても比較分析した。

比較検討の結果、以下のことが明らかになった。

（1）社会的問題解決方略について

① 発達に伴い、間接的攻撃、主張的方略及び抑制的方略が高くなる傾向が見られる。中学生になると、対人葛藤の問題の重要性に対する認識が最も高くなっており、直接的攻撃や直接的主張が高くなる傾向が見られる。

② 直接的攻撃、先生頼りにおいて、男子が女子より高く、間接的攻撃、主張的方略、抑制的方略において、女子が男子より高くなっている。発達に伴い、性差が多く見られ、女子の社会的問題解決における社会性が男子より発達している。

③ 場面によって、社会的問題解決方略の使用傾向が大きく異なる。

④ 社会的問題解決方略の使用傾向は、中国と日本の間で大きく異なっている。

各方略の使用をみると、騒ぎ回避抑制は中国のほうが高く、そのほかの直接的攻撃、断絶攻撃、直接的主張、間接的主張、関係重視抑制、先生頼り、ジャンケンの方略において、日本のほうが高い。日本の対象者のほうが積極的に問題解決したり、自己防衛したり、相手との関係を保つため抑制したりする傾向が強いと見られる。

各場面で最も高くなっている方略は日中間大きく異なっている。持物の損害場面においては、中国では非故意性抑制、日本では間接的主張、名誉の侵害場面においては、中国では直接的主張、日本では断絶的攻撃が最も高くなっている。先生との意見対立場面においては、中国では直接的主張と他人を推薦する間接的主張が極めて近い値で最も高く、日本では直接的主張が最も高くなっている。

全体的に見ると、中国の対象者は相対的に直接的方略を好み、日本の対象者は相対的に間接的方略を好む傾向が窺える。

⑤ 場面の要因を統制したうえ、社会的問題解決方略に最も影響を与えているのは国の要因であり、続いては小学生～中学生にかけての発達、最後には高校生・大学生における性差である。

言い換えれば、発達や性差より、中国と日本の社会的規範意識や価値観が最も子どもの問題解決行動に影響を与えていると言えよう。

⑥ 葛藤を重要と判断するほど、攻撃性、主張性が高く、自己抑制が低くなる。中国における重要度と社会的問題解決方略との相関が日本より低い。

⑦ 最もよい方略の選択と実際を取る方略の傾向が類似しているが、日本においては、実際を取る方略は、最もよいと選択された方略より、対決を回避している傾向が見られる。

(2) 親子関係について

中国では「両親がともに参加する子育て」、日本では「母親を中心とした子育て」の図式が見られた。子どもが男子であるか女子であるかによる養育態度の違いは中国では顕著でないが、日本では男子に厳しく女子に甘いという傾向がみられる。

子どもの発達に伴う養育態度の変化については、中国では、発達に伴って子どもへの対応が厳しい面も甘い面も同様に減少する傾向にあるが、そのバランスが崩れず、全体としての態度や考え方には各発達段階を通して大きな変動はみられなく、一貫した態度で接している。日本では、甘さの側面において、中国と同様に、発達に伴って減少しているが、厳しさの側面においては中学生に対する働きかけが最も多く、発達段階の特質に合わせた対応となっているようである。

養育態度の多くの下位尺度においては、中国のほうが高くなっており、特に「期待、干渉、心配」における差は顕著である。中国では日本より様々な面で子どもに対して関与することが多く、子どももそれを明確に認識していると思われる。

親の拒否的態度（不満、非難）は子どもの攻撃性を高める、親の保護的態度（干渉、心配）は子どもの先生頼り、子どもの自己抑制を高める傾向が見られる。

(3) 学校生活について

中国の幼稚園や学校は、学習の面に重みを置き、公平性を保ちながら、子ども一人ひとりの能力を最大限に発揮するような教育の態勢が窺える。日本の幼稚園や学校は、勉強だけでなく、子どもの人間性、特に人との協調性、集団内の協力意識を重点に置いて育成するような教育の態勢が窺える。

(4) 葛藤解決目標について

「自尊心やプライドを回復したい」「相手から尊重され、丁寧に扱ってもらいたい」「自分の名誉、体面、評判を回復したい」などの項目を含めた「社会的目標」は、中国では最も高く、中国男女ともに日本男女より大きく上回っている。「相手と良い関係を維持したい」「相手とお互いに理解し合いたい」の項目を含めた「関係目標」は、日本では最も高く、日本が中国より高い結果となった。

(5) 中国と日本の子どもの社会的問題解決行動の違いは、両国の親子関係と文化的倫理観、価値観の違いによって形成され、中国と日本の問題解決行動の特徴から、中国は「ぶつかり合い受容の個の倫理文化」、日本は「ぶつかり合い回避の場の倫理文化」であると考えられよう。このような中国と日本の価値観・倫理観の違いは、学校生活、学校教育を通して、両国の子どもに受け継がれ、中国と日本の子どもの社会的問題解決方略に影響を及ぼしたと思われる。

(6) 本研究における対象地域は、中国南部の内陸に位置している江西省と日本の山口県とした。中国・日本ともに農村部を含めた小都市であり、生活様式や価値観において伝統的な意識や考え方が色濃く残されているものと考えられる。今後の課題として、東京や上海などの大都市を対象とした研究による検討、社会人を対象とした研究による検討が待たれるところである。

中国と日本の社会的問題解決方略に関する発達心理学的研究

目 次

序章 社会的問題解決方略に関する研究の動向	1
第1節 社会的問題解決方略に関する研究の理論とモデル	1
第2節 社会的問題解決方略に関する先行研究	4
第3節 社会的問題解決方略に関する現在までの研究の特徴	10
第1章 本研究の目的と意義、本研究の概要	14
第1節 本研究の目的と意義	14
第2節 本研究の概要	15
第2章 中国と日本における社会的問題解決方略	20
第1節 中国と日本の幼稚園年長児における社会的問題解決方略	20
1. 方法	20
2. 結果	23
3. まとめ	31
第2節 中国と日本の小・中・高・大学生における社会的問題解決方略	34
1. 方法	34
2. 結果	37
2-1 性差に関する検討	37
2-2 場面間の相違に関する検討	48
2-3 発達的变化に関する検討	53
2-4 日中間の相違に関する検討	62
2-5 社会的問題解決方略における国、発達段階、性の三要因の影響力	72
2-6 重要度と社会的問題解決方略との相関	81
2-7 各場面における最もよい方略の選択	82
3. まとめ	93
第3章 社会的問題解決方略に影響する社会環境的要因(1):親子関係	105
第1節 調査方法と影響の大きい保護者	105
第2節 中国における親子関係	106
第3節 日本における親子関係	108
第4節 中国と日本における親子関係の比較	111

第5節	親子関係と社会的問題解決方略の相関関係	113
第6節	考察とまとめ	123
第4章	社会的問題解決方略に影響する社会環境的要因(2): 学校生活	128
第1節	中国と日本の保育園生活	128
第2節	中国と日本の小学校生活	137
第3節	中国と日本の中学校生活	144
第4節	中国と日本の高校生活	152
第5節	考察とまとめ	158
第5章	社会的問題解決方略に影響する社会環境的要因(3): 葛藤解決目標	161
第1節	葛藤解決目標の因子構造	161
第2節	中国と日本における葛藤解決目標	162
第3節	葛藤解決目標と社会的問題解決方略の相関関係	163
第4節	考察とまとめ	164
終章	総合考察と今後の課題	166
第1節	社会的問題解決方略について	166
第2節	親子関係について	177
第3節	学校生活について	179
第4節	葛藤解決目標について	181
第5節	総合考察と結論	183
引用文献		188
付録1	幼稚園年長児の親に対する調査表(日本語版)	194
付録2	小・中・高校生に対する調査表(日本語版)	196
付録3	大学生に対する調査表(日本語版)	202
付録4	幼稚園年長児の親に対する調査表(中国語版)	206
付録5	小・中・高校生に対する調査表(中国語版)	208
付録6	大学生に対する調査表(中国語版)	214
あとがき		218

序章 社会的問題解決方略に関する研究の動向

人間は、社会的生活の中で常に様々な他者と関わり、種々の葛藤場面に直面しつつ、それらを解決しながら生きている。個々の生活が円滑で適応的であるためには豊かな知性や健康な身体と共に、良好な人間関係を結ぶ社会的能力が必要となってくる。こうした視点に立ち、社会的スキルや社会的問題解決能力に関する研究が着目されるようになってきた。子どもの社会的問題解決に関する研究は、今日まで主に社会的適応の問題に焦点を当てることによって発展してきた。

社会的問題解決 (Social Problem Solving: SPS) という概念は、Spivack & Shure (1974) によって提唱された。社会的問題解決能力は、実際の社会的情報を伝える能力、複数の視点を持つ能力、失敗した際に代替となる解決案を考える能力、社会的結果を予測する能力、結果を評価する能力など、複数の認知スキルを統合したものと考えられ、研究場面では思いつく解決方略の数、方略の質、思いつく全ての解決方略の中に占める適切な方略の率などの指標によって評価されることが多い。

日本においても子どもの社会的適応問題とともに、子どもの社会的問題解決に関して多くの研究が展開されてきた。東 (1989) は、日本における社会的問題解決の概念が研究者により、また取り扱うテーマにより、微妙に異なっていることを指摘しており、東・野辺地 (1992) は「社会的問題解決」を社会的相互作用の中で「自己の人格的目的を達成するための自己主張及び自己抑制の過程」と定義している。このように、社会的問題解決は、「自己制御」或いは「自己調整」(自己主張と自己抑制)、「対人交渉」、「仲間関係調整」、「葛藤解決」などと極めて関連の深い概念となっており、以下はこれらに関する研究についても、社会的問題解決に関する研究とともに概観する。

社会的問題解決方略は、葛藤場面に出会う際の攻撃的、主張的或いは抑制的な様々な解決方法を指し、徐 (2004a, 2004b, 2005) により使用された。本研究も、社会的生活の中で出会う様々な社会的問題 (対人的葛藤問題や状況) に対する解決方法として、「社会的問題解決方略」を用いた。

第1節 社会的問題解決方略に関する研究の理論とモデル

今日まで、人間の行動特に社会的行動について理解する上で様々な側面から多くの理論が提唱されている。1980年代に入って一大潮流となったのが社会的認知理論である。

Shure, Spivack & Jaeger (1971) は、問題解決的思考の特異的認知指標として、問題に対する解決を考える能力、行動の潜在的な結果を思考する能力、問題の原因や解決案の効果について考える能力の3つの側面を挙げ、PIPS (Preschool Interpersonal Problem Solving) テストを考案した。これは、典型的な現実問題 (仲間場面と母親場面) を仮定して対象者に提示し、対象者がこれらの問題について考案した総解決数と総解決カテゴリー数とを尺度として測定するものである。Spivack & Shure (1974) は、社会に適応し、自己と他者との要求にうまく対処できる人は、現実の問題を解決する方法を考えたり、行動

の潜在的な結果を正確に予測したりでき、また様々な解決方法を評価し選択でき、失敗してもより効果的な代替案を作り出すこともでき、さらに最終目的だけにとらわれる人に比べて欲求不満に陥ることが少ないであろうと考えている。

彼らは、これらの研究と理論を基に、社会的問題解決スキルにおいて様々な不適応問題を起こす恐れのある子どもの訓練プログラムを発展させた。Richard & Dodge (1982) も社会的問題解決に関して一連の研究を展開している。攻撃的な男児を対象とした研究で、社会的問題状況に直面する際、①社会的手がかりの認知と解釈、②仲間の意図についての帰属と仲間の行動についての予測、③反応の選択（社会的問題解決方略）という3つのステップからなる「社会的情報一過程モデル」を構成している。彼らは社会的問題解決方略を「応答の選択」と定義し、社会的情報一過程モデルの一段階として捉えた。また、社会的問題解決の社会的一認知的プロセスを説明するには、数多くの代替案を作り出すという量的側面だけでなく、解決案の効果性や結果の評価といった質的側面も重要であると指摘し、社会的問題解決の尺度に解決案の効果性や結果の評価に関する認知を取り入れている。

Yeates & Selman (1989) は、発達の観点から、子供の他者との関わりの中での社会認知について検討し、社会的視点取得能力（自己と他者の視点を分化し他者の視点に立って他者の感情や思考を推測したり、第三者の視点から互いの感情や思考を調整する能力）を対人交渉能力の発達を支える中核的な能力と見なし、対人交渉能力の発達モデル（対人的交渉方略：Interpersonal Negotiation Strategy：INS モデル）を提示している。これは、対人交渉能力の発達を社会的視点取得能力の発達段階に対応させて設定し、従来、社会認知の発達を研究する上で別々に捉えられていた2つの側面、すなわち対人的問題解決に焦点を当てた機能的側面と、認知構造の質的（段階的・発達の）な変化に焦点を当てた構造的側面を統合したものである。このモデルにおいては、対人的な問題を解決する際に、問題の定義、方略の産出、方略の選択、結果の評価、という4つの対人交渉過程の時系列的な問題解決の段階があり（Table 1）、これらのステップには、未分化で自己中心的な段階から互恵的・第三者的なものへ変化していくという順序をもったレベルが設定されている。さらに、対人的問題を解決する際に、自分の欲求を変えるか、他者の欲求を変えるか、両者の欲求を協調させるかの3つの対人的志向が設定されている（Table 2）。

Table 1 社会的情報処理段階（Yeates & Selman, 1989 より）

	Step 1 問題の定義	Step 2 方略の産出	Step 3 方略の選択と実行	Step 4 結果の評価
Level 0	自己の要求のみに基づく、衝動的	欲求と行為の分化がなく、衝動的的非言語的葛藤解決	直接的な自己の満足か防衛のための行動選択	即時的な自己の要求に基づく
Level 1	自己か他者かの一方的要求に基づく	自他のバランスを考えない力中心か譲歩の葛藤解決	短期的に自己か他者のいずれかを満足させる行動選択	自己または他者の個人的満足に基づく
Level 2	自己と他者の両方の要求を対比する	自他が満足するような互恵的な葛藤解決	自己と他者及びその関係を満足させる行動選択	自己と他者の両方の満足とそのバランスに基づく
Level 3	相互的な目的と長期的な関係による	相互の関心と対話による協調的葛藤解決	最大限に協同し、関係も維持させる方略の選択	自己と他者の関係に及ぼす長期的な効果に沿う

Table 2 対人的交渉能力の発達 (Yeates & Selman, 1989 より)

	他者変化志向	方略 水準	社会的視 点取得能 力	自己変化志向
Level 0	衝動的に攻撃し、自己の要求を通そうとする けんか・掴み取る・たたく	衝動的方略	自己中心 的・未分化	衝動的盲目的服従、もしくは引きこもり、自己を守ろうとする
Level 1	一方的な命令・要求をし、自己の要求に合わせてようとする 命令・あおる・強制的	一方的方略	主観的・一 方向	他者の要求に対して従順に振舞う 従う・盲目的
Level 2	意識的に他者に心理的圧力をかけ、他者の気持ちを変えさせようとする	双方向的方略	自己内省 的・両方向	意識的に心理的な追従をし、自己の要求を2番手とする わけを尋ねる・2番目に実行する
Level 3	互いに共通の目的を見出そうとし、互いが互いの要求を協調的に変えようとする	共通向的方略	第三者 的・相互的	互いに共通の目的を見出そうとし、互いが互いの要求を協調的に変えようとする

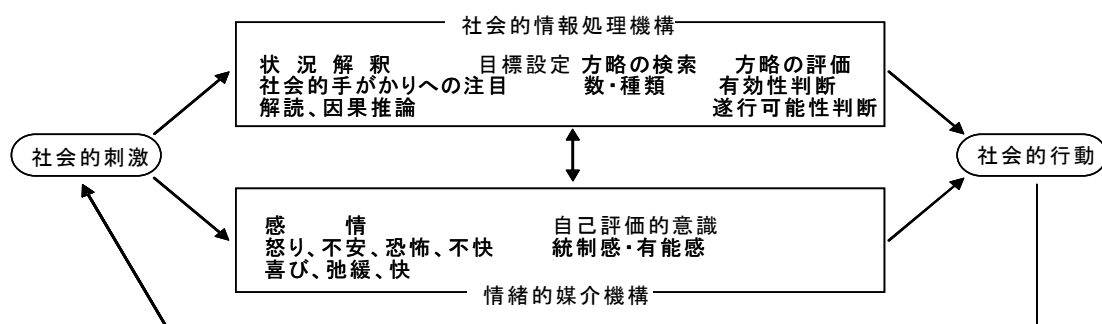


Fig. 1 社会的コンピテンスの内潜的過程モデル

濱口・新井（1991）は、社会的コンピテンスの概念は多くの研究において中心的な鍵概念として用いられながら、研究者によって定義の仕方が一貫せず、その用法が多様化していることを指摘し、従来の研究を吟味した上で、以下のように定義している。つまり、社会的コンピテンス (social competence) とは、対人的相互作用において、自分および相手にとって望ましい結果をもたらす社会的行動の遂行、並びに望ましくない結果をもたらす社会的行動の抑制を可能にする、時間的に比較的安定した個人的属性である。それは、階層的構造を持ち、下位の水準の社会的コンピテンスは、ある特定の社会的場面における特定の社会的行動の遂行と抑制に関わる安定した個人的属性を指し (場面特殊の社会的コンピテンス: situation specific social competence)、上位の水準の社会的コンピテンスは、場面の特殊性を越えた一般的な個人的属性を指している (一般的社会的コンピテンス: general social competence)。このような個人的属性は、認知的・情緒的成分を中心とした内潜的な諸要素から構成されるとしている。

このように、社会的コンピテンスは社会的問題解決能力とは極めて近い概念と考えることができる。濱口・新井（1991）の「社会的コンピテンスの内潜的過程モデル」（Fig. 1）を構成する「社会的情報処理機構」の部分は、Yeates & Selman（1989）の社会的情報処理段階に対応している。

相川ら（1993）は、社会的スキルという概念について検討し、Dodge（1990）の「子どもの社会的適応に関する情報処理モデル」を基に、感情の機能を明確にするなどの修正を加え、Fig. 2 のような社会的スキル生起過程モデルを提唱している。このモデルからも社会的問題解決と社会的スキルとは極めて近接した概念であることが示唆される。したがって、相川らの社会的スキル生起過程モデルは感情の機能を明確にした社会的問題解決過程と捉えることができる。

こうした理論やモデルを踏まえ、主として子どもの社会的問題解決に関して様々な実証的研究が行われている。以下、こうした分野の研究について概観する。

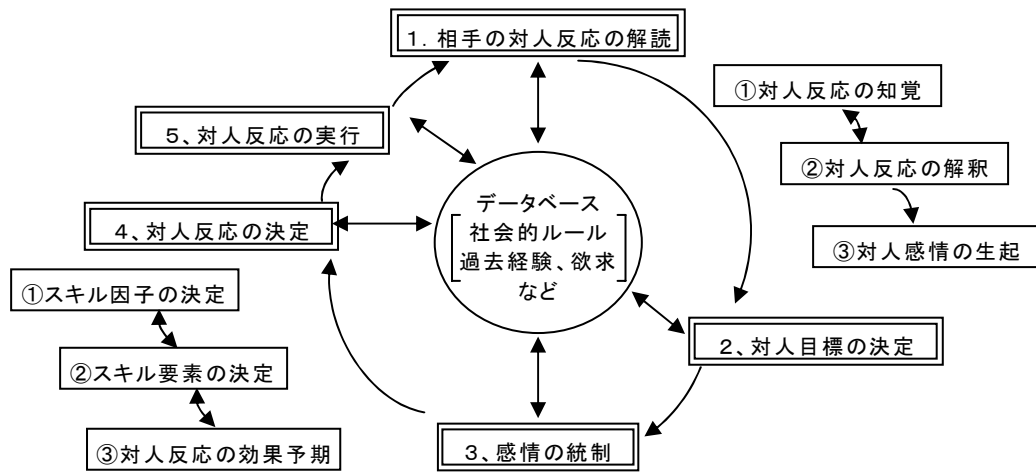


Fig. 2 社会的スキル生起過程モデル（相川ら、1993）

第2節 社会的問題解決方略に関する先行研究

中国における社会的問題解決方略に関する先行研究については、インターネットで「社会問題解決方式」（社会的問題解決方略）、「纠纷解決方式」（葛藤解決方略）、「纠纷处理」（葛藤解決）、「自我主张」（自己主張）、「自我抑制」（自己抑制）、「自我调整」（自己調整）などのキーワードで検索したところ、学術論文のようなものが見当たらなかった。中国国内の教育研究者に尋ねた結果、一人っ子の自己中心的な問題行動について社会からも研究者からも注目を集めたが、一般の子どもを対象とした社会的問題解決方略に関する理論的実証的研究はまだ展開されていないのではないかという返答であった。

中国は1970年代末までは、国全体「赤」一色で、政治が最も優先的な課題となっていた。1980年代改革開放後は、国全体「金」一色で、経済発展と生活水準の向上が最も優先的な課題となっている。また、中国が世界に開いたのは1980年代以降で、国際間の学術的な比較研究も十分展開されたとはいえない状態である。

以下は、主に日本における社会的問題解決方略に関する先行研究について概観する。

1. 社会的問題解決方略に関する研究

社会的問題解決方略に関する研究の多くは、主として社会的行動の関連変数の一つとして取り扱われることが多く、社会的問題解決方略そのものに焦点を当てた研究は少ない(東, 1989)。しかしながら、1990年代以降、こうした観点からの研究が日本においても報告されるようになってきた。以下は調査対象の発達段階に従って概観する。

東・野辺地(1992)は、自分が傷つけられる葛藤場面と他者が傷つけられる援助場面の二種の仮説場面を設定し、個人面接法を用いて幼児の社会的問題解決能力について調査した。一方、幼児の社会的コンピテンスについては保育者による観察評定を求めた。その結果、3歳から4歳にかけて多くの解決方法を考え出せるようになり、年長児になると相手を傷つけるような反社会的解決や一方的に相手に合わせるような向社会的解決といった極端な自己主張や自己抑制の方法ではなく、言語による主張的解決や第三者介入的解決、さらに、消極的解決のような「相手を傷つけずに」自己の要求を満たす方法を模索しているということが明らかにされている。

呉(2001)は、幼稚園における文化人類学的研究により、保育士の介入前後の幼児の社会的問題解決方略の変化について分析した。その結果、保育士の介入によって、幼児は自分とは違った意見を持つ相手の考え方やその気持ちが理解できるようになった。また、自分がどのような目標や期待を持っているかを相手にうまく伝えることができるようになり、二人で意見を交わす社会的問題解決方略を身につけていく過程が見出された。

幼児の社会的問題解決に関する研究としては、これらの他、社会的問題解決方略が幼児の「心の理論」の発達に及ぼす影響(子安・鈴木, 2002; 鈴木ら, 2004)、幼児の愛着表象との関係(利根川・首藤, 1997)、幼児の社会的認知との関係(相手の敵意有無)(丸山, 1999)、さらに、幼児の社会的スキルとの関係(大対・松見, 2002)といった報告も見られる。

児童期の社会的問題解決についての関心も多大である。初期のものとして、対人交渉能力と仲間と自己についての概念との関連(嘉数, 1987)、社会測定的地位及び親和動機づけと対人交渉能力との関連(嘉数ら, 1991)に関する研究がある。その後、金城・梅本(1991)は、日本の小学生を対象として、INSモデルを用いて対人交渉能力を測定し、発達段階の順序性が妥当であるかについて検討した。また、対人交渉能力の発達水準と対人志向について、年齢差、性差、文脈差(交渉相手との関係)についても検証している。その結果、発達段階の順序性は妥当性を持ち、対人交渉の発達が児童期において衝動的方略から一方的な方略へ、さらに互惠的方略へと進むことが明らかにされた。しかし、その移行は比較的ゆっくりとしたものであった。また、対人交渉の全ての段階において、女兒が男児よりも発達水準が高いことが認められた。さらに、対人交渉方略においては、ジャンケン志向という日本の児童の特有な解決方略を見出した。一方、文脈の違いに関する分析においては、いずれの文脈においても日本の児童は自己変化志向が高いという特徴も見出されている。

渡部(1993a, 1993b, 1995)では、小学生を対象とした一連の研究において、金城・梅本(1991)と類似した結果が報告されている。つまり、学年の進行とともにINS得点が高

くなること、対人志向スタイルについても協調的志向が多くなること、女兒が男児より INS 得点が高いこと、対人志向スタイルについても女兒が男児よりも対人調和を志向したスタイルが多いことが示されている。また、INS 得点が社会的情報処理段階の水準によって予測されることも明らかにされている。さらに、Step 3 の INS 得点により簡便に児童の対人交渉能力を測定する可能性も示されている。特に渡部（1995）では、児童がある対人交渉方略をとり、相手が不満を示した後の対人交渉方略に注目し、このような相互作用の前後において、児童の対人交渉方略が年齢、性、人気度によりどのように異なるかについて検討している。その結果、年齢が高くなるにつれて、対人交渉方略のレベルも高くなること、女兒が男児よりも対人交渉方略のレベルが高いこと、相手が不満を示すと、その後の対人交渉方略は、年齢・性に関わらず、最初のものよりも発達的に見てレベルの低いものになること、人気の高い子どもは低い子どもに比べて対人交渉方略のレベルが高いことを見出している。

山岸（1997, 1998）は、年齢により対人交渉方略の発達と適応感の関係において、性差があることを認めている。男児では対人交渉方略のレベルと学校での適応感との間に正の相関が見られ、その傾向は特に 6 年生において顕著であった。女兒では 6 年生で男児と同様の関連が見られたのに対し、中学 3 年生では全く異なる傾向を示していた。

二神・神谷（2004）は、中学生を対象として、主として葛藤場面での対応の仕方について検討している。彼らは、対人交渉方略の研究の多くが、なぜその方法を取るのかという内面的プロセスについて検討したものがないことを指摘し、葛藤状況の内的プロセスを記述的に捉える必要があることを主張している。実際には、中学生を対象として、仮説的葛藤場面を提示し、被験者がその際「自分だったらどうするか」を、5 項目から選択させ、その方略を選択した理由、また他の方略を選択しなかった理由について自由に記述させた。最終的に、その理由づけは「个人中心」と「社会関係中心」とに二分された。一般的に、日本人は集団主義的或いは相互協調的で自己よりも他者を優先させる傾向が強いと考えられるが、結果は、自己重視の項目の比率が社会関係重視の項目の比率よりも高いということであった。

長峰（1996, 1999）は、中学生と大学生を対象に、父子・母子・友人の 3 つの対人的文脈を取り上げ、仮定的葛藤場面を通して、青年の対人交渉方略の発達について検討している。その結果、中学生では「一方向的变化」の割合が多く、大学生では「関係維持」が多いことを見出している。また、全体としては、友人場面及び父子場面においては「互惠性維持」が多く、母子場面では「互惠→一方向」が「互惠性維持」よりもやや多いという結果であった。つまり、「母が理解してくれるだろう」という甘えで、自分の意志や欲求を一方的に通そうとする傾向が強いのではないかということである。深田・山根（2003）は、大学生の対人葛藤解決方略に及ぼす対人文脈（父親・母親・同姓友人）、使用文脈（最初最良方略・障害後の方略）、性別、方略型（協調・対決・回避・同調）の影響について検討している。徐（2005）は、先行研究において調査対象者の年齢層が狭いこと、社会的問題解決方略の間接的方略があまり分析の対象になっていないことを指摘し、方略を直接性・間接性の二つに分類して、小学校 5・6 年生、高校生、大学生を対象に調査を行っている。

比較文化的研究として、徐（2004a, 2004b）は小学校高学年生を対象に、日韓の児童の社会的問題解決方略について分析している。その結果、韓国の児童は日本より全体的に直

接的主張、直接的攻撃及び間接的方略を多く用い、日本の児童は韓国より抑制的方略を多く用いる傾向を見出している。これは、「親愛のコミュニケーション方略」を用いる傾向の高い韓国の児童が対人葛藤場面においても自分の感情を直接的・間接的に表出しやすく、「思いやりのコミュニケーション方略」を用いる傾向の高い日本の児童が相手を傷つけないように自分の感情を抑制する傾向が高いということを表していると考えられている。

2. 社会的問題解決方略に影響を及ぼす要因

Krasnor & Rubin (1983) は、社会的問題解決を「社会的相互作用を通しての人格的目標の達成の過程」と定義し、自然な相互作用の中で社会的問題解決の結果を予測する要因として、解決方略の型、社会的問題解決の目標、相手のアイデンティティ（性や年齢、仲間親密性、社会的支配性、対人間地位など）、問題解決者のアイデンティティ（知能、社会的評価、柔軟性など）の4つを挙げた。このような関係から考えると、解決方略の選択においても社会的問題解決の目標、相手や問題解決者のアイデンティティは大きな要因であると考えられる。

大淵・福島（1997）は、大学生を対象として、過去の対人葛藤経験を想起させる回想法を用いて、葛藤解決における社会的動機づけを強調する多目標理論について検討した。彼らは、目標を「関係目標」（相手との良好関係を維持する）、「パワー・敵意目標」（相手を支配や罰する）、「公正目標」（社会的公正・公平を回復する）、「同一性目標」（社会的体面や評判、自尊心を守る）、「個人的資源目標」（自由やプライバシーを守る）、「経済的資源目標」（経済的利害を守る）の6目標を設定し、パス解析によりその関係を分析している。それによると、相手との関係を重視すれば協調方略や第三者方略を多くとり、相手を支配したければ対決方略を多くとり、体面や自尊心を守るには事を荒立てずに協調方略や回避方略をとりやすく、自分の縄張りを守るには対決か回避方略を多くとり、といった関連性を見出している。

問題場面の状況性が解決方略を大きく左右することも明らかになってきた。問題場面の重要度、問題場面の当事者間の関係（親密さや相対的社会的地位）、問題場面における物質的実害の有無、問題場面の責任の所在の明確さ、といった状況により、強硬に対決か、冷静で柔軟に折り合うか、放っておくか、など解決方略が異なる（吉野，1987）。葛藤は個人と個人の間にあるか個人と集団の間にあるかによっても異なる（平井，2000；徐，2004）。さらに、相手と同一集団にいるか異なる集団にいるかによっても方略は異なっている（倉持，1992）。

問題場面に当面する当事者のアイデンティティが解決方略に大きく関与することについても検証がなされている。小森・宮本（1992）などのように、年齢や性別による相違は多くの研究において報告されている。個人は、自己受容ができ、自己を見つめられる状態になった時に対人的葛藤場面にも冷静に対応でき、他者と共同的な行動を取ろうとする傾向になると考えられる。自己受容ができたことで、対人交渉方略のレベルを向上させるような事例も見出されている（安松・濱野，2002）。その他に、信頼感、攻撃性、仲間親密性、社会的支配性、人気度、知能、社会的評価、柔軟性といった個人的特性も問題解決に影響を及ぼす要因となることが考えられる。

さらに、社会的問題解決方略には文化的要因も大きく影響を及ぼしていることが報告さ

れている（柏木，1988；箕浦，1990；吉武，1991；佐藤，1991；徐，2004a，2004b）。社会的問題解決方略は、社会的問題を解決する方略であり、言うまでもなく、向社会的行動は望ましいことである。しかし、その行動が向社会的であるか否かはその地域や社会の価値観に依拠する側面があり、文化的な信念や価値観が社会的問題解決方略に影響を及ぼすことは明らかであろう。

3. 社会的問題解決方略に関連する研究：自己調整（自己制御）

いじめ、不登校、引きこもり、キレル現象など世間を騒がすような不適応問題の根底に、自己制御能力の低下や社会的スキルの未成熟があるのではないかと指摘されるようになり、近年では、社会的問題解決に関連する研究は自己調整の発達と社会的適応のための社会的スキル訓練の両方面において展開されている。

子どもの適応に関する関心が大きくなってきた今日、社会的スキルに関する研究の多くは学校における集団社会的スキル教育に関するもの（江村・岡安，2003，など）、発達障害や社会的不適応に対する社会的スキル訓練に関するもの（佐藤ら，1993a，1993b，2000；佐藤，2000，など）、などである。こうした研究についての詳細はここでは省略し、社会的問題解決能力の基礎となる自己調整の発達に関する研究のみに焦点を当てる。

子どもは誕生とともに家族内関係を形成し、近所や親戚付き合いによる家族外の他者関係、幼稚園などへの入園により拡大する仲間関係など、常に多様な社会関係に囲まれ、周囲の人々との関わりを通して社会的なものの見方や行動の仕方を身につけていくものである。未熟と考えられがちな子どもではあるが、多くの研究は、子どもは実はかなり早期から自己調整の能力が芽生えていることを明らかにしている。したがって、こうした自己調整の発達研究は、幼児期、特に3歳児頃からを対象にして展開されることが多い。子どもの生活環境は保育所や幼稚園に入ることにより、親子関係を中心とした家庭環境から仲間関係に基づく集団生活へと変化し、社会的場面への適応が求められるようになってくる。子どもは集団生活の経験を通して、社会的関係の学習、他者の意図の推測、自己主張の方略、社会的言語能力の習得が進み、自己調整能力を獲得し、主体的かつ自律的に行動できるようになってくる。

柏木（1986）は、集団保育場面において、3～7歳の約700名の幼児を対象とし、71項目にわたる子どもの日常行動について保育者による観察評定を求め、データについて因子分析を行った。その結果、集団や他者との関係において、自己の欲求や意志を他者に対して主張しそれを行動として自己実現する「自己主張・実現面」と、自己の欲求や意志を他者との調和のために抑制したり制止する「自己抑制面」の2つの因子を抽出した。

柏木（1988）は、同様に保育者による観察評定を求め、幼児の自己調整能力を自己主張・実現面と自己抑制面との二側面から捉え、それぞれの発達的变化について量的に検討した。その結果、自己調整の二側面はその形成のメカニズムがやや異なっていることを見出した。自己抑制行動は年長になるにつれて順調に獲得されるのに対して、自己主張行動は年少時期では上昇が著しいものの5歳前後で停滞し、年長になると自己主張が減少することが明らかにされている。また、柏木（1988）は保育者の観察や評定の分析を通じて、自己抑制について「遅延可能性」「制止・ルールへの従順」「フラストレーション耐性」「持続的対処・根気」の4因子を、自己主張について「遊びへの積極的参加」「独自性・能動性」「拒否・

強い自己主張」の3因子をそれぞれ見出している。その上で、自己抑制及び自己主張のいずれの因子においても、女兒の得点が男児よりも高いことが報告されている。

倉持（1992）は、幼稚園の遊び時間に生じた子どもたちのトラブルを観察し、彼らがその中で用いる方略が個人間の関係によって選択されていることを見出している。つまり、同じ遊び集団に属する子どもたちの間では、主に物を先取りしていることを主張する方略とそのものを所有することが展開されている遊びにとって必要であることを示す方略が用いられたのである。また、異なる遊び集団に属する子どもたちは貸すための条件を示す方略と借りる限度を示す方略を使用することが見られる。

山本（1994, 1995a, 1995b）は、一連の研究において、対人葛藤場面での子どもの自己主張方略に焦点を当て、親密性および既知性が方略の使用に与える影響、自己調整能力の発達について分析している。その中で、自然場面では葛藤発生の原因、葛藤の展開および終結の要因、解決方略の使用について検討し、幼稚園の生活において子どもが自己中心的な行動から集団に適応した行動を獲得していく過程には発達的变化が見られることを見出している。また、仮説場面では、身体的な攻撃による自己主張、言語的手段を用いずに取り返すという自己主張、他者依存的自己主張は年齢の増加に従って減少し、説得による自己主張、協調的な自己主張は年齢の増加とともに増加しており、いわば非言語的で自己中心的な自己主張方略から言語的で自他双方の要求を考慮した自己主張的解決方略へと変化していくことが明かとなっている。また、身体的攻撃や取り返しなどの玩具獲得や、他者依存的な主張を含む非言語的で自己中心的な自己主張行動は、親密性の低い子に対してより多く用いられるのに対して、他方で言語的交渉を用いて相手を説得したり、協調的な自他双方の要求を考慮した自己主張的行動は、親密性の高い子に対してより多く用いられており、特に4歳児ではこの傾向が顕著であることが明らかにされている。

森下（2000a, 2000b, 2001, 2002a, 2002b, 2003a, 2003b）は、幼児・保育者・保護者を対象とした一連の研究を通して、以下のような結果を得ている。①自己制御の発達に関する横断的データと縦断的データには差異が認められ、改めて縦断的研究の重要性が示唆された。②家庭と園での自己抑制や自己主張の特徴は必ずしも一致せず、その割合は子どもの年齢や特性によって異なっており、一致するものは約60%であった。全体として、自己抑制の高い子どもの父母の態度は共に受容的であるのに対して、低い子どもの父母の場合は共に拒否的であった。また、自己主張の強い男児の母親には矛盾が少なく、反対に自己主張の弱い男児の母親には矛盾が多いという特徴がみられた。③父母が共に受容的な場合、女兒は自己抑制が高く、父母が共に拒否的な場合、男女児共に攻撃性が高いという特徴がみられた。また、母親の統制が強く父親の統制が弱い場合、男児は強い自己主張と強い攻撃性を示し、女兒は攻撃性において強い傾向を示している。④園の保育特徴が子どもの行動特徴に影響を及ぼしている可能性も示唆されている。安全・過程重視、協調性・思いやり重視の保育特徴は自己抑制や養護性（思いやり）を育み、攻撃性を抑制する傾向にあり、冒険やたくましさを重視した保育特徴や、生活体験や子どもの主導性を重視した保育特徴は子どもの自己抑制を開放し、攻撃性を表出させる傾向があることが示唆されている。

縦断的研究としては、伊藤（2002）、佐藤ら（1998, 1999, 2001, 2003）、などを挙げるができる。伊藤（2002）は、自己調整機能の年齢的变化に関し、横断的研究と縦断的

研究で得られたそれぞれのデータを比較し、両者間には大きな差異がみられないことを確認している。また、入園時に自己主張的で自己抑制的でない幼児（アサーション型）と自己抑制的で自己主張的でない幼児（コントロール型）を追跡し、アサーション型は加齢とともに過度な自己主張を低減させ自己抑制的になっていく一方、コントロール型は加齢と共に自己主張はできるようになるものの自己抑制を低減させることはなかった。この2つの型の年少時における平均値の差は年長時には確かに減少しているが、依然として前者は自己主張得点が高く自己抑制得点が高いという特徴がみられる。一方、後者も依然として自己主張得点が低く自己抑制得点が高いという傾向であった。佐藤ら（1998, 1999, 2001, 2003）は、保育士による評定、幼児の絵画自己制御機能テスト、保育日誌の3つの側面からデータを収集し、それら三者間には何らかの相関があることを見出している。

子どもの対人葛藤場面における行動の特徴と保育者の対応との関係に焦点を当てた研究も報告されている（朝生ら, 1991；玉井ら, 1992；本郷ら, 1991；本郷, 1992, 1994, 2000）。こうした研究の中から、子どもの対人葛藤の解決過程を理解する上で、保育者の働きかけが重要であることが指摘されている。これらの他、子どもの自己調整に関する研究としては、自己実現との関係（山崎ら, 1993, 1994）、注意力及び言語発達との関係（鈴木, 2003）、向社会的行動との関係（首藤, 1995）、問題行動との関係（中台・金山, 2002）といった観点からの報告がみられる。

第3節 社会的問題解決方略に関する現在までの研究の特徴

以上、社会的問題解決及び自己調整に関する従来の研究について、主として日本におけるものに関して概観してきた。これらを通して、こうした領域における研究のいくつかの特徴と課題が浮かび上がってきた。

1. 研究方法の多様性

研究者により、研究方法、問題場面の状況設定、方略の設定に独自の手法を用い、多様なアプローチとなっている。例えば、社会的問題解決方略の分類において、大学生の場合のみを取りあげても、Table 3に示すように、分類基準により、方略の数やカテゴリー、さらには定義そのものまでが様々となっている。

したがって、研究間で必ずしも一貫した結果となっていない。田島ら（1988）や丸山（1999）、渡部・稲川（2002）では、加齢に伴って自己主張は減少、自己抑制は増加の傾向を示したが、東・野辺地（1992）や山本（1995）では加齢に伴って抑制的方略は発達の変化がみられず、自己主張は増加する傾向であった。その背景には、状況設定の相違（相手行動の悪意の有無）が影響を及ぼしていることも考えられる。また、保育士による幼児の自己主張・自己抑制の評定では、「自己主張は年中の頃から頭打ちの傾向にあるが、自己抑制は幼稚園の時期に一貫して上昇し続ける」（柏木, 1988）ことを示しているのに対し、母親による幼児の自己主張・自己抑制の評定では、「年中児よりも年長児のほうが自己主張は高く、年中児では自己抑制と自己主張が同程度であり、年長児では自己抑制よりも自己主張のほうが高い」（首藤, 1995）ことを示している。その他、ここには記載しないが、状況

設定や研究方法によって、性差や親密性による差異が異なる様相を呈していることもみられる。

このように、自己調整機能の発達的变化や社会的問題解決方略には研究方法や評定方法によりかなりの相違が存在している。したがって、いずれの研究が子どもの実態を反映するものであるかを究明することは困難である。また、個々の研究結果を統合して照合することによって子どもの自己調整の様相や社会的問題解決方略の使用の全貌を掴むことも極めて困難な作業である。さらに、社会的問題解決方略に関する研究に多く用いられる質問紙法、観察法、個人面接法などにもそれぞれ長所短所があり、今後、より適切な方法が開発され、普遍性のある研究が期待される場所である。

Table 3 先行研究における社会的問題解決方略の分類（大学生の場合）

小森・ 宮本 (1992)	抑制・個別型：	相手の回避、無行動、暗示		
	抑制・協調型：	表面的同調		
	促進・個別型：	要求、命令、説得		
	促進・協調型：	協力的提案、相手への接近		
長峰 (1996)	自己変化志向：	自己の要求を変える場合		
	他者変化志向：	他者の要求を変える場合		
	協調的志向：	両者の要求を協調させる場合		
	その他：	どれにも当てはまらないもの		
大淵・ 福島 (1997)	協調：	自他双方の利害を調整し、相手の変化を穏やかに促す		
	対決：	一方的に自己を主張し、攻撃する		
	第三者介入：	第三者を介入させる		
	回避：	対立が公になることを避ける		
平井 (2000)	S (Self)	<ul style="list-style-type: none"> 自己を優先させる行動を単独で述べるもの 自己について思いやる、心配する、気にかけるもの 		
	O (Other)	<ul style="list-style-type: none"> 他者を優先させる行動を単独で述べるもの 他者について思いやる、心配する、気にかけるもの 		
	S' (S prime)	<ul style="list-style-type: none"> 「S」に分類される行動と全く同じではないが、最終的に自己を優先させる行動を単独で述べるもの 自己を優先させる行動の理由で「S」には分類されないもの 		
	O' (O prime)	<ul style="list-style-type: none"> 「O」に分類される行動と全く同じではないが、最終的に自己を優先させる行動を単独で述べるもの 自己を優先させる行動の理由で「O」には分類されないもの 		
	B (Balanced)	<ul style="list-style-type: none"> どちらも同じ程度に尊重している どちらを優先しているのか判断が付かない 		
	深田・ 山根 (2003)	協調：	自他双方の利害を調整し、相手の変化を穏やかに促す	
対決：		一方的に自己を主張し、攻撃する		
回避：		対立を避ける		
同調：		相手のいいなりになる		
徐 (2005)	<ul style="list-style-type: none"> 直接的攻撃 直接的主張 	<ul style="list-style-type: none"> 抑制的受容 間接的主張 	<ul style="list-style-type: none"> 間接的攻撃 回避的攻撃 	<ul style="list-style-type: none"> 背後の非難

2. 縦断的研究の重要性

子どもの自己調整機能の発達に関する研究としては縦断的研究も見られたが（伊藤，2002；佐藤ら，1998，など）、その多くは横断的研究によるものである。しかし、研究によっては、縦断的分析と横断的分析で異なる結果も報告されている。例えば、「自己抑制は横断的データでは年中から年長にかけて発達するのに対し、縦断的データでは年長では自己抑制しない」、「3歳以降、自己主張は発達しないと横断的データは示したが、縦断的データによると3歳以降いずれの年齢でも自己主張は発達する」（森下，2002a）、などである。横断的研究による差は必ずしも発達過程を反映しているとは言えず、縦断的研究の必要性が示唆される。

また、幼児期は周囲の環境を通して認知や言語などの諸側面が急速に発達する時期であり、その段階に応じて禁じられた行為を抑制し、複雑な指示を保持し実行することが可能になる。この時期は、仲間の間での様々なトラブル場面で自己の欲求や衝動を周囲の状況に合わせて調整し、適切な行動をとるための自己調整能力を獲得する芽生えの時期でもある。そのため、自己調整機能の発達研究は幼児期に注目されやすく、この段階の子どもの自己調整に関する研究が多いが、児童期以降についてのものは少ない。しかし、日常的にも表現される「最近丸くなった」「親父はますます頑固になった」などのように、自己調整機能には頂点のような時期があるとは考えられず、常に発達の的に変化していくものと考えられる。こうした側面であればこそ、生涯発達の観点からのアプローチが必要ではないかと考えられる。調査対象の年齢層をさらに拡大し、プロジェクトとして、組織的に縦断的研究を行うことは、自己調整の発達の真の様相を明らかにする上で極めて大切なことと考えられる。

3. 援助場面の状況設定に関する配慮

社会的問題解決方略や自己調整に関する研究における状況設定として、大多数が葛藤場面を想定している。葛藤場面とは、2つ以上の対立する傾向がほぼ等しい強さで同時に存在し、行動の決定が困難な状態である。したがって、葛藤場面においては、より高度な社会的問題解決能力や方略が求められ、研究の対象としては好都合の状況である。しかし、「大きなお世話」のような事態も考えられ、好意が好意として受け止められているとは限らない。援助の必要があるかどうかの判断、援助の方法やタイミングも社会的問題解決能力の一つとして獲得する必要があるだろう。特に異文化間においては、援助するつもりで相手に負担をかけていたり、本来の好意が相手に伝わらない場合もある。社会的問題解決方略の研究に、よく考慮された援助場面を取り入れることは極めて有意義であると考えられる。

4. 異文化間研究への発展

社会的問題解決方略は、その国の文化や地域・共同体の慣習などと密接な関係があるはずである。比較文化的研究の端緒とも言える「日米の母親の異なる態度や行動が子どもの知的発達に与える影響」（東ら，1981）は、当時の学界に大きな関心を引き起こした。子どもの自己調整や社会的問題解決方略に関する研究においてもこのような側面からのアプローチの意義が認識される場所である。こうした立場での研究としては、東（1994）、佐藤（1991，1993，1994，2001）、箕浦（1990）などがある。米国社会では「自己」の意

見や感情を準拠点として対人行動が決められるのに対して、日本では「他者」を準拠点として自分の行動を決めることが多く、対人関係の基本が他者を包摂しているのである。つまり、米国と日本では自分の輪郭の出し方に大きな差異がある。米国では子どもの頃より「自分の意見をはっきり主張しなさい」と言われて育つが、日本では自分の意見をはっきり言い過ぎる人は逸脱者とみなされがちで、むしろ相手の気持ちを汲み取ることのほうが強調されている（箕浦，1990）。母親が子どもに抱く発達期待において、米国の母親は他者に対して自己を主張し、対等に渡り合っていくことに期待するのに対して、日本の母親は子どもの大人への従順や礼儀、情緒的統制を早く身につけることを期待している（東ら，1981）。こうした発達期待の相違は日英間においても見出されている（佐藤，2001）。因みに、小学生に対する社会的問題解決方略に関する研究においても、アメリカでの研究に見られない日本独自の傾向（ジャンケン志向）が見出されていることは上記の通りである（金城・梅本，1991；渡部，1993a；山岸，1998）。日本においてジャンケンが志向される理由として、低学年では「早く決まるから」、中学年では「喧嘩にならないから」、高学年では「公平、平等だから」といった反応が顕著であった。梶田（1988）は、対人葛藤解決のスタイルとして、欧米では他譲志向（他者を譲歩させる）が優位であるのに対して、日本では伝統的に無譲志向（無問題化）や状況離脱志向（「なかったことにしよう」「誰も傷付けないようにしよう」という意識をもつ）、「自他の顔が立つように工夫する」「妥協する」「考えないようにする」といった解決法が優位を示すと考察している。両者ともに引き下らずにそのまま安易に解決に至ろうとするジャンケン志向は、梶田のいう無譲志向に包含されるものと考えられることができる（金城・梅本，1991）。このように、人間は幼少期から生活する独自の文化的環境の中で個々の志向性が形成されるものであり、地域の環境を考慮した比較文化的な研究が重要となってくることは論を待つまでもない。

日米間とか日英間といった比較文化的研究は、東洋と西洋の文化的特徴の差異という枠組みの中で、早期から多くの注目を集め、成果も挙げてきている。しかし、同じ東洋文化圏に属するアジアの国々間における比較文化的研究は、まだ緒に着いたばかりの状態ともいえる。新しいところでは、子どもの社会的問題解決方略に関する日韓比較研究において文化による相違が見られることが報告されており（徐，2004a，2004b）、今後ともこうした研究は発展が期待される場所である。また、こうした成果が広がりつつある国際理解、国際交流において貢献を果たしてくれると考えられる。

第1章 本研究の研究目的と意義、本研究の概要

社会的問題解決方略に関する今までの研究は、前章で述べたように、縦断的研究、同じ東洋圏に位置する国間の比較研究があまり展開されていない。本研究はこのような事情を踏まえて、以下に述べるような研究計画に基づいて行われた。

第1節 本研究の目的と意義

1. 本研究の目的

社会的問題解決方略とは、社会的な生活の中で出会う様々な葛藤や社会的問題状況に対する解決方法である。

子どもは人として生まれ、家庭や地域社会において、養育を受けながら人間として育てていく。生まれてからすぐに、親や家族をはじめ、様々な人間関係を生じ、自分の欲求の達成と拒否されることにより、様々な葛藤に出会うことになる。成長に伴い、子どもの日常生活の場が広がり、対人関係の問題に出会うことも多くなる。そして、このような問題を解決するために多様な方略を習得していく。子どもは年齢の増加に伴い、量的に多様な社会的問題解決方略を習得することになる。そして、質的にもその社会、文化から有効な方略として評価される方略を多く用いるようになり、拒否される方略は用いられないようになる。子どもの社会的問題解決方略の使用と変化、子どもの行動パターンは、子どもを取り巻く家庭や社会の価値観の色染めの過程とも言える。逆に言えば、子どもの社会的問題解決方略を考察することにより、子どもを取り巻く家庭や社会の価値観を窺うこともできると考えられる。

本研究の目的は、仮想的な対人葛藤場面を設定し、中国と日本において、幼稚園年長児、小学校4年生、中学2年生、高校2年生、及び大学3年生を対象に、各発達段階における社会的問題解決方略について比較分析することである。この際、両地域における文化的社会的背景要因として、親子関係、学校生活（幼稚園生活）と葛藤解決目標を取り上げ、比較分析することも研究の目的となる。

2. 本研究の意義

従来から、「中国と日本は近くて遠い国」などと言われ、中国と日本の類似性や相違性についてはさまざまな観点から言及されてきている。中嶋（1990）は、日本人と中国人は「同文同種」とか「一衣帯水」という言葉が示すほどの身近な存在なのに、その実両者は、その価値観、歴史観、文明観、人生観等々において、あまりにも異質なのであって、この違いを考えることが、重要なポイントだと指摘している。また、陳（1971）、金山（1978）、松本（1987）、福永（1996）、邱（1996）、王（2000）などにおいても、さまざまな立場から、中日の文化の差異やそうした差異による文化的摩擦などについて指摘されている。特に、近年こうした分野に関する文献はその数が増えているようである。しかし、これらは大半が主に文化人類学や社会学的な視点に立った社会的現象や伝統的思想に関するものであり、

心理学的な観点に依拠した立場での研究は少ない。

社会や文化は長い歴史の中で、それぞれの地域において、人間によって形成され維持・伝承されてきたものである。当然ながら、それは「地域に根ざした」ものであり、個人が居住するその国や地域に独特のものとなっていることになる。人間の発達過程の中で人格の形成においては、彼らの生活の基盤をなす文化・環境の影響の大きさは計りしれない。つまり、人間の行動や考え方を規定する要因として、それぞれの地域がもつ文化や社会の影響を無視することができないということである。こうした観点から、個人の発達過程の中で形成してきた心理的特性と彼らが属する文化との関係について比較検討することには大きな意義がある。

心理学的な観点に立ち、子どもの社会的問題解決方略、自己主張及び自己抑制の特徴に関する比較文化的な研究は、主として、日米間とか日英間といった東洋と西洋の文化的特徴の差異という枠組みの中で、早期から多くの注目を集め、成果も挙げてきている（柏木，1988；箕浦，1990；吉武，1991；東洋，1994；佐藤，1991，1993，1994，2001）。しかし、これらの研究は横断的な研究であり、今までの研究は、縦断的研究、同じ東洋圏に位置する国間の比較研究があまり展開されていない（羅・堂野，2005）。中国と日本は地理歴史、言語文化、社会制度など様々な面において異なっており、問題解決方略においてそれぞれ特徴があると思われる。

本研究は、中日間の比較研究をすること、及び発達段階に基づいて比較研究をすること、社会的環境的背景要因として、親子関係、学校生活と葛藤解決目標を取り上げて比較研究することが独創的な側面となっている。本研究の結果は、この分野の研究における先駆的な示唆を提供することができ、さらに、両国の教育課程の検討や拡大しつつある国際理解および国際交流における貢献が期待されるところである。

第2節 本研究の概要

1. 本研究の要因計画

前章で述べたように、社会的問題解決方略の使用には、葛藤の内容、問題解決の目標、当事者の文化背景、性別、年齢、社会的支配性、知能、社会的評価、柔軟性など様々な要因が絡み合っていて影響している。当事者相互の仲間親密性、対人間地位などの相互関係による影響も多くの研究から指摘されている。

本研究は、他の影響要因を統制し、国（2）×性（2）×場面状況（6）×発達段階（5）の4要因計画で、社会的問題解決方略について検証した。「国」の要因においては2水準（中国と日本）、「性」の要因においても2水準（男と女）、「場面状況」の要因においては6水準（6場面）、「発達段階」の要因においては5水準（幼・小・中・高・大）である。

2. 対象地域

本研究の対象地域として、中国においては江西省、日本では山口県を取り上げることにした。

以下の地図で見られるように、江西省は中国の東南部、長江の下流に位置しており、雨

が多い亜熱帯湿潤気候で、古来「魚米之郷」として栄え、歴史的に陶淵明、歐陽修、王安石、朱熹、湯顯祖、詹天佑等の文学者、科学者、政治家が多く出現している。新中国成立後も「革命の根拠地」として重用されてきた。しかし、改革開放後は、経済的にも意識的にもそれほど発展している地域とはなっていない。見方を変えれば、伝統的な文化や意識がまだ残されている地域といえよう。一方、日本における山口県の場合も、維新の地として文化や歴史において大きな役割を果たしてきており、同様の位置づけになっていると考えられる。

本研究の対象者の所在地域は、日中ともに農村部を含む小都市である。対象者の社会的問題解決方略の特徴は、日中ともに「伝統型」或いは「農村型」の社会的問題解決方略と考えたほうが妥当である。簡潔さを考慮し、以下は「中国」と「日本」の特徴として述べていくが、この対象者の地域事情に留意して、調査結果を見ることとしたい。



Fig. 3 中国江西省の地理上の位置

3. 本研究の対象者

本研究は中国と日本の幼稚園年長児、小学校4年生、中学2年生、高校2年生、及び大学3年生を対象とした。それぞれ幼児期、児童期、青年前期、青年中期、青年後期という発達段階に位置し、日中比較とともに、発達的变化についても検討する。

実施に当たって、中国においては、幼稚園や学校の規模がかなり大きく、一定の資料を得ることが可能と考え、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学それぞれ1校（1園）に依頼して調査を実施した。日本においては、幼稚園・保育園10園、小学校6校、中学校4校、高等学校3校、大学1校に依頼して調査を実施した。中国と日本の高校はいずれも普通校である。大学はいずれも医学部、工学部を含めた総合大学である。

(1) 対象者の性別構成

Table 4は、幼・小・中・高・大学生の性別構成を示している。中国においては、幼・小・中・高・大学生のいずれも男子のほうがやや多かった。日本においては、中・高校生は女子のほうがやや多かったが、他は男子のほうがやや多かった。

統計分析処理の際、性差に関する分析では性別「不明」のデータを除いたが、日中間の相違、発達的变化など他の場合は込みに処理した。

Table 4 調査対象の性別構成

	中国				日本			
	男	女	不明	実数 (人)	男	女	不明	実数(人)
幼稚園	67.1	32.9		219	51.8	48.2		305
小学校	56.8	43.0	2.3	435	52.1	47.9		453
中学校	50.7	44.9	4.4	546	47.2	52.8		422
高校	54.8	43.4	1.8	571	47.5	52.5		495
大学	51.0	45.9	3.1	577	50.8	47.5	1.7	590

注： 表中の数字はパーセンテージを示している。

(2) 対象者の年齢構成

幼稚園年長児の年齢は、中国では4歳7ヶ月～6歳9か月にあり、平均5歳2ヶ月で、開きがやや大きくなっている。日本では5歳～6歳2ヶ月にあり、平均5歳3ヶ月である。Table 5は、小・中・高・大学生の年齢構成を示している。

Table 5 調査対象の年齢構成

小学校	年齢										
		7	8	9	10	11	12	13	不明		
	中国	0.2	1.6	30.6	51.7	12.6	2.5	0.7			
	日本		0.2	77.7	20.5				1.5		
中学校	年齢										
		12	13	14	15	16	17	18	不明		
	中国	1.6	22.0	43.6	25.1	6.4	0.4	0.2	0.7		
	日本	0.2	72.7	26.1					0.9		
高校	年齢								不明		
		14	15	16	17	18	19				
	中国	0.7	14.0	47.3	26.3	9.1	1.8	0.9			
	日本			72.7	26.9	0.2		0.2			
大学	年齢										
		16	17	18	19	20	21	22	23	24	不明
	中国	0.2	1.4	6.1	8.0	33.8	29.1	15.8	4.2		1.4
	日本				0.7	54.7	33.1	7.6	0.8	0.7	2.4

注： 表中の数字はパーセンテージを示している。

中国でも日本でも今日における教育制度、教育課程は「6・3・3」制となっており、両国ともに小学校・中学校は義務教育となっている。本研究は対象の学年を小学校4年、中学校2年、高校2年、大学3年と指定したため、小学校では9・10歳、中学校では13・14歳、高校では16・17歳、大学では20・21歳が中心となっている。ただし、中国と日本では学年の始期が異なり（中国は9月1日、日本は4月1日が学年の開始）、本研究の調査の時期のズレにより、日本の子どもの方がやや年少者が多くなっている。また、中国においては「飛び級」や「留年」、早期入学なども厳しく禁止されていないため、いずれの学年も年齢の開きがやや大きくなっている。

本研究は教育年齢（学年）を中心として考えており、実年齢に対しては考慮しないことにした。

4. 調査の内容と方法

(1) 調査の内容と方法

調査の内容は、社会的問題解決方略を中心とした4つの部分が含まれている。

社会的問題解決方略については、中国と日本の幼稚園年長児～大学生の全対象者に対して行われた。幼稚園年長児には本研究者が面接法で、小学生～大学生には質問紙法で行われた。

子どもの人格形成に大きく影響を与える親子関係は、子どもの社会的問題解決方略にも影響を与える社会環境的要因であると考え、中国と日本の幼稚園年長児～高校生を対象に質問紙法で行われた。大学生にはその質問内容が適切でないため省いた。幼稚園年長児は親による回答、小学生～高校生は本人による回答であった。

現代の学校は子供が通らなければならない人生の道程であり、学校教育は文化伝達の制度・慣行・過程であり、人間形成の過程でもある。学校生活（幼稚園生活）は、子どもの価値観・倫理観の形成、子どもの社会的問題解決方略に影響を与える社会環境的要因であると考え、学校のディリープログラム、年間行事、運動会の三つの角度から、中国と日本の幼稚園、小学校、中学校、高校について比較検討した。

社会的動機付けとして、葛藤場面に出会った時、どのような結果や目標を期待するかという葛藤解決目標も、子どもの社会的問題解決方略に影響を与える社会環境的要因であると考え、中国と日本の大学生を対象に質問紙法で行われた。

(2) 小・中・高・大学生の質問紙の構成

フェイスシートは年齢及び性別を設けた。

小・中・高校生の質問紙は、第一部の社会的問題解決方略に関する質問項目と、第二部の親子関係に関する質問項目から構成されている。大学生の質問紙は、第一部の社会的問題解決方略に関する質問項目と、第二部の葛藤解決目標に関する質問項目から構成されている。

具体的な質問内容は、以後の該当章節で詳述する。

同じ発達段階の対象者に対する質問項目は、中国と日本は全く同じである。本研究は比較文化的な性質をもつものであり、用いる言語の問題は結果に影響を及ぼす隠れた要因になることが考えられる。したがって、質問項目の言語化には特に配慮し、可能な限り同じ内容の質問項目となるように日本語を中国語に翻訳した。翻訳においては、本研究者が翻訳した上で、中国の大学の日本語科教授を含む3人の合議により確定した。

5. 実施時期と方法

予備調査として、本調査における質問項目の検討に資するため、中国において2006年2月、日本において2006年3月に、高校生を対象として行った。

本調査は、全対象者に対して、中国では2006年4月、日本では2006年5～7月に実施した。大学生は1回目の調査では中国においても日本においても男子が少ないため、中国では2006年10月、日本では2006年11～12月に男子を対象に補足調査を行った。

質問紙法の実施に当たっては、幼稚園の親には担任の教師を通して配布し、後日回収する方法を用いた。園児とその親が対応できるよう、担任教師に事前にマークすることを依頼した（結果に影響を及ぼさないよう、親の質問紙には園児の名前でなく、質問紙の片隅に出席番号を振ることにした）。小・中・高校生には原則として、集団で一斉に回答をさせて回収するという方法を用いた。ただし、日本での1高校のみは配布後持ち帰り、個別に回答したものを学校で回収した。小学生に対しては、質問項目の内容理解及び進行の統制のため、担任の教師が読み上げながら回答を記入するという方法とした。大学生には担任の教師を通して配布し、後日回収する方法を用いた。

幼稚園年長児への面接法の具体的な内容は、以後の該当章節で詳述する。

第2章 中国と日本における社会的問題解決方略

社会的問題解決方略については、本研究は中国と日本の幼稚園年長児～大学生の全対象者に対して行われた。対象者の発達段階を考慮し、幼稚園年長児には面接法で、小学生～大学生には質問紙法で行われた。

葛藤場面の設定は、幼稚園年長児と小学生以上の対象者は同様に、持物の損害、級友との意見対立、権利の侵害、名誉の侵害、役割の怠惰、先生との意見対立という6つ（大学生は前からの5つ）の場面とした。ただし、幼稚園年長児に対しては、幼児であることを考慮し、場面提示は紙芝居で行うことにした。

社会的問題解決方略の設定と分類基準は、幼稚園年長児にも小学生以上の対象者に準じているが、幼児であることを考慮し、方略を簡略化した。社会的問題解決方略の設定と分類基準は、小学生以上の対象者に関する部分において詳述する。幼稚園年長児に関する部分においては、簡略化した方略のみ提示する。

以下は、幼稚園年長児と小学生以上の対象者を分けて、その調査方法と結果を開示する。

第1節 中国と日本の幼稚園児における社会的問題解決方略

1. 方法

(1) 調査協力を得た幼稚園（保育園）には、担任教師が事前に園児たちに、「これからよその先生と紙芝居をしますが、正しいか間違えるかということはないので、思ったことを恥ずかしがらずにはっきり話してね」と、念を押してくださるようお願いした。

(2) 実施日は、幼稚園内の一室に被験児が出席番号順に担任教師に誘導されて入室し、本研究者と向き合う状態で個人面接を行われた。緊張を解すため、まず笑顔で「こんにちは。お名前は？」と声をかけて、「いい名前ですね」などを話して、緊張感が和らげてから、「これから先生と紙芝居をしますから、〇〇ちゃん（くん）の思ったことを教えてね」と面接を始めた。

(3) 葛藤場面と各方略の提示は、いずれも絵カードを見せながら説明することにした（場面や方略の絵及び言語説明の内容が年長児に適切かどうか、理解できるかどうかについては、事前に現職の幼稚園教師に確認してもらい、調整した）。具体的な実験実施は以下のように行われていた。小学生以上の対象者と同様に、同じクラスの同性の友達という条件に統制するため、提示した葛藤場面の絵は男女別にした。

【場面1】: (Fig. 4の絵を見せながら) これは〇〇ちゃん（くん）（幼児の性別によって言い換える、以下同）です。〇〇ちゃんがお茶を飲んでいる時、△△組（該当園児の所属組みの名前、以下同）の友達がぶつかってきて、〇〇ちゃんの水筒を落として、割ってしまいました。

①この時〇〇ちゃんはどうしますか（多くの園児は「片付ける」などをいい、ぶつかる友達には言及していないため、「ぶつかる友達にはどうしますか」と付け加えて質問することがある）。



絵①（男子用）



絵①（女子用）



絵②（男女共用）

Fig. 4 持物の損害場面の紙芝居

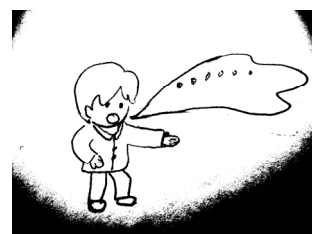
②ここに五つの方法があります。(Fig. 5の絵を順番に見せながら) 1番はお友達を叩いたり怒鳴ったりする、2番は他の友達に「〇〇ちゃんがいやだ、私をぶつかって、水筒を壊した」という、3番はお友達に「私の水筒を弁償して(直して)」という、4番はこのことを先生に言う、5番は何もしない、〇〇ちゃんは何番が一番いいと思いますか。



①直接的攻撃



②間接的攻撃（背後攻撃）



③直接的主張



④間接的主張（先生頼り）



⑤抑制的方略



泣く（場面6の方略④）

Fig. 5 社会的問題解決方略の絵カード

【場面2】(Fig. 6の絵を見せながら) これは〇〇ちゃんです。〇〇ちゃんがボール遊びをしている時、△△組の友達がやってきて「縄跳びをしよう」と誘いました。〇〇ちゃんはボール遊びがしくて、「いやだ」と言いましたが、友達がまた誘いました。

①この時〇〇ちゃんはどうしますか。



(男子用)



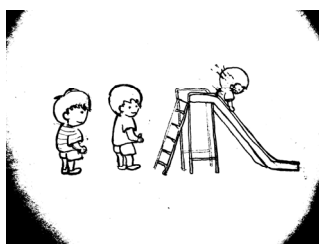
(女子用)

Fig. 6 級友との意見対立場面の紙芝居

②ここに五つの方法があります。(Fig. 5と同様の絵を順番に見せながら) 1番は誘う友達を叩いたり怒鳴ったりする、2番は他の友達に「〇〇ちゃんがいやだ。私がいやだと言ったのに、まだ誘ってくる」という、3番は誘う友達に「いやだ、ボール遊びしたい」という、4番はこのことを先生に言う、5番は誘う友達に「いいよ」という、〇〇ちゃんは何番が一番いいと思いますか。

【場面3】(Fig. 7の絵を見せながら)(実際に提示した絵は前後順がわかりやすいように、場面人物の服に色を塗ってある)、これは〇〇ちゃんです。〇〇ちゃんが滑り台に乗るために並んでいます。この時、後ろの△△組の友達が割り込んできました。

①この時〇〇ちゃんはどうしますか。



絵① (男子用)



絵② (男子用)



絵① (女子用)



絵② (女子用)

Fig. 7 権利の侵害場面の紙芝居

②ここに五つの方法があります。(Fig. 5と同様の絵を順番に見せながら) 1番はお友達を叩いたり怒鳴ったりする、2番は他の友達に「〇〇ちゃんがいやだ、順番を守らないから」という、3番は割り込む友達に「割り込まないで、順番を守って」という、4番はこのことを先生に言う、5番は何もしないで先に滑らせる、〇〇ちゃんは何番が一番いいと思いますか。

【場面4】(Fig. 8の絵を見せながら) これは〇〇ちゃんです。〇〇ちゃんが部屋に入ろうとする時、△△組の友達が〇〇ちゃんの悪口を言っているのが聞こえました。

①この時〇〇ちゃんはどうしますか。



(男子用)



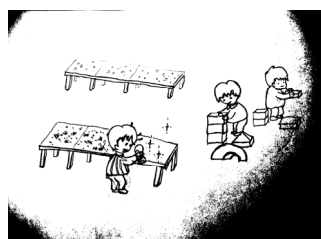
(女子用)

Fig. 8 名誉の侵害場面の紙芝居

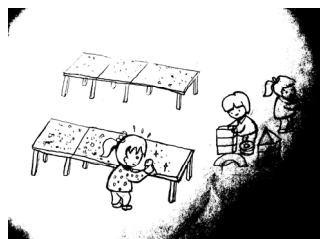
②ここに五つの方法があります。(Fig. 5と同様の絵を順番に見せながら) 1番はお友達を叩いたり怒鳴ったりする、2番は他の友達に「〇〇ちゃんがいやだ、悪口を言うから」という、3番は悪口を言う友達に「悪口を言っちゃいけないよ、私に謝って」という、4番はこのことを先生に言う、5番は何もしない、〇〇ちゃんは何番が一番いいと思いますか。

【場面5】(Fig. 9の絵を見せながら) これは〇〇ちゃんです。〇〇ちゃんの△△組の部屋の掃除は、給食の後で、2人で当番することになっています。今日、〇〇ちゃんがもう掃除を始めたけど、もう一人の当番の友達はまだ他の人と遊んでいます。

①この時〇〇ちゃんはどうしますか。



(男子用)



(女子用)

Fig. 9 役割の怠惰場面の紙芝居



Fig. 10 先生との意見対立場面の紙芝居

②ここに五つの方法があります。(Fig. 5と同様の絵を順番に見せながら) 1番はお友達を叩いたり怒鳴ったりする、2番は他の友達に「〇〇ちゃんがいやだ、ちゃんと当番しないから」という、3番は当番しない友達に「早く掃除して」という、4番はこのことを先生に言う、5番は何も言わないで1人で掃除する、〇〇ちゃんは何番が一番いいと思いますか。

【場面6】(Fig. 10の絵を見せながら) 生活発表会の時、〇〇ちゃんの△△組は動物劇場をやることになりました。ライオン、パンダ、ウサギ、アヒルの4つの動物の中で、〇〇ちゃんは何が一番やりたいですか、どれが一番やりたくないですか。(回答の後)、けれども、先生から□□(一番やりたくないと答えた動物を取り上げて)をやると言われました。

①この時〇〇ちゃんはどうしますか。

②ここに五つの方法があります。(Fig. 5と同様の絵を順番に見せながら、ただし4番の「先生頼り」が間接的主張の「泣く」に変えた) 1番は先生を叩いたり怒鳴ったりする、2番は他の友達に「先生がいやだ、私のやりたくない□□をやらせるから」という、3番は先生に「□□をやりたくない、◇◇(一番やりたいと答えた動物)をやりたい」という、4番は泣く、5番は「いいよ」という、〇〇ちゃんは何番が一番いいと思いますか。

2. 結果

幼稚園年長児の社会的問題解決方略の分類基準においては、小学生以上の対象者に準じているが、幼児であることを考慮し、方略を簡略化した。最もよいと思われる方略は、直

接的攻撃、間接的攻撃（背後的攻撃）、直接的主張、間接的主張（場面1～5は先生頼り、場面6は泣く）、抑制的方略という5つのカテゴリーに省略して提示することにした。実際に取りうる方略も最もよいとされる方略に倣って、同様の5つのカテゴリーにまとめた。

実際に取りうる方略をカテゴリー化する際、一般的に「謝ってもらう」のは「直接的主張」と考えられるが、持物の損害場面においては、「謝ってもらう」のは単に社会的に要求されている儀礼上の行動で、実際に受けた損害に対して主張していないため、ここでは、小学生以上の対象者と同様に、「抑制的方略」としてカウントした。因みに、中国においても日本においても、持物の損害に対して、多くの幼児は「謝ってもらう」ことを要求し、まだそれに止まり、損害への補償までは主張しないことが明らかになった。この他、持物の損害場面における間接的主張も「先生頼り」を基本としているが、日本では「泣く」も多く見られ、同様に間接的主張としてカウントした。

この節の図表の中で各方略及び場面は、次のように、直接的攻撃は「直攻」、間接的攻撃（背後的攻撃）は「間攻」、直接的主張は「直主」、間接的主張は「間主」、抑制的方略は「抑制」、持物の損害場面は「持物」、級友との意見対立場面は「意見1」、権利の侵害場面は「権利」、名誉の侵害場面は「名誉」、役割の怠惰場面は「役割」、先生との意見対立場面は「意見2」、と省略して示す。

2-1 中国における調査の結果

中国の幼稚園における社会的問題解決方略に関する面接調査では、男子147人、女子72人の有効回答を得られた。Table 6は中国における調査の結果である。各場面において、男女それぞれ実際に取りうる方略及び最もよいと選択された方略（以下、「理想とする方略」と略す）の占める割合を示している（2割以上を占めた方略はゴシック体で示している）。

Table 6 中国幼稚園年長児の社会的問題解決方略の構成

		実際に取りうる方略						理想とする方略					
		直攻	間攻	直主	間主	抑制	不明	直攻	間攻	直主	間主	抑制	不明
持物	男	3.4	1.4	2.7	34.0	51.0	7.5	4.8	8.8	16.3	55.1	15.0	0.0
	女	1.4	0.0	5.6	38.9	40.3	13.9	0.0	11.1	16.7	59.7	12.5	0.0
意見1	男	2.0	0.7	55.8	12.9	23.1	5.4	6.1	15.6	24.5	23.1	30.6	0.0
	女	1.4	1.4	50.0	13.9	26.4	6.9	6.9	22.2	15.3	13.9	41.7	0.0
権利	男	0.0	1.4	40.1	29.9	25.9	2.7	9.5	15.6	20.4	27.2	27.2	0.0
	女	4.2	0.0	33.3	30.6	23.6	8.3	12.5	12.5	27.8	20.8	26.4	0.0
名誉	男	5.4	3.4	20.4	59.9	4.1	6.8	4.8	15.6	17.7	43.5	18.4	0.0
	女	1.4	2.8	12.5	68.1	4.2	11.1	13.9	12.5	23.6	41.7	8.3	0.0
役割	男	2.0	0.7	56.5	29.9	6.1	4.8	4.1	15.0	39.5	26.5	15.0	0.0
	女	2.8	0.0	50.0	34.7	6.9	5.6	6.9	12.5	34.7	34.7	11.1	0.0
意見2	男	2.7	0.0	47.6	0.7	39.5	9.5	8.8	12.9	40.1	4.8	33.3	0.0
	女	0.0	0.0	50.0	2.8	38.9	8.3	9.7	12.5	34.7	6.9	34.7	1.4

注： 表中の数字はパーセンテージを示している。

(1) 性差に関する検討

男女間で比較してみると、実際に取る方略においては、男女間基本的に同様な傾向を示している。詳細に見ると、級友との意見対立、権利の侵害、名誉の侵害、役割の怠惰の4場面において、男児の直接的主張が女児より高くなっている。他の場面においては差が少ない。持物の損害、名誉の侵害の2場面において、女児の間接的主張（先生頼り）が男子より高くなっている。他の場面においては差が少ない。持物の損害場面において、男児の抑制的方略も女子より高くなっている。幼稚園女児が男児より一歩進んで、自分の受けた損害に対して、直感的にストレートに主張するのみならず、先生の権威を借りた間接的主張もより生かしていると考えられる。

理想とする方略においては、男女間およそ同様な傾向を示している。詳細に見ると、級友との意見対立場面において、男女間の意識が異なっている。男児の直接的主張及び間接的主張（先生頼り）が女児より高く、女児の抑制的方略及び間接的攻撃（第三者に不満を漏らす背後的攻撃）が男児より高くなっている。意識（社会的価値観）の上でも、幼稚園女児が男児より一歩進んで、相手との関係を考慮し、他人の意見を許容したり、直接的な対決を避けて間接的に不満を発散したりするようになったと考えられる。

(2) 場面間の相違に関する検討

各場面で占める割合の高い方略をみると、実際に取る方略においては、主張性が最も高いのは役割の怠惰と名誉の侵害の2場面であり、いずれの場面も直接的主張と間接的主張（先生頼り）をあわせて8割以上を占めた。役割の怠惰場面では直接的主張、名誉の侵害場面では間接的主張（先生頼り）が中心となっている。幼稚園年長児という発達段階では、社会的役割が遂行すべき、名誉を侵害してはいけないという意識が既に形成しており、堂々と主張したり、自分の力で解決できない場合は先生を頼ったりするようになったと思われる。級友との意見対立、先生との意見対立場面では、直接的主張が最も高く、続いては相手の意見に従う抑制であり、直接的主張と抑制の二極に分かれている。級友との意見対立における抑制は、先生との意見対立における抑制よりも低い。幼稚園年長児という発達段階では、相手との関係を考慮し、相手の気持ちに沿うよりも、自分の意見を押し通し、確固たる自己を持つことが優先されていると考えられる。また、先生の権威性への配慮が見られ、先生との意見対立において、自己抑制が級友の場合より高くなっている。持物の損害場面では抑制的方略が最も高く、間接的主張（先生頼り）が続いている。面接の際、多くの幼児の「(水筒を) お母さんに買ってもらう」という反応から、幼稚園年長児という発達段階では、金銭における自他の意識がまだ高くない、親がカバーしてくれることが予測しており、金銭的損害に対する心理的ダメージが低く、自己主張も低いと考えられる。権利の侵害場面（順番が抜かされた）において、直接的主張、間接的主張（先生頼り）、抑制的方略が三本柱の構造になっており、最も高くなっている。幼稚園年長児という発達段階では、順番を守るべきだという意識が形成しており、主張性も高いが、喧嘩にならないよう、順番を抜かされるような些細な損害に対する相手への許容、自己抑制も高くなっていると考えられる。

理想とする方略においては、実際に取る方略とおよそ同様な傾向を示しているが、持物の損害、級友との意見対立場面においてやや異なっている。持物の損害場面においては、間接的主張（先生頼り）が中心的によい方略として選択されている。意識の上では、持物

の損害に対して何もせず、一方的に抑制するよりも、先生に頼って円満に解決することを幼稚園年長児が望んでいると窺える。級友との意見対立場面においては、相手の意見に従い、自分の意見を抑制する方略が最も高く、続いては直接的主張、間接的主張（先生頼り）、間接的攻撃（背後的攻撃）の三本柱である。意識の上では、幼稚園年長児は、相手との関係も重視するようになったが、自分の意見を押し通そうとする意識も強く、主張と抑制の二極に揺れていることが窺える。

（3）実際にとる方略と理想とする方略の相違に関する検討

実際にとる方略と理想とする方略を比較してみると、3点のことが見て取れる。

①いずれの場面においても、理想とする方略が実際にとる方略より、ばらつきが大きい。実際にとる方略においては、占める割合が極めて高く、中心的な存在となっている方略があるが、理想とする方略においては、中心的な存在となっている方略がみられない。幼稚園年長児という発達段階では、まだ自己中心的で、直感的に行動する段階にあり、各個人の実際の行動パターンがある程度共通しているが、意識の上では、共通する価値観がまだ十分確立していないと考えられる。特に、理想とする方略において直接的攻撃の占める割合が高くなったことが興味深い。これは、日々先生から「喧嘩してはいけない」「皆仲良く」という強い意志から、トラブルのある時、相手や先生に恐れて喧嘩しないよう、攻撃的行動を自ら抑制し、実際には取らないが、心のうちには直接的攻撃は有力で、自分の意のままにいけるといふ思いがあり、理想とする方略として選んだと思われる。

②持物の損害、級友との意見対立、名誉の侵害場面において、実際にとる方略と理想とする方略が異なる様相を呈している。持物の損害場面においては、実際にとる方略は抑制的方略、続いては間接的主張（先生頼り）が最も多くなっているが、理想とする方略は間接的主張（先生頼り）が最も多くなっている。意識の上では、持物の損害に対して、受けた損害を鵜呑みではなく、先生に頼って、より円満な解決を望んでいることが伺える。級友との意見対立場面においては、実際にとる方略は男女同様に直接的主張、続いては抑制的方略が最も多くなっているが、理想とする方略は抑制的方略が最も多くなっている。意識の上では、自分の思うままではなく、友達の意見や気持ちを優先するようになったと思われる。名誉の侵害場面においては、実際にとる方略は男子の直接的主張が女子より高くなっているが、理想とする方略は女子の直接的主張が男子より高くなっており、逆転している。実際の行動においては、幼稚園男児のほうがストレートに主張し、自己防衛する傾向が強いが、意識の上では、幼稚園女児のほうがより自己主張したい傾向が強いと思われる。

③実際にとる方略において、男女間の傾向は各場面において一貫性が見られるが、理想とする方略においては、男女間の傾向は各場面においてばらばらである。男女間実際の行動上のズレより、意識上（社会的価値観）のズレのほうが大きい。言い換えれば、中国の幼稚園の男女児は、先生頼り以外、行動の上では共にまだ衝動的で、自発的な情緒的な反応に止まっており、意識の上では女児がより発達し、社会的規範意識が高く、男児との発達のズレが存在すると思われる。

2-2 日本における調査の結果

日本の幼稚園における社会的問題解決方略に関する面接調査では、男子 158 人、女子 147 人の有効回答を得られた。Table 7 は日本における調査の結果である。各場面において、男

女それぞれ実際に取りの方略及び理想とする方略の占める割合を示している（2割以上を占めた方略はゴシック体で示している）。

（１）性差に関する検討

男女間で比較してみると、実際に取りの方略においては、男女間およそ同様な傾向を示している。詳細に見ると、持物の損害、権利の侵害、名誉の侵害場面において、女兒の間接的主張（先生頼り）が男児より高くなっている。他の場面においては差が少ない。級友との意見対立及び権利の侵害場面において、男児の直接的主張が女兒より高くなっており、役割の怠惰場面において、女兒の直接的主張が男児より高くなっている。持物の損害場面において、男児の抑制的方略が女兒より高くなっており、級友との意見対立場面において、女兒の抑制的方略が男児より高くなっている。幼稚園女兒は男児より一歩進んで、自分の受けた損害に対して、直感的にストレートに主張するのみならず、先生の権威を借りた間接的主張もより生かしていると考えられる。また、意見の対立に対しても、幼稚園女兒が男児より一歩進んで、相手との関係、相手の気持ちを考慮し、自分の気持ちを抑制し、相手の意見を許容する姿勢をとるようになったと考えられる。

理想とする方略においては、男女間ほとんど同様な傾向を示している。詳細に見ると、持物の損害、名誉の侵害、役割の怠惰場面において、女兒の間接的主張（先生頼り）が男児より高くなっている。意識の上では、幼稚園男児は、女兒ほど先生頼りしていない以外、ほとんど女兒とズレがないと考えられる。

Table 7 日本幼稚園年長児の社会的問題解決方略の構成

		実際に取りの方略						理想とする方略					
		直攻	間攻	直主	間主	抑制	不明	直攻	間攻	直主	間主	抑制	不明
持物	男	8.2	0.6	2.5	19.0	48.7	20.9	4.4	6.3	21.5	51.9	15.2	0.6
	女	2.7	1.4	6.8	31.3	33.3	24.5	2.7	5.4	21.1	57.8	12.9	0.0
意見 1	男	0.6	0.0	43.0	1.9	52.5	1.9	0.0	5.1	24.7	21.5	47.5	1.3
	女	0.0	0.0	34.0	2.0	59.9	4.1	0.0	6.1	21.8	22.4	49.7	0.0
権利	男	3.2	0.0	55.1	9.5	20.9	11.4	0.6	13.9	38.6	24.7	21.5	0.6
	女	1.4	0.0	44.2	21.8	23.8	8.8	1.4	12.2	40.1	20.4	25.9	0.0
名誉	男	6.3	0.6	36.7	32.9	10.8	12.7	7.6	10.1	38.0	33.5	10.1	0.6
	女	3.4	1.4	36.7	38.1	11.6	8.8	4.1	8.8	38.1	40.8	8.2	0.0
役割	男	0.6	3.8	63.3	13.9	11.4	7.0	5.1	8.2	44.3	24.1	17.1	1.3
	女	1.4	1.4	69.4	11.6	9.5	6.8	4.1	7.5	47.6	29.9	10.9	0.0
意見 2	男	0.6	0.0	37.3	0.6	57.6	3.8	1.3	7.0	37.3	7.6	44.3	2.5
	女	0.0	0.0	42.2	0.7	55.1	2.0	2.0	5.4	33.3	10.2	48.3	0.7

注： 表中の数字はパーセンテージを示している。

（２）場面間の相違に関する検討

各場面で占める割合の高い方略をみると、実際に取りの方略においては、持物の損害場面では抑制的方略が最も高くなっており、続いては女子の間接的主張（先生頼り）で、「不明」

つまり答えられず口をつぐんでしまう、言い換えればどう対応していいかわからない子どもが他の葛藤場面より多いことも特徴的である。幼稚園年長児という発達段階では、金銭的損害に対する主張性がまだ低く、対応する方略もまだ身につけていないと考えられる。級友との意見対立及び先生との意見対立場面では抑制的方略が最も高く、続いては直接的主張であり、主張と抑制の二極に分かれている。幼稚園年長児という発達段階では、既に相手との関係、相手の気持ちを考慮するようになり、意見の対立において、自分の意見を押し通すよりも、相手の気持ちを配慮するほうが優先されていると考えられる。権利の侵害場面では直接的主張が最も高く、続いては抑制的方略及び女子の間接的主張（先生頼り）である。幼稚園年長児という発達段階では、順番を守るべきだという意識が形成しており、主張性も高いが、喧嘩にならないよう、順番を抜かされるような些細な損害に対する相手への許容、自己抑制も高くなっていると考えられる。名誉の侵害場面では直接的主張及び間接的主張（先生頼り）がともに高く、あわせて7割以上を占めた。幼稚園年長児という発達段階では、名誉を犯されてはいけないという意識が高く、直接的に主張するほか、効果を高めるため先生に頼ったりもすると思われる。役割の怠惰場面では直接的主張が最も高く、中心的な方略となっている。役割の怠惰場面における直接的主張は、他の全ての場面より最も高くなっている。幼稚園年長児という発達段階では、社会的役割が遂行すべきだという価値観が浸透しており、その社会的正当性から堂々と主張するようになったと思われる。

理想とする方略においては、実際に取る方略とおよそ同様な傾向を示しているが、持物の損害、級友との意見対立、役割の怠惰場面においてやや異なっている。持物の損害場面においては、間接的主張（先生頼り）が中心のよい方略として選択されており、続いては直接的主張である。意識の上では、金銭的損害に対して主張性が芽生えてきており、一方的に抑制するよりも、先生に頼ったり、自己主張したりすることを幼稚園年長児が望んでいると伺える。級友との意見対立、役割の怠惰場面においては、直接的主張の占める割合の一部は間接的主張（先生頼り）に変更している。意識の上では、幼稚園年長児は、相手との直接的な対決を避け、権威（先生）を借りて自己主張しようとする姿勢が伺える。

（3）実際にとる方略と理想とする方略の相違に関する検討

実際に取る方略と理想とする方略を比較してみると、3点のことが見て取れる。

①いずれの場面においても、理想とする方略が実際に取る方略より、間接的攻撃（背後攻撃）、間接的主張（先生頼り）の占める割合が高くなっている。幼稚園年長児という発達段階では、実際の行動までまだ至っていないが、意識の上では、相手と直接的に対決しない間接的方略の優越性が認識されるようになったと考えられる。

②名誉の侵害場面以外、他の5つの場面において、実際に取る方略と理想とする方略が異なる様相を呈している。持物の損害場面においては、実際に取る方略は抑制的方略が最も高くなっているが、理想とする方略は抑制的方略が大きく下がり、間接的主張（先生頼り）、続いては直接的主張が最も高くなっている。意識の上では、金銭的損害を鵜呑みするのではなく、先生に頼って、より円満な解決を望んでいることが窺える。級友との意見対立及び先生との意見対立場面においては、理想とする方略は実際に取る方略より、抑制的方略が大きく下がっている。実際には、相手への配慮などからやせ我慢し、自己抑制しているが、意識の上では自分の意志を押し通したい気持ちが強く残っていると窺える。級友

との意見対立、権利の侵害、役割の怠惰場面においては、直接的主張の占める割合の一部は間接的主張（先生頼り）に変更している。意識の上では、幼稚園年長児は、相手との直接的な対決を避け、権威（先生）を借りて自己主張しようとする姿勢が窺える。

③実際取る方略において、男女間の傾向は各場面において異なっているが、理想とする方略においては、先生頼り以外、男女間ほぼ一致している。日本の幼稚園男児は、意識（社会的価値観）の上では女児とほとんど差がないが、意識から行動までまだ至らず、行動の上では女児と差が出てきている。言い換えれば、日本の男女児の発達のズレは、意識の上にはあまりないが、行動の上では差が見られ、女児のほうがより発達していると思われる。

2-3 中国と日本の比較

Table 8は中国と日本の幼稚園における社会的問題解決方略に関する面接調査の全体の結果である。各場面において、中国と日本それぞれ実際取る方略及び理想とする方略の占める割合を示している（2割以上を占めた方略はゴシック体で示している）。

（1）実際にとる方略において

日中間で比較してみると、実際取る方略においては、以下のことが見て取れる。

①いずれの場面においても、中国の間接的主張（先生頼り）が日本より高くなっている。中国の幼児が日本の幼児より、問題解決において先生を頼っていることが窺える。

②権利の侵害、名誉の侵害、役割の怠惰場面における直接的主張は、日本のほうが中国より高くなっているが、級友との意見対立及び先生との意見対立場面における直接的主張は、中国のほうが日本より高くなっている。場面によって、葛藤によって、中国と日本の幼児の主張性が異なっていることが窺える。

③級友との意見対立及び先生との意見対立場面における抑制的方略は、日本のほうが中国より高くなっている。意見の対立に対して、日本の幼児が中国の幼児より、相手の気持ちを配慮し、相手に同調する傾向が高いことが窺える。

④持物の損害場面において、「不明」つまり答えられず口をつぐんでしまうことは日本のほうが中国より高くなっている。これは、日本の幼児のほうが問題解決能力が低いと直感的に解釈することもあるが、日本の幼児は権利の侵害、名誉の侵害、役割の怠惰場面において中国の幼児より直接的主張が高いこと、理想とする方略において中国の幼児より社会的規範意識が確立していること、面接の時受けた印象などから、これは、日本の幼児が戸惑いのあるとき、中国の幼児ほど、気軽に安易に答えず、より穏便であると解釈したほうが妥当であるように思われる。

⑤各場面に最も高くなっている方略を見ると、名誉の侵害、級友との意見対立及び先生との意見対立場面においては、日中間異なる様相を呈している。級友との意見対立及び先生との意見対立場面においては、中国は直接的主張が最も高くなっているが、日本は抑制的方略が最も高くなっている。意見の対立に対して、中国の幼児は自分の意志を貫く傾向が高いが、日本の幼児は相手に同調する傾向が高いと見られる。名誉の侵害場面においては、中国は間接的主張（先生頼り）が中心的な方略で最も高くなっているが、日本は直接的主張が間接的主張（先生頼り）とともに、最も高くなっている。中国の幼児は先生頼りの傾向が高く、日本の幼児は自らの主張と先生頼りの二本柱で問題解決に臨んでいる傾向

が高いと窺える。

Table 8 中国と日本の幼稚園年長児の社会的問題解決方略の構成

		実際に取る方略						理想とする方略					
		直攻	間攻	直主	間主	抑制	不明	直攻	間攻	直主	間主	抑制	不明
持物	中国	2.7	0.9	3.7	35.6	47.5	9.6	3.2	9.6	16.4	56.6	14.2	0.0
	日本	5.6	1.0	4.6	24.9	41.3	22.6	3.6	5.9	21.3	54.8	14.1	0.3
意見 1	中国	1.8	0.9	53.9	13.2	24.2	5.9	6.4	17.8	21.5	20.1	34.2	0.0
	日本	0.3	0.0	38.7	2.0	56.1	3.0	0.0	5.6	23.3	22.0	48.5	0.7
権利	中国	1.4	0.9	37.9	30.1	25.1	4.6	10.5	14.6	22.8	25.1	26.9	0.0
	日本	2.3	0.0	49.8	15.4	22.3	10.2	1.0	13.1	39.3	22.6	23.6	0.3
名誉	中国	4.1	3.2	17.8	62.6	4.1	8.2	7.8	14.6	19.6	42.9	15.1	0.0
	日本	4.9	1.0	36.7	35.4	11.1	10.8	5.9	9.5	38.0	37.0	9.2	0.3
役割	中国	2.3	0.5	54.3	31.5	6.4	5.0	5.0	14.2	37.9	29.2	13.7	0.0
	日本	1.0	2.6	66.2	12.8	10.5	6.9	4.6	7.9	45.9	26.9	14.1	0.7
意見 2	中国	1.8	0.0	48.4	1.4	39.3	9.1	9.1	12.8	38.4	5.5	33.8	0.5
	日本	0.3	0.0	39.7	0.7	56.4	3.0	1.6	6.2	35.4	8.9	46.2	1.6

注： 表中の数字はパーセンテージを示している。

(2) 理想とする方略において

理想とする方略においては、以下のことが見て取れる。

①持物の損害場面以外、いずれの場面においても、各方略のばらつきは中国のほうが日本より大きい。金銭的損害に対する社会的規範意識は、中国の幼児と日本の幼児はあまり差がないが、他の侵害に対する社会的規範意識は、中国の幼児は日本の幼児ほど確立していないと思われる。

②権利の侵害、名誉の侵害、役割の怠惰場面における直接的主張は、日本のほうが中国より高くなっている。他の場面では差が少ない。問題解決に対する自己主張は、中国の幼児は日本の幼児ほど発達していないと考えられる。

③級友との意見対立及び先生との意見対立場面における抑制的方略は、日本のほうが中国より高くなっている。他の場面では差が少ない。問題解決に対する自己主張のみならず、問題解決に対する自己抑制も、中国の幼児は日本の幼児ほど発達していないと考えられる。

④各場面に最も高くなっている方略を見ると、権利の侵害、名誉の侵害及び先生との意見対立場面においては、日中間異なる様相を呈している。権利の侵害場面においては、中国は抑制的方略が、間接的主張(先生頼り)、直接的主張とともに、最も高くなっているが、日本は直接的主張が最も高くなっている。名誉の侵害場面においては、中国は間接的主張(先生頼り)が中心的な方略で最も高くなっているが、日本は直接的主張が間接的主張(先生頼り)とともに、最も高くなっている。先生との意見対立場面においては、中国は直接的主張が最も高くなっているが、日本は抑制的方略が最も高くなっている。中国の幼児は受けた侵害に対する主張性、相手の意見への許容において日本の幼児ほど高くないこと、

中国の幼児は日本の幼児より、先生頼りの傾向が高いことが窺える。

3. まとめ

中国と日本における幼稚園年長児の社会的問題解決方略に関する上の結果から、主な特徴について以下のようにまとめることができる。

(1) 性差について

幼稚園年長児という発達段階では、実際に取る方略においても、理想とする方略（最もよいと思われる方略）の選択においても、中国の男女間も日本の男女間も、差が見られた。

実際に取る方略において、中国では持物の損害、名誉の侵害の2場面において、女兒の間接的主張（先生頼り）が男子より高くなっている。日本では持物の損害、権利の侵害、名誉の侵害場面において、女兒の間接的主張（先生頼り）が男児より高くなっている。級友との意見対立場面において、男児の直接的主張が女兒より高くなっており、女兒の抑制的方略が男児より高くなっている。

理想とする方略において、中国では級友との意見対立場面において、男児の直接的主張及び間接的主張（先生頼り）が女兒より高く、女兒の抑制的方略及び間接的攻撃（第三者に不満を漏らす背後的攻撃）が男児より高くなっている。日本では、持物の損害、名誉の侵害、役割の怠惰場面において、女兒の間接的主張（先生頼り）が男児より高くなっている。

このように、持物の損害、名誉の侵害など自らの力で効果的に解決できない（面接の時、「言っても無駄」という反応が見られた）葛藤に対して、幼稚園女兒が男児より一步進んで、先生の権威を借りた間接的な主張をよく取り入れている。級友との意見対立に対して、幼稚園女兒が男児より一步進んで、相手との関係、相手の気持ちを考慮し、他人の意見を許容したり、直接的な対決を避けて間接的に不満を発散したりするようになっている。発達に伴い、間接的方略、抑制的方略が多く取り入れられていること（柏木，1988；山本，1994，1995b；羅・堂野，2007；羅・名島・堂野，2008）を照らして考えると、幼稚園年長児という発達段階で、女兒の社会的問題解決方略のレベルが男児より高く、女兒の社会性が男児より発達していると言えよう。

(2) 場面間の相違について

各場面で占める割合の高い方略をみると、幼稚園年長児という発達段階では、実際に取る方略においても、理想とする方略（最もよいと思われる方略）の選択においても、場面により、方略の使用に差が見られた。

実際に取る方略において、中国では、主張性が最も高いのは役割の怠惰と名誉の侵害の2場面であり、いずれの場面も直接的主張と間接的主張（先生頼り）をあわせて8割以上を占めた。役割の怠惰場面では直接的主張、名誉の侵害場面では間接的主張（先生頼り）が中心となっている。級友との意見対立、先生との意見対立場面では、直接的主張が最も高く、続いては相手の意見に従う抑制であり、直接的主張と抑制の二極に分かれている。持物の損害場面では抑制的方略が最も高く、間接的主張（先生頼り）が続いている。権利の侵害場面において、直接的主張、間接的主張（先生頼り）、抑制的方略が三本柱の構造になっており、最も高くなっている。日本では、持物の損害場面では抑制的方略が最も高く、続いては間接的主張（先生頼り）と「不明」（答えられず口をつぐんでしまう、言い換えれ

ばどう対応していいかわからないこと)である。級友との意見対立及び先生との意見対立場面では抑制的方略が最も高く、続いては直接的主張であり、抑制と直接的主張の二極に分かれている。権利の侵害場面では直接的主張が最も高く、続いては抑制的方略である。名誉の侵害場面では直接的主張及び間接的主張(先生頼り)がともに高く、あわせて7割以上を占めた。役割の怠惰場面では直接的主張が最も高く、中心的な方略となっている。

理想とする方略において、中国では、実際取る方略とおおよそ同様の傾向を示しているが、持物の損害、級友との意見対立場面においてやや異なっている。持物の損害場面においては、間接的主張(先生頼り)が中心的によい方略として選択されている。級友との意見対立場面においては、抑制的方略が最も高く、続いては直接的主張、間接的主張(先生頼り)、間接的攻撃(背後的攻撃)の三本柱である。日本でも、実際取る方略とおおよそ同様の傾向を示しているが、持物の損害、級友との意見対立、役割の怠惰場面においてやや異なっている。持物の損害場面においては、間接的主張(先生頼り)が中心的によい方略として選択されており、続いては直接的主張である。級友との意見対立、役割の怠惰場面においては、直接的主張の占める割合の一部は間接的主張(先生頼り)に変更している。

このように、持物の損害に対して、実際の行動においては、親がカバーしてくれることが予測しており、金銭的損害に対する心理的ダメージが低く、主張性も低い、意識の上においては、間接的主張(先生頼り)が中心的によい方略として選択されているから、幼稚園年長児という発達段階では、金銭的損害に対する解決方略はまだ身につけていないが、意識の上では、金銭的損害に対する主張性が芽生えてきており、一方的に自己抑制するよりも、先生に頼ったり、自己主張したりして解決することを望んでいると考えられる。

級友及び先生との意見対立に対して、直接的主張と抑制の二極に分かれている。中国では自分の意志を貫くことが優先で、日本では相手の気持ちへの配慮が優先されている。幼稚園年長児という発達段階では、既に相手との関係、相手の気持ちを考慮するようになったが、自分の意見を押し通そうとする意識も強く、主張と抑制の二極に揺れていると考えられる。

権利の侵害に対して、実際の行動においても、意識の上においても、直接的主張、間接的主張(先生頼り)、抑制的方略が共に高くなっている。幼稚園年長児という発達段階では、順番を守るべきだという意識が形成しており、主張性も高いが、喧嘩にならないよう、順番を抜かすような些細な損害に対する相手への許容、自己抑制も高くなっていると考えられる。

名誉の侵害に対しては、実際の行動においても、意識の上においても、主張性が高い。幼稚園年長児という発達段階では、名誉が犯されてはいけないという意識が高く、直接的に主張するほか、効果を高めるため先生に頼ったりもしている。

役割の怠惰に対しては、実際の行動においても、意識の上においても、主張性が全ての場面において最も高くなっている。幼稚園年長児という発達段階では、社会的役割が遂行すべきだという価値観が浸透しており、その社会的正当性から堂々と主張するようになったと思われる。

(3) 日中間の相違について

実際取る方略及び理想とする方略(最もよいと思われる方略)の選択から、中国と日本の幼稚園年長児の社会的問題解決方略は以下の特徴が見られる。

①日本の幼稚園年長児が中国の幼稚園年長児より、社会的問題解決方略のレベルが高く、社会性が発達していると考えられる。

第一、幼児の発達的变化から見ると、幼児はまず自己中心的に衝動的に自己の要求を一方向的に達成しようとする問題解決の姿勢から、社会的規範意識を認識するようになり、社会的規範意識に基づいて問題解決するようになると思われる。最もよいと思われる方略の選択は幼児の社会的規範意識の具現化とも言える。この選択がいずれの場面においても、中国のほうが日本より各方略のばらつきが大きいということは、中国の幼稚園年長児はまだ日本の幼稚園年長児ほど、社会的規範意識が浸透されていなく、幼児の考えや意識がまだばらばらであることを意味すると考えられよう。

第二、中国の幼稚園年長児は、実際に取る方略において男女間のズレが少なく、理想とする方略の選択、つまり社会的規範意識において男女間のズレが見られ、意識の上のみ、男女間に社会性の発達のズレが生じたと思われる。日本の幼稚園年長児は、一步進んで、理想とする方略の選択において男女間のズレが少なく、実際に取る方略において男女間のズレが見られ、意識を越えて行動まで男女間に社会性の発達のズレが生じたと思われる。

第三、権利の侵害、名誉の侵害、役割の怠惰場面における直接的主張は、実際に取る方略においても理想とする方略においても、日本のほうが中国より高くなっている。日本の幼稚園年長児は、中国の幼稚園年長児より、問題解決に積極的で、自己防衛が高いと言えよう。

②意見の対立に対する解決方略は、中国の幼稚園年長児と日本の幼稚園年長児が異なる傾向を示している。

級友との意見対立及び先生との意見対立場面においては、実際に取る方略においても理想とする方略においても、中国は直接的主張が日本より高く、日本は抑制的方略が中国より高くなっている。また、実際に取る方略においても理想とする方略においても、中国は主張的方略が抑制的方略より高く、日本は抑制的方略が主張的方略より高くなっている。

意見の対立に対して、中国と日本の幼稚園年長児は、行動上も意識上も既に大きく異なっており、中国の幼稚園年長児は自分の意志を貫く傾向が高く、日本の幼稚園年長児は相手に同調する傾向が高いと思われる。

③中国の幼稚園年長児における先生の権威性は日本の幼稚園年長児より高いと思われる。

第一、実際に取る方略においては、いずれの場面でも、中国の間接的主張（先生頼り）が日本より高くなっている。

第二、日本の幼稚園年長児は、級友との意見対立における直接的主張及び抑制が先生との意見対立における直接的主張及び抑制と差が少ない。中国の幼稚園年長児は、級友との意見対立における直接的主張が先生との意見対立における直接的主張より高く、級友との意見対立における抑制が先生との意見対立における抑制より低くなっている。

しかし、理想とする方略においては日中間の間接的主張（先生頼り）の差が少ない。中国の幼稚園年長児が間接的主張（先生頼り）を多用することは、社会性が高いからというよりも、中国における先生の権威性が日本より高く、中国の幼稚園年長児は日本の幼稚園年長児より、問題解決に安易に先生に頼ってしまう傾向があると考えたほうが妥当であると思われる。儒教の発祥地である中国は、現在において依然として、家では親の言うこと、

学校（幼稚園）では先生の言うことをよく聞くようと強く要求されている。日本青少年研究所（2001）の中国と日本の小・中・高校生の親に対する調査によると、日常に子どもへの「先生の言うことをよく聞きなさい」という指示は、中国が日本より 40.4%、「親の言うことをよく聞きなさい」という指示は、中国が日本より 25.6%、高くなっている。伝統意識における先生や親の権威性がいかに高いことが窺わせる。

第2節 中国と日本の小・中・高・大学生における社会的問題解決方略

1. 方法

(1) 質問紙の構成

フェイスシートは年齢及び性別を設けた。

小・中・高校生の質問紙は、第一部の社会的問題解決方略に関する質問項目と、第二部の親子関係に関する質問項目から構成されている。大学生の質問紙は、第一部の社会的問題解決方略に関する質問項目と、第二部の葛藤解決目標に関する質問項目から構成されている。

社会的問題解決方略に関する質問項目では、6つ（大学生は5つ）の対人葛藤場面を設定し、それぞれの場面には、葛藤を提示した上、実際に例示した各種の方略通りに行動する可能性、その葛藤場面の自分にとっての重要性について質問した。行動する可能性については、「いつもこのようにする（4点）」から「そうすることが全くない（1点）」までの4件法により評定させた。重要性については、「とても重要（4点）」から「全く重要でない（1点）」までの4件法により評定させた。

(2) 対人葛藤場面の作成

社会的問題解決方略の採用には、葛藤の内容、問題解決の目標、当事者の文化背景、性別、年齢、社会的支配性、知能、社会的評価、柔軟性など様々な要因が絡み合って影響している。当事者相互の仲間親密性、対人間地位などの相互関係による影響も多くの研究から指摘されている（嘉数ら, 1991；金城・梅本, 1991；小森・宮本, 1992；倉持, 1992）。問題場面の状況性が解決の方略を大きく左右することも明らかになってきた（吉野, 1987；二神・神谷, 2004；徐, 2004, 2005）。

以上の先行研究及び日本と中国の事情など考慮し、本研究では、Table 9 に示したとおり、クラスの中の同性の友達（親友という意味ではなく、普通に話せる友人）との「持物の損害」、「意見の対立」、「権利の侵害」、「名誉の侵害」、「役割の怠惰」、先生との「意見の対立」という6つの対人葛藤場面を作成した。

潜在要因の影響を抑制するために、葛藤場面の作成においては以下のような点を考慮した。①葛藤は出来るだけ日本と中国の両方の学校生活の中で馴染みがあり理解しやすい内容のものとして設定した。②葛藤は、1対1の中での人間関係で、相互関係が明確となるように設定した。③葛藤の責任所在が相手にあることを明示した。④出来るだけ価値観や常識的判断が入らないように、中立的で客観的に葛藤事実を述べるように配慮した。⑤より明確に変化や相違を反映させるため、葛藤は深刻でない内容に設定した（深刻な葛藤は対決方略に集中してしまう可能性が高いと考えられる）。

Table 9 対人葛藤場面

番号	分類	葛藤内容
1	持物の 損害	廊下に立っているあなたにクラスの友達がぶつかってきて、あなたのメガネは落ちて、壊れてしまいました。友達は「すみません」と言ってから、立ち去ろうとしました。
2	級友と の意見 対立	昼休み、好きな本を借りて読んでいると、クラスの友達がそばに来て、「本はやめて、外で遊ぼう」と言いました。あなたは本が読みたくて一度断りましたが、その人は依然として誘い続けました。
3	権利の 侵害	あなたはクラスのコンピューターを使うために長い間待ち、やっとあなたの番になりました。あなたはコンピューターを動かし始めましたが、資料を探すために、少しの間離れました。戻ってくると、次の番の友達がコンピューターの前に座り、「もう僕(私)が使っているのだから、じゃまをしないでよ」と言いました。
4	名誉の 損害	ある日、あなたが教室に入ろうとすると、クラスの友達があなたの悪口を言っているのが聞こえました。
5	役割の 怠惰	あなたのクラスでは、教室の掃除当番を放課後2人ですることになっています。今日、あなたは既に掃除を始めたのに、相手の友達はまだ知らないふりで他の人と遊んでいます。
6	先生と の意見 対立	クラスで役割分担を決める時、先生から体育係をやってくれと頼まれました。あなたは他の係りになりたいと思っていたので、「ぼく(私)には無理だ」と遠慮しましたが、先生は「君ならできる」と言いました。

(3) 社会的問題解決方略の分類

Table 10 社会的問題解決方略の分類と定義

直接的攻撃	叩くや怒鳴るなど、自分の考えや感情を強く表現し、相手に攻撃性を示す。
攻撃的 方略	間接 表情攻撃 言葉で相手を攻撃しないで、いやな表情や身振りをして間接的に伝える。 的攻 背後的攻撃 直接的に表現しないで、裏で第三者に不満を漏らす。 撃 断絶的攻撃 直接的に表現しないが、内心不満を感じ、相手との関係を徐々に絶つ。
主張的 方略	直接的主張 攻撃性を示さなくて、説得や取引など言葉で自分の考えや感情を率直に伝える。 間接的主張 直接言わないで、暗示的に自分の考えや感情を伝える。
抑制的 方略	関係重視抑制 相手との関係を重視するため、自分の要求や感情を抑える。 騒ぎ回避抑制 騒ぎになることが恥ずかしいため、自分の要求や感情を抑える。

社会的問題解決方略の分類は、研究の目的や視点、葛藤場面の内容などによって多様であり、方略の数やカテゴリー、さらに定義そのものまでがさまざまとなっている。標準化された分類基準があるとは言えない(子安・鈴木, 2002; 徐, 2004b; 羅・堂野, 2005)。

Albert & Emmons (1970) は、対人反応のパターンを主張的反応、非主張的反応、攻撃的反応の3種類としている。主張的反応は、相手の権利を侵害しない範囲内で自分の考えや感情を素直に表現することである。非主張的反応は、自分の考えや感情を抑えて外に出さず、自分の権利が侵害されていても我慢し何も言わないことである。攻撃的反応は、自

分の考えや感情を強く表出し、相手の権利を侵害したり無視したりすることである。Phelps & Austin(1975)は攻撃的反応を直接的攻撃と間接的攻撃と分類している。間接的攻撃は、相手に直接表現をせず、いやな表情や身振りをして間接に伝える行動である。徐(2004b、2005)は、社会的問題解決方略を直接的主張、直接的攻撃、抑制的受容、間接的主張、間接的攻撃、回避的攻撃、背後の非難の7つに分類した。また、直接的主張、直接的攻撃、抑制的受容を「直接的方略」、間接的主張、間接的攻撃、回避的攻撃、背後の非難を「間接的方略」と大別している。

以上の先行研究及び日本と中国の事情を参照し、本研究では、Table 10 に示すとおりに分類した。徐(2004b、2005)は、背後の非難を抑制的受容とともに非主張的反応とし、背後の非難は社会性の否定的な側面で、抑制的受容は社会性の肯定的な側面とした。本研究は背後の非難(背後攻撃)も相手の名誉や人間関係に負の影響を及ぼすと考え、「間接的攻撃」の一つとみなすことにした。

一方、日米などの比較研究においてはジャンケン志向という日本独自の傾向が見出されている(金城・梅本, 1991; 渡部, 1993; 山岸, 1998)。日本においてジャンケンが志向される理由として、低学年では「早く決まるから」、中学年では「喧嘩にならないから」、高学年では「公平、平等だから」といった反応が顕著であった。梶田(1988)は、対人葛藤解決のスタイルとして、欧米では他譲志向(他者を譲歩させる)が優位であるのに対して、日本では伝統的に無譲志向(無問題化)や状況離脱志向(「なかったことにしよう」、「誰も傷付けないようにしよう」という意識)、「自他の顔が立つよう工夫する」、「妥協する」、「考えないようにする」といった解決法が優位を示すと考察している。両者ともに引き下がらずにそのまま安易に解決に至ろうとするジャンケン志向は、梶田のいう無譲志向に包含されるものと考えられることができる(金城・梅本, 1991)。では同じ東洋圏に属する中国ではどうであるか、果たしてジャンケン志向は日本独自の傾向であるのか。このことについて解明するため、級友との意見対立、権利の侵害の2場面において「ジャンケン」方略を設定した。

権威志向の日中間の相違及び発達的变化について検討するため、持物の損害、権利の侵害、名誉の侵害、役割の怠惰の4場面において「先生に言う」という「先生頼り」方略を設定した(現実を考慮し、大学生の質問紙には「先生頼り」を設定しなかった)。

因みに、葛藤の性質により、各場面に共通する方略のほかに、その場面に適合する独自の方略が存在することも考えられる。予備調査の際、例示した方略がいずれも選択されなかったこともあり、本調査では、以上の方略の他に、持物の侵害場面では「故意ではないと考え、気にしないように振舞う」という相手の非故意のために抑制的方略を取る「**非故意性抑制**」方略、権利の侵害場面では「自分が離れたことが悪いので、何も言わずに待つ」という自分に責任がある思いから抑制的方略を取る「**自己責任抑制**」方略、名誉の侵害場面では「悪口を言う人には何も言う必要がないと考え、聞こえなかった振りをする」という無効力、無意義の判断から抑制的方略を取る「**無意義抑制**」方略、先生との意見対立場面では「他の適任と思う人を先生に薦める」という代替案の提出を「**間接的主張2**」方略として付け加えた。

2. 結果

国・性・発達段階・場面の4要因に関する多変量分散分析（ANOVA4）を行った結果、4要因及び要因間の交互作用において、ほとんどの方略が有意差を示した。

以下は、国・性・発達段階・場面の4要因別で比較検討する。

図表の中で各方略は、次のように、直接的攻撃は「直攻」、表情（態度）攻撃は「表情攻」、背後的攻撃は「背後攻」、断絶的攻撃は「断絶攻」、直接的主張は「直主」、間接的主張は「間主」、関係重視抑制は「関係抑」、騒ぎ回避抑制は「騒ぎ抑」、非故意性抑制は「非故意抑」、自己責任抑制「自己責抑」、無意義抑制は「無意義抑」、ジャンケン「ジャンケン」、先生頼りは「先生」、「間接的主張2」を「間主2」、と省略して示す。

各場面は、次のように、持物の損害場面は「持物」、級友との意見対立場面は「意見1」、権利の侵害場面は「権利」、名誉の侵害場面は「名誉」、役割の怠惰場面は「役割」、先生との意見対立場面は「意見2」、と省略して示す。

2-1 性差に関する検討

2-1-1 全体としての性差

全体としての性差は、Table11 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

直接的攻撃、表情（態度）攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃、直接的主張、間接的主張、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制の8方略は6場面共通に設定されており、先生頼りは4場面、ジャンケン「ジャンケン」は2場面に設定されている。他人を推薦する「間接的主張2」、非故意性抑制、自己責任抑制、無意義抑制はそれぞれ1場面に設定されている。

全体通してみると、男子は直接的攻撃、先生頼りの2方略において女子より有意に高く、女子は間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃）、主張的方略（直接的主張、間接的主張）、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制、自己責任抑制、無意義抑制）の10方略において、男子より有意に高くなっている。各場面の葛藤の重要度においても、女子が男子より有意に高くなっている。

Table11 全体の男女別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

	直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	ジャ ン	間主 2	関係 抑	騒ぎ 抑	非故 意抑	自己 責抑	無意 義抑	重要 度
男	1.89	2.10	1.91	1.78	2.60	2.24	1.83	1.75	2.38	2.02	1.89	2.48	2.09	2.27	2.67
女	1.61	2.22	2.13	1.84	2.63	2.39	1.72	1.75	2.43	2.12	1.94	2.59	2.27	2.38	2.76
p	****	****	****	****	*	****	****			****	****	****	****	****	****

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

2-1-2 国別の性差

国別の性差は、次頁の Table12 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table12 から、以下のことが見てとれる。

①中国と日本の性差の傾向は極めて類似している。男子は直接的攻撃、先生頼りにおいて女子より高く、女子は間接的攻撃、主張的方略、抑制的方略及び葛藤の重要度において、男子より高くなっている。

②ジャンケンにおいて、中国と日本の性差の傾向は逆になっている。中国においては男子が女子より有意に高く、日本においては、女子が男子より有意に高い傾向が見られた。

③断絶的攻撃において中国の男子と女子は共に低く、非故意性抑制において中国の男子と女子は共に高く、男女間に有意差が見られなかった。日本はいずれも女子が男子より有意に高い。直接的主張、他人を推薦する「間接的主張2」、無意義抑制において、中国は女子が男子より有意に高いが、日本は男子と女子の間有意差が見られなかった。

Table12 中国と日本の男女別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

	直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	ジャ ン	間主 2	関係 抑	騒ぎ 抑	非故 意抑	自己 責抑	無意 義抑	重要 度	
中 国	男	1.84	2.08	1.83	1.64	2.59	2.21	1.75	1.71	2.61	1.99	1.96	2.64	2.11	2.29	2.63
	女	1.62	2.19	1.97	1.64	2.65	2.30	1.59	1.65	2.81	2.06	2.00	2.67	2.29	2.46	2.69
	p	****	****	****		****	****	****	**	****	****	**		****	****	****
日 本	男	1.95	2.11	2.01	1.93	2.62	2.28	1.91	1.79	2.10	2.05	1.81	2.31	2.06	2.25	2.71
	女	1.60	2.25	2.28	2.03	2.62	2.48	1.85	1.84	2.08	2.18	1.88	2.51	2.25	2.30	2.82
	p	****	****	****	****		****	*	+		****	****	****	****		****

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

2-1-3 発達段階別の性差

発達段階別の性差は、Table13 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table13 各発達段階の男女別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

	直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	ジャ ン	間主 2	関係 抑	騒ぎ 抑	非故 意抑	自己 責抑	無意 義抑	重要 度	
小	男	1.99	1.90	1.67	1.64	2.44	2.07	2.22	1.88	2.13	2.05	1.92	2.38	2.21	1.98	2.63
	女	1.70	1.96	1.71	1.63	2.53	2.10	2.20	1.77	2.18	2.07	1.88	2.46	2.29	1.96	2.66
	p	****	**			***			*							
中	男	2.08	2.09	1.91	1.77	2.74	2.20	1.84	1.82	2.53	1.93	1.83	2.45	2.09	2.17	2.74
	女	1.78	2.24	2.16	1.80	2.75	2.33	1.66	1.79	2.58	2.03	1.84	2.54	2.31	2.30	2.78
	p	****	****	****			****	****			****			****	+	*
高	男	1.86	2.21	2.00	1.80	2.63	2.27	1.46	1.59	2.47	1.95	1.84	2.47	2.01	2.42	2.64
	女	1.53	2.31	2.23	1.86	2.64	2.46	1.40	1.68	2.50	2.12	1.93	2.73	2.36	2.56	2.75
	p	****	****	****	***		****	***	*		****	****	****	****	*	****
大	男	1.65	2.17	2.05	1.89	2.59	2.43		1.73		2.15	1.98	2.61	2.05	2.45	2.66
	女	1.43	2.32	2.37	2.05	2.57	2.66		1.75		2.26	2.11	2.59	2.13	2.59	2.82
	p	****	****	****	****		****				****	****			*	****

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

Table13 から、以下のことが見て取れる。

①発達に伴い、男女間に有意差の見られる方略が多くなる。間接的攻撃、間接的主張、抑制的方略及び葛藤の重要度において、女子が男子より有意に高くなる傾向が見られた。

②直接的攻撃において、小・中・高・大のいずれの発達段階でも、男子が女子より有意に高くなっている。

③直接的主張において、小学生では、男子が女子より有意に高いが、中学生以降では男子の値が高くなり、男女間に有意差が見られなくなった。

④ジャンケンにおいて、小学生では男子が女子より有意に高いが、発達に伴い男女共に値が低くなり、中学生では男女間に有意差が見られなくなり、高校生では逆転して、女子が男子より有意に高くなった。大学生では男女共に高校生より値が高くなり、男女間に有意差が見られなかった。

2-1-4 場面別の性差

場面別の性差は、Table14 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table14 各場面の男女別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

		直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	ジャ ン	間主 2	関係 抑	騒ぎ 抑	非故 意抑	自己 責抑	無意 義抑	重要 度
持 物	男	1.75	2.32	2.11	1.74	2.20	2.25	1.92			2.26	2.07	2.48			2.77
	女	1.49	2.42	2.35	1.82	2.09	2.56	1.85			2.38	2.17	2.59			2.88
	p	****	****	****	***	****	****	*			****	****	****			****
意 見 1	男	1.70	1.70	1.52	1.51	2.63	2.27		1.69		2.18	1.90				2.53
	女	1.45	1.75	1.62	1.47	2.71	2.44		1.70		2.31	1.96				2.62
	p	****	*	****		**	****				****	*				****
権 利	男	2.06	2.22	2.03	1.87	2.68	2.19	1.72	1.81		1.90	1.88		2.09		2.67
	女	1.69	2.40	2.32	1.91	2.68	2.22	1.69	1.79		2.06	1.97		2.27		2.67
	p	****	****	****							****	***		****		
名 誉	男	1.82	2.30	2.08	2.26	2.35	2.30	1.87			1.97	1.89			2.27	2.95
	女	1.53	2.44	2.36	2.49	2.25	2.41	1.72			2.09	1.97			2.38	3.16
	p	****	****	****	****	****	****	****			****	***			****	****
役 割	男	2.34	2.08	1.88	1.67	3.03	2.27	1.78			1.81	1.76				2.45
	女	1.96	2.26	2.13	1.70	3.21	2.44	1.62			1.89	1.78				2.50
	p	****	****	****		****	****	****			***					*
意 見 2	男	1.60	1.90	1.84	1.54	2.75	2.16			2.38	1.98	1.84				2.61
	女	1.50	1.96	1.96	1.57	2.92	2.25			2.43	1.94	1.74				2.68
	p	***	+	****		****	*					***				*

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

Table14 から、以下のことが見て取れる。

①各場面の性差の傾向は極めて類似している。男子は直接的攻撃、先生頼りにおいて女子より高く、女子は間接的攻撃、間接的主張、抑制的方略及び葛藤の重要度において、男子より高くなっている。

②権利の侵害場面において、男女間に有意差が見られる方略は最も少なかった。直接的主張、間接的主張、先生頼り及び葛藤の重要度は、権利の侵害場面において、各場面で唯一に男女間に有意差を示さなかった。

③直接的主張において、場面によって性差の傾向が異なっている。持物の損害、名誉の侵害場面では、男子が女子より有意に高いが、級友との意見対立、役割の怠惰、先生との意見対立場面において女子が男子より有意に高くなっている。

④騒ぎ回避抑制において、持物の損害、級友との意見対立、権利の侵害、名誉の侵害場面では、女子が男子より有意に高いが、先生との意見対立場面では逆転し、男子が女子より有意に高くなっている、男子が先生との意見対立を回避し、男子における先生の権威性が女子より高いと思われる。

⑤各場面で最も高くなっている方略を比較してみると、級友との意見対立、権利の侵害、役割の怠惰、先生との意見対立の4場面において、男女共に直接的主張が最も高くなっているが、持物の損害及び名誉の侵害の2場面において、男女間が異なっている。持物の損害場面では、男子は相手が故意でないため抑制する非故意性抑制が最も高くなっているが、女子は間接的主張も非故意性抑制に近い値で高くなっている。名誉の侵害場面では、男子は直接的主張が最も高くなっているが、女子は断絶的攻撃が最も高くなっている。

2-1-5 各場面、発達段階、国ごとの詳細分析における性差

(1) 持物の損害場面における性差の詳細分析

持物の損害場面における発達段階、国別の性差は、次頁の Table15 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

各方略で見てみると、直接的攻撃は、日本では各発達段階を通して男子が女子より有意に高いが、中国では中学生女子の値が高くなり、男女間に有意差が見られなくなった。表情攻撃は、中国の中学生、大学生のみ、女子が男子より有意に高くなっている。背後的攻撃は、日中共に中学生以降女子が男子より有意に高い傾向が見られた。断絶的攻撃は、中国では小学生において男子が女子より有意に高いが、大学生には逆転し、女子が男子より有意に高くなっている。日本では、大学生のみ女子が男子より有意に高くなっている。直接的主張は、日本では小学生において女子が男子より有意に高いが、中学生以降は逆転し、男子が女子より有意に高くなっている。中国では各発達段階を通して、男女間に有意差が見られなかった。間接的主張は、日本では各発達段階を通して、中国では中学生以降において、女子が男子より有意に高くなっている。先生頼りでは、中国の中高生のみ、男子が女子より有意に高くなっている。関係重視抑制は、日本では中学生以降、中国では高校生のみにおいて、女子が男子より有意に高くなっている。騒ぎ回避抑制は、日本では中高生、中国では高校・大学生において、女子が男子より有意に高くなっている。非故意性抑制は、日本では中高生、中国では高校生のみにおいて、女子が男子より有意に高くなっている。

葛藤の重要度は、日本では小学生・大学生において、女子が男子より有意に高くなっているが、中国では小学生において男子が女子より有意に高いが、中学生以降は逆転し、女子が男子より有意に高くなっている。

持物の損害場面で最も高くなっている方略は、中国では、各発達段階男女ともに非故意性抑制が最も高くなっているが、日本では、小学生は男女ともに先生頼り、中学生男子は直接的主張と表情攻撃、女子は間接的主張、高校男子は直接的主張と背後の攻撃、女子は間接的主張、大学生は男女ともに間接的主張が最も多く用いられている。日中間大きく異なっている。

Table15 持物の損害場面における男女別の詳細の社会的問題解決方略と重要度の評定値

持物		直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	関係 抑	騒ぎ 抑	非故 意抑	重要 度	
小	中国	男	1.79	2.03	1.72	1.59	1.95	2.13	2.12	2.21	1.98	2.51	2.55
		女	1.52	1.99	1.63	1.42	1.91	2.06	2.04	2.18	1.98	2.65	2.32
		p	****			*							*
	日本	男	1.84	2.02	1.73	1.71	1.92	2.22	2.55	2.18	2.08	2.25	2.86
		女	1.59	2.08	1.80	1.81	2.15	2.42	2.64	2.30	2.09	2.31	3.15
		p	***				**	*					***
中	中国	男	1.77	2.23	1.94	1.51	2.28	2.19	1.85	2.26	2.13	2.64	2.54
		女	1.74	2.46	2.07	1.56	2.13	2.37	1.67	2.27	2.08	2.59	2.67
		p		***	+		+	*	*				*
	日本	男	2.17	2.54	2.38	2.03	2.55	2.31	2.11	2.24	1.86	2.20	3.11
		女	1.65	2.51	2.59	1.92	2.32	2.68	2.01	2.47	2.10	2.48	3.11
		p	****		*		*	****		*	**	***	
高	中国	男	1.65	2.51	2.04	1.59	2.01	2.00	1.43	2.23	2.18	2.66	2.61
		女	1.37	2.53	2.33	1.65	1.96	2.35	1.29	2.44	2.35	2.81	2.72
		p	****		****			****	*	***	*	*	+
	日本	男	1.81	2.45	2.49	1.95	2.51	2.34	1.66	2.25	1.93	2.22	3.09
		女	1.37	2.51	2.63	2.02	2.08	2.89	1.61	2.45	2.11	2.66	3.10
		p	****		+		****	****		*	*	****	
大	中国	男	1.46	2.29	2.06	1.70	1.97	2.22		2.39	2.29	2.72	2.54
		女	1.33	2.52	2.47	1.91	1.96	2.44		2.36	2.44	2.62	2.66
		p	+	****	****	***		***			*		+
	日本	男	1.69	2.49	2.52	1.95	2.50	2.59		2.26	2.04	2.51	3.00
		女	1.43	2.59	2.95	2.14	2.15	3.05		2.49	2.15	2.57	3.19
		p	****		****	**	****	****		***			**

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

(2) 級友との意見対立場面における性差の詳細分析

級友との意見対立場面における発達段階、国別の性差は、次頁の Table16 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table16 級友との意見対立場面における男女別の詳細の社会的問題解決方略と重要度の評定値

意見 1		直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	ジャン ン	関係 抑	騒ぎ 抑	重要 度
小	中国 男	1.97	1.80	1.56	1.52	2.58	2.11	1.72	1.94	1.87	2.80
	中国 女	1.82	1.81	1.43	1.38	2.66	1.81	1.52	1.93	1.82	2.96
	p	+		+	+		****	*			+
	日本 男	1.66	1.64	1.40	1.49	2.31	2.13	1.74	2.41	1.97	2.30
	日本 女	1.38	1.71	1.53	1.57	2.64	2.35	1.69	2.45	1.96	2.46
	p	****		+		****	*				+
中	中国 男	2.08	1.69	1.44	1.69	2.75	2.04	1.62	2.03	1.99	2.92
	中国 女	1.72	1.69	1.40	1.53	2.98	2.33	1.65	2.06	1.97	3.04
	p	****			+	***	****				+
	日本 男	1.78	1.71	1.55	1.55	2.62	2.29	1.74	2.29	1.87	2.17
	日本 女	1.39	1.79	1.72	1.49	2.58	2.39	1.71	2.44	1.84	2.22
	p	****		*							
高	中国 男	1.91	1.71	1.42	1.43	2.91	2.28	1.48	1.96	1.93	2.75
	中国 女	1.63	1.81	1.49	1.28	3.02	2.61	1.58	2.14	1.96	2.93
	p	****	+		*	*	****		*		***
	日本 男	1.49	1.71	1.62	1.43	2.54	2.41	1.66	2.32	1.78	2.11
	日本 女	1.27	1.73	1.75	1.58	2.61	2.61	1.74	2.53	1.90	2.23
	p	****		+	*		*		*		
大	中国 男	1.48	1.70	1.59	1.55	2.79	2.43	1.78	2.07	1.99	2.83
	中国 女	1.36	1.84	1.67	1.46	2.76	2.61	1.78	2.21	2.15	2.84
	p	*	*				*		*	*	
	日本 男	1.29	1.64	1.56	1.40	2.47	2.42	1.84	2.50	1.80	2.12
	日本 女	1.17	1.63	1.84	1.48	2.45	2.63	1.88	2.60	2.04	2.33
	p	***		****			**			***	***

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

各方略で見ると、直接的攻撃は、日中共に各発達段階を通して男子が女子より有意に高くなっている。表情攻撃は、中国の大学生のみ、女子が男子より有意に高くなっている。背後の攻撃は、日本では女子が男子より有意に高いが、中国の小学生では反対に、男子が女子より有意に高い傾向が見られた。断絶的攻撃は、中国では男子が女子より有意に高い傾向が見られたが、日本では高校生のみ女子が男子より有意に高くなっている。直接的主張は、日本では小学生、中国では中高生において、女子が男子より有意に高くなって

いる。間接的主張は、中国では小学生において男子が女子より有意に高いが、中学生以降は逆転し、女子が男子より有意に高くなっている。日本では各発達段階を通して、女子が男子より有意に高くなっている。ジャンケンは、中国の小学生のみ、男子が女子より有意に高くなっている。関係重視抑制は、中国では高校生以降、日本では高校生のみにおいて、女子が男子より有意に高くなっている。騒ぎ回避抑制は、日中共に大学生のみにおいて、女子が男子より有意に高くなっている。葛藤の重要度は、中国では高校生、日本では大学生において、女子が男子より有意に高くなっている。

級友との意見対立場面で最も高くなっている方略は、中国では、各発達段階男女ともに直接的主張が最も高くなっている。日本では、小学生男子は関係重視抑制、女子は直接的主張、中学生は男女ともに直接的主張、高校生男子は直接的主張、女子は直接的主張と間接的主張、大学生男子は関係重視抑制、女子は間接的主張と関係重視抑制が最も高くなっている。日中間大きく異なっている。

(3) 権利の侵害場面における性差の詳細分析

権利の侵害場面における発達段階、国別の性差は、Table17 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table17 権利の侵害場面における男女別の詳細の社会的問題解決方略と重要度の評定値

権利		直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	ジャン ケン	関係 抑	騒ぎ 抑	自己 責抑	重要 度
小	中国 男	2.07	2.09	1.70	1.61	2.30	1.87	1.74	2.00	1.98	2.06	2.26	2.52
	中国 女	1.67	2.04	1.63	1.37	2.20	1.64	1.61	1.82	2.08	2.07	2.37	2.30
	p	****			***		***		+				*
	日本 男	2.20	1.91	1.68	1.81	2.59	2.05	2.39	2.07	1.99	1.81	2.16	2.68
	日本 女	1.76	2.16	1.87	1.82	2.51	2.07	2.37	2.01	2.05	1.84	2.22	2.54
	p	****	***	*									
中	中国 男	2.01	2.21	1.88	1.66	2.60	2.00	1.58	2.01	1.98	2.00	2.19	2.55
	中国 女	1.80	2.36	2.12	1.64	2.68	1.96	1.57	1.81	2.09	2.08	2.46	2.55
	p	***	*	***					*			***	
	日本 男	2.55	2.20	2.21	1.98	2.98	2.39	1.73	1.91	1.65	1.65	1.94	2.79
	日本 女	2.06	2.50	2.60	2.05	2.89	2.28	1.69	2.01	1.90	1.70	2.14	2.77
	p	****	****	****						***		*	
高	中国 男	2.04	2.37	1.98	1.75	2.55	2.19	1.52	1.56	1.93	1.99	2.07	2.51
	中国 女	1.70	2.60	2.40	1.73	2.50	2.16	1.51	1.47	2.13	2.12	2.42	2.61
	p	****	****	****						***	+	****	+
	日本 男	2.20	2.41	2.45	2.19	2.83	2.39	1.46	1.72	1.72	1.64	1.95	2.91
	日本 女	1.60	2.55	2.58	2.19	2.76	2.35	1.46	1.91	2.05	1.83	2.30	2.75
	p	****							*	****	*	****	*
大	中国 男	1.81	2.08	2.03	1.91	2.74	2.36		1.62	1.99	2.01	1.95	2.66
	中国 女	1.55	2.30	2.37	2.04	2.88	2.49		1.57	1.98	2.11	1.94	2.78
	p	****	****	****	+	*	+						+
	日本 男	1.80	2.39	2.29	2.09	2.91	2.29		1.67	1.91	1.78	2.15	2.83
	日本 女	1.45	2.54	2.74	2.27	2.86	2.57		1.78	2.17	1.97	2.31	2.94
	p	****	+	****	*		****		+	****	**	*	+

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

各方略で見ると、直接的攻撃は、日中共に各発達段階を通して男子が女子より有意に高くなっている。表情攻撃と背後的攻撃は、中国では中学生以降、日本では各発達段階通して、女子が男子より有意に高くなっている。断絶的攻撃は、中国では小学生において男子が女子より有意に高いが、大学生は逆転し、女子が男子より有意に高い傾向が見られた。日本では大学生のみにおいて、女子が男子より有意に高くなっている。直接的主張は、中国の大学生のみにおいて、女子が男子より有意に高くなっている。間接的主張は、中国では小学生において男子が女子より有意に高いが、大学生は逆転し、女子が男子より有意に高い傾向が見られた。日本では大学生のみ女子が男子より有意に高くなっている。先生頼りは日中共に男女間に有意差が見られなかった。ジャンケンは、中国では、中学生において男子が女子より有意に高くなっているが、日本では反対に、高校生以降において、女子が男子より有意に高くなっている。関係重視抑制は、中国では高校生のみ、日本では中学生以降において、女子が男子より有意に高くなっている。騒ぎ回避抑制は、日本の高校・大学生において、女子が男子より有意に高くなっている。自己責任抑制は、中国では中高生、日本では中学生以降において、女子が男子より有意に高くなっている。葛藤の重要度は、中国では小学生、日本では高校生において、男子が女子より有意に高くなっている。

権利の侵害場面で最も高くなっている方略は、中国では、小学生男子は直接的主張、女子は自分が離れたことが悪いと思って抑制する自己責任抑制、高校生男子は直接的主張、女子は表情攻撃、中学生・大学生は男女ともに直接的主張が最も高くなっている。日本では、各発達段階男女ともに直接的主張が最も高くなっている。日中間大きく異なっている。

(4) 名誉の侵害場面における性差の詳細分析

名誉の侵害場面における発達段階、国別の性差は、次頁の Table18 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

各方略で見ると、直接的攻撃は、日中共に各発達段階を通して男子が女子より有意に高くなっている。表情攻撃は、中国では中学生以降、日本では小中学生において、女子が男子より有意に高くなっている。背後的攻撃は、中国では中学生以降、日本では各発達段階通して、女子が男子より有意に高くなっている。断絶的攻撃は、中国では高校生以降、日本では各発達段階通して、女子が男子より有意に高くなっている。直接的主張は、中国の小学生、日本の中学生・大学生において、男子が女子より有意に高くなっている。間接的主張は、中国では中学生以降、日本では大学生において、女子が男子より有意に高くなっている。先生頼りは、中国の中高生、日本の高校生において、男子が女子より有意に高くなっている。関係重視抑制と騒ぎ回避抑制は、日本の大学生のみにおいて、女子が男子より有意に高くなっている。無意義抑制は、中国高校生・大学生において、女子が男子より有意に高くなっている。葛藤の重要度は、中国では高校生以降、日本では各発達段階通して、女子が男子より有意に高くなっている。

名誉の侵害場面で最も高くなっている方略は、中国では、小中学生は男女ともに直接的主張、高校生男子は表情攻撃、女子は間接的主張と無意義抑制、大学生は男女ともに間接的主張が最も高くなっている。日本では、小学生は男女ともに先生頼り、中学・高校・大学生は男女ともに断絶攻撃が最も高くなっている。日中間大きく異なっている。

Table18 名誉の侵害場面における男女別の詳細の社会的問題解決方略と重要度の評定値

名誉		直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	関係 抑	騒ぎ 抑	無意 義抑	重要 度	
小	中国	男	2.00	2.09	1.81	1.68	2.50	2.16	2.04	1.86	1.90	2.11	2.77
		女	1.63	2.14	1.80	1.60	2.26	2.12	1.91	1.99	1.84	2.09	2.63
		p	****				**						
	日本	男	2.34	2.00	1.80	2.16	2.47	1.99	2.58	1.86	1.78	1.85	3.01
		女	1.78	2.24	2.02	2.43	2.49	2.10	2.72	1.91	1.86	1.86	3.31
		p	****	*	*	**							****
中	中国	男	2.04	2.30	2.01	1.95	2.85	2.42	2.05	1.70	1.74	2.22	3.12
		女	1.80	2.52	2.28	2.08	2.87	2.60	1.60	1.78	1.84	2.36	3.20
		p	***	***	****			*	****				
	日本	男	2.12	2.35	2.29	2.65	2.38	2.22	1.85	1.87	1.68	2.10	3.05
		女	1.74	2.56	2.69	2.87	2.10	2.29	1.61	1.99	1.73	2.23	3.33
		p	****	*	****	*	***		**				***
高	中国	男	1.66	2.56	2.08	2.12	2.38	2.48	1.49	1.81	1.83	2.42	2.88
		女	1.48	2.67	2.38	2.28	2.40	2.68	1.31	1.92	1.92	2.68	3.13
		p	**	+	****	*		**	***			***	****
	日本	男	1.59	2.35	2.25	2.78	1.90	2.14	1.31	2.20	1.91	2.43	3.02
		女	1.29	2.44	2.56	2.94	1.81	2.20	1.36	2.30	1.99	2.45	3.29
		p	****		****	+							****
大	中国	男	1.56	2.30	2.05	2.13	2.33	2.59		2.01	2.13	2.38	2.81
		女	1.44	2.50	2.32	2.45	2.45	2.73		2.13	2.13	2.60	3.03
		p	+	***	****	****		*		+		***	****
	日本	男	1.47	2.40	2.34	2.69	2.02	2.25		2.38	2.03	2.52	2.96
		女	1.22	2.38	2.61	3.00	1.77	2.45		2.57	2.32	2.57	3.25
		p	****		****	****	****	**		*	****		****

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

(5) 役割の怠惰場面における性差の詳細分析

役割の怠惰場面における発達段階、国別の性差は、次頁の Table19 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

各方略で見ると、直接的攻撃は、日中共に各発達段階を通して男子が女子より有意に高くなっている。表情攻撃と背後的攻撃は、中国では高校生以降、日本では各発達段階を通して、女子が男子より有意に高くなっている。断絶的攻撃は、日本の大学生のみにおいて、女子が男子より有意に高くなっている。直接的主張は、中国では中学生以降、日本では各発達段階を通して、女子が男子より有意に高くなっている。間接的主張は、日本の小学生・高校生・大学生において、女子が男子より有意に高くなっている。先生頼りは、

日本の中学生、中国の小中高校生において、男子が女子より有意に高くなっている。関係重視抑制は、中国の高校生、日本の中学生において、女子が男子より有意に高くなっている。騒ぎ回避抑制は、中国の高校生のみにおいて、女子が男子より有意に高くなっている。葛藤の重要度は、中国の大学生、日本の高校生・大学生において、女子が男子より有意に高くなっている。

役割の怠惰場面で最も高くなっている方略は、中国も日本も、各発達段階男女ともに直接的主張が最も高くなっている。

Table19 役割の怠惰場面における男女別の詳細の社会的問題解決方略と重要度の評定値

役割	直攻	表情攻	背後攻	断絶攻	直主	間主	先生	関係抑	騒ぎ抑	重要度	
小	中 男	2.41	1.86	1.69	1.53	2.90	1.91	2.11	1.80	1.80	2.39
	中 女	2.25	1.94	1.58	1.44	2.91	1.93	1.91	1.79	1.80	2.37
	p	+						*			
	日 男	2.62	1.85	1.77	1.77	2.95	2.30	2.27	1.84	1.73	2.78
	日 女	2.25	2.00	1.93	1.81	3.26	2.59	2.18	1.84	1.62	2.80
	p	****				****	***				
中	中 男	2.46	2.00	1.74	1.52	3.09	2.09	1.93	1.66	1.69	2.34
	中 女	2.27	2.06	1.87	1.43	3.32	2.13	1.69	1.77	1.71	2.24
	p	*		+		****		***	+		
	日 男	2.85	2.11	1.97	1.81	3.11	2.32	1.63	1.63	1.54	2.84
	日 女	2.16	2.37	2.46	1.80	3.29	2.47	1.47	1.80	1.61	2.71
	p	****	**	****		*		*	*		
高	中 男	2.44	2.10	1.78	1.53	3.08	2.14	1.43	1.68	1.71	2.20
	中 女	1.98	2.23	2.00	1.42	3.25	2.19	1.25	1.92	1.93	2.23
	p	****	*	***	+	***		****	****	****	
	日 男	2.13	2.28	2.09	1.81	2.87	2.21	1.38	1.89	1.74	2.44
	日 女	1.60	2.49	2.36	1.92	3.07	2.49	1.37	1.95	1.70	2.60
	p	****	*	***		*	****				*
大	中 男	2.05	2.07	1.92	1.67	2.93	2.53		2.05	2.02	2.29
	中 女	1.72	2.29	2.11	1.74	3.11	2.63		1.99	2.00	2.40
	p	****	****	***		***					*
	日 男	1.92	2.33	2.10	1.81	3.26	2.59		1.90	1.77	2.57
	日 女	1.63	2.55	2.55	1.96	3.39	2.94		2.00	1.81	2.70
	p	****	***	****	*	*	****				*

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

(6) 先生との意見対立場面における性差の詳細分析

先生との意見対立場面における発達段階、国別の性差は、Table20 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for

Windows)。

Table20 先生との意見対立場面における男女別の詳細の社会的問題解決方略と重要度の評定値

意見 2		直攻	表情攻	背後攻	断絶攻	直主	間主	間主 2	関係抑	騒ぎ抑	重要度
小	中国 男	1.23	1.74	1.66	1.31	2.33	1.96	2.30	2.36	2.18	2.56
	中国 女	1.12	1.58	1.51	1.17	2.48	1.74	2.35	2.11	1.91	2.53
	p	*	*	+	*		*		*	**	
	日本 男	1.71	1.74	1.53	1.54	2.51	2.00	1.95	2.22	1.92	2.36
	日本 女	1.63	1.81	1.68	1.52	2.81	2.19	2.03	2.13	1.76	2.42
	p			+		**	+				
中	中国 男	1.23	1.91	1.78	1.33	2.80	2.12	2.74	2.04	1.93	2.79
	中国 女	1.19	1.93	1.82	1.35	2.85	2.19	2.98	2.04	1.90	2.71
	p							****			
	日本 男	2.16	1.90	1.99	1.85	2.94	2.12	2.24	1.83	1.65	2.73
	日本 女	1.90	2.17	2.32	1.97	3.01	2.25	2.16	1.76	1.55	2.91
	p	**	***	****							*
高	中国 男	1.37	2.06	1.97	1.38	2.75	2.38	2.73	1.86	1.84	2.50
	中国 女	1.25	2.02	2.03	1.38	2.98	2.48	2.98	1.86	1.78	2.69
	p	*				****		****			***
	日本 男	2.08	2.04	2.09	1.95	3.21	2.35	2.13	1.59	1.49	2.77
	日本 女	1.85	2.16	2.26	1.91	3.28	2.52	2.05	1.78	1.57	2.79
	p	*		+			+		**		

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

各方略で見ると、直接的攻撃は、中国の小学生・高校生、日本の中高生において、男子が女子より有意に高くなっている。表情攻撃は、中国では小学生において男子が女子より有意に高くなっているが、日本では反対に、中学生において女子が男子より有意に高くなっている。背後的攻撃は、日本の中学生のみにおいて、女子が男子より有意に高くなっている。断絶的攻撃は、中国の小学生のみにおいて、男子が女子より有意に高くなっている。直接的主張は、中国の高校生、日本の小学生において、女子が男子より有意に高くなっている。間接的主張は、中国の小学生のみにおいて、女子が男子より有意に高くなっている。他人を推薦する「間接的主張2」は、中国の中高生において、女子が男子より有意に高くなっている。関係重視抑制は、中国では小学生において男子が女子より有意に高くなっているが、日本では反対に、大学生において女子が男子より有意に高くなっている。騒ぎ回避抑制は、中国の小学生のみにおいて、男子が女子より有意に高くなっている。葛藤の重要度は、中国の高校生、日本の中学生において、女子が男子より有意に高くなっている。

先生との意見対立場面で最も高くなっている方略は、中国では、小学生男子は関係重視抑制と直接的主張、女子は直接的主張、中学生男子は直接的主張、女子は他人を推薦する

間接的主張、高校生は男女ともに直接的主張と他人を推薦する間接的主張が極めて近い値で最も高くなっている。日本では、各発達段階男女ともに直接的主張が最も高くなっている。

2-2 場面間の相違に関する検討

2-2-1 全体としての場面間の相違

各場面に共通する方略と重要度の評定値は Table21 に示したとおりである（一元配置分散分析：SPSS for Windows）。全ての方略において各場面間に有意差が見られ、「等質サブグループ」の欄で示している。1～6の数字は場面番号であり、順に持物の損害、級友との意見対立、権利の損害、名誉の侵害、役割の怠惰、先生との意見対立場面を表わしている。評定値の高いものほど前に位置し、異質なグループ間、つまり有意差がある場面間は「>」記号で区切っている。「>」記号の前の場面は「>」記号の後ろの場面よりその評定値が統計的に有意に高い（ $p < 0.05$ ）。「>」記号で区切っていない場面間は統計的に有意差がない（ $p > 0.05$ ）ことを意味する。

同一の場面番号が「>」記号の前後ともに存在する場合には、その場面が「>」の前後の2つのグループに同時に属し、それぞれのグループの中の他の場面と有意差がないことを意味している。例えば、「43>36」は、場面4が場面6より統計的に有意に高いが、場面4と場面3の間、場面3と場面6の間には有意差がない、ということである。

Table21 全体の社会的問題解決方略と重要度の場面間の相違

	持物	意見1	権利	名誉	役割	意見 2	等質サブグループ
直攻	1.62	1.58	1.88	1.68	2.15	1.55	5>3>41>12>26
表情攻	2.37	1.72	2.31	2.37	2.17	1.93	41>3>5>6>2
背後攻	2.22	1.56	2.17	2.21	2.00	1.90	143>5>6>2
断絶攻	1.78	1.49	1.89	2.37	1.69	1.55	4>3>1>5>6>2
直主	2.14	2.67	2.68	2.31	3.11	2.83	5>6>32>4>1
間主	2.40	2.35	2.21	2.35	2.35	2.21	1452>63
先生	1.89		1.71	1.80	1.71		1>4>35
ジャン		1.70	1.80				3>2
関係抑	2.31	2.24	1.98	2.03	1.85	1.96	1>2>43>36>5
騒ぎ抑	2.12	1.93	1.92	1.93	1.77	1.80	1>243>65
重要度	2.82	2.58	2.67	3.05	2.48	2.65	4>1>36>2>5

Table21 から、特に等質サブグループを比較してみると、以下のことが見て取れる。

- ①葛藤の重要度においては、名誉の侵害が最も高く、続いては持物の損害で、役割の怠惰場面が最も低くなっている。
- ②間接的主張、先生頼り、ジャンケンは、各場面間に差が少ない。
- ③各場面の方略の使用は次の特徴が見られる。

持物の損害場面では、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）が各場面で最も高くなっている一方、間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃）、間接的主張、先生頼りも各場面で最も高くなっている。

級友との意見対立場面では、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）が各場面で最も低く、主張的方略（直接的主張、間接的主張）、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）が持物の損害場面に続いて最も高くなっている。

権利の侵害場面では、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）が各場面において高い方であるが、直接的主張、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）が各場面において中間にあり、間接的主張、先生頼りが各場面で最も低くなっている。ジャンケンでは級友との意見の対立場面より高くなっている。

名誉の侵害場面では、間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃）、間接的主張が各場面で最も高くなっているが、直接的攻撃、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）も各場面において中間に位置している。

役割の怠惰場面では、重要性を最も低く評価しているにも関わらず、直接的攻撃、直接的主張が各場面で最も高くなっている。

先生との意見対立場面では、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）が級友との意見の対立場面に続いて最も低く、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）も役割の怠惰場面に続いて最も低くなっている。直接的主張が役割の怠惰場面に続いて最も高くなっている。

2-2-2 国別の場面間の相違

国別の各場面に共通する方略と重要度の評定値及び等質サブグループは次頁の Table22 に示したとおりである（一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table22 から、特に等質サブグループを比較してみると、以下のことが見てとれる。

①各方略の使用における各場面の順位については、中国と日本は極めて類似している。一方、各場面の順位が日中間やや異なっている方略も存在する。

②級友との意見の対立場面、先生との意見の対立場面への対応方略は日中間大きく異なっている。

級友との意見対立に対して、日本では、葛藤の重要度は各場面で最も低く、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）が各場面で最も低く、関係重視抑制が各場面で最も高く、騒ぎ回避抑制も各場面において高い方である。中国では、葛藤の重要度は名誉の侵害に続いて最も高く、間接的攻撃は各場面で最も低く、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）も各場面において低い方であるが、直接的攻撃、直接的主張が各場面において高い方である。

先生との意見対立に対して、日本では、級友との意見対立より、葛藤の重要度が高く、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）、直接的主張が高く、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）が低くなっている。中国では、正反対に、級友との意見対立より、葛藤の重要度が低く、直接的攻撃、断絶的攻撃、直接的主張が低くなっている。抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）は両場面間有意差が見られなかった。

③名誉の侵害場面への対応方略は日中間に違いが見られた。名誉の侵害に対して、日中

共に葛藤の重要度が各場面で最も高くなっているが、対応の方略に違いが見られた。直接的攻撃、直接的主張は、値も各場面間での順位も中国が日本より高く、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）は、値も各場面間での順位も中国が日本より低くなっている。特に表情攻撃において、中国では、名誉の侵害場面が各場面で最も高くなっているが、日本では、名誉の侵害場面が各場面で中間に位置している。間接的主張において、中国では、名誉の侵害場面が各場面で最も高くなっているが、日本では、名誉の侵害場面が各場面で最も低くなっている。

④各場面の葛藤の重要度は、日本は中国より、開きが大きく、場面間に有意差が多く見られた。

Table22 国別の社会的問題解決方略と重要度の場面間の相違

		持物	意見 1	権利	名誉	役割	意見 2	等質サブグループ
直攻	中国	1.58	1.75	1.84	1.70	2.20	1.24	5>3>24>1>6
	日本	1.67	1.41	1.92	1.66	2.11	1.89	5>36>14>2
表情 攻	中国	2.33	1.75	2.27	2.40	2.07	1.90	41>13>5>6>2
	日本	2.41	1.69	2.35	2.34	2.27	1.97	134>345>6>2
背後 攻	中国	2.05	1.50	2.03	2.10	1.85	1.82	41>13>56>2
	日本	2.41	1.63	2.32	2.33	2.17	1.98	143>5>6>2
断絶 攻	中国	1.62	1.49	1.73	2.06	1.54	1.33	4>3>1>52>6
	日本	1.95	1.49	2.06	2.71	1.84	1.79	4>3>1>56>2
直主	中国	2.02	2.81	2.57	2.51	3.08	2.71	5>2>6>34>1
	日本	2.27	2.52	2.79	2.09	3.16	2.97	5>6>3>2>1>4
間主	中国	2.22	2.28	2.11	2.49	2.21	2.18	4>215>156>63
	日本	2.58	2.42	2.31	2.21	2.50	2.24	15>52>36>64
先生	中国	1.71		1.59	1.72	1.70		415>3
	日本	2.08		1.84	1.89	1.71		1>43>5
ジ ャ ン	中国		1.65	1.73				3>2
	日本		1.76	1.88				3>2
関係 抑	中国	2.29	2.05	2.02	1.90	1.83	2.04	1>263>45
	日本	2.34	2.45	1.94	2.16	1.87	1.88	2>1>4>365
騒 ぎ 抑	中国	2.19	1.97	2.05	1.92	1.83	1.92	1>3>264>5
	日本	2.05	1.90	1.79	1.93	1.70	1.65	1>42>3>56
重 要 度	中国	2.59	2.88	2.57	2.96	2.30	2.63	4>2>613>5
	日本	3.08	2.24	2.78	3.15	2.67	2.67	41>3>56>2

2-2-3 男女別の場面間の相違

男女別の各場面に共通する方略と重要度の評定値及び等質サブグループは、次頁のTable23に示したとおりである（一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table23から、特に等質サブグループを比較してみると、以下のことが見てとれる。

①各方略の使用における各場面の順位については、男子と女子は極めて類似している。

②先生との意見対立場面への対応は男女間やや異なっている。先生との意見対立に対して、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）においては、男子が女子より、値も各場面間での順位も高くなっている。直接的攻撃においては、男子が女子より、各場面間での順位が低くなっている。

③名誉の侵害場面への対応は男女間やや異なっている。間接的主張において、男子では、名誉の侵害場面が各場面で最も高くなっているが、女子では、名誉の侵害場面が各場面で中間に位置している。

Table23 男女別の社会的問題解決方略と重要度の場面間の相違

		持物	意見 1	権利	名誉	役割	意見 2	等質サブグループ
直攻	男	1.75	1.70	2.06	1.82	2.34	1.60	5>3>41>12>6
	女	1.49	1.45	1.69	1.53	1.96	1.50	5>3>461>612
表情攻	男	2.32	1.70	2.22	2.30	2.08	1.90	14>3>5>6>2
	女	2.42	1.75	2.40	2.44	2.26	1.96	413>5>6>2
背後攻	男	2.11	1.52	2.03	2.08	1.88	1.84	14>43>56>2
	女	2.35	1.62	2.32	2.36	2.13	1.96	413>5>6>2
断絶攻	男	1.74	1.51	1.87	2.26	1.67	1.54	4>3>15>62
	女	1.82	1.47	1.91	2.49	1.70	1.57	4>3>1>5>6>2
直主	男	2.20	2.63	2.68	2.35	3.03	2.75	5>63>32>4>1
	女	2.09	2.71	2.68	2.25	3.21	2.92	5>6>23>4>1
間主	男	2.25	2.27	2.19	2.30	2.27	2.16	4251>2513>136
	女	2.56	2.44	2.22	2.41	2.44	2.25	1>524>63
先生	男	1.92		1.72	1.87	1.78		14>45>53
	女	1.85		1.69	1.72	1.62		1>43>35
ジャン	男		1.69	1.81				3>2
	女		1.70	1.79				3>2
関係抑	男	2.26	2.18	1.90	1.97	1.81	1.98	12>643>5
	女	2.38	2.31	2.06	2.09	1.89	1.94	12>43>65
騒ぎ抑	男	2.07	1.90	1.88	1.89	1.76	1.84	1>2436>5
	女	2.17	1.96	1.97	1.97	1.78	1.74	1>432>56
重要度	男	2.77	2.53	2.67	2.95	2.45	2.61	4>1>36>25
	女	2.88	2.62	2.67	3.16	2.50	2.68	4>1>632>5

2-2-4 発達段階別の場面間の相違

男女別の各場面に共通する方略と重要度の評定値及び等質サブグループは、Table24 に示したとおりである（大学生の質問紙には現実性を考慮し、先生との意見対立場面を設定しなかった。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table24 発達段階別の社会的問題解決方略と重要度の場面間の相違

		持物	意見 1	権利	名誉	役割	意見 2	等質サブグループ
直攻	小	1.70	1.71	1.95	1.96	2.39	1.44	5>43>21>6
	中	1.81	1.76	2.08	1.92	2.43	1.58	5>3>41>12>6
	高	1.55	1.59	1.89	1.51	2.05	1.61	5>3>621>214
	大	1.48	1.33	1.66	1.42	1.83		5>3>14>2
表情攻	小	2.03	1.74	2.05	2.11	1.91	1.72	431>5>26
	中	2.42	1.72	2.32	2.43	2.13	1.98	413>5>6>2
	高	2.50	1.74	2.48	2.51	2.27	2.07	413>5>6>2
	大	2.47	1.69	2.33	2.39	2.31		14>435>2
背後攻	小	1.72	1.48	1.72	1.86	1.75	1.60	45>513>36>62
	中	2.23	1.52	2.19	2.30	2.00	1.96	413>56>2
	高	2.35	1.56	2.33	2.31	2.04	2.08	134>65>2
	大	2.49	1.66	2.34	2.32	2.16		1>34>5>2
断絶攻	小	1.64	1.49	1.66	1.98	1.65	1.40	4>351>26
	中	1.73	1.59	1.81	2.35	1.63	1.60	4>31>15>562
	高	1.79	1.44	1.96	2.51	1.66	1.64	4>3>1>56>2
	大	1.93	1.47	2.07	2.57	1.79		4>3>1>5>2
直主	小	1.98	2.54	2.41	2.44	3.00	2.53	5>2643>1
	中	2.29	2.74	2.77	2.58	3.20	2.89	5>63>32>4>1
	高	2.13	2.78	2.65	2.13	3.07	3.04	56>2>3>41
	大	2.16	2.61	2.84	2.14	3.17		5>3>2>14
間主	小	2.21	2.11	1.92	2.09	2.19	1.98	1524>246>63
	中	2.38	2.24	2.14	2.39	2.24	2.17	41>5263
	高	2.38	2.47	2.27	2.38	2.26	2.44	2641>413>35
	大	2.58	2.52	2.42	2.50	2.67		51>124>243
先生	小	2.35		2.04	2.32	2.13		14>53
	中	1.90		1.63	1.79	1.70		1>45>53
	高	1.49		1.50	1.37	1.36		31>45
ジャン	小		1.68	1.98				3>2
	中		1.69	1.94				3>2
	高		1.61	1.66				ns.
	大		1.82	1.67				2>3
関係抑	小	2.22	2.19	2.02	1.90	1.82	2.21	162>34>45
	中	2.30	2.19	1.93	1.83	1.72	1.94	12>634>45
	高	2.34	2.23	1.96	2.04	1.85	1.78	1>2>43>56
	大	2.37	2.34	2.01	2.28	1.99		124>35
騒ぎ抑	小	2.03	1.91	1.94	1.85	1.74	1.95	1632>6324>45
	中	2.05	1.93	1.88	1.76	1.65	1.78	1>23>36>64>45
	高	2.15	1.90	1.91	1.91	1.77	1.68	1>432>56
	大	2.22	1.99	1.96	2.16	1.90		14>235
重要度	小	2.73	2.62	2.52	2.93	2.59	2.47	4>12>253>536
	中	2.81	2.65	2.64	3.18	2.49	2.79	4>16>23>5
	高	2.86	2.53	2.68	3.06	2.36	2.67	4>1>36>2>5
	大	2.86	2.53	2.80	3.01	2.49		4>13>25

Table24 から、特に等質サブグループを比較してみると、以下のことが見てとれる。

①各方略の使用における各場面の順位については、各発達段階は極めて類似している。一方、各場面の順位が、各発達段階間にやや異なっている方略も存在する。

②役割の怠惰場面への対応は各発達段階間やや異なっている。背後的攻撃において、小

学生では、役割の怠惰場面が名誉の侵害場面が続いて各場面間で最も高くなっているが、中学生以降では、役割の怠惰場面が級友との意見対立場面に続いて各場面間で最も低くなっている。間接的主張において、役割の怠惰場面が各場面間に占める順位は、小学生では持物の損害場面が続いて各場面間で最も高く、中学生では各場面間で中間に位置し、高校生では各場面間で最も低く、大学生では再び各場面間で最も高くなっている。

③先生との意見対立場面への対応は各発達段階間やや異なっている。先生との意見対立の葛藤の重要度は、小学生では各場面間で最も低くなっているが、中学生では各場面間で中間に位置している。直接的攻撃は、小中学生は各場面間で最も低くなっているが、高校生では各場面間で中間に位置している。抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）は、小中学生では持物の損害場面が続いて各場面間で高くなっているが、高校生では各場面間で最も低くなっている。

④級友との意見対立場面への対応は各発達段階間やや異なっている。級友との意見対立の葛藤の重要度は、小学生では名誉の侵害、持物の損害場面が続いて各場面間で高くなっているが、発達に伴い、各場面間での順位が下がり、大学生では各場面間で最も低くなっている。級友との意見対立への間接的主張は、小学生では、持物の損害、役割の怠惰場面が続いて各場面間で高くなっているが、中学生では一旦下がり、高校生では再び各場面間で最も高くなり、大学生では再び下がり、権利の侵害、名誉の侵害場面が続いて各場面間で低くなっている。

⑤ジャンケン、小中学生では、権利の侵害場面が級友との意見対立場面より有意に高いが、高校生では有意差がなく、大学生では逆転し、級友との意見対立場面が権利の侵害場面より、有意に高くなっている。

2-3 発達的变化に関する検討

2-3-1 全体としての発達的变化

各発達段階の社会的問題解決方略と重要度の評定値及び等質サブグループはTable25に示したとおりである（一元配置分散分析：SPSS for Windows）。全ての方略において各発達段階間に有意差が見られ、「等質サブグループ」の欄で示している。1～4の数字は発達段階番号であり、順に小学生、中学生、高校生、大学生を表わしている。評定値の高いものほど前に位置し、異質なグループ間、つまり有意差がある発達段階間は「>」記号で区切っている。「>」記号の前の発達段階は「>」記号の後ろの発達段階よりその評定値が統計的に有意に高い（ $p < 0.05$ ）。「>」記号で区切っていない発達段階間は統計的に有意差がない（ $p > 0.05$ ）ことを意味する。

同一の発達段階番号が「>」記号の前後ともに存在する場合には、その発達段階が「>」の前後の2つのグループに同時に属し、それぞれのグループの他の発達段階と有意差がないことを意味している。

Table25から、特に等質サブグループを比較してみると、以下のことが見てとれる。

①全体的には、発達に伴い、葛藤の重要度、間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃）、間接的主張、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制、無意義抑制）が高くなり、直接的攻撃、直接的主張、先生頼り、ジャンケン、自己責任抑制が低くなる傾向が見られる。

②中学生では、葛藤を最も重要視し、直接的攻撃、直接的主張が各発達段階で最も高くなっている傾向も見られる。

③小学生では、中・高・大学生の発達的变化の傾向に反して、直接的主張が各発達段階で最も低く、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制が大学生に続いて高くなっている傾向も見られる。

Table25 全体の発達段階別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

	小	中	高	大	等質サブグループ
直攻	1.86	1.93	1.70	1.54	2>1>3>4
表情攻	1.93	2.17	2.26	2.24	34>2>1
背後攻	1.69	2.03	2.11	2.2	4>3>2>1
断絶攻	1.64	1.79	1.83	1.97	4>3>2>1
直主	2.48	2.75	2.63	2.58	2>3>4>1
間主	2.08	2.26	2.37	2.54	4>3>2>1
先生	2.21	1.75	1.43		1>2>3
ジャン	1.83	1.81	1.63	1.74	12>24>3
間主2	2.15	2.56	2.49		2>3>1
関係抑	2.06	1.99	2.03	2.2	4>13>2
騒ぎ抑	1.90	1.84	1.89	2.04	4>13>2
非故意抑	2.42	2.50	2.60	2.6	432>21
自己責抑	2.24	2.20	2.18	2.09	123>34
無意義抑	1.97	2.23	2.49	2.52	43>2>1
重要度	2.64	2.76	2.69	2.74	24>3>1

2-3-2 国別の発達的变化

国別の各発達段階の社会的問題解決方略と重要度の評定値及び等質サブグループは次頁の Table26 に示したとおりである（一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table26 から、特に等質サブグループを比較してみると、各方略の使用の発達的变化については、中国と日本はほとんど類似していることが見てとれる。詳しく見てみると、騒ぎ回避抑制と自己責任抑制において、中国と日本の発達的变化がやや異なっている。騒ぎ回避抑制は、中国では小中高の間に有意差が見られないが、日本では小学生が大学生に続いて中高生より有意に高くなっている。自己責任抑制は、中国では中学生が最も高く、大学生が最も低くなっているが、日本では逆転し、中学生が最も低く、大学生は最も高くなっている。

Table26 中国と日本の発達段階別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

		小	中	高	大	等質サブグループ
直攻	中国	1.81	1.85	1.72	1.58	21>3>4
	日本	1.90	2.03	1.68	1.51	2>1>3>4
表情攻	中国	1.92	2.11	2.26	2.18	3>4>2>1
	日本	1.93	2.23	2.26	2.30	43>32>1
背後攻	中国	1.65	1.87	1.98	2.04	4>3>2>1
	日本	1.73	2.24	2.26	2.34	4>32>1
断絶攻	中国	1.48	1.62	1.63	1.84	4>32>1
	日本	1.78	2.00	2.06	2.08	43>32>1
直主	中国	2.42	2.76	2.65	2.59	2>34>1
	日本	2.55	2.73	2.62	2.58	2>34>41
間主	中国	1.96	2.20	2.32	2.50	4>3>2>1
	日本	2.20	2.34	2.41	2.57	4>3>2>1
先生	中国	1.95	1.75	1.41		1>2>3
	日本	2.46	1.76	1.45		1>2>3
ジャン	中国	1.78	1.79	1.52	1.69	21>14>3
	日本	1.88	1.84	1.76	1.79	124>243
間主2	中国	2.32	2.85	2.84		23>1
	日本	1.99	2.20	2.09		2>3>1
関係抑	中国	2.02	1.98	1.98	2.11	4>132
	日本	2.10	1.99	2.09	2.28	4>13>2
騒ぎ抑	中国	1.94	1.93	1.96	2.12	4>312
	日本	1.87	1.73	1.80	1.97	4>1>3>2
非故意抑	中国	2.57	2.62	2.73	2.67	342>421
	日本	2.28	2.35	2.45	2.53	43>32>21
自己責抑	中国	2.30	2.32	2.22	1.94	213>4
	日本	2.19	2.05	2.13	2.23	413>132
無意義抑	中国	2.10	2.29	2.53	2.49	34>2>1
	日本	1.85	2.17	2.44	2.55	43>2>1
重要度	中国	2.57	2.72	2.63	2.69	24>43>1
	日本	2.72	2.81	2.76	2.79	423>31

次頁の Fig. 11 は中国と日本の社会的問題解決方略と重要度の発達の变化をグラフに視覚的に示したものである（中国と日本における各発達段階間の有意差は Table26、各発達段階における日中間の有意差は Table31 に示したとおりである）。

Fig. 11 に示されたように、中国と日本の社会的問題解決方略と重要度の発達の变化はほとんど同様な傾向が見られる。一方、中国と日本の発達の变化が交差している方略も見ら

れる。詳細に比較してみると、以下のことが見てとれる。

①葛藤の重要度においては、日本が中国を大きく上回りながら、同様な発達的变化を示している。発達に伴って高くなる傾向がある一方、中学生が他の発達段階より最も高くなっている。

②間接的攻撃（表情攻撃、背後の攻撃、断絶的攻撃）、間接的主張、関係重視抑制においては、日本が中国を上回りながら、日中同様に発達に伴って高くなっている。

③直接的攻撃においては、中国では発達に伴って徐々に低くなっているが、日本では発達に伴って低くなる傾向がある一方、中学生が他の発達段階より最も高くなっている。また、小中学生では日本が中国より高いが、高校・大学生では逆転し、中国が日本より高くなっている。

④直接的な主張においては、中国と日本が同様に、小学生から中学生まで急伸びした後、大学生まで徐々に下がっている。小学生では日本が中国を大きく上回っているが、中高大学生では値も発達的变化も近寄っている。

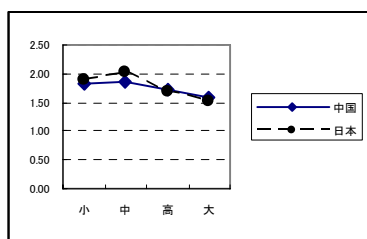
⑤先生頼りにおいては、中国と日本が同様に、発達に伴って徐々に低くなっている。小学生では日本が中国を大きく上回っているが、中高生では値も発達的变化も近寄っている。

⑥ジャンケンにおいては、日本が中国を上回りながら、同様な発達的变化を示している。小学生から高校生までは徐々に低くなり、大学生では再び高くなる傾向が見られる。

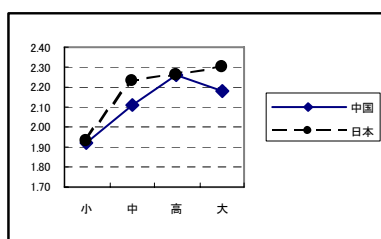
⑦他人を推薦する間接的主張、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制においては、中国が日本を大きく上回りながら、発達に伴って高くなっている。

⑧自己責任抑制においては、中国と日本が正反対な発達的变化を呈している。中国では中学生で高ピークになってから、大学まで大きく下がっているが、日本では中学生で低ピークになってから、大学まで大きく上がっている。

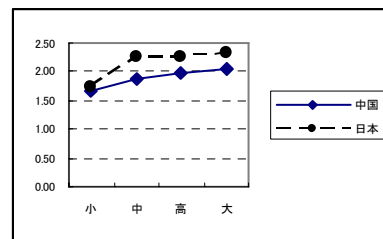
⑨無意義抑制においては、中国と日本が同様に、発達に伴って徐々に高くなっている。小学生では中国が日本を上回っているが、中高大学生では値も発達的变化も近寄っている。



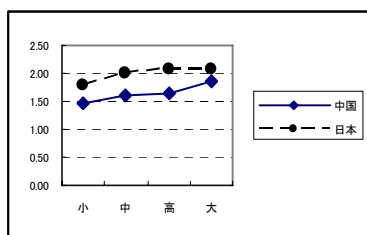
直接的攻撃



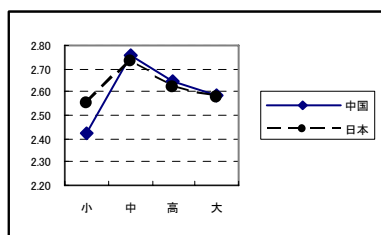
表情攻撃



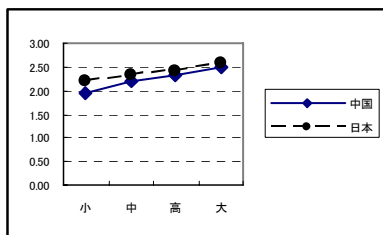
背後の攻撃



断絶的攻撃



直接的な主張



間接的主張

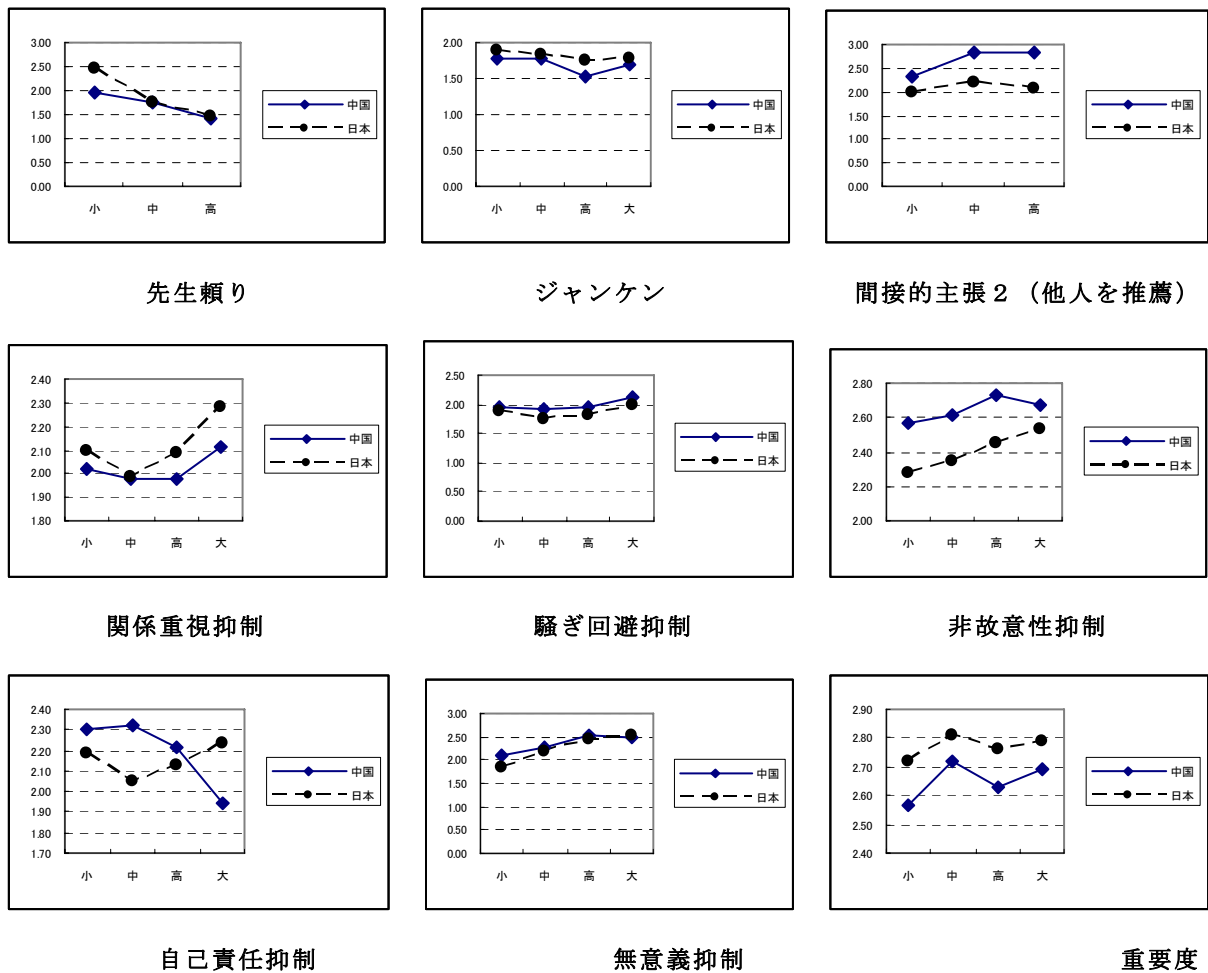


Fig. 11 中国と日本の社会的問題解決方略と重要度の発達の變化

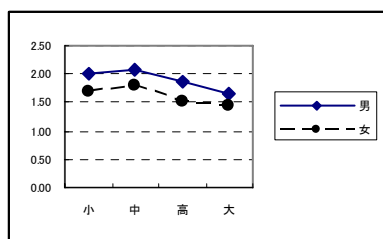
2-3-3 男女別の発達の變化

男女別の各発達段階の社会的問題解決方略と重要度の評定値及び等質サブグループはTable27に示したとおりである（一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

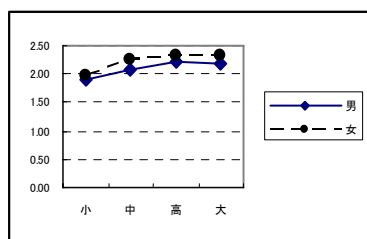
Table27 から、特に等質サブグループを比較してみると、各方略の使用の発達の變化については、男子と女子はほとんど類似していることが見てとれる。詳しく見てみると自己責任抑制のみにおいて、男子と女子の発達の變化がやや異なっている。男子では小学生が最も高く、高校生が最も低くなっているが、女子では逆転し、高校生が最も高く、小学生は大学生に続いて最も低くなっている。

Table27 男子と女子の発達段階別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

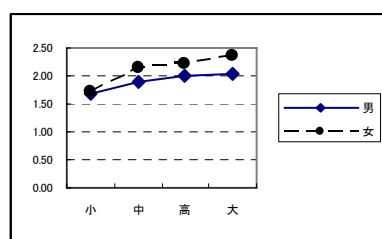
		小	中	高	大	等質サブグループ
直攻	男	1.99	2.08	1.86	1.65	2>1>3>4
	女	1.70	1.78	1.53	1.43	2>1>3>4
表情攻	男	1.90	2.09	2.21	2.17	34>2>1
	女	1.96	2.24	2.31	2.32	43>2>1
背後攻	男	1.67	1.91	2.00	2.05	43>2>1
	女	1.71	2.16	2.23	2.37	4>3>2>1
断絶攻	男	1.64	1.77	1.80	1.89	4>32>1
	女	1.63	1.80	1.86	2.05	4>32>1
直主	男	2.44	2.74	2.63	2.59	2>34>1
	女	2.53	2.75	2.64	2.57	2>34>41
間主	男	2.07	2.20	2.27	2.43	4>3>2>1
	女	2.10	2.33	2.46	2.66	4>3>2>1
先生	男	2.22	1.84	1.46		1>2>3
	女	2.20	1.66	1.40		1>2>3
ジャン	男	1.88	1.82	1.59	1.73	12>24>3
	女	1.77	1.79	1.68	1.75	214>143
間主2	男	2.13	2.53	2.47		23>1
	女	2.18	2.58	2.50		23>1
関係抑	男	2.05	1.93	1.95	2.15	4>1>32
	女	2.07	2.03	2.12	2.26	4>31>12
騒ぎ抑	男	1.92	1.83	1.84	1.98	4>1>32
	女	1.88	1.84	1.93	2.11	4>31>12
非故意抑	男	2.38	2.45	2.47	2.61	43>321
	女	2.46	2.54	2.73	2.59	34>421
自己責抑	男	2.21	2.09	2.01	2.05	124>243
	女	2.29	2.31	2.36	2.13	321>14
無意義抑	男	1.98	2.17	2.42	2.45	43>2>1
	女	1.96	2.30	2.56	2.59	43>2>1
重要度	男	2.63	2.74	2.64	2.66	2>431
	女	2.66	2.78	2.75	2.82	42>23>1



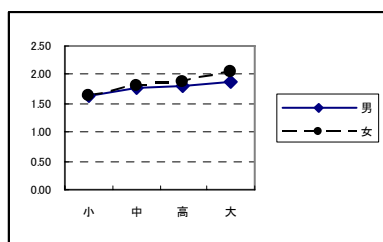
直接的攻撃



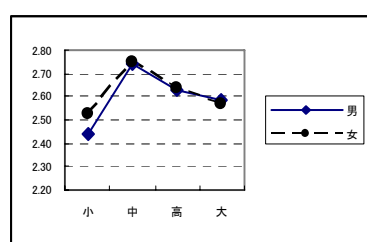
表情攻撃



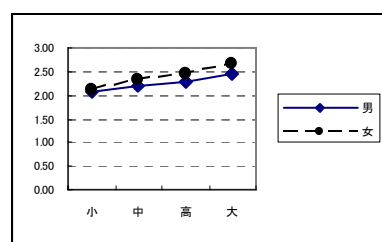
背後の攻撃



断絶的攻撃



直接的主張



間接的主張

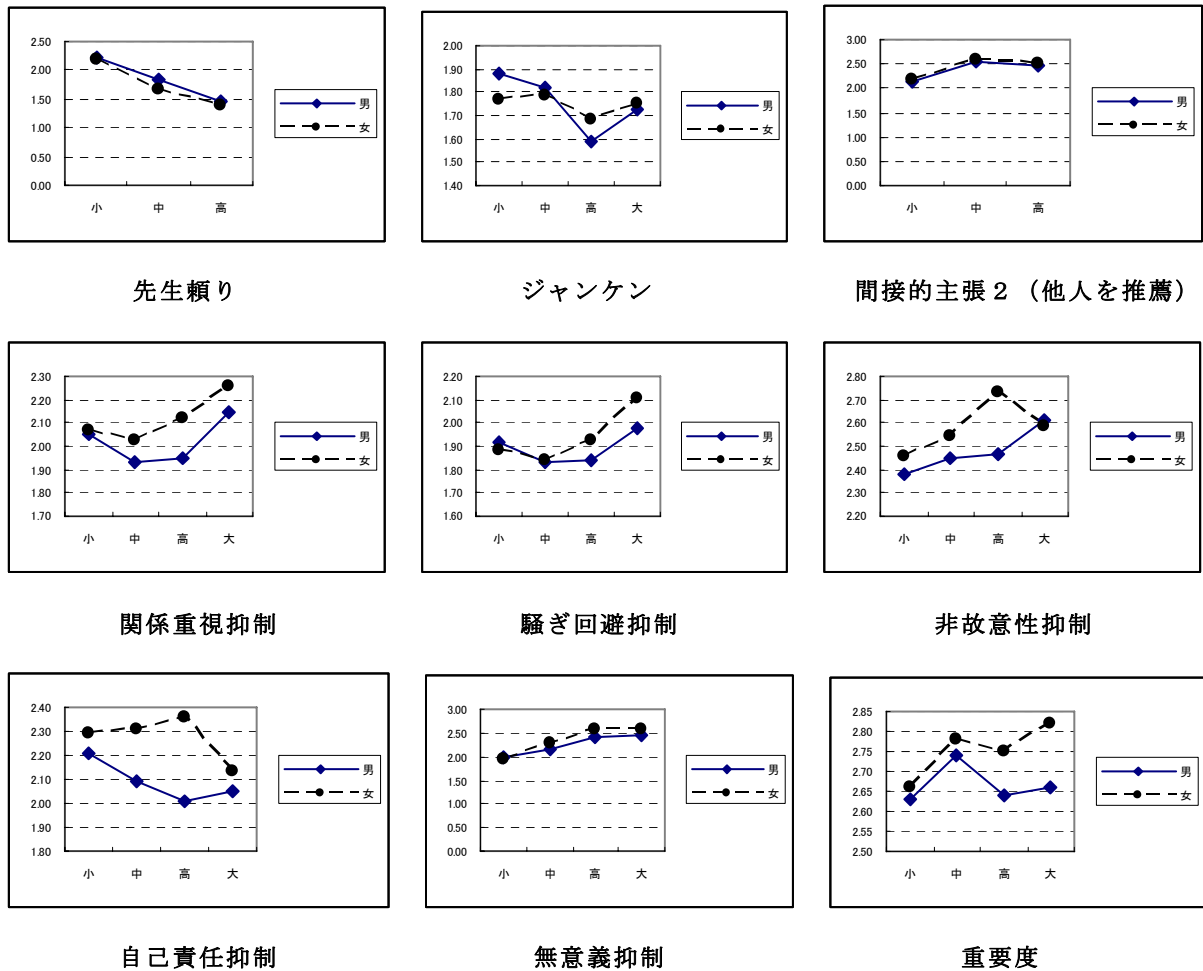


Fig. 12 男子と女子の社会的問題解決方略と重要度の発達の變化

Fig. 12 は男子と女子の社会的問題解決方略と重要度の発達の變化をグラフに視覚的に示したものである（男子と女子における各発達段階間の有意差は Table27、各発達段階における男女間の有意差は Table13 に示したとおりである）。

Fig. 12 に示されたように、男子と女子の社会的問題解決方略と重要度の発達の變化は、自己責任抑制、非故意性抑制以外、ほとんど同様な傾向が見られる。詳細に比較してみると、以下のことが見てとれる。

①葛藤の重要度、間接的攻撃（表情攻撃、背後の攻撃、断絶的攻撃）、間接的主張、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、無意義抑制）においては、男子と女子は小学生では男女間に差が少ないが、発達に伴って男女共に高りながら、男女間の開きも徐々に大きくなっている。

②直接的攻撃においては、男子が女子を大きく上回りながら、同様な発達の變化を示している。発達に伴って低くなる傾向がある一方、中学生が他の発達段階より最も高くなっている。

③直接的主張においては、男子と女子が同様に、小学生から中学生まで急伸びした後、大学生まで徐々に下がっている。小学生では女子が男子を大きく上回っているが、中高大学生では値も発達の變化も近寄っている。

④先生頼りと他人を推薦する間接的主張においては、男子と女子は値も発達の變化も、

極めて類似している。

⑤ジャンケンにおいては、男子と女子が同様な発達的变化を示しているものの、値は発達段階によって逆転している。小中学生では男子が女子を上回っているが、高校大学生では女子が男子を上回っている。

⑥非故意性抑制においては、高校生までは、男女間の開きが徐々に大きくなりながら、男女共に発達に伴って高くなっている。大学生では、女子が大きく下がり、男子が大きく上がり、男女間急接近している。

⑦自己責任抑制においては、男子と女子が正反対な発達的变化を呈している。女子では高校生までは発達に伴って徐々に高くなっているが、大学では大きく下がっている。男子では高校生までは発達に伴って大きく下がっているが、大学では再び高くなっている。

2-3-4 場面別の発達的变化

場面別の各発達段階の社会的問題解決方略と重要度の評定値及び等質サブグループはTable28に示したとおりである（一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table28から、特に等質サブグループを比較してみると、各方略の使用の発達的变化は、各場面間にほとんど類似していることが見られる。詳しく見てみると、以下のことが見てとれる。

①直接的攻撃においては、先生との意見対立場面が他の場面とは逆の発達的变化傾向を示している。

先生との意見対立場面のみ、発達に伴って高くなっている。他の場面は、中学生が最も高くなっているものの、発達に伴って低くなっている傾向が見られる。発達に伴い、先生の権威性が低くなったことの反映と思われる。

②断絶的攻撃においては、級友との意見対立場面が他の場面とは逆の発達的变化傾向を示している。他の場面は、発達に伴って高くなっているが、級友との意見対立場面のみ、中学生が最も高く、小学生が続いて高くなっている。中学生は自我の形成の真最中で、自己の意思を強く主張したいことの反映と思われる。

③表情攻撃においては、級友との意見対立場面のみ、表情攻撃の値が他の場面より低く、各発達段階間に有意差が見られなかった。

④関係重視抑制においては権利の侵害場面のみ、騒ぎ回避抑制においては、級友との意見対立及び権利の侵害場面が、各発達段階間に有意差が見られなかった。

⑤ジャンケンにおいては、級友との意見対立場面では大学生が最も高くなっているが、権利の侵害場面では反対に、高校大学生が低く、小中学生が最も高くなっている。

⑥葛藤の重要度においては、権利の侵害場面以外、各場面に明確な発達的变化が呈示していない。特に小学生の値が各発達段階に占めている順位は、場面によって大きく異なっている。持物の損害、権利の侵害、名誉の侵害、先生との意見対立場面では、小学生が最も低くなっているが、役割の怠惰、級友との意見対立場面では、小学生が最も高くなっている。中学生の値が級友との意見対立、名誉の侵害、先生との意見対立場面において、各発達段階で最も高くなっていることも特徴的である。

Table28 各場面の発達段階別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

		小	中	高	大	等質サブグループ
直攻	持物	1.70	1.81	1.55	1.48	2>1>34
	意見 1	1.71	1.76	1.59	1.33	21>3>4
	権利	1.95	2.08	1.89	1.66	2>13>4
	名誉	1.96	1.92	1.51	1.42	12>34
	役割	2.39	2.43	2.05	1.83	21>3>4
	意見 2	1.44	1.58	1.61		32>1
表情攻	持物	2.03	2.42	2.50	2.47	342>1
	意見 1	1.74	1.72	1.74	1.69	ns.
	権利	2.05	2.32	2.48	2.33	3>42>1
	名誉	2.11	2.43	2.51	2.39	32>24>1
	役割	1.91	2.13	2.27	2.31	43>2>1
	意見 2	1.72	1.98	2.07		3>2>1
背後攻	持物	1.72	2.23	2.35	2.49	4>3>2>1
	意見 1	1.48	1.52	1.56	1.66	4>321
	権利	1.72	2.19	2.33	2.34	43>2>1
	名誉	1.86	2.30	2.31	2.32	432>1
	役割	1.75	2.00	2.04	2.16	4>32>1
	意見 2	1.60	1.96	2.08		3>2>1
断絶攻	持物	1.64	1.73	1.79	1.93	4>32>21
	意見 1	1.49	1.59	1.44	1.47	2>143
	権利	1.66	1.81	1.96	2.07	4>3>2>1
	名誉	1.98	2.35	2.51	2.57	43>2>1
	役割	1.65	1.63	1.66	1.79	4>312
	意見 2	1.40	1.60	1.64		32>1
直主	持物	1.98	2.29	2.13	2.16	2>43>1
	意見 1	2.54	2.74	2.78	2.61	32>41
	権利	2.41	2.77	2.65	2.84	42>3>1
	名誉	2.44	2.58	2.13	2.14	2>1>43
	役割	3.00	3.20	3.07	3.17	24>43>31
	意見 2	2.53	2.89	3.04		3>2>1
間主	持物	2.21	2.38	2.38	2.58	4>23>1
	意見 1	2.11	2.24	2.47	2.52	43>2>1
	権利	1.92	2.14	2.27	2.42	4>3>2>1
	名誉	2.09	2.39	2.38	2.50	4>23>1
	役割	2.19	2.24	2.26	2.67	4>321
	意見 2	1.98	2.17	2.44		3>2>1
先生	持物	2.35	1.90	1.49		1>2>3
	権利	2.04	1.63	1.50		1>3>3
	名誉	2.32	1.79	1.37		1>2>3
	役割	2.13	1.70	1.36		1>2>3
ジャン	意見 1	1.68	1.69	1.61	1.82	4>213
	権利	1.98	1.94	1.66	1.67	12>43
関係抑	持物	2.22	2.30	2.34	2.37	432>21
	意見 1	2.19	2.19	2.23	2.34	4>321
	権利	2.02	1.93	1.96	2.01	ns.
	名誉	1.90	1.83	2.04	2.28	4>3>12
	役割	1.82	1.72	1.85	1.99	4>31>12
	意見 2	2.21	1.94	1.78		1>2>3
騒ぎ抑	持物	2.03	2.05	2.15	2.22	43>32>21
	意見 1	1.91	1.93	1.90	1.99	ns.
	権利	1.94	1.88	1.91	1.96	ns.
	名誉	1.85	1.76	1.91	2.16	4>31>12
	役割	1.74	1.65	1.77	1.90	4>31>12
	意見 2	1.95	1.78	1.68		1>2>3
重要度	持物	2.73	2.81	2.86	2.86	342>421
	意見 1	2.62	2.65	2.53	2.53	21>143
	権利	2.52	2.64	2.68	2.80	4>32>1
	名誉	2.93	3.18	3.06	3.01	2>34>41
	役割	2.59	2.49	2.36	2.49	14>42>3
	意見 2	2.47	2.79	2.67		2>3>1

2-4 日中間の相違に関する検討

2-4-1 全体としての日中間の相違

全体としての日中間の相違は、Table29 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

直接的攻撃、表情（態度）攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃、直接的主張、間接的主張、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制の8方略は6場面共通に設定されており、先生頼りは4場面、ジャンケン2は2場面に設定されている。他人を推薦する「間接的主張2」、非故意性抑制、自己責任抑制、無意義抑制はそれぞれ1場面に設定されている。

全体を通してみると、日本は、葛藤の重要度、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）、間接的主張、先生頼り、ジャンケンが中国より高いと共に、関係重視抑制も中国より高くなっている。中国は、自分の代わりに他の適切な人を推薦する「間接的主張2」、騒ぎ回避抑制、持物の侵害場面において相手が故意に損害を与えたのではないため抑制的方略を取る「非故意性抑制」、悪口を言う人には何も言う必要がないという「無意義抑制」が日本より高くなっている。

日本の対象者が中国の対象者より、対人葛藤を重要視し、攻撃性、主張性が高く、積極的に問題解決に臨んでいる一方、葛藤相手との関係も中国の対象者より重要視している姿勢が窺える。

Table29 全体の国別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

	直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生 頼り	ジャン ケン	間主 2	関係 抑	騒ぎ 抑	非故 意抑	自己 責抑	無意 義抑	重要 度
中国	1.74	2.13	1.89	1.64	2.61	2.25	1.68	1.69	2.70	2.02	1.98	2.65	2.19	2.37	2.66
日本	1.77	2.18	2.15	1.98	2.62	2.38	1.88	1.82	2.09	2.12	1.85	2.41	2.16	2.28	2.77
p	**	****	****	****		****	****	****	****	****	****	****		****	****

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

2-4-2 男女別の日中間の相違

男女別の日中間の相違は、Table30 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table30 から、以下のことが見てとれる。

①男子と女子の日中間の相違は極めて類似している。男女共に、日本は間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃）、間接的主張、先生頼り、ジャンケン、関係重視抑制が中国より有意に高くなっている。中国は他人を推薦する間接的主張、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制が日本より高くなっている。

②直接的攻撃において、男子と女子の日中間の相違はやや異なっている。男子においては日本が中国より有意に高いが、女子においては有意差が見られなかった。

③無意義抑制において、男子と女子の日中間の相違はやや異なっている。女子においては中国が日本より有意に高いが、男子においては有意差が見られなかった。

Table30 男子と女子の国別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

	直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	ジャ ン	間主 2	関係 抑	騒ぎ 抑	非故 意抑	自己 責抑	無意 義抑	重要 度	
男	中国	1.84	2.08	1.83	1.64	2.59	2.21	1.75	1.71	2.61	1.99	1.96	2.64	2.11	2.29	2.63
	日本	1.95	2.11	2.01	1.93	2.62	2.28	1.91	1.79	2.10	2.05	1.81	2.31	2.06	2.25	2.71
	p	****	+	****	****	+	****	****	**	****	****	****	****			****
女	中国	1.62	2.19	1.97	1.64	2.65	2.30	1.59	1.65	2.81	2.06	2.00	2.67	2.29	2.46	2.69
	日本	1.60	2.25	2.28	2.03	2.62	2.48	1.85	1.84	2.08	2.18	1.88	2.51	2.25	2.30	2.82
	p		****	****	****		****	****	****	****	****	****	****			****

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

2-4-3 発達段階別の日中間の相違

発達段階別の日中間の相違は、Table31 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table31 各発達段階の国別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

	直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	ジャ ン	間主 2	関係 抑	騒ぎ 抑	非故 意抑	自己 責抑	無意 義抑	重要 度	
小	中国	1.81	1.92	1.65	1.48	2.42	1.96	1.78	2.32	2.02	1.94	2.57	2.30	2.10	2.57	
	日本	1.90	1.93	1.73	1.78	2.55	2.20	2.46	1.88	1.99	2.10	1.87	2.28	2.19	1.85	2.72
	p	****		***	****	****	****	****	*	****	**	**	****	****	****	
中	中国	1.85	2.11	1.87	1.62	2.76	2.20	1.75	1.79	2.85	1.98	1.93	2.62	2.32	2.29	2.72
	日本	2.03	2.23	2.24	2.00	2.73	2.34	1.76	1.84	2.20	1.99	1.73	2.35	2.05	2.17	2.81
	p	****	****	****	****		****		****		****	****	****	****	+	****
高	中国	1.72	2.26	1.98	1.63	2.65	2.32	1.41	1.52	2.84	1.98	1.96	2.73	2.22	2.53	2.63
	日本	1.68	2.26	2.26	2.06	2.62	2.41	1.45	1.76	2.09	2.09	1.80	2.45	2.13	2.44	2.76
	p	+		****	****		****	+	****	****	****	****	****			****
大	中国	1.58	2.18	2.04	1.84	2.59	2.50		1.69		2.11	2.12	2.67	1.94	2.49	2.69
	日本	1.51	2.30	2.34	2.08	2.58	2.57		1.79		2.28	1.97	2.53	2.23	2.55	2.79
	p	****	****	****	****		****		***		****	****	*	****		****

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

Table31 から、以下のことが見てとれる。

①各発達段階の日中間の相違は、極めて類似している。各発達段階共に、日本は葛藤の重要度、背後的攻撃、断絶的攻撃、間接的主張が中国より有意に高くなっている。中国は他人を推薦する間接的主張、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制が日本より高くなっている。

②直接的攻撃において、小中学生は日本のほうが中国より有意に高いが、高校・大学生では逆転し、大学生は中国のほうが日本より有意に高くなっている。

③表情攻撃において、中学生・大学生は日本のほうが中国より有意に高いが、小学生・

高校生は日中間に有意差が見られなかった。

④直接的主張と先生頼りにおいて、小学生は日本のほうが中国より有意に高いが、中学生以降は日中間に有意差が見られなかった。

⑤ジャンケンと関係重視抑制において、中学生は日中間に有意差が見られなかったが、他の発達段階はいずれも日本のほうが中国より有意に高くなっている。

⑥無意義抑制において、小学生は中国のほうが日本より有意に高いが、中学生以降は日中間に有意差が見られなかった。

⑦自己責任抑制においては、小中高校生は中国のほうが日本より高く、日本の中学生と中国の中学生の間に有意差が見られた。大学生は逆転し、日本のほうが中国より有意に高くなっている。

2-4-4 場面別の日中間の相違

場面別の日中間の相違は、Table32 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table32 各場面の国別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

		直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	ジャ ン	間主 2	関係 抑	騒ぎ 抑	非故 意抑	自己 責抑	無意 義抑	重要 度
持 物	中国	1.58	2.33	2.05	1.62	2.02	2.22	1.71			2.29	2.19	2.65			2.59
	日本	1.67	2.41	2.41	1.95	2.27	2.58	2.08			2.34	2.05	2.41			3.08
	p	****	**	****	****	****	****	****	****			****	****			****
意 見 1	中国	1.75	1.75	1.50	1.49	2.81	2.28		1.65		2.05	1.97				2.88
	日本	1.41	1.69	1.63	1.49	2.52	2.42		1.76		2.45	1.90				2.24
	p	****	*	****		****	****		****		****	**				****
権 利	中国	1.84	2.27	2.03	1.73	2.57	2.11	1.59	1.73		2.02	2.05		2.19		2.57
	日本	1.92	2.35	2.32	2.06	2.79	2.31	1.84	1.88		1.94	1.79		2.16		2.78
	p	***	***	****	****	****	****	****	****		**	****				****
名 誉	中国	1.70	2.40	2.10	2.06	2.51	2.49	1.72			1.90	1.92			2.37	2.96
	日本	1.66	2.34	2.33	2.71	2.09	2.21	1.89			2.16	1.93			2.28	3.15
	p			+	****	****	****	****	****		****				***	****
役 割	中国	2.20	2.07	1.85	1.54	3.08	2.21	1.70			1.83	1.83				2.30
	日本	2.11	2.27	2.17	1.84	3.16	2.50	1.71			1.87	1.70				2.67
	p	***	****	****	****	***	****					****				****
意 見 2	中国	1.24	1.90	1.82	1.33	2.71	2.18			2.70	2.04	1.92				2.63
	日本	1.89	1.97	1.98	1.79	2.97	2.24			2.09	1.88	1.65				2.67
	p	****	*	****	****	****	*			****	****	****				

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

Table32 から、以下のことが見てとれる。

①各場面の日中間の相違は類似している。日本は各場面共に背後的攻撃、断絶的攻撃、先生頼り、ジャンケンにおいて中国より高く、中国は名誉の侵害場面以外の全ての場面共に騒ぎ回避抑制において日本より高くなっている。他人を推薦する間接的主張、非故意性抑制、無意義抑制において、中国も日本より高くなっている。

②各場面に共通している日中間の相違のおよその傾向に反して、それぞれの場面に独自の特徴も見られる。特に級友との意見対立場面と名誉の侵害場面における日中間の相違は、他の4場面（持物の損害、権利の侵害、役割の怠惰、先生との意見対立）と異なっている。

級友との意見対立場面は、葛藤の重要度において、他の全ての場面は日本が中国より有意に高いが、級友との意見対立場面は中国が日本より高くなっており、中国の中では名誉の侵害に続いて最も高くなっている。直接的攻撃において、持物の損害、権利の侵害、先生との意見対立場面は日本が中国より有意に高いが、級友との意見対立場面は中国が日本より高くなっている。表情攻撃と直接的主張において、持物の損害、権利の侵害、役割の怠惰、先生との意見対立場面は日本が中国より有意に高いが、級友との意見対立場面は中国が日本より有意に高くなっている。

名誉の侵害場面は、間接的主張において、他の全ての場面は日本が中国より有意に高いが、名誉の侵害場面は中国が日本より高くなっている。直接的主張において、級友との意見対立場面と同様に、持物の損害、権利の侵害、役割の怠惰、先生との意見対立場面は日本が中国より有意に高いが、名誉の侵害場面は中国が日本より高くなっている。表情攻撃においても同様な傾向が見られる。直接的攻撃において、持物の損害、権利の侵害、先生との意見対立場面は日本が中国より有意に高いが、名誉の侵害場面は日中間に有意差が見られなかった。

役割の怠惰場面は、先生頼りと関係重視抑制は日中間に有意差がないことが特徴的である。また、直接的攻撃において、級友との意見対立場面と同様に、持物の損害、権利の侵害、先生との意見対立場面は日本が中国より有意に高いが、役割の怠惰場面は中国が日本より有意に高くなっている。

③関係重視抑制は場面によって、日中間の相違が異なっている。級友との意見対立及び名誉の侵害場面は、日本が中国より有意に高い。持物の損害及び役割の怠惰場面は、日本が中国より高いが、有意差が見られなかった。権利の侵害及び先生との意見対立場面は逆転し、中国が日本より有意に高くなっている。

④次頁の Fig. 13 は場面別の中国と日本の社会的問題解決方略と重要度をグラフに示したものである。Table32 と Fig. 13 から、各場面で最も高くなっている方略は日中間大きく異なっていることが見て取れる。

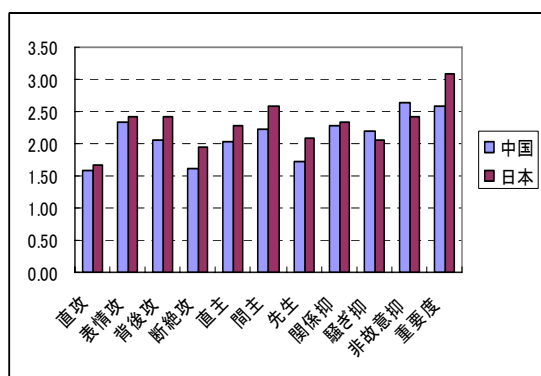
持物の損害場面においては、中国では非故意性抑制が最も高くなっているが、日本では間接的主張が最も多く用いられている。

級友との意見対立場面においては、中国では直接的主張が最も高くなっているが、日本では直接的主張も最も高いものの、関係重視抑制とは差が少なく、主張と抑制が拮抗している様子が窺える。

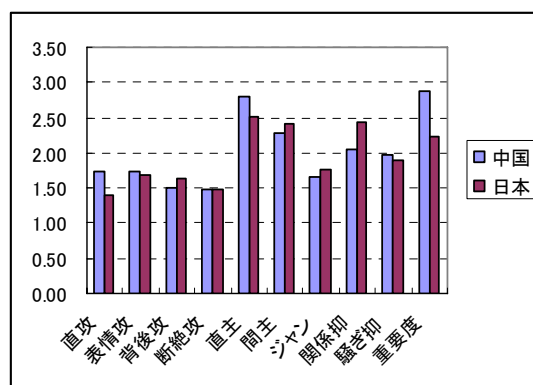
名誉の侵害場面においては、中国では直接的主張と間接的主張が最も高くなっているが、日本では断絶攻撃が最も高くなっている。

先生との意見対立場面においては、中国では直接的主張と他人を推薦する間接的主張が

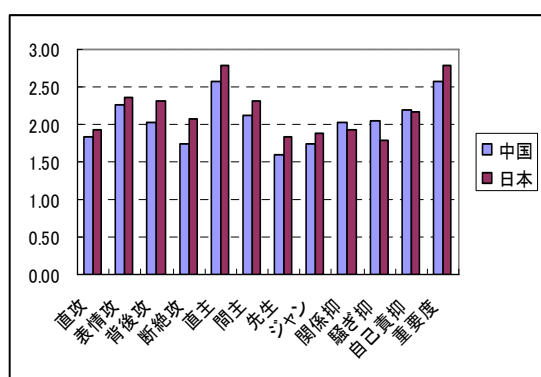
極めて近い値で最も高くなっているが、日本では直接的主張が飛び切り最も高くなっている。



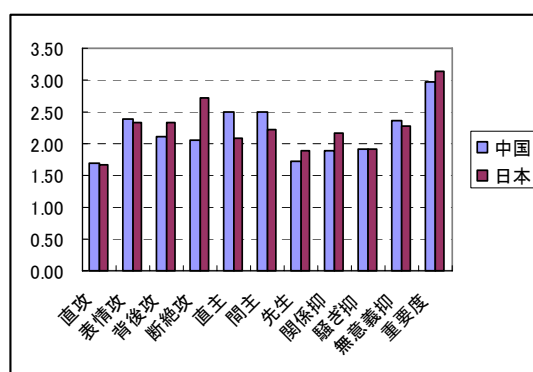
持物の損害場面



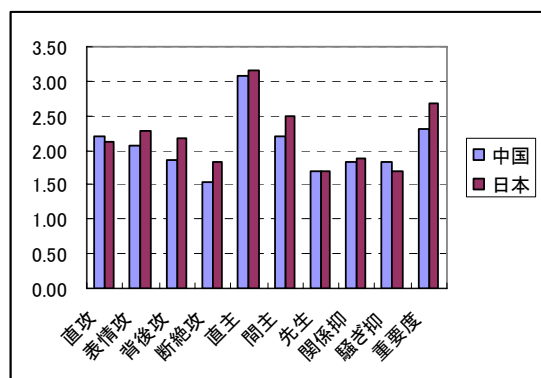
級友との意見対立場面



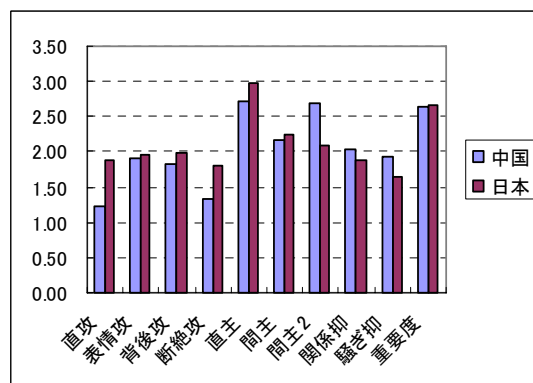
権利の侵害場面



名誉の侵害場面



役割の怠惰場面



先生との意見対立場面

Fig. 13 各場面における中国と日本の社会的問題解決方略と重要度

2-4-5 各場面、発達段階、男女ごとの詳細分析における日中間の相違

(1) 持物の損害場面における日中間の相違の詳細分析

持物の損害場面における日中間の相違は、次頁の Table33 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table33 から、以下のことが見てとれる。

①重要度において、小・中・高・大のいずれの発達段階も男女共に、日本のほうが中国

より有意に高くなっている。

②女子は、小・中・高・大の各発達段階の日中間の相違が類似している。背後的攻撃、断絶的攻撃、直接的主張、間接的主張、先生頼りにおいて、日本のほうが中国より有意に高くなっている。

③男子は、小学生では日中間に有意差が見られる方略が少なく、日本の先生頼りが中国より高く、中国の非故意性抑制が日本より高くなっているのみである。中学生以降では日中間に有意差が見られる方略が多くなり、中・高・大の各発達段階の日中間の相違が類似している。直接的攻撃、表情攻撃（高校生を除く）、背後的攻撃、断絶的攻撃、直接的主張、間接的主張（中学生を除く）、先生頼りにおいて、日本のほうが中国より有意に高くなっている。騒ぎ回避抑制、非故意性抑制において、中国のほうが日本より有意に高くなっている。

④持物の損害に対して、女子の問題解決における発達が早いため、小学生において、既に日中間に違いを多く示した。男子の問題解決における発達が遅れているため、中学生以降になって、日中間に多くの違いを示したのではないかと思われる。

Table33 持物の損害場面における国別の詳細の社会的問題解決方略と重要度の評定値

持物		直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	関係 抑	騒ぎ 抑	非故 意抑	重要 度	
小	中国	1.79	2.03	1.72	1.59	1.95	2.13	2.12	2.21	1.98	2.51	2.55	
	男	日本	1.84	2.02	1.73	1.71	1.92	2.22	2.55	2.18	2.08	2.25	2.86
		p						****			**	****	
	中国	1.52	1.99	1.63	1.42	1.91	2.06	2.04	2.18	1.98	2.65	2.32	
	女	日本	1.59	2.08	1.80	1.81	2.15	2.42	2.64	2.30	2.09	2.31	3.15
		p			*	****	**	****	****		***	****	
中	中国	1.77	2.23	1.94	1.51	2.28	2.19	1.85	2.26	2.13	2.64	2.54	
	男	日本	2.17	2.54	2.38	2.03	2.55	2.31	2.11	2.24	1.86	2.20	3.11
		p	****	****	****	****	***		***		****	****	****
	中国	1.74	2.46	2.07	1.56	2.13	2.37	1.67	2.27	2.08	2.59	2.67	
	女	日本	1.65	2.51	2.59	1.92	2.32	2.68	2.01	2.47	2.10	2.48	3.11
		p			****	****	*	****	****	*			****
高	中国	1.65	2.51	2.04	1.59	2.01	2.00	1.43	2.23	2.18	2.66	2.61	
	男	日本	1.81	2.45	2.49	1.95	2.51	2.34	1.66	2.25	1.93	2.22	3.09
		p	*		****	****	****	****	****		****	****	****
	中国	1.37	2.53	2.33	1.65	1.96	2.35	1.29	2.44	2.35	2.81	2.72	
	女	日本	1.37	2.51	2.63	2.02	2.08	2.89	1.61	2.45	2.11	2.66	3.10
		p			****	****		****	****		***	+	****
大	中国	1.46	2.29	2.06	1.70	1.97	2.22		2.39	2.29	2.72	2.54	
	男	日本	1.69	2.49	2.52	1.95	2.50	2.59		2.26	2.04	2.51	3.00
		p	****	**	****	****	****	****		+	****	**	****
	中国	1.33	2.52	2.47	1.91	1.96	2.44		2.36	2.44	2.62	2.66	
	女	日本	1.43	2.59	2.95	2.14	2.15	3.05		2.49	2.15	2.57	3.19
		p	+		****	***	*	****		+	****		****

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

(2) 級友との意見対立場面における日中間の相違の詳細分析

級友との意見対立場面における日中間の相違は、Table34 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table34 から、以下のことが見てとれる。

①重要度において、小・中・高・大のいずれの発達段階も男女共に、中国のほうが日本より有意に高くなっている。

②直接的攻撃において、小・中・高・大のいずれの発達段階も男女共に、中国のほうが日本より有意に高く、関係重視抑制において、小・中・高・大のいずれの発達段階も男女共に、日本のほうが中国より有意に高くなっている。

③直接的主張において、小学生男子、中学生女子を除き、いずれの発達段階も男女共に、中国のほうが日本より有意に高くなっている。

Table34 級友との意見対立場面における国別の詳細の社会的問題解決方略と重要度の評定値

意見 1	直攻	表情攻	背後攻	断絶攻	直主	間主	ジャン	関係抑	騒ぎ抑	重要度	
小	中国	1.97	1.80	1.56	1.52	2.58	2.11	1.72	1.94	1.87	2.80
	男 日本	1.66	1.64	1.40	1.49	2.31	2.13	1.74	2.41	1.97	2.30
	p	****	*	*		***			****		****
	中国	1.82	1.81	1.43	1.38	2.66	1.81	1.52	1.93	1.82	2.96
	女 日本	1.38	1.71	1.53	1.57	2.64	2.35	1.69	2.45	1.96	2.46
	p	****			*		****	*	****		****
中	中国	2.08	1.69	1.44	1.69	2.75	2.04	1.62	2.03	1.99	2.92
	男 日本	1.78	1.71	1.55	1.55	2.62	2.29	1.74	2.29	1.87	2.17
	p	****		+	+		**		***		****
	中国	1.72	1.69	1.40	1.53	2.98	2.33	1.65	2.06	1.97	3.04
	女 日本	1.39	1.79	1.72	1.49	2.58	2.39	1.71	2.44	1.84	2.22
	p	****		****		****			****		****
高	中国	1.91	1.71	1.42	1.43	2.91	2.28	1.48	1.96	1.93	2.75
	男 日本	1.49	1.71	1.62	1.43	2.54	2.41	1.66	2.32	1.78	2.11
	p	****		***		****		***	****	*	****
	中国	1.63	1.81	1.49	1.28	3.02	2.61	1.58	2.14	1.96	2.93
	女 日本	1.27	1.73	1.75	1.58	2.61	2.61	1.74	2.53	1.90	2.23
	p	****		****	****	****		*	****		****
大	中国	1.48	1.70	1.59	1.55	2.79	2.43	1.78	2.07	1.99	2.83
	男 日本	1.29	1.64	1.56	1.40	2.47	2.42	1.84	2.50	1.80	2.12
	p	****			**	****			****	**	****
	中国	1.36	1.84	1.67	1.46	2.76	2.61	1.78	2.21	2.15	2.84
	女 日本	1.17	1.63	1.84	1.48	2.45	2.63	1.88	2.60	2.04	2.33
	p	****	****	*		****			****		****

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

(3) 権利の侵害場面における日中間の相違の詳細分析

権利の侵害場面における日中間の相違は、Table35 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table35 から、以下のことが見てとれる。

①重要度において、小・中・高・大のいずれの発達段階も男女共に、日本のほうが中国より有意に高くなっている。

②小・中・高・大の各発達段階の日中間の相違が類似している。騒ぎ回避抑制において、小・中・高・大のいずれの発達段階も男女共に、中国のほうが日本より有意に高くなっている。背後的攻撃、断絶的攻撃、直接的主張、間接的主張において、日本のほうが中国より有意に高い傾向が見られる。

③関係重視抑制において、小学生では男女共に日中間に有意差がなく、中学生・高校生では男女共に中国のほうが日本より有意に高く、大学生では逆転し、男女共に日本のほうが中国より有意に高くなっている。

④自己責任抑制において、小学生では男女共に日中間に有意差がなく、中学生では男女共に中国のほうが日本より有意に高く、高校生では男女共に日中間に有意差がなく、大学生では逆転し、男女共に日本のほうが中国より有意に高くなっている。

Table35 権利の侵害場面における国別の詳細の社会的問題解決方略と重要度の評定値

権利		直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	ジャ ン	関係 抑	騒ぎ 抑	自己 責抑	重要 度	
小	中国	2.07	2.09	1.70	1.61	2.30	1.87	1.74	2.00	1.98	2.06	2.26	2.52	
	男	日本	2.20	1.91	1.68	1.81	2.59	2.05	2.39	2.07	1.99	1.81	2.16	2.68
	p		*		*	***	*	****			***		+	
	中国	1.67	2.04	1.63	1.37	2.20	1.64	1.61	1.82	2.08	2.07	2.37	2.30	
女	日本	1.76	2.16	1.87	1.82	2.51	2.07	2.37	2.01	2.05	1.84	2.22	2.54	
p				**	****	***	****	****	+		*		**	
中	中国	2.01	2.21	1.88	1.66	2.60	2.00	1.58	2.01	1.98	2.00	2.19	2.55	
	男	日本	2.55	2.20	2.21	1.98	2.98	2.39	1.73	1.91	1.65	1.65	1.94	2.79
	p	****		****	****	****	****	+		****	****	**	***	
	中国	1.80	2.36	2.12	1.64	2.68	1.96	1.57	1.81	2.09	2.08	2.46	2.55	
女	日本	2.06	2.50	2.60	2.05	2.89	2.28	1.69	2.01	1.90	1.70	2.14	2.77	
p	****	+	****	****	*	****		*	*	****	****	***		
高	中国	2.04	2.37	1.98	1.75	2.55	2.19	1.52	1.56	1.93	1.99	2.07	2.51	
	男	日本	2.20	2.41	2.45	2.19	2.83	2.39	1.46	1.72	1.72	1.64	1.95	2.91
	p	*		****	****	****	**		*	***	****		****	
	中国	1.70	2.60	2.40	1.73	2.50	2.16	1.51	1.47	2.13	2.12	2.42	2.61	
女	日本	1.60	2.55	2.58	2.19	2.76	2.35	1.46	1.91	2.05	1.83	2.30	2.75	
p			*	****	****	**		****		****		*		
大	中国	1.81	2.08	2.03	1.91	2.74	2.36		1.62	1.99	2.01	1.95	2.66	
	男	日本	1.80	2.39	2.29	2.09	2.91	2.29		1.67	1.91	1.78	2.15	2.83
	p		****	****	**	*					****	**	**	
	中国	1.55	2.30	2.37	2.04	2.88	2.49		1.57	1.98	2.11	1.94	2.78	
女	日本	1.45	2.54	2.74	2.27	2.86	2.57		1.78	2.17	1.97	2.31	2.94	
p		****	****	***				****	**	*	****	**		

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

(4) 名誉の侵害場面における日中間の相違の詳細分析

名誉の侵害場面における日中間の相違は、Table36 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。Table36 から、以下のことが見てとれる。

①重要度において、小学生と大学生は男女共に、日本のほうが中国より有意に高くなっている。中学生と高校生は男女共に日中間に有意差が見られなかった。

②断絶的攻撃において、小・中・高・大のいずれの発達段階も男女ともに、日本のほうが中国より有意に高くなっている。背後的攻撃においても、小学生男子を除き、いずれの発達段階も男女ともに、日本のほうが中国より有意に高くなっている。

③直接的主張において、小学生女子は日本のほうが中国より有意に高くなっているが、中学生以降はいずれの発達段階も男女ともに、中国のほうが日本より有意に高くなっている。間接的主張においても、小学生女子を除き、いずれの発達段階も男女ともに、中国のほうが日本より有意に高くなっている。

④関係重視抑制において、小学生では日中間に有意差がなく、中学生以降では各発達段階の男女共に、日本のほうが中国より有意に高くなっている。

⑤直接的攻撃において、小学生では男女共に日本のほうが中国より有意に高いが、高校生・大学生では逆転し、中国の男子のほうが日本より有意に高くなっている。

Table36 名誉の侵害場面における国別の詳細の社会的問題解決方略と重要度の評定値

名誉		直攻	表情攻	背後攻	断絶攻	直主	間主	先生	関係抑	騒ぎ抑	無意義抑	重要度	
小	中国	2.00	2.09	1.81	1.68	2.50	2.16	2.04	1.86	1.90	2.11	2.77	
	男	日本	2.34	2.00	1.80	2.16	2.47	1.99	2.58	1.86	1.78	1.85	3.01
		p	****			****		*	****			**	**
	中国	1.63	2.14	1.80	1.60	2.26	2.12	1.91	1.99	1.84	2.09	2.63	
	女	日本	1.78	2.24	2.02	2.43	2.49	2.10	2.72	1.91	1.86	1.86	3.31
		p	+		*	****	*		****			*	****
中	中国	2.04	2.30	2.01	1.95	2.85	2.42	2.05	1.70	1.74	2.22	3.12	
	男	日本	2.12	2.35	2.29	2.65	2.38	2.22	1.85	1.87	1.68	2.10	3.05
		p			***	****	****	*	*	*			
	中国	1.80	2.52	2.28	2.08	2.87	2.60	1.60	1.78	1.84	2.36	3.20	
	女	日本	1.74	2.56	2.69	2.87	2.10	2.29	1.61	1.99	1.73	2.23	3.33
		p			****	****	****	****		*			+
高	中国	1.66	2.56	2.08	2.12	2.38	2.48	1.49	1.81	1.83	2.42	2.88	
	男	日本	1.59	2.35	2.25	2.78	1.90	2.14	1.31	2.20	1.91	2.43	3.02
		p		***	*	****	****	****	***	****			+
	中国	1.48	2.67	2.38	2.28	2.40	2.68	1.31	1.92	1.92	2.68	3.13	
	女	日本	1.29	2.44	2.56	2.94	1.81	2.20	1.36	2.30	1.99	2.45	3.29
		p	***	***	*	****	****	****		****		**	*
大	中国	1.56	2.30	2.05	2.13	2.33	2.59		2.01	2.13	2.38	2.81	
	男	日本	1.47	2.40	2.34	2.69	2.02	2.25		2.38	2.03	2.52	2.96
		p			****	****	****	****		****		+	*
	中国	1.44	2.50	2.32	2.45	2.45	2.73		2.13	2.13	2.60	3.03	
	女	日本	1.22	2.38	2.61	3.00	1.77	2.45		2.57	2.32	2.57	3.25
		p	****		****	****	****	****		****	**		****

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

(5) 役割の怠惰場面における日中間の相違の詳細分析

役割の怠惰場面における日中間の相違は、Table37 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table37 から、以下のことが見てとれる。

①重要度において、小・中・高・大のいずれの発達段階も男女共に、日本のほうが中国より有意に高くなっている。

②断絶的攻撃において、小・中・高・大のいずれの発達段階も男女ともに、日本のほうが中国より有意に高くなっている。背後的攻撃においても、小学生男子を除き、いずれの発達段階も男女ともに、日本のほうが中国より有意に高くなっている。

③直接的攻撃と直接的主張において、高校生は男女共に、中国のほうが日本より有意に高くなっている。

④騒ぎ回避抑制において、小・中・高・大のいずれの発達段階も中国のほうが日本より有意に高い。

Table37 役割の怠惰場面における国別の詳細の社会的問題解決方略と重要度の評定値

役割	直攻	表情攻	背後攻	断絶攻	直主	間主	先生	関係抑	騒ぎ抑	重要度	
小	中国	2.41	1.86	1.69	1.53	2.90	1.91	2.11	1.80	1.80	2.39
	男 日本	2.62	1.85	1.77	1.77	2.95	2.30	2.27	1.84	1.73	2.78
	p	*			***		****	+			****
	中国	2.25	1.94	1.58	1.44	2.91	1.93	1.91	1.79	1.80	2.37
	女 日本	2.25	2.00	1.93	1.81	3.26	2.59	2.18	1.84	1.62	2.80
	p			****	****	****	****	**		*	****
中	中国	2.46	2.00	1.74	1.52	3.09	2.09	1.93	1.66	1.69	2.34
	男 日本	2.85	2.11	1.97	1.81	3.11	2.32	1.63	1.63	1.54	2.84
	p	****		***	****		**	****		*	****
	中国	2.27	2.06	1.87	1.43	3.32	2.13	1.69	1.77	1.71	2.24
	女 日本	2.16	2.37	2.46	1.80	3.29	2.47	1.47	1.80	1.61	2.71
	p		****	****	****		****	***			****
高	中国	2.44	2.10	1.78	1.53	3.08	2.14	1.43	1.68	1.71	2.20
	男 日本	2.13	2.28	2.09	1.81	2.87	2.21	1.38	1.89	1.74	2.44
	p	****	**	****	****	***			***		****
	中国	1.98	2.23	2.00	1.42	3.25	2.19	1.25	1.92	1.93	2.23
	女 日本	1.60	2.49	2.36	1.92	3.07	2.49	1.37	1.95	1.70	2.60
	p	****	****	****	****	**	****	**		****	****
大	中国	2.05	2.07	1.92	1.67	2.93	2.53		2.05	2.02	2.29
	男 日本	1.92	2.33	2.10	1.81	3.26	2.59		1.90	1.77	2.57
	p		****	*	*	****			*	****	****
	中国	1.72	2.29	2.11	1.74	3.11	2.63		1.99	2.00	2.40
	女 日本	1.63	2.55	2.55	1.96	3.39	2.94		2.00	1.81	2.70
	p		****	****	***	****	****			**	****

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

(6) 先生との意見対立場面における日中間の相違の詳細分析

先生との意見対立場面における日中間の相違は、Table38 に示したとおりである（評定値が有意に高い方はゴシック体で示している。一元配置分散分析：SPSS for Windows）。

Table38 から、以下のことが見てとれる。

①重要度において、小学生男子では中国のほうが日本より有意に高くなっているが、中学生女子、高校生男子では日本のほうが中国より有意に高くなっている。

②直接的攻撃、断絶的攻撃、直接的主張、間接的主張において、小・中・高のいずれの発達段階も男女共に、日本のほうが中国より有意に高くなっている。関係重視抑制と騒ぎ回避抑制において、中国のほうが日本より高い傾向が見られる。

③他人を推薦する間接的主張において、小・中・高のいずれの発達段階も男女共に、中国のほうが日本より有意に高くなっている。

Table38 先生との意見対立場面における国別の詳細の社会的問題解決方略と重要度の評定値

意見 2		直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	間主 2	関係 抑	騒ぎ 抑	重要 度	
小	中国	1.23	1.74	1.66	1.31	2.33	1.96	2.30	2.36	2.18	2.56	
	男	日本	1.71	1.74	1.53	1.54	2.51	2.00	1.95	2.22	1.92	2.36
	p	****			+	***	+		****		**	*
	中国	1.12	1.58	1.51	1.17	2.48	1.74	2.35	2.11	1.91	2.53	
	女	日本	1.63	1.81	1.68	1.52	2.81	2.19	2.03	2.13	1.76	2.42
	p	****	***	*	****	***	****	***				
中	中国	1.23	1.91	1.78	1.33	2.80	2.12	2.74	2.04	1.93	2.79	
	男	日本	2.16	1.90	1.99	1.85	2.94	2.12	2.24	1.83	1.65	2.73
	p	****		**	****			****	**	****		
	中国	1.19	1.93	1.82	1.35	2.85	2.19	2.98	2.04	1.90	2.71	
	女	日本	1.90	2.17	2.32	1.97	3.01	2.25	2.16	1.76	1.55	2.91
	p	****	***	****	****	*		****	****	****	****	**
高	中国	1.37	2.06	1.97	1.38	2.75	2.38	2.73	1.86	1.84	2.50	
	男	日本	2.08	2.04	2.09	1.95	3.21	2.35	2.13	1.59	1.49	2.77
	p	****			****	****		****	****	****	****	
	中国	1.25	2.02	2.03	1.38	2.98	2.48	2.98	1.86	1.78	2.69	
	女	日本	1.85	2.16	2.26	1.91	3.28	2.52	2.05	1.78	1.57	2.79
	p	****	+	***	****	****		****		****	****	

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

2-5 社会的問題解決方略における国、発達段階、性の三要因の影響力

以上に検討してきたように、国、発達段階、性、場面の4要因共に社会的問題解決方略に影響を与えていることが見られた。以下は、国、発達段階、性をダミー変数に置き換え、重回帰分析を通して、それぞれの要因が社会的問題解決方略に与えた影響を検討する。

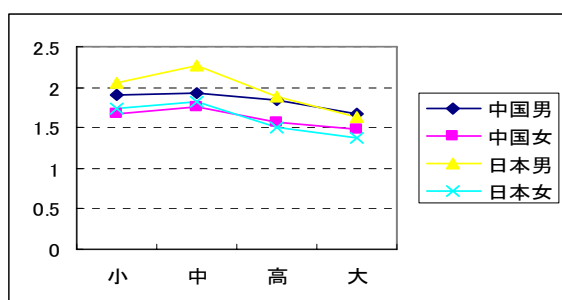
場面は被験者内要因で、今の SPSS for Windows などの一般的な統計ソフトでも分析不能のため、場面要因を統制し、国、発達段階、性の3要因について分析した。因みに、ダミー変数（0、1）は2変数しかないので、発達段階を分けて検討することにした。

2-5-1 全部の場面における国、発達段階、性の三要因の影響

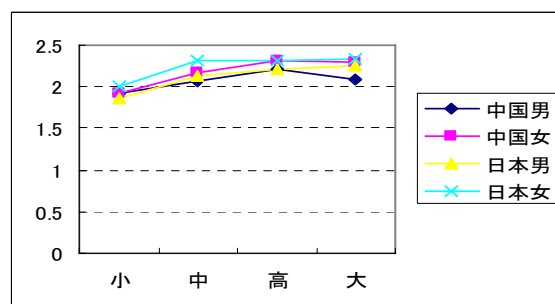
全部の場面を込みに重回帰分析（SPSS for Windows）した結果は Table39 に示したとおりである（標準化係数が 0.1 以上の値がゴシック体で、0.2 以上の値が斜体字で示している）。統計検定の結果、小学生～中学生のジャンケン、中学生～大学生の直接的主張などの重相関係数（R）が低く、国・性・発達の3変数による重回帰式の当てはまりが良くない以外、他の方略はいずれも統計的に有意であり、国・性・発達の3変数による重回帰式で予測できる。

Table39 社会的問題解決方略における国、発達段階、性の三要因の影響（重回帰分析の標準化係数）

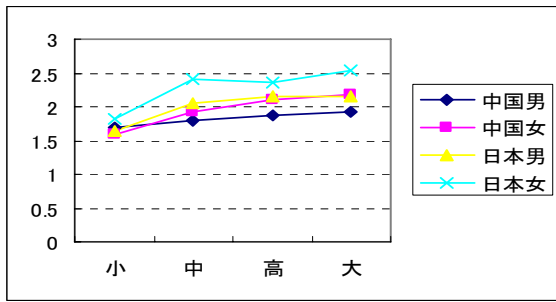
	R	小～中			R	中～高			R	高～大		
		標準化係数				標準化係数				標準化係数		
		国	発達	性		国	発達	性		国	発達	性
直攻	.177(a)	0.08	0.05	0.16	.221(a)	0.05	0.13	0.18	.219(a)	0.07	0.10	0.18
表情攻	.145(a)	0.03	0.13	0.06	.090(a)	0.03	0.05	0.07	.083(a)	0.03	0.03	0.07
背後攻	.231(a)	0.12	0.19	0.07	.211(a)	0.17	0.04	0.11	.221(a)	0.15	0.04	0.15
断絶攻	.207(a)	0.19	0.09	0.00	.225(a)	0.22	0.02	0.01	.185(a)	0.17	0.05	0.06
直主	.132(a)	0.02	0.13	0.02	.061(a)	0.02	0.06	0.01	.035(a)	0.03	0.02	0.01
間主	.134(a)	0.09	0.09	0.04	.113(a)	0.05	0.05	0.08	.162(a)	0.05	0.10	0.12
先生	.198(a)	0.08	0.16	0.06	.208(a)	0.02	0.20	0.07	.056(a)	0.03		0.05
ジャン	.059(a)	0.05	0.01	0.04	.134(a)	0.09	0.10	0.01	.125(a)	0.10	0.06	0.03
間主2	.312(a)	0.24	0.18	0.04	.367(a)	0.37	0.03	0.05				
関係抑	.054(a)	0.02	0.04	0.03	.087(a)	0.03	0.03	0.07	.137(a)	0.09	0.06	0.08
騒ぎ抑	.079(a)	0.07	0.04	0.00	.108(a)	0.10	0.03	0.04	.128(a)	0.08	0.07	0.07
非故意抑	.149(a)	0.14	0.03	0.05	.186(a)	0.15	0.06	0.11	.130(a)	0.11	0.01	0.07
自己責抑	.122(a)	0.10	0.03	0.08	.175(a)	0.10	0.00	0.15	.129(a)	0.05	0.05	0.11
無意義抑	.152(a)	0.09	0.12	0.03	.149(a)	0.06	0.13	0.07	.073(a)	0.01	0.02	0.07
重要度	.094(a)	0.07	0.07	0.02	.088(a)	0.06	0.04	0.05	.103(a)	0.06	0.02	0.08



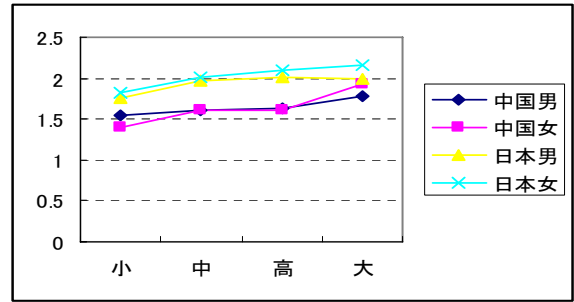
直接的攻撃



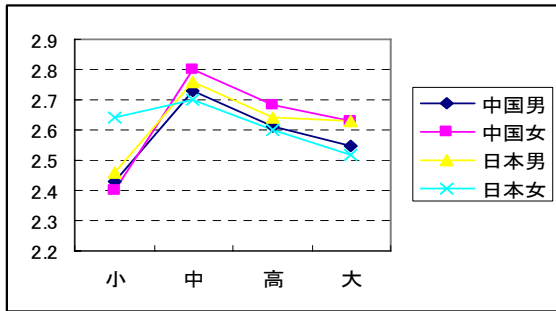
表情攻撃



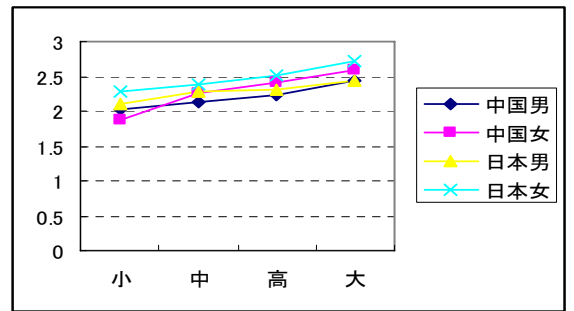
背後的攻撃



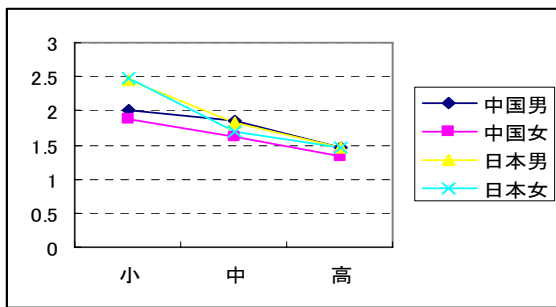
断絶的攻撃



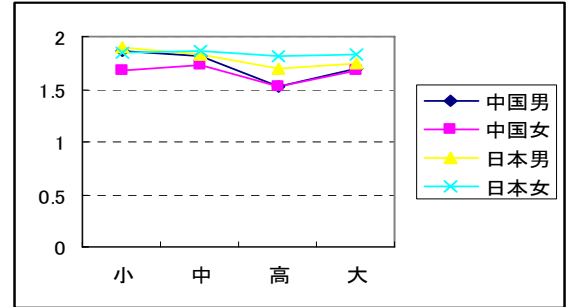
直接的主張



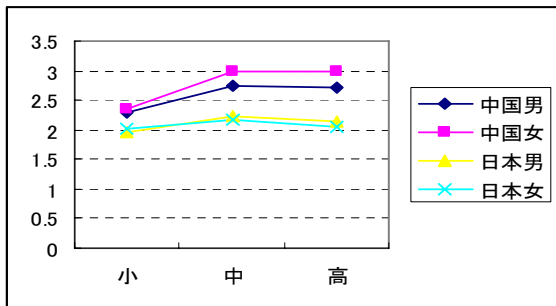
間接的主張



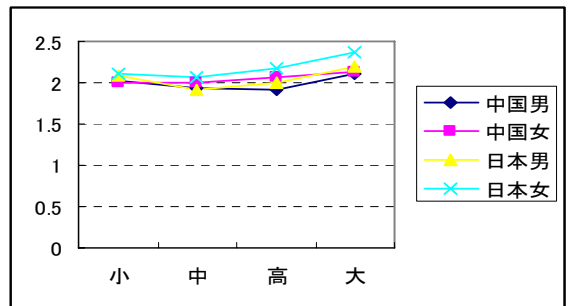
先生頼り



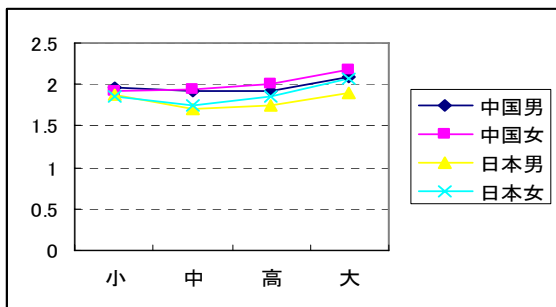
ジャンケン



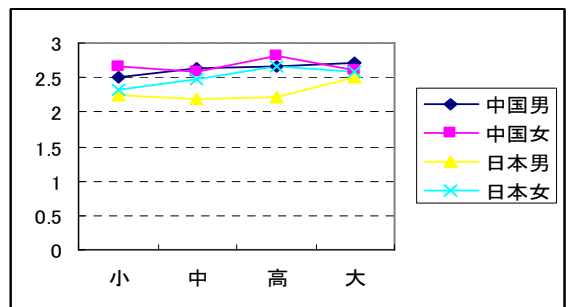
間接的主張 (他人を推薦する)



関係重視抑制



騒ぎ回避抑制



非故意性抑制

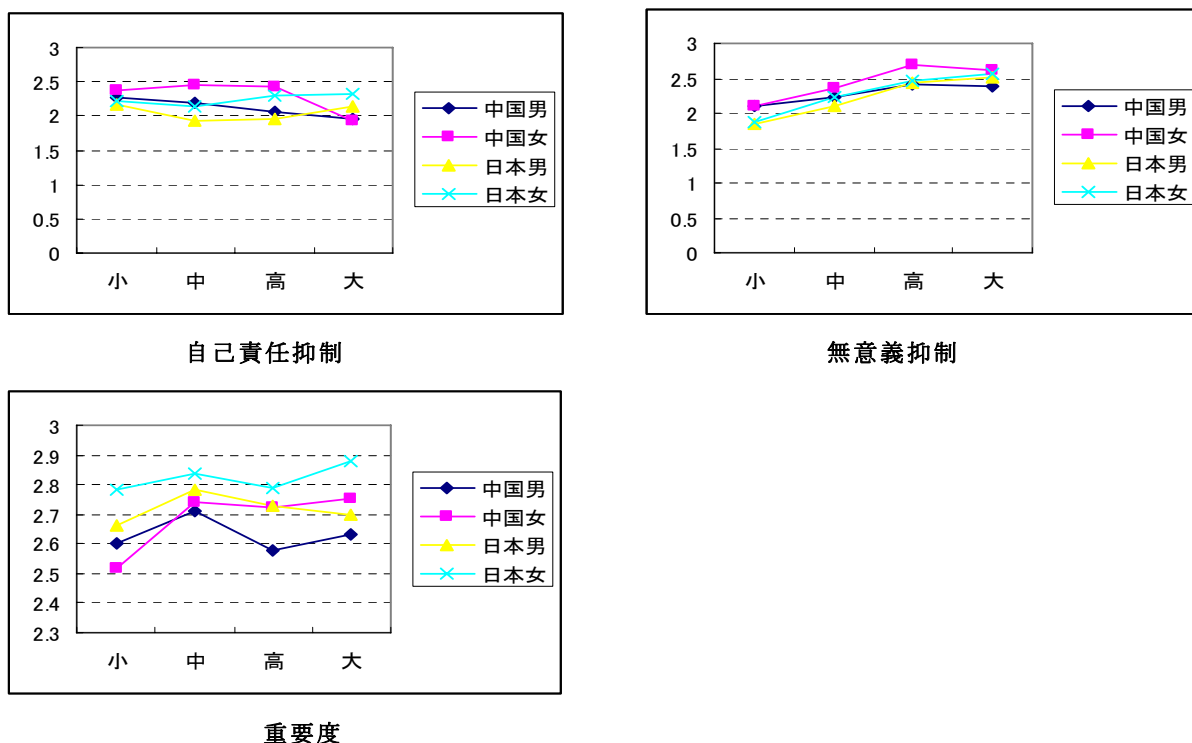


Fig. 14 社会的問題解決方略と重要度の国及び男女別の発達の变化

Fig. 14 は社会的問題解決方略と重要度を国、男女、発達段階別に示しており、視覚的にも国、性、発達の影響が窺える。

Table39 と Fig. 14 から、以下のことが見てとれる。

国・性・発達の要因別で全体的に見ると、国の要因は発達段階に関係なく、いずれの発達段階でも標準化係数が最も高く、最も影響を与えている。発達の要因は小学生～中学生にかけて最も影響を与えており、続いては中学生～高校生の段階であり、高校生～大学生にかけては影響が少ない。性の要因は小学生～中学生にかけて影響が少なく、中学生～高校生、高校生～大学生にかけては影響が大きくなる。

方略別でみると、直接的攻撃においては、性の要因が最も影響を与えており、続いては中学生～大学生の発達が影響を与えている。

表情攻撃においては、性の要因が最も影響を与えており、続いては中学生～大学生の発達が影響を与えている。

背後的攻撃においては、国、性、発達がいずれも大きく影響を与えている。

断絶的攻撃においては、国の要因が最も影響を与えている。

直接的主張においては、小学生～中学生の発達が最も影響を与えている。

間接的主張においては、高校生～大学生の発達と性の要因が最も影響を与えている。

先生頼りにおいては、発達の要因が最も影響を与えている。

ジャンケンにおいては、中学生～高校生では主に発達の要因、高校生～大学生では主に国の要因が影響を与えている。

他人を推薦する間接的主張においては、国の要因が最も影響を与えている。

関係重視抑制においては、国、性、発達の影響はあるものの、重相関係数 (R)、各要因の標準化係数が低く、国・性・発達の3変数による重回帰式の当てはまりが良くない。葛

藤相手との親密性や相対的地位など、国・性・発達の以外の要因が影響を与えていると考えられる。

騒ぎ回避抑制においては、国の要因が最も影響を与えている。

非故意性抑制と自己責任抑制においては、国の要因が最も影響を与えており、続いては性の要因が影響を与えている。

無意義抑制においては、小学生～高校生の発達が最も影響を与えている。性の要因が最も影響を与えており、続いては中学生～大学生の発達が影響を与えている。

重要度においては、国、性、発達の影響はあるものの、交互作用が多く見られ、重相関係数 (R)、各要因の標準化係数が低く、国・性・発達の3変数による重回帰式の当てはまりが良くない。

2-5-2 各場面における国、発達段階、性の三要因の影響

(1) 持物の損害場面における国、発達段階、性の三要因の影響

持物の損害場面における重回帰分析の結果は Table40 に示したとおりである (標準化係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している)。

Table40 持物の損害場面における社会的問題解決方略への国、発達段階、性の三要因の影響

	小～中			中～高			高～大					
	R	標準化係数			R	標準化係数			R	標準化係数		
		国	発達	性		国	発達	性		国	発達	性
直攻	.182(a)	0.07	0.08	0.16	.271(a)	0.07	0.18	0.20	.203(a)	0.08	0.05	0.18
表情攻	.227(a)	0.06	0.22	0.04	.074(a)	0.04	0.05	0.04	.070(a)	0.03	0.02	0.06
背後攻	.320(a)	0.16	0.28	0.05	.264(a)	0.23	0.07	0.10	.304(a)	0.23	0.07	0.17
断絶攻	.208(a)	0.20	0.07	0.02	.239(a)	0.24	0.03	0.01	.209(a)	0.17	0.07	0.08
直主	.188(a)	0.08	0.17	0.02	.194(a)	0.14	0.10	0.11	.200(a)	0.17	0.00	0.11
間主	.168(a)	0.11	0.09	0.09	.256(a)	0.17	0.00	0.18	.331(a)	0.24	0.09	0.20
先生	.289(a)	0.19	0.20	0.04	.281(a)	0.16	0.23	0.07	.183(a)	0.18		0.06
関係抑	.070(a)	0.03	0.05	0.04	.094(a)	0.03	0.02	0.09	.090(a)	0.01	0.02	0.09
騒ぎ抑	.025(a)	0.01	0.01	0.02	.132(a)	0.10	0.06	0.07	.168(a)	0.14	0.05	0.09
非故意抑	.149(a)	0.14	0.03	0.05	.186(a)	0.15	0.06	0.11	.130(a)	0.11	0.01	0.07
重要度	.301(a)	0.29	0.07	0.03	.304(a)	0.30	0.02	0.04	.293(a)	0.28	0.02	0.07

Table40 から、以下のことが見てとれる。

国・性・発達の要因別で全体的に見ると、持物の損害場面においては、国の要因は発達段階に関係なく、いずれの発達段階でも最も影響を与えている。発達と性による影響が少ない。

方略別でみると、直接的攻撃においては、性の要因が最も影響を与えており、続いては中学生～大学生の発達が影響を与えている。

表情攻撃においては、小学生～中学生の発達が最も影響を与えている。

背後の攻撃と直接的主張においては、国、性、発達がいずれも大きく影響を与えている。
 断絶的攻撃においては、国の要因が最も影響を与えている。
 間接的主張においては、国と性の要因が最も影響を与えている。
 先生頼りにおいては、国と発達の要因が最も影響を与えている。
 関係重視抑制においては、国、性、発達の影響は少ない。
 騒ぎ回避抑制においては、国の要因が最も影響を与えている。
 非故意性抑制においては、国の要因が最も影響を与えており、続いては性の要因が影響
 を与えている。
 重要度においては、国の要因が最も影響を与えており、重相関係数（R）がやや高く、
 重回帰式の当てはまりがややよい。

（２）級友との意見対立場面における国、発達段階、性の三要因の影響

級友との意見対立場面における重回帰分析の結果は Table41 に示したとおりである
 （標準化係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している）。

Table41 級友との意見対立場面における社会的問題解決方略への国、発達段階、性の三要因の影響

	小～中			中～高			高～大					
	R	標準化係数			R	標準化係数			R	標準化係数		
		国	発達	性		国	発達	性		国	発達	性
直攻	.282(a)	0.21	0.02	0.18	.331(a)	0.23	0.11	0.20	.317(a)	0.21	0.18	0.14
表情攻	.033(a)	0.02	0.01	0.02	.036(a)	0.00	0.01	0.03	.083(a)	0.07	0.03	0.05
背後攻	.071(a)	0.06	0.03	0.02	.167(a)	0.15	0.03	0.06	.152(a)	0.09	0.06	0.10
断絶攻	.065(a)	0.01	0.05	0.04	.098(a)	0.02	0.09	0.04	.037(a)	0.03	0.03	0.00
直主	.165(a)	0.11	0.09	0.08	.192(a)	0.19	0.02	0.06	.226(a)	0.20	0.09	0.02
間主	.134(a)	0.10	0.07	0.05	.181(a)	0.06	0.12	0.12	.136(a)	0.02	0.03	0.13
ジャン	.058(a)	0.05	0.00	0.03	.099(a)	0.08	0.04	0.03	.153(a)	0.08	0.13	0.03
関係抑	.204(a)	0.20	0.01	0.02	.207(a)	0.19	0.02	0.07	.247(a)	0.22	0.06	0.09
騒ぎ抑	.017(a)	0.01	0.01	0.01	.067(a)	0.07	0.02	0.01	.121(a)	0.08	0.06	0.08
重要度	.350(a)	0.35	0.02	0.07	.420(a)	0.42	0.05	0.07	.395(a)	0.39	0.01	0.08

Table41 から、以下のことが見てとれる。

国・性・発達の要因別で全体的に見ると、国の要因が最も影響を与えている。発達と性の
 要因は、発達に伴って大きくなるものの、影響が少ない。

方略別でみると、直接的攻撃においては、国、性、発達がいずれも大きく影響を与えて
 いる。

表情攻撃、断絶的攻撃と騒ぎ回避抑制においては、国、性、発達のいずれの要因も影響
 が少ない。

背後の攻撃においては、国と性の要因が影響を与えている。

直接的主張、関係重視抑制、重要度においては、国の要因が大きく影響を与えている。

間接的主張においては、国、発達と性のいずれの要因も影響を与えている。
 ジャンケンにおいては、高校生～大学生の発達の要因が影響を与えている。

(3) 権利の侵害場面における国、発達段階、性の三要因の影響

権利の侵害場面における重回帰分析の結果は Table42 に示したとおりである（標準化係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している）。

Table42 から、以下のことが見てとれる。

国・性・発達の要因別で全体的に見ると、国の要因は発達段階に関係なく、いずれの発達段階でも最も影響を与えている。発達の要因は小学生～中学生にかけて最も影響を与えており、性の要因は小学生～中学生にかけて影響が少なく、中学生～高校生、高校生～大学生にかけて影響が大きくなっている。

方略別でみると、直接的攻撃と背後的攻撃においては、国、性、発達がいずれも大きく影響を与えている。

表情攻撃においては、小学生～中学生の発達と性の要因が最も影響を与えている。

断絶的攻撃、直接的主張、間接的主張、先生頼り、ジャンケンにおいては、国と発達の要因が最も影響を与えている。

関係重視抑制と自己責任抑制においては、国と性の要因が影響を与えている。

騒ぎ回避抑制と重要度においては、国の要因が最も影響を与えている。

Table42 権利の侵害場面における社会的問題解決方略への国、発達段階、性の三要因の影響

	R	小～中			R	中～高			R	高～大		
		標準化係数				標準化係数				標準化係数		
		国	発達	性		国	発達	性		国	発達	性
直攻	.242(a)	0.13	0.09	0.20	.261(a)	0.11	0.11	0.22	.254(a)	0.01	0.13	0.22
表情攻	.173(a)	0.01	0.14	0.09	.146(a)	0.02	0.09	0.11	.159(a)	0.08	0.09	0.10
背後攻	.294(a)	0.13	0.25	0.10	.261(a)	0.19	0.07	0.15	.260(a)	0.17	0.01	0.19
断絶攻	.205(a)	0.19	0.10	0.02	.237(a)	0.23	0.07	0.00	.197(a)	0.18	0.06	0.04
直主	.229(a)	0.15	0.19	0.02	.161(a)	0.15	0.06	0.02	.142(a)	0.09	0.10	0.00
間主	.207(a)	0.17	0.13	0.04	.163(a)	0.15	0.07	0.03	.114(a)	0.05	0.09	0.05
先生	.291(a)	0.21	0.19	0.03	.094(a)	0.02	0.09	0.01	.037(a)	0.04		0.00
ジャン	.064(a)	0.04	0.02	0.04	.178(a)	0.10	0.15	0.00	.131(a)	0.13	0.01	0.03
関係抑	.111(a)	0.07	0.06	0.07	.166(a)	0.11	0.03	0.13	.119(a)	0.03	0.03	0.11
騒ぎ抑	.169(a)	0.16	0.05	0.03	.201(a)	0.19	0.02	0.07	.173(a)	0.15	0.04	0.09
自己責抑	.122(a)	0.10	0.03	0.08	.175(a)	0.10	0.00	0.15	.129(a)	0.05	0.05	0.11
重要度	.148(a)	0.12	0.08	0.05	.164(a)	0.16	0.02	0.01	.169(a)	0.14	0.08	0.03

(4) 名誉の侵害場面における国、発達段階、性の三要因の影響

名誉の侵害場面における重回帰分析の結果は Table43 に示したとおりである（標準化係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している）。

Table43 から、以下のことが見てとれる。

国・性・発達の要因別で全体的に見ると、国の要因は発達段階に関係なく、いずれの発達段階でも最も影響を与えている。発達の要因は小学生～中学生、中学生～高校生にかけて最も影響を与えており、性の要因は小学生～中学生にかけて影響が少なく、中学生～高校生、高校生～大学生にかけて影響が大きくなっている。

方略別でみると、直接的攻撃、背後的攻撃、先生頼り、重要度においては、国、発達、性の要因が共に影響を与えている。

表情攻撃においては、小学生～中学生の発達が影響を与えている。

断絶的攻撃、直接的主張、間接的主張、関係重視抑制においては、国と発達の要因が最も影響を与えている。

騒ぎ回避抑制と無意義抑制においては、発達の要因が最も影響を与えている。

Table43 名誉の侵害場面における社会的問題解決方略への国、発達段階、性の三要因の影響

	R	小～中			R	中～高			R	高～大		
		標準化係数				標準化係数				標準化係数		
		国	発達	性		国	発達	性		国	発達	性
直攻	.207(a)	0.07	0.01	0.20	.290(a)	0.04	0.24	0.16	.188(a)	0.10	0.06	0.15
表情攻	.187(a)	0.01	0.16	0.09	.105(a)	0.05	0.05	0.08	.103(a)	0.06	0.06	0.05
背後攻	.272(a)	0.11	0.22	0.11	.217(a)	0.13	0.00	0.16	.203(a)	0.13	0.01	0.15
断絶攻	.380(a)	0.33	0.20	0.07	.370(a)	0.35	0.07	0.08	.341(a)	0.31	0.02	0.12
直主	.165(a)	0.14	0.06	0.06	.368(a)	0.29	0.22	0.04	.280(a)	0.28	0.02	0.03
間主	.184(a)	0.09	0.15	0.04	.186(a)	0.18	0.00	0.07	.223(a)	0.20	0.08	0.08
先生	.292(a)	0.13	0.24	0.08	.281(a)	0.05	0.25	0.12	.075(a)	0.05		0.05
関係抑	.077(a)	0.04	0.04	0.05	.206(a)	0.16	0.12	0.06	.255(a)	0.21	0.12	0.07
騒ぎ抑	.071(a)	0.04	0.06	0.03	.100(a)	0.00	0.09	0.05	.155(a)	0.03	0.14	0.07
無意義抑	.152(a)	0.09	0.12	0.03	.149(a)	0.06	0.13	0.07	.073(a)	0.01	0.02	0.07
重要度	.197(a)	0.13	0.14	0.07	.155(a)	0.06	0.06	0.13	.187(a)	0.10	0.04	0.15

(5) 役割の怠惰場面における国、発達段階、性の三要因の影響

役割の怠惰場面における重回帰分析の結果は Table44 に示したとおりである（標準化係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している）。

Table44 から、以下のことが見てとれる。

国・性・発達の要因別で全体的に見ると、国、性、発達のいずれの要因も大きく影響を与えている。

方略別でみると、直接的攻撃、表情攻撃、背後的攻撃、間接的主張においては、国、性、発達のいずれの要因も影響を与えている。

断絶的攻撃と騒ぎ回避抑制においては、国の要因が最も影響を与えている。

直接的主張と先生頼りにおいては、発達と性の要因が影響を与えている。

関係重視抑制においては、国、性、発達による影響は少ない。

重要度においては、国と発達の要因が影響を与えている。

Table44 役割の怠惰場面における社会的問題解決方略への国、発達段階、性の三要因の影響

	小～中			中～高			高～大					
	R	標準化係数			R	標準化係数			R	標準化係数		
		国	発達	性		国	発達	性		国	発達	性
直攻	.179(a)	0.06	0.03	0.17	.310(a)	0.06	0.19	0.24	.278(a)	0.12	0.11	0.21
表情攻	.154(a)	0.06	0.12	0.07	.170(a)	0.12	0.08	0.09	.184(a)	0.14	0.02	0.11
背後攻	.230(a)	0.17	0.14	0.09	.251(a)	0.20	0.03	0.14	.250(a)	0.17	0.06	0.16
断絶攻	.183(a)	0.18	0.00	0.02	.226(a)	0.23	0.02	0.02	.198(a)	0.18	0.07	0.04
直主	.159(a)	0.05	0.11	0.10	.149(a)	0.06	0.08	0.12	.127(a)	0.04	0.06	0.10
間主	.210(a)	0.20	0.04	0.06	.143(a)	0.12	0.01	0.07	.266(a)	0.10	0.22	0.11
先生	.239(a)	0.02	0.22	0.09	.244(a)	0.07	0.21	0.10	.082(a)	0.03		0.08
関係抑	.069(a)	0.01	0.06	0.04	.128(a)	0.04	0.08	0.09	.099(a)	0.01	0.08	0.05
騒ぎ抑	.089(a)	0.07	0.06	0.00	.107(a)	0.07	0.08	0.05	.126(a)	0.10	0.08	0.03
重要度	.266(a)	0.26	0.03	0.03	.267(a)	0.25	0.10	0.00	.232(a)	0.20	0.08	0.07

(6) 先生との意見対立場面における国、発達段階、性の三要因の影響

先生との意見対立場面における重回帰分析の結果は Table45 に示したとおりである（標準化係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している）。

Table45 先生との意見対立場面における社会的問題解決方略への国、発達段階、性の三要因の影響

	小～中			中～高				
	R	標準化係数			R	標準化係数		
		国	発達	性		国	発達	性
直攻	.403(a)	0.39	0.11	0.07	.419(a)	0.42	0.01	0.09
表情攻	.161(a)	0.06	0.15	0.03	.090(a)	0.05	0.06	0.05
背後攻	.227(a)	0.10	0.20	0.05	.173(a)	0.14	0.06	0.08
断絶攻	.289(a)	0.26	0.14	0.00	.331(a)	0.33	0.02	0.01
直主	.216(a)	0.10	0.18	0.07	.187(a)	0.15	0.08	0.06
間主	.117(a)	0.06	0.10	0.02	.156(a)	0.01	0.14	0.06
間主2	.312(a)	0.24	0.18	0.04	.367(a)	0.37	0.03	0.05
関係抑	.170(a)	0.08	0.14	0.05	.152(a)	0.12	0.09	0.02
騒ぎ抑	.181(a)	0.14	0.10	0.07	.192(a)	0.18	0.05	0.02
重要度	.173(a)	0.02	0.17	0.02	.123(a)	0.09	0.07	0.05

Table45 から、以下のことが見てとれる。

国・性・発達の要因別で全体的に見ると、国と小学生～中学生にかけての発達が最も影響を与えており、性の要因の影響は少ない。

方略別でみると、直接的攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃、直接的主張、他人を推薦する間接的主張、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制においては、国と発達の要因が最も影響を与えている。

表情攻撃、間接的主張、重要度においては、発達の要因が最も影響を与えている。

2-6 重要度と社会的問題解決方略との相関

重要度と社会的問題解決方略との相関は Table46 に示したとおりである(相関係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している)。

Table46 葛藤の重要度と社会的問題解決方略との相関係数

		直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	ジャン ケン	間主 2	関係 抑	騒ぎ 抑	非故 意抑	自己 責抑	無意 義抑
全体		0.14	0.16	0.20	0.24	0.13	0.14	0.14	-0.01	0.07	-0.12	-0.08	-0.21	-0.18	-0.15
国別	中国	0.06	0.06	0.09	0.15	0.10	0.10	0.07	-0.03	0.02	-0.11	-0.10	-0.16	-0.09	-0.15
	日本	0.21	0.23	0.27	0.31	0.16	0.17	0.16	0.02	0.13	-0.13	-0.06	-0.21	-0.27	-0.14
男女別	男	0.18	0.15	0.17	0.22	0.15	0.12	0.14	-0.02	0.04	-0.11	-0.08	-0.25	-0.17	-0.17
	女	0.12	0.16	0.22	0.27	0.11	0.16	0.14	0.00	0.09	-0.13	-0.09	-0.18	-0.20	-0.14
発達段階別	小	0.19	0.15	0.17	0.21	0.17	0.16	0.22	0.02	0.08	-0.10	-0.07	-0.07	-0.11	-0.11
	中	0.13	0.12	0.18	0.25	0.14	0.13	0.12	0.00	0.08	-0.14	-0.10	-0.24	-0.19	-0.09
	高	0.15	0.16	0.20	0.26	0.07	0.12	0.09	-0.01	-0.03	-0.12	-0.09	-0.27	-0.19	-0.21
	大	0.08	0.17	0.22	0.25	0.13	0.15		-0.05		-0.12	-0.08	-0.31	-0.22	-0.22
	持物	0.19	0.15	0.20	0.18	0.23	0.19	0.15			-0.10	-0.09	-0.21		
	意見1	0.16	0.12	0.04	0.12	0.30	0.13		-0.06		-0.23	-0.07			
場面別	権利	0.20	0.09	0.21	0.25	0.20	0.20	0.09	0.02		-0.13	-0.13		-0.18	
	名誉	0.13	0.14	0.21	0.25	0.13	0.09	0.10			-0.05	-0.04			-0.15
	役割	0.18	0.12	0.18	0.20	0.14	0.11	0.17			-0.15	-0.16			
	意見2	0.17	0.15	0.17	0.17	0.26	0.12			0.07	-0.15	-0.13			

注：ジャンケン、中国・男・高の間主2以外、すべての相関係数は1%水準で有意である(両側)

Table46 から、以下のことが見てとれる。

①全体的に見ると、重要度は攻撃的方略(直接的攻撃、間接的攻撃)、主張的方略(直接的主張、間接的主張)、先生頼りと弱い正の相関を示し、抑制的方略と弱い負の相関を示している。ジャンケン、他人を推薦する間接的主張、騒ぎ回避抑制との相関が低い。重要と判断するほど、攻撃性、主張性が高く、自己抑制が低くなる。

②国別で見ると、中国における重要度と社会的問題解決方略との相関が日本より弱い。

③男女別で見ると、男児と女子における重要度と社会的問題解決方略との相関の違いが少ない。

④発達段階別で見ると、小学生における重要度と抑制的方略との相関が弱い。

⑤場面別で見ると、名誉の侵害場面における重要度と関係重視抑制、騒ぎ回避抑制との

相関が弱い。

⑥各方略で見ると、重要度と間接的攻撃（背後的攻撃、断絶的攻撃）、非故意性抑制、自己責任抑制、無意義抑制との相関が強く、ジャンケン、他人を推薦する間接的主張、騒ぎ回避抑制との相関が弱い。

2-7 各場面における最もよい方略の選択

場面によって方略設定が多少異なっており、また大学生には「先生頼り」方略を設けなかったため、各場面で例示した方略の中から最もよいと選択された方略の占める割合には、全部の場面を込みに集計するのは不適切と考え、以下は場面ごと発達段階ごとで集計した。

(1) 持物の損害場面における最もよい方略の選択

持物の損害場面における最もよい方略の選択の結果は Table47 に示したとおりである(2割以上を占めた方略はゴシック体で示している)。Fig. 15 は中国と日本の選択の結果をグラフに示している。

Table47 持物の損害場面における最もよい方略の占める割合

持物	直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	関係 抑	騒ぎ 抑	非故 意抑	不明	
小・全体	6.5	3.8	4.6	4.6	6.9	3.7	27.4	8.2	3.6	29.9	0.8	
国別	中国	3.9	3.2	6.0	3.9	6.4	2.5	19.1	8.0	3.9	42.8	0.2
	日本	9.0	4.4	3.3	5.2	7.4	4.8	35.4	8.3	3.3	17.7	1.3
男女 別	男	7.9	4.6	5.2	5.8	5.6	3.1	28.1	7.5	3.8	28.3	0.0
	女	4.7	3.0	4.0	3.2	8.6	4.4	27.2	9.1	3.5	32.3	0.0
中・全体	4.5	4.0	4.4	1.2	16.6	3.7	20.7	9.3	2.0	32.6	0.9	
国別	中国	2.2	2.6	6.2	0.7	17.0	4.2	15.0	5.9	3.1	42.1	0.9
	日本	7.4	5.8	2.1	1.8	16.2	3.0	27.9	13.6	0.7	20.6	0.9
男女 別	男	7.0	5.4	6.0	1.4	12.0	2.5	23.8	7.7	2.3	30.6	1.2
	女	2.1	2.8	2.8	1.1	21.8	4.9	17.8	11.2	1.9	33.1	0.6
高・全体	3.1	5.4	2.1	1.5	22.4	7.7	10.1	8.5	2.7	35.8	0.8	
国別	中国	1.9	6.7	2.6	1.7	17.0	9.1	4.0	9.3	4.6	41.2	1.9
	日本	4.4	3.8	1.4	1.2	28.2	5.8	17.0	7.4	0.4	28.6	1.8
男女 別	男	4.5	5.1	2.5	2.2	23.6	5.1	10.7	10.5	2.7	32.6	0.5
	女	1.6	5.7	1.6	0.8	21.2	10.2	9.6	6.5	2.6	39.1	1.2
大・全体	3.9	5.4	2.7	1.4	27.2	11.0		11.7	3.5	31.8	1.3	
国別	中国	3.0	6.6	3.6	1.6	17.9	12.7		10.2	7.0	35.4	2.0
	日本	4.8	4.3	1.9	1.2	36.1	9.4		13.2	0.2	28.4	0.7
男女 別	男	5.7	6.2	2.9	1.5	27.5	7.4		11.4	3.1	32.2	2.1
	女	2.1	4.9	2.4	1.3	26.4	15.0		12.3	3.4	32.0	0.4

注： 表中の数字はパーセンテージを示している。

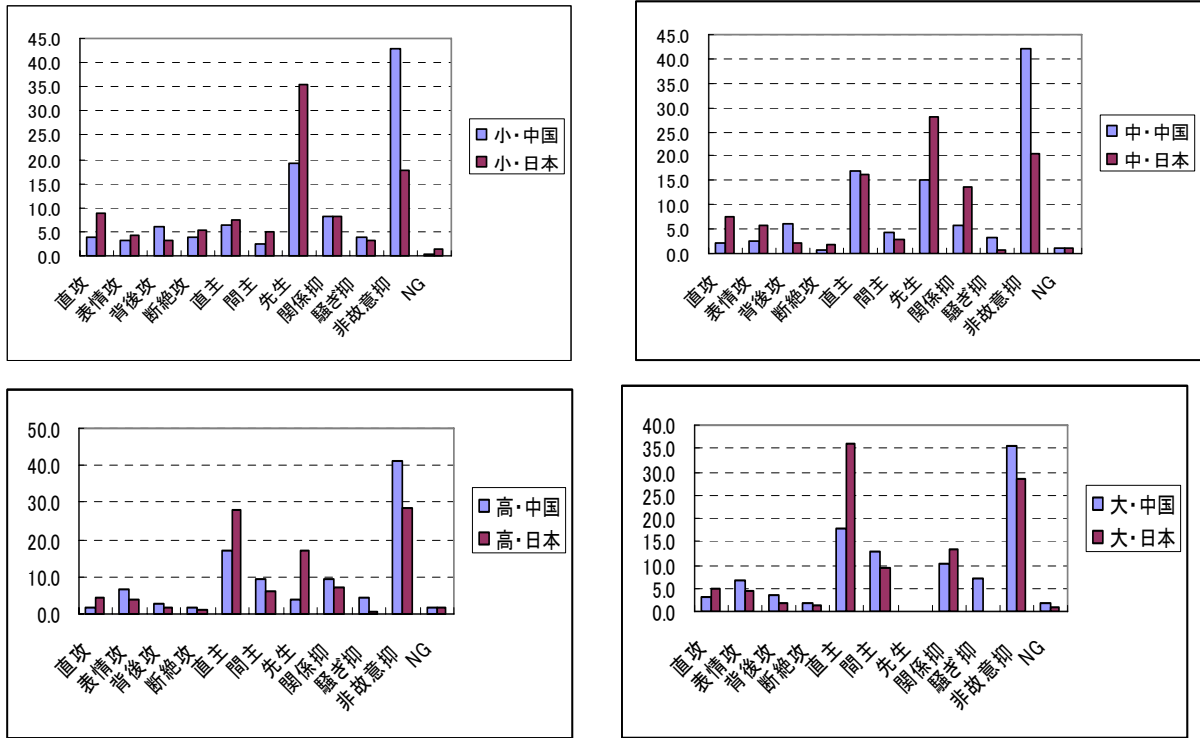


Fig. 15 持物の損害場面における国別の最もよい方略の占める割合

Table47 と Fig. 15 に示されたように、発達段階で比較してみると、全体的には、小学生では非故意性抑制が最も多く、先生頼りも非故意性抑制と近い値で多く選択されている。中学生では非故意性抑制がさらに多く選択され、先生頼りの選択が少なくなった。高校生では非故意性抑制が最も多く選択され、先生頼りの選択がさらに少なくなり、直接的主張が2位に多く選択された。大学生では非故意性抑制の選択が高校生より減ったが、依然最も高くなっており、直接的主張がそれに続いて多く選択された。持物の損害に対する最もよい方略、いわゆる理想とする方略の選択において、いずれの発達段階でも非故意性抑制が最も多いこと、発達に伴い、権威者に頼る方略から自立性の高い直接的主張へ変化する傾向が見られる。

国別で比較してみると、中国では各発達段階を通して、非故意性抑制が最も多く選択されている。日本では発達に伴い徐々に変化している。小学生では先生頼りが最も多く選択されている。中学生では先生頼りが依然最も多く選択されているが、占める割合が低くなり、非故意性抑制が先生頼りに続いて多く選択されている。高校生では先生頼りの占める割合がさらに低くなり、非故意性抑制と直接的主張が近い値で最も多く選択されている。大学生では直接的主張がさらに高くなり、最も多く選択されている。中国では、相手の非故意性（悪意のなさ）が最も重要視されていることが見られる。日本では発達に伴い、権威者に頼る方略から自立性の高い直接的主張へ変化する傾向、相手の非故意性への配慮が高くなる傾向が見られる。Fig. 13 の中国と日本の実際を取る方略と比較してみると、中国では、理想としても、実際にしても非故意性抑制が最も高いが、日本では実際を取る方略においては、間接的主張が最も多く、続いては表情攻撃、背後的攻撃、非故意性抑制が同じ値で用いられている。理想とする方略は直接的主張が好まれるが、実際を取る方略は相

手の気持ちを配慮し、間接的主張が多く取られている。

男女別で比較してみると、小学生では男女共に非故意性抑制と先生頼りが近い値で最も多く選択されている。中学生では男女共に非故意性抑制が最も多く選択されているが、2位を占める男子の先生頼りに対し、女子の先生頼り大幅に減り、直接的主張が大幅に伸び、2位を占めた。高校生・大学生では男女間再び同様の傾向を示し、非故意性抑制の選択が最も高く、続いては直接的主張である。女子は一步リードしながら、男女共に権威者に頼る主張から自立性の高い直接的主張への変化の傾向が見られる。Table14の男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、男子では、理想としても、実際にしても非故意性抑制が最も高いが、女子では、実際を取る方略においては、間接的主張も非故意性抑制に近い値で高くなっている。理想とする方略は直接的主張が好まれるが、実際を取る方略は相手の気持ちを配慮し、間接的主張が多く取られている。

(2) 級友との意見対立場面における最もよい方略の選択

級友との意見対立場面における最もよい方略の選択の結果はTable48に示したとおりである(2割以上を占めた方略はゴシック体で示している)。Fig.16は中国と日本の選択の結果をグラフに示している。

Table48 級友との意見対立場面における最もよい方略の占める割合

意見1	直攻	表情攻	背後攻	断絶攻	直主	間主	ジャン	関係抑	騒ぎ抑	不明
小・全体	4.5	4.9	4.5	4.3	31.9	14.0	11.3	15.3	8.8	0.4
国別										
中国	4.6	7.4	4.4	2.1	35.6	12.4	8.5	11.3	13.8	0.0
日本	4.4	2.6	4.6	6.3	28.4	15.5	14.0	19.2	4.1	0.9
男女別										
男	5.4	5.8	4.3	5.2	25.0	13.6	14.3	15.9	10.1	0.4
女	3.4	3.7	4.7	3.2	40.2	14.5	7.8	14.7	7.4	0.5
中・全体	2.0	2.9	4.6	2.0	48.6	12.3	7.4	14.7	5.0	0.5
国別										
中国	1.8	3.5	3.1	0.7	59.3	11.2	4.6	9.0	6.6	0.2
日本	2.3	2.1	6.5	3.7	35.1	13.6	10.9	21.9	3.0	0.9
男女別										
男	3.3	4.8	6.4	2.5	41.8	12.8	9.3	13.0	5.2	0.8
女	0.8	1.1	3.0	1.7	55.1	11.0	5.7	16.7	4.7	0.2
高・全体	1.2	1.9	1.3	1.0	44.8	23.7	8.6	14.9	2.0	0.6
国別										
中国	1.4	1.6	1.2	0.5	57.1	19.8	5.6	8.9	3.3	0.5
日本	1.0	2.2	1.4	1.6	30.8	28.2	12.0	21.8	0.4	0.6
男女別										
男	2.0	2.4	1.1	0.5	43.8	21.6	8.7	16.7	2.7	0.5
女	0.4	1.4	1.6	1.6	46.2	25.9	8.6	12.8	1.2	0.4
大・全体	1.4	1.9	1.8	1.2	35.7	23.4	10.3	19.3	4.0	0.9
国別										
中国	2.1	3.0	1.6	2.0	38.5	28.4	7.9	9.5	6.4	0.5
日本	0.7	0.9	2.1	0.5	33.0	18.6	12.6	28.7	1.7	1.2
男女別										
男	1.7	2.6	2.6	1.5	34.9	21.5	11.2	20.0	2.8	1.2
女	1.1	1.1	1.1	0.7	36.4	25.4	9.3	19.1	5.0	0.6

注：表中の数字はパーセンテージを示している。

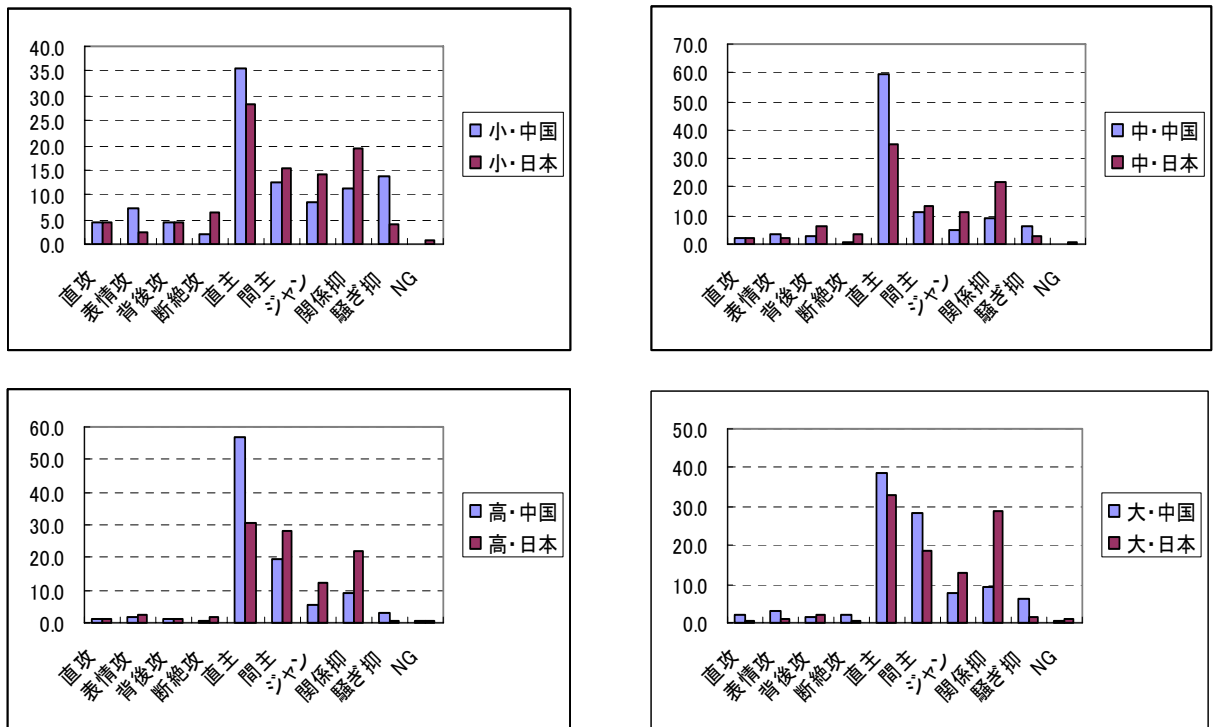


Fig. 16 級友との意見対立場面における国別の最もよい方略の占める割合

Table48 と Fig. 16 に示されたように、発達段階で比較してみると、各発達段階共に直接的主張が最も多く選択されている。高校生・大学生では間接的主張も直接的主張に続いて多く選択されている。

国別で比較してみると、中国では、各発達段階を通して直接的主張が最も多く選択されており、大学生においては、間接的主張も直接的主張に続いて多く選択されている。日本では、各発達段階を通して直接的主張が最も多く選択されているものの、関係重視抑制も各発達段階を通して、直接的主張に続いて多く選択されている（高校生においては、間接的主張が2位、関係重視抑制が3位）。Fig. 13 の中国と日本の実際を取る方略と比較してみると、中国では、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高くなっているが、日本では実際を取る方略においては、直接的主張も最も高いものの、関係重視抑制とは差が少なく、主張と抑制が拮抗している様子が窺える。級友との意見対立場面においては、日本も理想と実際の間には差が少ない。

男女別で比較してみると、男女共に同様の傾向を示している。小中学生では直接的主張が最も多く選択されている。高校生・大学生では直接的主張が最も多く選択されており、間接的主張も直接的主張に続いて多く選択されている。Table14 の男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高くなっており、理想と実際の間には差が少ない。

(3) 権利の侵害場面における最もよい方略の選択

権利の侵害場面における最もよい方略の選択の結果は Table49 に示したとおりである（2割以上を占めた方略はゴシック体で示している）。Fig. 17 は中国と日本の選択の結果をグラフに示している。

Table49 と Fig. 17 に示されたように、発達段階で比較してみると、全体的には、小学生では自己責任抑制、中学生以降では直接的主張が最も多く選択されている。

国別で比較してみると、日中共に、小学生では自己責任抑制、中学生・高校生では直接的主張が最も多く選択されている。大学生において、中国では直接的主張が最も多く選択され、間接的主張が直接的主張に続いて多く選択されている。日本では直接的主張が最も多く選択され、自己責任抑制が直接的主張に続いて多く選択されている。Fig. 13 の中国と日本の実際を取る方略と比較してみると、全体的には、日中共に、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高く、理想と実際の間には差が少ない。

男女別で比較してみると、男女共に、小学生では自己責任抑制、中学生以降では直接的主張が最も多く選択されている。ただし、中学生において、女子は自己責任抑制も直接的主張に続いて多く選択されている。Table14 の男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、全体的には、男女共に、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高く、理想と実際の間には差が少ない。

Table49 権利の侵害場面における最もよい方略の占める割合

権利	直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	ジャ ン	関係 抑	騒ぎ 抑	自己 責抑
小・全体	6.5	3.6	5.2	3.4	12.8	5.4	15.0	12.7	7.3	5.6	22.4
国別											
中国	4.6	3.7	6.4	3.0	11.0	3.9	17.0	7.1	9.9	9.4	23.9
日本	8.4	3.5	4.0	3.8	14.6	6.8	13.0	18.1	4.9	2.0	21.0
男女別											
男	7.9	5.2	5.8	3.5	12.9	5.2	16.2	11.6	5.2	5.4	21.0
女	4.7	1.7	4.4	3.2	12.8	5.7	13.5	14.0	9.9	5.9	24.1
中・全体	5.1	4.6	3.9	1.7	29.7	6.8	14.9	5.7	6.4	3.5	17.6
国別											
中国	2.4	3.5	5.0	1.7	27.4	4.8	19.1	5.0	9.4	5.9	16.0
日本	8.6	6.0	2.6	1.7	32.6	9.5	9.5	6.7	2.6	0.5	19.8
男女別											
男	6.3	5.5	5.9	1.7	26.3	7.8	16.6	6.7	5.7	4.0	13.5
女	3.9	3.9	2.2	1.7	32.9	5.8	13.1	4.9	6.2	3.2	22.2
高・全体	5.1	4.1	2.6	1.2	33.0	12.4	9.3	4.1	7.0	5.3	16.0
国別											
中国	3.7	5.3	3.3	1.4	30.6	11.2	7.6	4.7	8.3	9.0	14.9
日本	6.7	2.7	1.8	1.0	35.8	13.7	11.2	3.3	5.5	1.0	17.2
男女別											
男	7.5	3.9	3.1	1.1	34.1	11.9	9.9	3.7	5.7	6.1	13.0
女	2.6	4.4	2.2	1.4	32.1	12.5	8.7	4.4	8.3	4.2	19.2
大・全体	4.7	4.1	2.2	1.5	43.5	15.8		5.3	6.0	3.6	13.2
国別											
中国	6.2	3.8	2.9	2.2	42.9	20.0		4.2	7.3	6.4	4.2
日本	3.3	4.3	1.6	0.9	44.1	11.9		6.4	4.8	1.0	21.7
男女別											
男	6.6	4.4	3.1	1.6	42.3	15.9		4.4	4.0	4.7	12.9
女	2.8	4.0	1.1	1.5	45.7	14.9		6.2	7.7	2.6	13.4

注： 表中の数字はパーセンテージを示している。

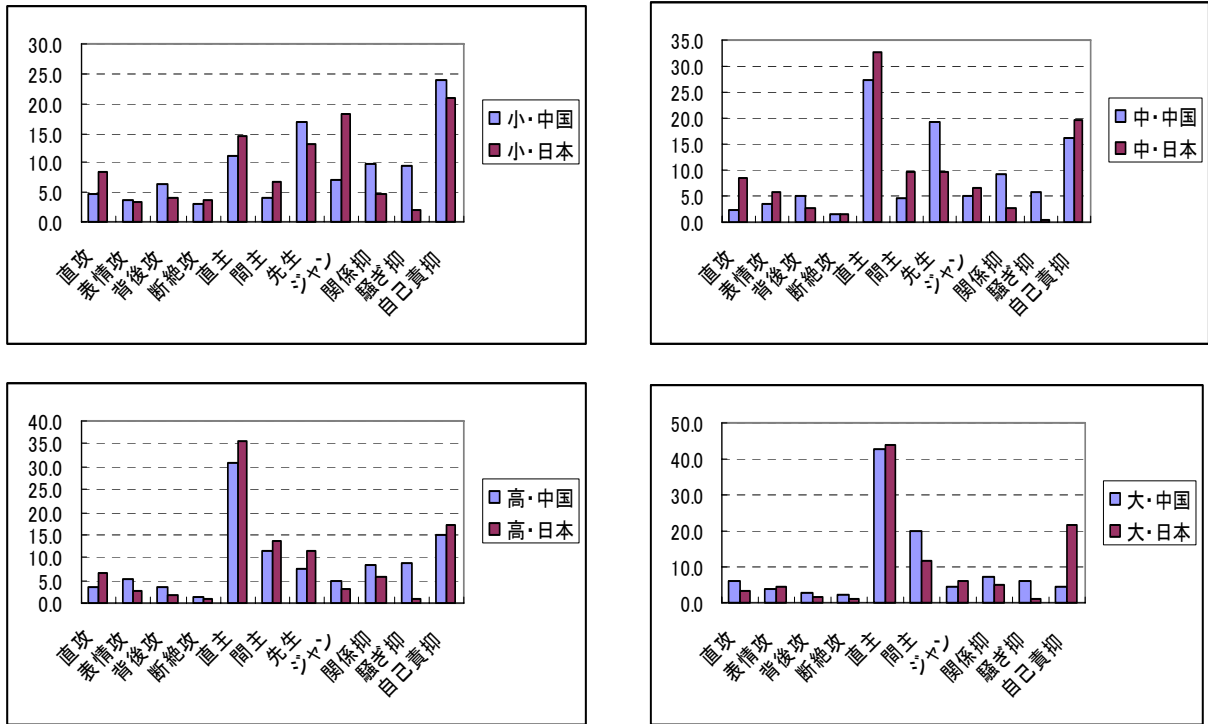


Fig. 17 権利の侵害場面における国別の最もよい方略の占める割合

(4) 名誉の侵害場面における最もよい方略の選択

名誉の侵害場面における最もよい方略の選択の結果は Table50 に示したとおりである(2割以上を占めた方略はゴシック体で示している)。Fig. 18 は中国と日本の選択の結果をグラフに示している。

Table50 と Fig. 18 から、以下のことが見てとれる。

① 発達段階で比較してみると、発達段階によって、侵害を受けた人の関係によって、最もよい方略の選択が大きく異なっている。

小学生では、自分自身が受けた名誉の侵害に対して、先生頼りが最も多く選択されている。親友が受けた名誉の侵害に対して、先生頼りと直接的主張が近い値で最も多く選択されている。兄弟が受けた名誉の侵害に対して、直接的攻撃が最も多く選択されている。

中学生では、自分自身、親友、兄弟が受けた名誉の侵害に対して、共に直接的主張が最も多く選択されている。ただし、兄弟が受けた名誉の侵害に対して、直接的攻撃が依然高く、直接的主張に続いて最も多く選択されている。

高校生・大学生では、自分自身、親友、兄弟が受けた名誉の侵害に対して、共に直接的主張が最も多く選択されている。自分自身、親友、兄弟の順に、直接的主張の占める割合が高くなる。自分自身が受けた名誉の侵害に対しては間接的主張と無意義抑制、親友が受けた名誉の侵害に対しては間接的主張、兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的攻撃もよく選択されている。

各発達段階ともに、自分自身よりも、親友や兄弟を大切に、親友を守る、兄弟を守るという姿勢が見られる。

Table50 名誉の侵害場面における最もよい方略の占める割合（表中の数字は%）

名誉		直攻	表情 攻	背後 攻	断絶 攻	直主	間主	先生	関係 抑	騒ぎ 抑	無意 義抑	不明	
小・全体	本人	10.3	5.9	4.6	4.6	17.0	7.2	25.8	6.7	3.0	14.4	0.4	
	親友	17.1	7.4	4.0	4.5	21.9	8.1	23.8	4.9	2.7	5.4	0.0	
	兄弟	27.8	6.0	3.2	7.7	18.9	6.0	17.8	3.5	2.6	6.0	0.3	
国別	中国	本人	6.7	5.1	6.0	4.1	17.5	8.3	18.2	7.4	3.4	23.0	0.5
		親友	9.7	11.3	4.4	5.3	29.0	8.7	16.3	5.1	4.1	6.2	0.0
		兄弟	20.9	8.3	2.8	9.9	23.4	6.9	15.4	4.1	3.4	4.8	0.0
	日本	本人	13.8	6.8	3.3	5.0	16.6	6.1	33.0	6.1	2.6	6.3	0.4
		親友	24.2	3.7	3.7	3.7	15.2	7.5	31.1	4.8	1.3	4.6	0.0
		兄弟	34.3	3.9	3.7	5.7	14.6	5.2	20.1	2.8	1.7	7.2	0.7
男女別	男	本人	11.4	6.6	4.6	5.6	14.9	6.8	26.3	6.0	1.9	15.8	0.0
		親友	19.9	7.7	3.9	5.0	19.5	7.1	23.2	5.2	2.5	6.0	0.0
		兄弟	28.7	6.2	3.9	7.6	14.5	6.4	19.0	3.9	2.3	7.0	0.4
	女	本人	8.9	5.2	4.7	3.4	19.7	7.6	25.4	7.6	4.4	13.1	0.0
		親友	13.8	6.9	4.2	3.9	24.9	9.4	24.6	4.7	3.0	4.7	0.0
		兄弟	26.5	5.9	2.5	7.8	24.3	5.6	16.4	2.9	2.9	4.9	0.2
中・全体	本人	6.1	6.5	3.3	3.9	34.9	12.9	10.9	4.3	1.0	15.7	0.4	
	親友	12.3	6.7	3.4	2.5	41.5	14.3	9.8	3.8	1.1	4.6	0.0	
	兄弟	20.8	5.7	2.7	4.4	37.7	9.5	6.7	3.4	1.9	6.6	0.5	
	中国	本人	2.6	5.1	1.8	2.0	41.9	11.9	11.5	3.1	1.5	18.1	0.4
		親友	6.4	6.0	2.9	2.4	50.7	13.7	8.8	2.7	1.3	4.9	0.0
		兄弟	16.5	4.0	2.0	3.3	48.5	10.4	8.2	1.5	1.1	4.2	0.2
日本	本人	10.6	8.3	5.1	6.2	26.1	14.1	10.2	5.8	0.5	12.7	0.5	
	親友	19.7	7.6	3.9	2.5	29.9	15.0	11.1	5.1	0.9	4.2	0.0	
	兄弟	26.3	7.9	3.5	5.8	24.0	8.3	4.8	5.8	3.0	9.7	0.9	
男女別	男	本人	9.1	9.6	2.3	3.5	32.0	10.6	13.3	3.7	1.2	14.6	0.0
		親友	12.4	7.9	3.5	2.7	39.2	11.6	13.1	3.9	1.7	3.9	0.0
		兄弟	23.6	6.0	2.7	4.6	35.2	6.6	9.7	3.1	2.5	5.2	0.8
	女	本人	3.2	3.8	4.5	4.5	37.0	15.7	8.7	5.1	0.4	17.0	0.0
		親友	12.7	5.9	3.4	2.3	42.8	16.7	6.6	3.8	0.4	5.3	0.0
		兄弟	18.9	5.7	2.5	4.0	39.2	12.3	3.6	3.6	1.5	8.5	0.2
高・全体	本人	3.3	4.6	2.5	6.5	26.1	21.7	3.0	6.2	1.2	23.9	1.0	
	親友	6.5	6.1	2.4	4.0	42.5	23.1	2.2	5.1	1.0	7.0	0.0	
	兄弟	16.8	5.5	2.0	5.9	40.3	14.0	1.2	3.4	1.0	9.3	0.6	
	中国	本人	2.1	4.0	2.8	3.5	26.6	25.7	3.0	3.0	1.6	27.5	0.2
		親友	4.7	5.3	3.7	1.9	51.1	19.6	2.5	3.5	1.8	6.0	0.0
		兄弟	18.2	4.6	2.8	3.7	51.7	11.0	1.1	1.1	0.9	4.9	0.2
日本	本人	4.6	5.2	2.2	10.0	25.6	17.0	3.0	9.8	0.8	19.8	2.0	
	親友	8.5	7.0	1.0	6.4	32.8	27.2	1.8	6.8	0.2	8.2	0.0	
	兄弟	15.2	6.6	1.0	8.4	27.4	17.4	1.4	6.0	1.2	14.4	1.0	
男女別	男	本人	3.8	4.6	3.3	7.3	24.5	21.4	3.7	6.6	1.5	23.3	0.0
		親友	7.1	7.2	3.1	4.3	38.8	23.6	2.2	5.6	1.4	6.7	0.0
		兄弟	19.2	5.8	2.9	6.0	38.2	11.6	1.4	3.4	1.8	9.4	0.2
	女	本人	2.8	4.8	1.8	5.9	28.3	22.4	2.4	5.9	0.6	25.1	0.0
		親友	5.7	4.7	1.6	3.8	47.2	22.5	2.2	4.3	0.6	7.3	0.0
		兄弟	14.3	5.1	1.0	5.7	43.0	16.5	1.0	3.1	0.2	9.2	0.8
大・全体	本人	3.8	4.8	2.7	7.4	23.1	25.7		8.3	2.7	20.5	1.0	
	親友	5.8	6.6	3.4	5.9	37.2	25.3		5.2	1.1	9.4	0.1	
	兄弟	14.2	5.3	2.0	6.0	43.8	15.2		3.6	1.5	8.0	0.4	
	中国	本人	3.6	5.7	3.0	3.6	25.2	28.6		4.3	4.1	20.8	1.1
		親友	3.2	6.4	4.8	4.1	40.4	26.5		4.7	1.4	8.2	0.2
		兄弟	11.8	5.0	2.3	3.2	52.8	14.3		2.5	1.8	5.7	0.2
日本	本人	4.1	3.9	2.4	11.1	21.0	22.9		12.1	1.4	20.2	0.9	
	親友	8.2	6.7	2.1	7.7	34.0	24.3		5.6	0.9	10.6	0.0	
	兄弟	16.4	5.6	1.7	8.7	35.2	16.1		4.6	1.2	10.1	0.3	
男女別	男	本人	4.7	5.9	3.0	7.5	21.0	23.7		8.5	3.5	21.9	0.3
		親友	6.4	7.9	4.5	7.7	32.7	22.9		5.5	1.9	10.3	0.2
		兄弟	16.0	6.2	3.1	7.2	38.6	14.8		4.5	1.0	8.1	0.5
	女	本人	3.0	3.4	2.4	7.5	25.7	28.3		8.1	1.9	19.5	0.2
		親友	5.0	5.2	2.4	4.1	42.1	27.7		4.5	0.4	8.6	0.0
		兄弟	12.3	4.5	0.7	5.0	48.8	16.3		2.2	1.9	7.9	0.4

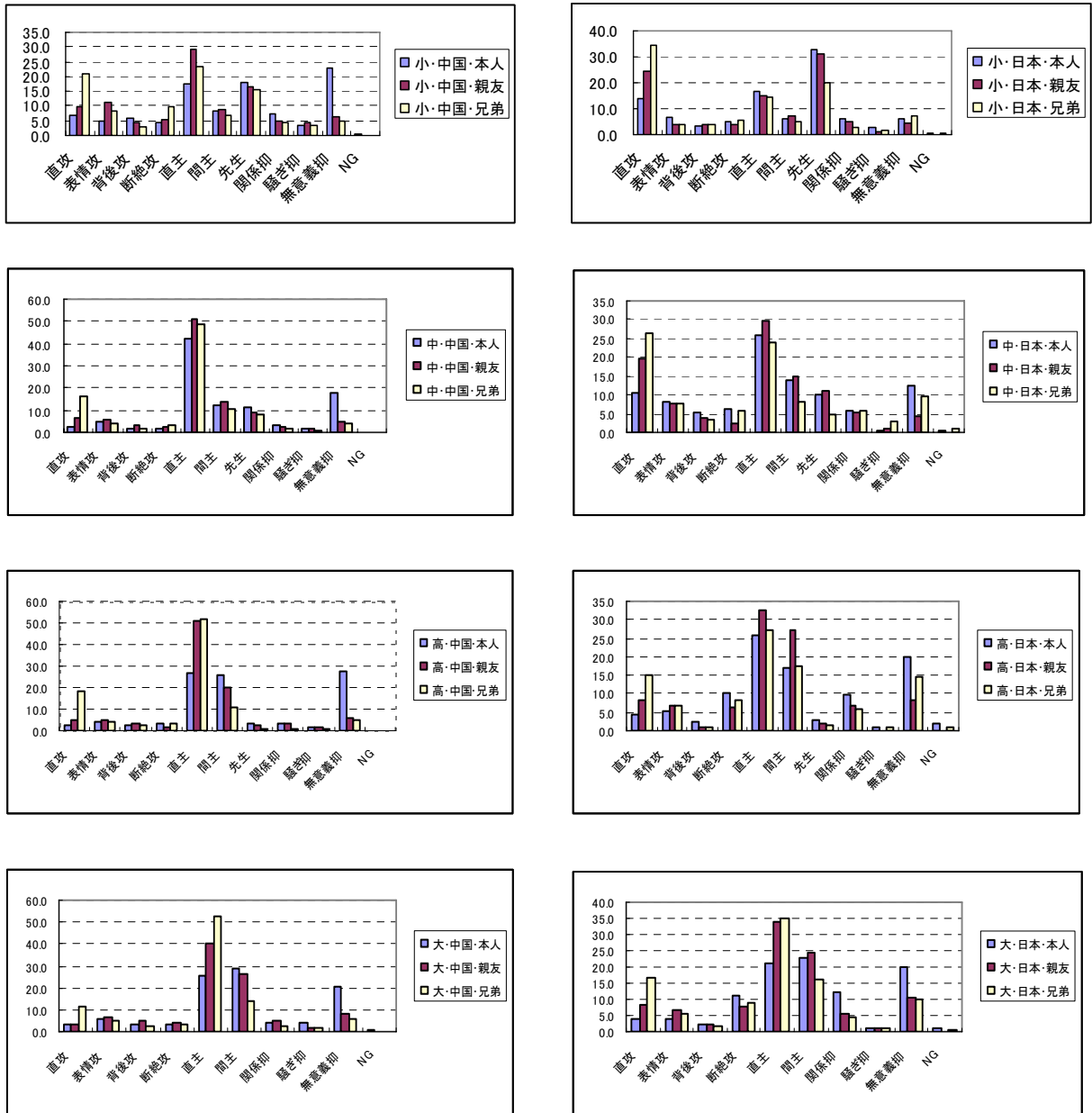


Fig. 18 名誉の侵害場面における国別の最もよい方略の占める割合

② 国別で比較してみると、発達段階によって、侵害を受けた人の関係によって、中国と日本における最もよい方略の選択が大きく異なっている。

小学生においては、中国では、自分自身が受けた名誉の侵害に対しては無意義抑制、親友が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張、兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張と直接的攻撃が、最も多く選択されている。日本では、自分自身が受けた名誉の侵害に対しては先生頼り、親友が受けた名誉の侵害に対しては先生頼りと直接的攻撃、兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的攻撃と先生頼りが、最も多く選択されている。

中学生においては、中国では、自分自身、親友、兄弟が受けた名誉の侵害に対して、共に直接的主張が最も多く選択されている。日本では、自分自身と親友が受けた名誉の侵害に対して、共に直接的主張が最も多く選択されているが、兄弟が受けた名誉の侵害に対して、直接的攻撃が最も高く、直接的主張がそれに続いて多く選択されている。

高校生においては、中国では、自分自身が受けた名誉の侵害に対しては無意義抑制、直接的主張及び間接的主張が近い値で、親友と兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張が、最も多く選択されている。日本では、自分自身と兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張、親友が受けた名誉の侵害に対しては直接的攻撃と間接的主張が、最も多く選択されている。

大学生においては、日中間に同様の傾向を示している。自分自身が受けた名誉の侵害に対しては間接的主張、直接的主張及び無意義抑制が近い値で、親友が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張、続いては間接的主張、兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張が、最も多く選択されている。

日中間は類似した傾向を示しながら、日本の小学生が中国の小学生より、徒党意識が強く、親友をかばう姿勢が強いと窺える。

自分自身が受けた名誉の侵害に対する最もよい方略の選択と、Fig. 13 の中国と日本の実際を取る方略を比較してみると、中国では、実際にとる方略は直接的主張と間接的主張が最も高くなっているが、理想とする方略は対決することが無意義で自己抑制する無意義抑制も高くなっている。日本では、実際にとる方略は、小学生は男女ともに先生頼り、中学・高校・大学生は男女ともに断絶攻撃が最も高くなっているが、理想とする方略は直接的主張が最も多く選択されている。実際を取る方略は理想とする方略より、日中共に特に日本において、名誉の侵害を強く受け止め、対決性が強い。

③ 男女別で比較してみると、発達段階によって、侵害を受けた人の関係によって、男子と女子における最もよい方略の選択が大きく異なっている。

小学生においては、男子では、自分自身と親友が受けた名誉の侵害に対しては先生頼り、兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的攻撃が、最も多く選択されている。女子では、自分自身が受けた名誉の侵害に対しては先生頼り、親友が受けた名誉の侵害に対しては先生頼りと直接的主張、兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的攻撃と直接的主張が、最も多く選択されている。

中学生においては、男女ともに、自分自身、親友、兄弟が受けた名誉の侵害に対して、いずれも直接的主張が最も多く選択されているが、男子において、兄弟が受けた名誉の侵害に対する直接的攻撃依然多く選択されている。

高校生・大学生においては、男女間に同様の傾向を示している。自分自身が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張、無意義抑制及び間接的主張が近い値で、親友が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張、続いては間接的主張、兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張が、最も多く選択されている。

男女間は類似した傾向を示しながら、小学生女子が小学生男子より、徒党意識が強く、親友をかばう姿勢が強いと窺える。

自分自身が受けた名誉の侵害に対する最もよい方略の選択と、Table 14 の男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、男子は、理想としても、実際にしても、直接的主張が最も高くなっている。女子は実際にとる方略において断絶的攻撃が最も高くなっており、実際を取る方略は理想とする方略より、名誉の侵害を強く受け止め、対決性が強いと見られる。

(5) 役割の怠惰場面における最もよい方略の選択

役割の怠惰場面における最もよい方略の選択の結果は Table51 に示したとおりである(2割以上を占めた方略はゴシック体で示している)。Fig. 19 は中国と日本の選択の結果をグラフに示している。

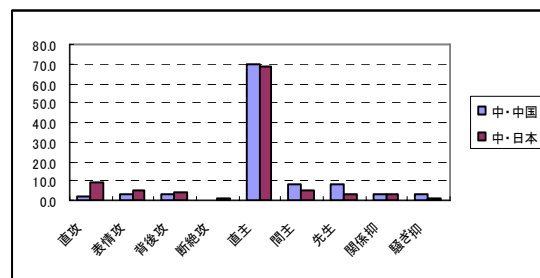
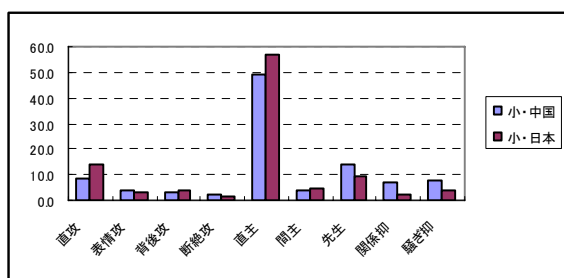
Table51 と Fig. 19 に示されたように、各発達段階、日中、男女共に直接的主張が最も多く選択されている。Fig. 13 の中国と日本の実際を取る方略、Table14 の男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、日中共に、男女共に、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高くなっており、理想と実際の間には差が少ない。

役割の遂行への要求という社会的規範意識は、日中間共に小学生低学年までに既に形成しており、意識のみならず、行動まで実行できていると思われる。

Table51 役割の怠惰場面における最もよい方略の占める割合

役割		直攻	表情 攻	背後攻	断絶攻	直主	間主	先生	関係 抑	騒ぎ抑
小・全体		11.7	3.6	3.7	1.9	52.8	4.5	11.9	4.3	5.5
国別	中国	8.8	4.2	3.2	2.1	48.8	4.2	14.4	6.7	7.6
	日本	14.4	3.1	4.2	1.8	56.6	4.9	9.5	2.0	3.5
男女別	男	15.0	3.1	4.8	2.5	47.0	4.4	13.2	4.6	5.4
	女	7.7	4.0	2.5	1.2	59.9	4.7	10.4	4.0	5.7
中・全体		5.5	4.3	3.4	0.7	69.0	6.8	5.6	2.7	1.9
国別	中国	2.2	3.5	3.0	0.4	69.6	8.3	7.9	2.6	2.6
	日本	9.7	5.4	4.0	1.2	68.4	5.0	2.6	2.8	0.9
男女別	男	9.0	4.6	5.3	0.8	61.3	6.5	7.1	2.7	2.5
	女	1.9	4.3	1.7	0.4	76.9	6.9	4.1	2.8	1.1
高・全体		4.5	1.7	1.3	0.9	76.0	8.5	2.0	2.8	2.3
国別	中国	4.4	1.2	1.8	1.1	74.5	9.3	2.5	2.1	3.2
	日本	4.6	2.2	0.8	0.8	77.8	7.5	1.4	3.6	1.2
男女別	男	5.5	3.1	1.6	1.3	70.3	9.3	2.6	3.3	3.1
	女	3.6	0.2	1.0	0.6	82.0	7.5	1.4	2.4	1.4
大・全体		2.5	2.4	2.5	0.9	70.8	13.5		4.4	3.0
国別	中国	2.2	2.9	3.8	1.3	65.4	15.5		4.4	4.4
	日本	2.8	1.9	1.2	0.5	76.0	11.6		4.3	1.7
男女別	男	3.5	2.8	3.1	1.0	67.3	14.2		4.7	3.3
	女	1.5	2.1	1.9	0.6	74.4	13.1		4.0	2.5

注： 表中の数字はパーセンテージを示している。



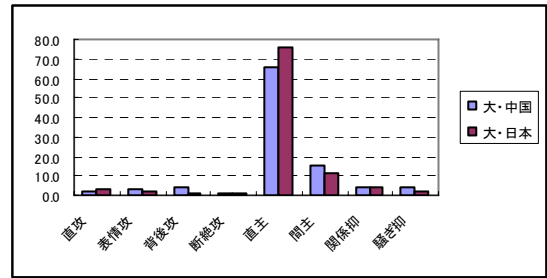
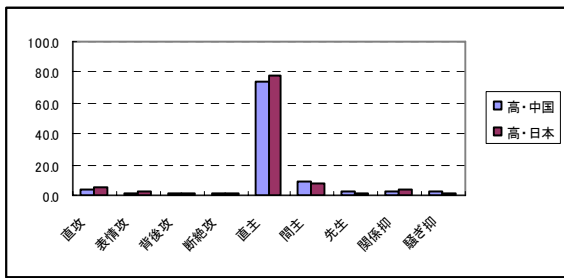


Fig. 19 役割の怠惰場面における国別の最もよい方略の占める割合

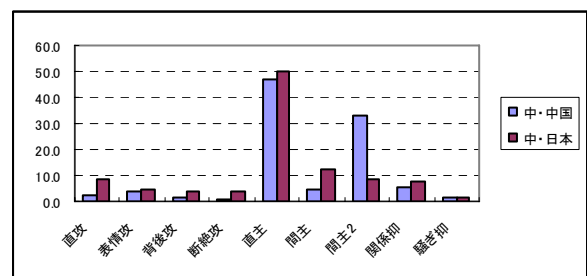
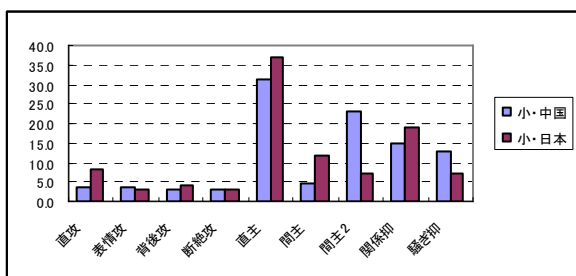
(6) 先生との意見対立場面における最もよい方略の選択

先生との意見対立場面における最もよい方略の選択の結果は Table52 に示したとおりである (2 割以上を占めた方略はゴシック体で示している)。Fig. 20 は中国と日本の選択の結果をグラフに示している。

Table52 先生との意見対立場面における最もよい方略の占める割合

意見 2	直攻	表情 攻	背後攻	断絶 攻	直主	間主	間主 2	関係 抑	騒ぎ抑
小・全体	5.9	3.3	3.6	2.9	34.2	8.3	15.0	17.0	9.8
国別									
中国	3.5	3.5	3.2	3.0	31.3	4.8	23.0	15.0	12.7
日本	8.2	3.1	4.0	2.9	36.9	11.7	7.3	19.0	7.1
男女									
男	7.5	4.4	3.7	3.3	28.3	7.5	14.3	18.3	12.7
女	3.7	2.0	3.5	2.5	41.2	9.4	15.8	15.6	6.4
中・全体	4.7	4.1	2.6	2.1	48.3	7.9	22.5	6.4	1.5
国別									
中国	2.0	3.7	1.8	0.9	46.8	4.6	33.2	5.3	1.7
日本	8.1	4.7	3.5	3.5	50.2	12.1	8.8	7.7	1.4
男女									
男	6.7	5.2	3.1	2.1	45.5	7.1	22.2	5.8	2.3
女	3.0	2.8	2.1	2.1	51.5	9.1	21.9	6.6	0.9
高・全体	2.1	2.1	1.4	0.8	58.3	10.7	19.6	4.0	0.9
国別									
中国	0.7	2.1	1.2	0.5	49.7	9.5	31.9	3.2	1.2
日本	3.8	2.0	1.6	1.2	68.1	12.0	5.6	5.0	0.6
男女									
男	3.6	2.4	2.0	0.7	53.7	10.5	21.2	4.5	1.3
女	0.6	1.8	0.8	1.0	63.3	10.8	17.7	3.5	0.6

注： 表中の数字はパーセンテージを示している。



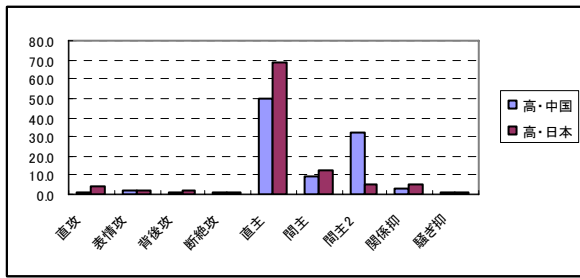


Fig. 20 先生との意見対立場面における国別の最もよい方略の占める割合

Table52 と Fig. 20 に示されたように、発達段階で比較してみると、各発達段階共に直接的主張が最も多く選択されている。発達に伴い、直接的主張の占める割合も高くなっている。

国別で比較してみると、日中共に、各発達段階を通して直接的主張が最も多く選択されているが、中国において、各発達段階共に、他の適切な人を推薦する「間接的主張2」も高い割合で選択されていることが特徴的である。Fig. 13 の中国と日本の実際を取る方略と比較してみると、実際を取る方略においても、中国では直接的主張と他人を推薦する間接的主張が極めて近い値で最も高くなっているが、日本では直接的主張が最も多く用いられている。理想としても、実際にしても、日中間にこの方略に対する考え方の違いが存在すると思われる。

男女別で比較してみると、男女共に各発達段階を通して直接的主張が最も多く選択され、同様の傾向を示している。Table14 の男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高くなっており、理想と実際の間には差が少ない。

3. まとめ

中国と日本における小学生・中学生・高校生・大学生の社会的問題解決方略に関する以上の結果から、主な特徴について以下のようにまとめることができる。

(1) 性差について

① 全体通してみると、男子は直接的攻撃、先生頼りの2方略において女子より高く、女子は間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃）、主張的方略（直接的主張、間接的主張）、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制、自己責任抑制、無意義抑制）の10方略において、男子より高くなっている。各場面の葛藤の重要度においても、女子が男子より高くなっている。

② 中国と日本の性差の傾向は極めて類似している。男子は直接的攻撃、先生頼りにおいて女子より高く、女子は間接的攻撃、主張的方略、抑制的方略及び葛藤の重要度において、男子より高くなっている。

ジャンケンにおいて、中国と日本の性差の傾向は逆になっている。中国においては男子が女子より有意に高く、日本においては、女子が男子より有意に高い傾向が見られた。

断絶的攻撃、非故意性抑制において、中国は男子と女子の間有意差が見られなかったが、

日本は女子が男子より有意に高い。直接的主張、他人を推薦する「間接的主張2」、無意義抑制において、中国は女子が男子より有意に高いが、日本は男子と女子の間有意差が見られなかった。

③ 発達に伴い、男女間に有意差の見られる方略が多くなる。

④ 各場面の性差の傾向は極めて類似している。男子は直接的攻撃、先生頼りにおいて女子より高く、女子は間接的攻撃、間接的主張、抑制的方略及び葛藤の重要度において、男子より高くなっている。

権利の侵害場面において、男女間に有意差が見られる方略は最も少なかった。直接的主張、間接的主張、先生頼り及び葛藤の重要度は、権利の侵害場面において、各場面で唯一に男女間に有意差を示さなかった。

直接的主張において、場面によって性差の傾向が異なっている。持物の損害、名誉の侵害場面では、男子が女子より有意に高いが、級友との意見対立、役割の怠惰、先生との意見対立場面において女子が男子より有意に高くなっている。

騒ぎ抑制において、持物の損害、級友との意見対立、権利の侵害、名誉の侵害場面では、女子が男子より有意に高いが、先生との意見対立場面では逆転し、男子が女子より有意に高くなっている。

各場面で最も高くなっている方略を比較してみると、級友との意見対立、権利の侵害、役割の怠惰、先生との意見対立の4場面において、男女共に直接的主張が最も高くなっているが、持物の損害及び名誉の侵害の2場面において、男女間が異なっている。持物の損害場面では、男子は相手が故意でないため抑制する非故意性抑制が最も高くなっているが、女子は間接的主張も非故意性抑制に近い値で高くなっている。名誉の侵害場面では、男子は直接的主張が最も高くなっているが、女子は断絶的攻撃が最も高くなっている。

(2) 場面間の相違について

① 全体通してみると、葛藤の重要度においては、名誉の侵害が最も高く、続いては持物の損害で、役割の怠惰場面が最も低くなっている。間接的主張、騒ぎ回避抑制は、各場面間に差が少ない。各場面の方略の使用は次の特徴が見られる。

持物の損害場面では、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）が各場面で最も高くなっている一方、間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃）、間接的主張、先生頼りも各場面で最も高くなっている。

級友との意見対立場面では、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）が各場面で最も低く、主張的方略（直接的主張、間接的主張）、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）が持物の損害場面に続いて最も高くなっている。

権利の侵害場面では、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）が各場面において高い方であるが、直接的主張、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）が各場面において中間にあり、間接的主張、先生頼りが各場面で最も低くなっている。ジャンケン級友との意見の対立場面より高くなっている。

名誉の侵害場面では、間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃）、間接的主張が各場面で最も高くなっているが、直接的攻撃、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）も各場面において中間に位置している。

役割の怠惰場面では、重要性を最も低く評価しているにも関わらず、直接的攻撃、直接的主張が各場面で最も高くなっている。

先生との意見対立場面では、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）が級友との意見の対立場面に続いて最も低く、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）も役割の怠惰場面に続いて最も低くなっている。直接的主張が役割の怠惰場面に続いて最も高くなっている。

② 各方略の使用における各場面の順位については、中国と日本は極めて類似している。一方、各場面の順位が日中間やや異なっている方略も存在する。級友との意見の対立場面、先生との意見の対立場面への対応方略は日中間大きく異なっている。

級友との意見対立に対して、日本では、葛藤の重要度は各場面で最も低く、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）が各場面で最も低く、関係重視抑制が各場面で最も高く、騒ぎ回避抑制も各場面において高い方である。中国では、葛藤の重要度は名誉の侵害に続いて最も高く、間接的攻撃は各場面で最も低く、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）も各場面において低い方であるが、直接的攻撃、直接的主張が各場面において高い方である。

先生との意見対立に対して、日本では、級友との意見対立より、葛藤の重要度が高く、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）、直接的主張が高く、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）が低くなっている。中国では、正反対に、級友との意見対立より、葛藤の重要度が低く、直接的攻撃、断絶的攻撃、直接的主張も低くなっている。抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）は両場面間有意差が見られなかった。

名誉の侵害場面への対応方略は日中間に違いが見られた。名誉の侵害に対して、日中共に葛藤の重要度が各場面で最も高くなっているが、対応の方略に相違が見られた。直接的攻撃、直接的主張は、値も各場面間での順位も中国が日本より高く、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）は、値も各場面間での順位も中国が日本より低くなっている。特に表情攻撃において、中国では、名誉の侵害場面が各場面で最も高くなっているが、日本では、名誉の侵害場面が各場面で中間に位置している。間接的主張において、中国では、名誉の侵害場面が各場面で最も高くなっているが、日本では、名誉の侵害場面が各場面で最も低くなっている。

各場面の葛藤の重要度は、日本は中国より、開きが大きく、場面間に有意差が多く見られた。

③ 各方略の使用における各場面の順位については、男子と女子は極めて類似している。

先生との意見対立場面への対応は男女間やや異なっている。先生との意見対立に対して、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）においては、男子が女子より、値も各場面間での順位も高くなっている。直接的攻撃においては、男子が女子より、各場面間での順位が低くなっている。

名誉の侵害場面への対応は男女間やや異なっている。間接的主張において、男子では、名誉の侵害場面が各場面で最も高くなっているが、女子では、名誉の侵害場面が各場面で中間に位置している。

④ 各方略の使用における各場面の順位については、各発達段階は極めて類似している。一方、各場面の順位が、各発達段階間にやや異なっている方略も存在する。

役割の怠惰場面への対応は各発達段階間やや異なっている。背後的攻撃において、小学生では、

役割の怠惰場面が名誉の侵害場面が続いて各場面間で最も高くなっているが、中学生以降では、役割の怠惰場面が級友との意見対立場面に続いて各場面間で最も低くなっている。間接的主張において、役割の怠惰場面が各場面間に占める順位は、小学生では持物の損害場面が続いて各場面間で最も高く、中学生では各場面間で中間に位置し、高校生では各場面間で最も低く、大学生では再び各場面間で最も高くなっている。

先生との意見対立場面への対応は各発達段階間やや異なっている。先生との意見対立の葛藤の重要度は、小学生では最も各場面間で最も低くなっているが、中高生では各場面間で中間に位置している。直接的攻撃は、小中学生は各場面間で最も低くなっているが、高校生では各場面間で中間に位置している。抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）は、小中学生では持物の損害場面が続いて各場面間で高くなっているが、高校生では各場面間で最も低くなっている。

級友との意見対立場面への対応は各発達段階間やや異なっている。級友との意見対立の葛藤の重要度は、小学生では名誉の侵害、持物の損害場面が続いて各場面間で高くなっているが、発達に伴い、各場面間での順位が下がり、大学生では各場面間で最も低くなっている。級友との意見対立への間接的主張は、小学生では、持物の損害、役割の怠惰場面が続いて各場面間で高くなっているが、中学生では一旦下がり、高校生では再び各場面間で最も高くなり、大学生では再び下がり、権利の侵害、名誉の侵害場面が続いて各場面間で低くなっている。

ジャンケンは、小中学生では、権利の侵害場面が級友との意見対立場面より有意に高いが、高校生では有意差がなく、大学生では逆転し、級友との意見対立場面が権利の侵害場面より、有意に高くなっている。

（３）発達的变化について

① 全体的には、発達に伴い、葛藤の重要度、間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃）、間接的主張、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制、無意義抑制）が高くなり、直接的攻撃、直接的主張、先生頼り、ジャンケン、自己責任抑制が低くなる傾向が見られる。

中学生では、葛藤を最も重要視し、直接的攻撃が各発達段階で最も高くなっている傾向も見られる。

小学生では、中・高・大学生の発達的变化の傾向に反して、直接的主張が各発達段階で最も低く、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制が大学生に続いて高くなっている傾向も見られる。

② 各方略の使用の発達的变化については、中国と日本はほとんど類似している。詳しく見てみると、騒ぎ回避抑制と自己責任抑制において、中国と日本の発達的变化がやや異なっている。騒ぎ回避抑制は、中国では小中高の間に有意差が見られないが、日本では小学生が大学生に続いて中高生より有意に高くなっている。自己責任抑制は、中国では中学生が最も高く、大学生が最も低くなっているが、日本では逆転し、中学生が最も低く、大学生は最も高くなっている。

葛藤の重要度においては、日本が中国を大きく上回りながら、同様な発達的变化を示し

ている。発達に伴って高くなる傾向がある一方、中学生が他の発達段階より最も高くなっている。

間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃）、間接的主張、関係重視抑制においては、日本が中国を上回りながら、日中同様に発達に伴って高くなっている。

直接的攻撃においては、中国では発達に伴って徐々に低くなっているが、日本では発達に伴って低くなる傾向がある一方、中学生が他の発達段階より最も高くなっている。また、小中学生では日本が中国より高いが、高校・大学生では逆転し、中国が日本より高くなっている。

直接的主張においては、中国と日本が同様に、小学生から中学生まで急伸びした後、大学生まで徐々に下がっている。小学生では日本が中国を大きく上回っているが、中高大学生では値も発達の变化も近寄っている。

先生頼りにおいては、中国と日本が同様に、発達に伴って徐々に低くなっている。小学生では日本が中国を大きく上回っているが、中高生では値も発達の变化も近寄っている。

ジャンケンにおいては、日本が中国を上回りながら、同様な発達の变化を示している。小学生から高校生までは徐々に低くなり、大学生では再び高くなる傾向が見られる。

他人を推薦する間接的主張、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制においては、中国が日本を大きく上回りながら、発達に伴って高くなっている。

自己責任抑制においては、中国と日本が正反対な発達の变化を呈している。中国では中学生で高ピーチになってから、大学まで大きく下がっているが、日本では中学生で低ピーチになってから、大学まで大きく上がっている。

無意義抑制においては、中国と日本が同様に、発達に伴って徐々に高くなっている。小学生では中国が日本を上回っているが、中高大学生では値も発達の变化も近寄っている。

③ 男子と女子の社会的問題解決方略と重要度の発達の变化は、自己責任抑制以外、ほとんど同様な傾向が見られる。詳細に比較してみると、以下のことが見て取れる。

葛藤の重要度、間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃）、間接的主張、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、無意義抑制）においては、男子と女子は小学生では男女間に差が少ないが、発達に伴って男女共に高くなる一方、男女間の開きが徐々に大きくなっている。

直接的攻撃においては、男子が女子を大きく上回りながら、同様な発達の变化を示している。発達に伴って低くなる傾向がある一方、中学生が他の発達段階より最も高くなっている。

直接的主張においては、男子と女子が同様に、小学生から中学生まで急伸びした後、大学生まで徐々に下がっている。小学生では女子が男子を大きく上回っているが、中高大学生では値も発達の变化も近寄っている。

先生頼りと他人を推薦する間接的主張においては、男子と女子は値も発達の变化も、極めて類似している。

ジャンケンにおいては、男子と女子が同様な発達の变化を示しているものの、値は発達段階によって逆転している。小中学生では男子が女子を上回っているが、高校大学生では女子が男子を上回っている。

非故意性抑制においては、高校生までは、男女間の開きが徐々に大きくなりながら、男

女共に発達に伴って高くなっている。大学生では、女子が大きく下がり、男子が大きく上がり、男女間急接近している。

自己責任抑制においては、男子と女子が正反対な発達的变化を呈している。女子では高校生までは発達に伴って徐々に高くなっているが、大学では大きく下がっている。男子では高校生までは発達に伴って大きく下がっているが、大学では再び高くなっている。

④ 各方略の使用の発達的变化は、各場面間ほとんど類似している。詳しく見てみると、以下のことが見てとれる。

直接的攻撃においては、先生との意見対立場面が他の場面とは逆の発達的变化傾向を示している。

先生との意見対立場面のみ、発達に伴って高くなっている。他の場面は、中学生が最も高くなっているものの、発達に伴って低くなっている傾向が見られる。発達に伴い、先生の権威性が低くなったことの反映と思われる。

断絶的攻撃においては、級友との意見対立場面が他の場面とは逆の発達的变化傾向を示している。他の場面は、発達に伴って高くなっているが、級友との意見対立場面のみ、中学生が最も高く、小学生が続いて高くなっている。中学生は自我の成立の真最中で、自己の意思を強く主張したいことを反映していると思われる。

表情攻撃においては、級友との意見対立場面のみ、表情攻撃の値が他の場面より低く、各発達段階間に有意差が見られなかった。

関係重視抑制においては権利の侵害場面のみ、騒ぎ回避抑制においては、級友との意見対立場及び権利の侵害場面が、各発達段階間に有意差が見られなかった。

ジャンケンにおいては、級友との意見対立場面では大学生が最も高くなっているが、権利の侵害場面では反対に、高校大学生が低く、小中学生が最も高くなっている。

葛藤の重要度においては、権利の侵害場面以外、各場面に明確な発達的变化が呈示していない。特に小学生の値が各発達段階に占めている順位は、場面によって大きく異なっている。持物の損害、権利の侵害、名誉の侵害、先生との意見対立場面では、小学生が最も低くなっているが、役割の怠惰、級友との意見対立場面では、小学生が最も高くなっている。中学生の値が級友との意見対立、名誉の侵害、先生との意見対立場面において、各発達段階で最も高くなっていることも特徴的である。

(4) 日中間の相違について

① 全体を通してみると、日本は、葛藤の重要度、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）、間接的主張、先生頼り、ジャンケンが中国より高いと共に、関係重視抑制も中国より高くなっている。中国は、自分の代わりに他の適切な人を推薦する「間接的主張2」、騒ぎ回避抑制、持物の侵害場面において相手が故意に損害を与えたのではないため抑制的方略を取る「非故意性抑制」、悪口を言う人には何も言う必要がないという「無意義抑制」が日本より高くなっている。

日本の対象者が中国の対象者より、対人葛藤を重要視し、攻撃性、主張性が高く、積極的に問題解決に臨んでいる姿勢が窺える一方、葛藤相手との関係も中国の対象者より重要視している。

② 男子と女子の日中間の相違は極めて類似している。男女共に、日本は葛藤の重要度、

間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃）、間接的主張、先生頼り、ジャンケンが中国より有意に高くなっている。中国は他人を推薦する間接的主張、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制が日本より高くなっている。

直接的攻撃において、男子と女子の日中間の相違はやや異なっている。男子においては日本が中国より有意に高いが、女子においては有意差が見られなかった。

無意義抑制において、男子と女子の日中間の相違はやや異なっている。女子においては中国が日本より有意に高いが、男子においては有意差が見られなかった。

③ 各発達段階の日中間の相違は、極めて類似している。各発達段階共に、日本は葛藤の重要度、背後的攻撃、断絶的攻撃、間接的主張が中国より有意に高くなっている。中国は他人を推薦する間接的主張、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制が日本より高くなっている。

直接的攻撃において、小中学生は日本のほうが中国より有意に高いが、高校・大学生では逆転し、大学生は中国のほうが日本より有意に高くなっている。

表情攻撃において、中学生・大学生は日本のほうが中国より有意に高いが、小学生・高校生は日中間に有意差が見られなかった。

直接的主張と先生頼りにおいて、小学生は日本のほうが中国より有意に高いが、中学生以降は日中間に有意差が見られなかった。

ジャンケンと関係重視抑制において、中学生は日中間に有意差が見られなかったが、他の発達段階はいずれも日本のほうが中国より有意に高くなっている。

無意義抑制において、小学生は中国のほうが日本より有意に高いが、中学生以降は日中間に有意差が見られなかった。

自己責任抑制においては、小中高生は中国のほうが日本より高く、日本の中学生と中国の中学生の間に有意差が見られた。大学生は逆転し、日本のほうが中国より有意に高くなっている。

④ 各場面の日中間の相違は類似している。日本は各場面共に背後的攻撃、断絶的攻撃、先生頼り、ジャンケンにおいて中国より高く、中国は名誉の侵害場面以外の全ての場面共に騒ぎ回避抑制において日本より高くなっている。他人を推薦する間接的主張、非故意性抑制、無意義抑制において、中国も日本より高くなっている。

各場面に共通している日中間の相違のおよその傾向に反して、それぞれの場面に独自の特徴も見られる。特に級友との意見対立場面と名誉の侵害場面における日中間の相違は、他の4場面（持物の損害、権利の侵害、役割の怠惰、先生との意見対立）と異なっている。

級友との意見対立場面は、葛藤の重要度において、他の全ての場面は日本が中国より有意に高いが、級友との意見対立場面は中国が日本より高くなっており、中国の中では名誉の侵害に続いて最も高くなっている。直接的攻撃において、持物の損害、権利の侵害、先生との意見対立場面は日本が中国より有意に高いが、級友との意見対立場面は中国が日本より高くなっている。表情攻撃と直接的主張において、持物の損害、権利の侵害、役割の怠惰、先生との意見対立場面は日本が中国より有意に高いが、級友との意見対立場面は中国が日本より高くなっている。

名誉の侵害場面は、間接的主張において、他の全ての場面は日本が中国より有意に高いが、名誉の侵害場面は中国が日本より高くなっている。直接的主張において、級友との意見対立場面と同様に、持物の損害、権利の侵害、役割の怠惰、先生との意見対立場面は日

本が中国より有意に高いが、名誉の侵害場面は中国が日本より高くなっている。表情攻撃においても同様な傾向が見られる。直接的攻撃において、持物の損害、権利の侵害、先生との意見対立場面は日本が中国より有意に高いが、名誉の侵害場面は日中間に有意差が見られなかった。

役割の怠惰場面は、先生頼りと関係重視抑制は日中間に有意差がないが特徴的である。また、直接的攻撃において、級友との意見対立場面と同様に、先生との意見対立場面は日本が中国より有意に高いが、役割の怠惰場面は中国が日本より高くなっている。

関係重視抑制は場面によって、日中間の相違が異なっている。級友との意見対立場面と名誉の侵害場面は、日本が中国より有意に高い。持物の損害場面と役割の怠惰場面は、日本が中国より高いが、有意差が見られなかった。権利の侵害場面と先生との意見対立場面は逆転し、中国が日本より高くなっている。

各場面で最も高くなっている方略は日中間大きく異なっている。持物の損害場面においては、中国では非故意性抑制が最も高くなっているが、日本では間接的主張が最も多く用いられている。

級友との意見対立場面においては、中国では直接的主張が飛び切り最も高くなっているが、日本では直接的主張も最も高いものの、関係重視抑制とは差が少なく、主張と抑制が拮抗している様子が窺える。

名誉の侵害場面においては、中国では直接的主張と間接的主張が最も高くなっているが、日本では小学生は男女ともに先生頼り、中学・高校・大学生は男女ともに断絶攻撃が最も高くなっている。

先生との意見対立場面においては、中国では直接的主張と他人を推薦する間接的主張が極めて近い値で最も高くなっているが、日本では直接的主張が飛び切り最も多く用いられている。

(5) 社会的問題解決方略における国、発達段階、性の影響

国・性・発達の要因別で全体的に見ると、国の要因は発達段階に関係なく、いずれの発達段階でも標準化係数が最も高く、最も影響を与えている。発達の要因は小学生～中学生にかけて最も影響を与えており、続いては中学生～高校生の段階であり、高校生～大学生にかけては影響が少ない。性の要因は小学生～中学生にかけて影響が少なく、中学生～高校生、高校生～大学生にかけては影響が大きくなる。

方略別で見ると、直接的攻撃においては、性の要因が最も影響を与えており、続いては中学生～大学生の発達が影響を与えている。

表情攻撃においては、性の要因が最も影響を与えており、続いては中学生～大学生の発達が影響を与えている。

背後的攻撃においては、国、性、発達がいずれも大きく影響を与えている。

断絶的攻撃においては、国の要因が最も影響を与えている。

直接的主張においては、小学生～中学生の発達が最も影響を与えている。

間接的主張においては、高校生～大学生の発達と性の要因が最も影響を与えている。

先生頼りにおいては、発達の要因が最も影響を与えている。

ジャンケンにおいては、中学生～高校生では主に発達の要因、高校生～大学生では主に

国の要因が影響を与えている。

他人を推薦する間接的主張においては、国の要因が最も影響を与えている。

関係重視抑制においては、国、性、発達の影響はあるものの、重相関係数（R）、各要因の標準化係数が低く、国・性・発達の3変数による重回帰式の当てはまりが良くない。葛藤相手と親密性や相対的地位など、国・性・発達の以外の要因が影響を与えていると考えられる。

騒ぎ回避抑制においては、国の要因が最も影響を与えている。

非故意性抑制と自己責任抑制においては、国の要因が最も影響を与えており、続いては性の要因が影響を与えている。

無意義抑制においては、小学生～高校生の発達が最も影響を与えている。性の要因が最も影響を与えており、続いては中学生～大学生の発達が影響を与えている。

重要度においては、国、性、発達の影響はあるものの、交互作用が多く見られ、重相関係数（R）、各要因の標準化係数が低く、国・性・発達の3変数による重回帰式の当てはまりが良くない。場面ごとの重回帰分析では重要度の重相関係数（R）高く、重回帰式の当てはまりがややよい。

（6）重要度と社会的問題解決方略との相関

①全体的に見ると、重要度は攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）、主張的方略（直接的主張、間接的主張）先生頼りと弱い正の相関を示し、抑制的方略と弱い負の相関を示している。ジャンケン、他人を推薦する間接的主張、騒ぎ回避抑制との相関が低い。重要と判断するほど、攻撃性、主張性が高く、自己抑制が低くなる。

②国別で見ると、中国における重要度と社会的問題解決方略との相関が弱くて少ない。

③男女別で見ると、男児と女子における重要度と社会的問題解決方略との相関の違いが少ない。

④発達段階別で見ると、小学生における重要度と抑制的方略との相関が弱い。

⑤場面別で見ると、名誉の侵害場面における重要度と関係重視抑制、騒ぎ回避抑制との相関が弱い。

⑥各方略で見ると、重要度と間接的攻撃（背後的攻撃、断絶的攻撃）、非故意性抑制、自己責任抑制、無意義抑制との相関が強く、ジャンケン、他人を推薦する間接的主張、騒ぎ回避抑制との相関が弱い。

（7）最もよい方略の選択について

① 持物の損害場面における最もよい方略の選択は、発達に伴い、抑制的方略から主張的方略へ、権威者に頼る方略から自立性の高い直接的主張への変化の傾向が見られる。

国別で比較してみると中国では、理想としても、実際にしても非故意性抑制が最も高いが、日本では実際に取る方略においては、間接的主張が最も多く、続いては表情攻撃、背後的攻撃、非故意性抑制が同じ値で用いられている。理想とする方略は直接的主張が好まれるが、実際に取る方略は相手の気持ちを配慮し、間接的主張が多く取られる。

男女別で比較してみると、男子では、理想としても、実際にしても非故意性抑制が最も高いが、女子では、実際に取る方略においては、間接的主張も非故意性抑制に近い値で高

くなっている。理想とする方略は直接的主張が好まれるが、実際を取る方略は相手の気持ちを配慮し、間接的主張が多く取られる。

② 級友との意見対立場面における最もよい方略の選択は、各発達段階共に直接的主張が最も多く選択されている。高校生・大学生では間接的主張も直接的主張に続いて多く選択されている。

国別で比較してみると、中国では、理想としても、実際にしても直接的主張が飛び切り最も高くなっているが、日本では実際を取る方略においては、直接的主張も最も高いものの、関係重視抑制とは差が少なく、主張と抑制が拮抗している様子が窺える。級友との意見対立場面においては、日本も理想と実際の間には差が少ない。

男女別で比較してみると、男女共に同様な傾向を示している。小中学生では直接的主張が最も多く選択されている。高校生・大学生では直接的主張が最も多く選択されており、間接的主張も直接的主張に続いて多く選択されている。男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高くなっており、理想と実際の間には差が少ない。

③ 権利の侵害場面における最もよい方略の選択のは、全体的には、小学生では自己責任抑制、中学生以降では直接的主張が最も多く選択されている。

国別で比較してみると、日中共に、小学生では自己責任抑制、中学生・高校生では直接的主張が最も多く選択されている。大学生において、中国では直接的主張が最も多く選択され、間接的主張が直接的主張に続いて多く選択されている。日本では直接的主張が最も多く選択され、自己責任抑制が直接的主張に続いて多く選択されている。中国と日本の実際を取る方略と比較してみると、全体的には、日中共に、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高く、理想と実際の間には差が少ない。

男女別で比較してみると、男女共に、小学生では自己責任抑制、中学生以降では直接的主張が最も多く選択されている。ただし、中学生において、女子は自己責任抑制も直接的主張に続いて多く選択されている。男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、全体的には、男女共に、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高く、理想と実際の間には差が少ない。

④ 名誉の侵害場面における最もよい方略の選択は、発達段階によって、侵害を受けた人の関係によって、最もよい方略の選択が大きく異なっている。

小学生では、自分自身が受けた名誉の侵害に対して、先生頼りが最も多く選択されている。親友が受けた名誉の侵害に対して、先生頼りと直接的主張に近い値で最も多く選択されている。兄弟が受けた名誉の侵害に対して、直接的攻撃が最も多く選択されている。

中学生では、自分自身、親友、兄弟が受けた名誉の侵害に対して、共に直接的主張が最も多く選択されている。ただし、兄弟が受けた名誉の侵害に対して、直接的攻撃が依然高く、直接的主張に続いて最も多く選択されている。

高校生・大学生では、自分自身、親友、兄弟が受けた名誉の侵害に対して、共に直接的主張が最も多く選択されている。自分自身、親友、兄弟の順に、直接的主張の占める割合が高くなる。自分自身が受けた名誉の侵害に対しては間接的主張、無意義抑制、親友が受けた名誉の侵害に対しては間接的主張、兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的攻撃もよく選択された。

各発達段階ともに、自分自身よりも、親友を大切に、親友を守る、兄弟を守るという姿勢が見られる。

国別で比較してみると、発達段階によって、侵害を受けた人の関係によって、中国と日本における最もよい方略の選択が大きく異なっている。

小学生においては、中国では、自分自身が受けた名誉の侵害に対しては無意義抑制、親友が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張、兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張と直接的攻撃が、最も多く選択されている。日本では、自分自身が受けた名誉の侵害に対しては先生頼り、親友が受けた名誉の侵害に対しては先生頼りと直接的攻撃、兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的攻撃と先生頼りが、最も多く選択されている。

中学生においては、中国では、自分自身、親友、兄弟が受けた名誉の侵害に対して、共に直接的主張が最も多く選択されている。日本では、自分自身と親友が受けた名誉の侵害に対して、共に直接的主張が最も多く選択されているが、兄弟が受けた名誉の侵害に対して、直接的攻撃が最も高く、直接的主張がそれに続いて多く選択されている。

高校生においては、中国では、自分自身が受けた名誉の侵害に対しては無意義抑制、直接的主張及び間接的主張が近い値で、親友と兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張が、最も多く選択されている。日本では、自分自身と兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張、親友が受けた名誉の侵害に対しては直接的攻撃と間接的主張が、最も多く選択されている。

大学生においては、日中間に同様な傾向を示している。自分自身が受けた名誉の侵害に対しては間接的主張、直接的主張及び無意義抑制が近い値で、親友が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張、続いては間接的主張、兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張が、最も多く選択されている。

日中間は類似した傾向を示しながら、日本の小学生が中国の小学生より、徒党意識が強く、親友をかばう姿勢が強いと窺える。

自分自身が受けた名誉の侵害に対する最もよい方略の選択と、中国と日本の実際を取る方略を比較してみると、中国では、実際にとる方略は直接的主張と間接的主張が最も高くなっているが、理想とする方略は対決することが無意義で自己抑制する無意義抑制も高くなっている。日本では、実際にとる方略は、小学生は男女ともに先生頼り、中学・高校・大学生は男女ともに断絶攻撃が最も高くなっているが、理想とする方略は直接的主張が最も多く選択されている。実際を取る方略は理想とする方略より、日中共に特に日本において、名誉の侵害を強く受け止め、対決性が強い。

男女別で比較してみると、発達段階によって、侵害を受けた人の関係によって、男子と女子における最もよい方略の選択が大きく異なっている。

小学生においては、男子では、自分自身と親友が受けた名誉の侵害に対しては先生頼り、兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的攻撃が、最も多く選択されている。女子では、自分自身が受けた名誉の侵害に対しては先生頼り、親友が受けた名誉の侵害に対しては先生頼りと直接的主張、兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的攻撃と直接的主張が、最も多く選択されている。

中学生においては、男女ともに、自分自身、親友、兄弟が受けた名誉の侵害に対して、いずれも直接的主張が最も多く選択されているが、男子において、兄弟が受けた名誉の侵

害に対する直接的攻撃依然多く選択されている。

高校生・大学生においては、男女間に同様な傾向を示している。自分自身が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張、無意義抑制及び間接的主張が近い値で、親友が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張、続いては間接的主張、兄弟が受けた名誉の侵害に対しては直接的主張が、最も多く選択されている。

男女間は類似した傾向を示しながら、小学生女子が小学生男子より、徒党意識が強く、親友をかばう姿勢が強いと窺える。

自分自身が受けた名誉の侵害に対する最もよい方略の選択と、男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、男子は、理想としても、実際にしても、直接的主張が最も高くなっている。女子は実際にとる方略において断絶的攻撃が最も高くなっており、実際を取る方略は理想とする方略より、名誉の侵害を強く受け止め、対決性が強い。

⑤ 役割の怠惰場面における最もよい方略の選択は、各発達段階、日中、男女共に直接的主張が最も多く選択されている。中国と日本の実際を取る方略、男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、日中共に、男女共に、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高くなっており、理想と実際の間には差が少ない。

役割の遂行への要求という社会的規範意識は、日中間共に小学生低学年までに既に形成しており、意識のみならず、行動まで執行できていると思われる。

⑥ 先生との意見対立場面における最もよい方略の選択は、発達段階で比較してみると、各発達段階共に直接的主張が最も多く選択されている。発達に伴い、直接的主張の占める割合も高くなっている。

国別で比較してみると、日中共に、各発達段階を通して直接的主張が最も多く選択されている。日本に比して、中国において、各発達段階共に、他の適切な人を推薦する「間接的主張2」も高い割合で選択されていることが特徴的である。中国と日本の実際を取る方略と比較してみると、実際を取る方略においても、中国では直接的主張と他人を推薦する間接的主張が極めて近い値で最も高くなっているが、日本では直接的主張が飛び切り最も多く用いられている。理想としても、実際にしても、日中間にこの方略に対する考え方の違いが存在すると思われる。

男女別で比較してみると、男女共に各発達段階を通して直接的主張が最も多く選択され、同様な傾向を示している。男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高くなっており、理想と実際の間には差が少ない。

第4章 社会的問題解決方略に影響する社会環境的要因（1）：

親子関係

「普通の人間は常に家族の中で生まれ、家族の中で成長し、家族の中で死ぬ。このため、個人を理解しようとするなら、おのずと家族生活から始めざるを得ない」（費・横山訳、1985）、「人間は社会によって作られるというよりも、むしろ家族によって作られると言うべきかもしれない」（清水、1969）といわれるように、家族、とりわけ親子関係は、人間の一生の中で最も大切な存在であり、また個人の人格形成や行動傾向に及ぼす影響も図り知れないほどに甚大である。

親子関係に関する日中比較研究としては、高木・張（1990）、田村（1996）、中里（2000）、日本青少年研究所（2001）、雷・堂野（2003）など、近年になって散見されるようになってきた。しかし、心理学的な観点から年少者を視野に入れ、しかも発達的变化に焦点を当てた研究はまだ少ない。

本研究は、親子関係を子どもの社会的問題解決方略に影響を与える社会的環境的要因と考え、中国と日本において、幼稚園年長児の親、小学生、中学生、高校生を対象に、その親子関係の実態及び発達的变化について分析・検討した。

第1節 調査方法と影響の大きい保育者

1. 調査方法と内容

発達的变化を明らかにする本研究の目的に従って、親子関係に関する質問項目としては、適用範囲が広く、また親の養育態度を多くの下位尺度で総合的に診断できるTK式幼児用親子関係検査（幼稚園年長児の親）、TK式診断的新親子関係検査（小・中・高校生）を用いた。TK式幼児用親子関係検査とTK式診断的新親子関係検査は、適用対象は違うものの、質問内容は同様なものとなっている。

ただし、本来的には同一の質問項目に対して対象児が父親と母親との関係についてそれぞれ評定するという方法であるが、項目数の多さの考慮、一人親の子どもの存在、父親と母親の二重回答による系列的効果といった問題もあり、本調査においては以下のような修正を加えた。幼稚園年長児の親に対しては、「ご両親、あるいは他の保護者の中から、子どもと関わりが多く、子どもに最も影響を及ぼしている人を選んで、アンケートを教えてください。次に、アンケートの記入者と、お子様との関わり方について、教えてください」、小・中・高校生に対しては、「あなたのご両親、または他の保護者の中から、あなたと関わりが深く、あなたに最も影響を及ぼしている人を一人選んで下さい。次に、その方と現在のあなたとの関わり方について、教えてください。」という教示とした。

質問の項目としては、幼稚園年長児の親にも、小・中・高校生にも、不満、非難、厳格、期待、干渉、心配、溺愛、盲従の8尺度で構成し、1尺度は8項目で、合計64項目であった。各々の質問に対し、「ぴったり当てはまる（4点）」から「全く当てはまらない（1点）」

までの4件法により評定させた。

2. 影響の大きい保護者の構成

Table53 は、影響の大きい保護者として挙げた人の構成である。両国ともに、幼稚園・小学校・中学校・高等学校のいずれにおいても「母親」が多数を占めている。特に日本においては、その傾向が極めて顕著となっている。中国では母親は父親の約2倍であるのに対し、日本では母親とする者が父親の約5倍にも上っている。幼稚園児において、母親の占める率はさらに高くなっている。また、中国では小学校と高校において、母親と父親の二人を同時に挙げた者が多い点も特徴的である。中学校では、担任に「一人を……」と要請したために、二人を挙げた者は少ない。しかし、「不選択 (NA)」の数は多くなっている。さらに、中国においては日本より、親以外の祖父・祖母・おじ・おばを挙げる者が多い点も特徴的である。これには、地方では出稼ぎに出ている親が少なくないということ、より教育水準の高い都市部の親戚に子どもの教育を委ねる親も少なくないといった背景が影響を及ぼしていると考えられる。

影響の大きい保護者として挙げたのは、父親・母親のほか、祖父母、おじおばなどもあるが、以下は「親」と総称して扱う。

Table53 影響の大きい養育者

	養育者	父	母	祖父	祖母	おじ	おば	両親	NA
幼稚園	中国	19.6	51.1	8.7	9.2		1.6	2.7	7.1
	日本	2.7	96.2		0.8				0.4
小学校	中国	15.6	39.3	4.1	9.4	1.8	3.2	20.2	6.2
	日本	14.1	72.6	1.3	3.1	0.7	2.0	1.8	4.4
中学校	中国	20.9	44.5	3.5	4.6	2.6	2.6	6.2	15.2
	日本	16.1	76.3	0.7	2.1			1.4	3.3
高校	中国	22.9	41.7	2.5	4.4	1.1	1.4	17.3	8.8
	日本	14.9	79.2	0.4	1.6	0.2		0.4	3.2

注：表中の数字はパーセンテージを示している。

第2節 中国における親子関係

1. 父親と母親の養育態度

次頁の Table54 は、影響の大きい養育者として挙げられた中国の父親と母親の養育態度の8尺度（不満、非難、厳格、期待、干渉、心配、溺愛、盲従）の平均得点である（t検定で父母間有意差が見られた項目は表中に示している）。

全体的にみると、各発達段階を通して、中国の父親と母親の養育態度得点は有意差が少なかった。幼稚園年長児への「厳格、干渉」のみにおいて、父親が母親より有意に高い。高校生への「期待」において、母親が父親より高い傾向も見られた ($p < .10$)。中国社会に

において、主たる養育者とする父親と母親の養育態度はあまり差がないと言えよう。

Table54 中国：父親と母親の養育態度得点

	不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従	人数
中国幼 父	1.92	2.32	2.46*	2.49	2.46*	2.61	2.52	2.48	36
母	1.90	2.33	2.33	2.46	2.27	2.51	2.47	2.46	94
中国小 父	2.17	2.14	2.43	2.90	3.05	3.03	2.39	2.19	68
母	2.06	2.03	2.33	2.88	2.96	3.08	2.44	2.17	171
中国中 父	2.03	2.04	2.31	2.92	2.92	2.84	2.24	2.09	110
母	2.03	2.03	2.28	2.88	2.86	2.86	2.25	2.11	228
中国高 父	1.94	1.91	2.17	2.71	2.72	2.62	2.10	1.98	131
母	1.99	2.00	2.25	2.79 ⁺	2.79	2.70	2.12	1.98	236

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

2. 男児と女児別の親の養育態度

Table55 は、中国における男女児別の親の養育態度の各尺度の平均得点である（t検定で男女間有意差が見られた項目は表中に示してある）。全体的にみると、各発達段階を通して、中国の男女間有意差のみられる尺度が少なかった。高校生の「干渉、溺愛」のみにおいて、男子が女子より有意に高い。幼稚園年長児の「不満」、小学生の「盲従」、中学生の「溺愛」、高校生の「心配」において、男子が女子より高い傾向も見られた（ $p<.10$ ）。有意差や傾向が見られる尺度はいずれも男子の方が女子より高くなっており、男子の方が女子よりもあれこれ気に掛けることが多い傾向が窺える。

Table55 中国：男女児別の養育態度得点

	不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従	人数
中国幼 男	1.97 ⁺	2.30	2.42	2.47	2.35	2.52	2.47	2.46	107
女	1.85	2.31	2.40	2.56	2.42	2.62	2.54	2.50	56
中国小 男	2.14	2.15	2.37	2.86	2.94	3.02	2.47	2.23 ⁺	247
女	2.12	2.04	2.32	2.88	2.97	3.05	2.38	2.15	187
中国中 男	2.05	2.08	2.34	2.86	2.88	2.86	2.28 ⁺	2.11	277
女	2.07	2.01	2.27	2.86	2.83	2.84	2.19	2.09	245
中国高 男	1.98	1.97	2.23	2.78	2.83 ^{**}	2.72 ⁺	2.16 ^{**}	2.01	313
女	2.02	2.00	2.25	2.77	2.71	2.64	2.05	1.98	248

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

3. 発達に伴う親の養育態度の変化

幼稚園年長児は親による回答、小・中・高校生は生徒本人による回答であるため、発達に伴う養育態度の変化を見るには、両者を区分して詳細に分析したほうが妥当であると判断した。ここでは、小・中・高校生の回答を元に、発達に伴う親の養育態度の変化につい

て検討する。

Fig. 21 は、小学生、中学生、高校生という発達段階ごとの中国の養育態度の尺度の平均得点である。この中から以下の2つの点が指摘できよう。

①発達段階が高くなるにつれ各尺度得点が低くなっている。顕著な変化がみられるのは「心配、溺愛、干渉、盲従」であった。分散分析の結果(一元配置:Tukey法、SPSS for Windows)、全ての尺度得点において有意差が認められた(「非難、厳格、期待」: $p < .05$ 、その他: $p < .01$)。多重比較の結果、以下のことが明らかにされた

「不満」においては、小学生は中学生 ($p < .05$) 及び高校生 ($p < .01$) よりも高く、中一・高校生の間には有意差は見られない。「非難」と「厳格」においては、小学生は高校生より高い ($p < .01$)。「期待」においては、小・中学生は高校生より高い ($p < .05$)。「干渉」においては、小学生は中・高校生より ($p < .01$)、中学生は高校生より ($p < .05$) 高くなっている。「心配」と「溺愛」においては、小学生は中・高校生より、中学生は高校生より高い ($p < .01$)。「盲従」においては、小学生は中学生 ($p < .05$)、高校生 ($p < .01$) より高く、中学生も高校生より高くなっている ($p < .01$)。

発達とともに、子どもの独立性、自立性が高まり、保護者がいろいろと手をかけることが次第に少なくなっていることが窺える。

②各尺度得点の分布は発達段階を通して類似したパターンを示している。各発達段階ともに「期待、干渉、心配」が高く、「不満、非難、盲従」が低いという曲線である。中国の保護者は各発達段階の子どもに対して一貫した態度で臨み、子どもを愛しながら、子どもに高い期待を寄せ、自分の立場で統制しようとする態度のようである。いわば「愛の鞭」的子育て方式をとっていると言えよう。

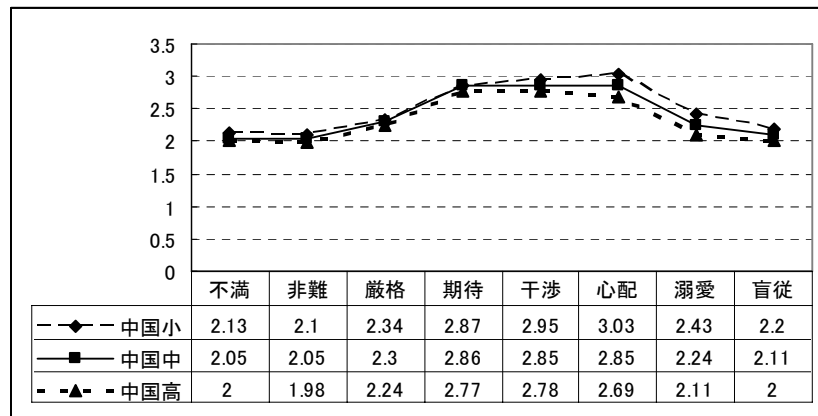


Fig. 21 中国：発達段階ごとの養育態度得点

第3節 日本における親子関係

1. 父親と母親の養育態度

次頁の Table56 は、影響の大きい養育者として挙げられた日本の父親と母親の養育態度の8尺度(不満、非難、厳格、期待、干渉、心配、溺愛、盲従)の平均得点である(t検

定で父母間有意差が見られた項目は表中に示してある)。

全体的にみると、各発達段階を通して、日本の父親と母親の養育態度得点は有意差が少なかった。幼稚園年長児への「干渉、溺愛、盲従」において、父親が母親より有意に高い。日本では母親を中心に回答しており、回答した父親の数が極めて少ない(7人)。日本のこの事情を考えると、回答した父親は片親であるか或いは母親が育児不能である可能性が高く、父親が母親の分まで子どもと関わろうとする態勢があるかもしれない。この他、中学生への「心配」において、母親が父親より有意に高い。高校生への「心配」、中学生への「干渉」において、母親が父親より高い傾向も見られた($p < .10$)。日本社会においても、主たる養育者とする父親と母親の養育態度はあまり差がないと言えよう。

Table 56 日本：父親と母親の養育態度得点

		不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従	人数
日本幼	父	1.80	2.02	2.20	1.55	2.00*	2.66	2.77****	2.41*	7
	母	1.85	2.14	2.25	1.68	1.71	2.35	2.21	2.07	254
日本小	父	2.01	1.96	2.11	2.04	2.15	2.32	2.04	1.93	64
	母	1.95	1.93	2.04	1.95	2.11	2.27	2.04	1.84	329
日本中	父	1.99	1.95	2.11	2.11	2.03	1.93	1.81	1.68	68
	母	1.97	2.09	2.16	2.20	2.16 ⁺	2.08*	1.86	1.68	322
日本高	父	1.90	1.89	2.01	1.91	1.88	1.84	1.85	1.65	74
	母	1.94	1.97	1.98	1.98	1.98	1.96 ⁺	1.80	1.66	392

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .005$, **** $p < .001$

2. 男児と女児別の親の養育態度

Table57 は、日本における男女児別の親の養育態度の各尺度の平均得点である(t検定で男女間に有意差が見られた項目は表中に示してある)。

Table57 日本：男女児別の養育態度得点

		不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従	人数
日本幼	男	1.89	2.19*	2.29*	1.72 ⁺	1.78*	2.36	2.25	2.08	135
	女	1.82	2.07	2.19	1.62	1.67	2.34	2.21	2.08	129
日本小	男	1.98	1.99*	2.1 ⁺	1.99	2.13	2.24	1.99	1.86	236
	女	1.91	1.86	1.98	1.92	2.06	2.32	2.12*	1.88	217
日本中	男	2.00	2.07	2.17	2.21	2.23**	2.09	1.92 ⁺	1.74 ⁺	199
	女	1.98	2.09	2.17	2.17	2.07	2.05	1.81	1.65	223
日本高	男	1.96	1.95	1.99	2.03*	2.02*	1.85	1.77	1.62	235
	女	1.92	1.96	2.00	1.92	1.91	2.01**	1.84 ⁺	1.69 ⁺	260

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .005$, **** $p < .001$

幼稚園年長児の「非難、厳格、干渉」、小学生の「非難」、中学生の「干渉」、高校生の

「期待、干渉」において、男子が女子より有意に高い。小学生の「溺愛」、高校生の「心配」において、女子が男子より有意に高い。幼稚園年長児の「期待」、小学生の「厳格」、中学生の「溺愛、盲従」において、男子が女子より高い傾向も見られた ($p < .10$)。高校生の「溺愛、盲従」において、女子が男子より高い傾向も見られた ($p < .10$)。

全体的には、各発達段階通して、男子に対しては「不満、非難、厳格、期待、干渉」の得点が高く、小学生・高校生女子に対しては「心配、溺愛、盲従」の得点が高くなっている。日本の親はやや男子に厳しく女子に甘い傾向といえるかもしれない。中学生男子への「干渉」が高い一方、「溺愛、盲従」も女子より高い。中学生男子に対して、日本の親が女子よりもあれこれ気に掛けることが多い傾向が窺える。

3. 発達に伴う親の養育態度の変化

Fig. 22 は、小学生、中学生、高校生に対する日本の養育者の養育態度の平均得点である。

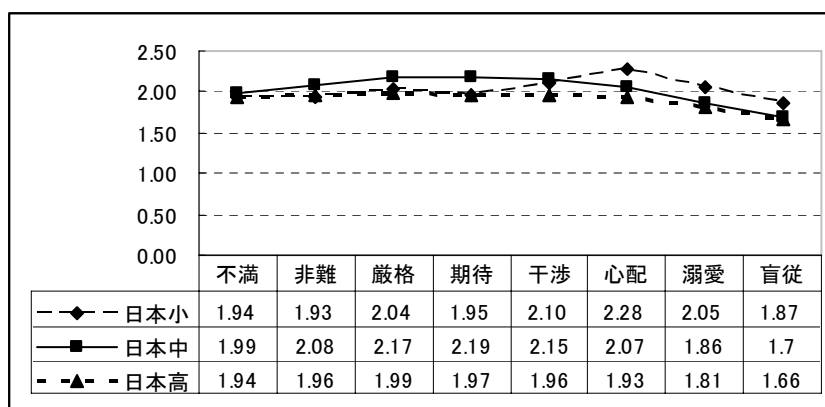


Fig. 22 日本：発達段階ごとの養育態度得点

「不満、非難、厳格、期待」においては、中学生の得点が高く、小学生と高校生との間には差はみられない。「干渉」においては、中学生の得点が高く、次いで小学生、高校生となっている。「心配、溺愛、盲従」においては、小・中・高校生と発達段階が高くなるにつれて低くなっている。分散分析の結果（一元配置：Tukey法、SPSS for Windows）、「不満」を除き、他のすべてにおいては有意差が見られた ($p < .01$)。多重比較の結果は以下のとおりである。

「非難、厳格、期待」においては、中学生は小・高校生より高く ($p < .01$)、小—高校生の間には有意差が認められない。「干渉」においては、小・中学生は高校生よりも高い ($p < .01$)。「心配」においては、小学生は中・高校生より、中学生は高校生よりも高い ($p < .01$)。「溺愛、盲従」においては、小学生は中・高校生より高い ($p < .01$)。

「心配、溺愛、盲従」を「甘さ」（「優しさ」「柔軟さ」）の側面とし、「不満、非難、厳格、期待、干渉」を「厳しさ」の側面として大別し、養育態度についてこの2側面からの分析を加えた。「甘さ」の側面は、発達に伴って低下する傾向となっている。こうした側面は低年齢の子どもに対するほど高くなりやすいのは理解できることである。一方、「厳しさ」の側面は、中学生の得点が最も高くなっている。この結果については二つの解釈可能であろう。一つは、中学生という発達段階が思春期で、疾風怒濤のいわば第二反抗期ともいう

べき時期で、親や大人に対する対抗的・抵抗的態度で受け止めやすい時期にあり、親の態度を厳しく受け止めがちになりやすいからという考えである。もう一つは、中学生という段階は、子どものな小学生段階と心身ともに大人への入り口にあつて自我の確立を目前にしている高校生との間にあつて、「中間人」とか「こどな」ともいわれるような中途半端な立場にあり、親としては小学生のように甘過ぎても問題であり、高校生のように大人扱いするにも時期尚早と考え、自ずから厳しい態度をとってしまうという考えである。

第4節 中国と日本における親子関係の比較

1. 全体としての特徴

Fig. 23、Fig. 24、Fig. 25、Fig. 26 は、中国と日本における養育態度の各下位尺度得点を発達段階別に示したものである。

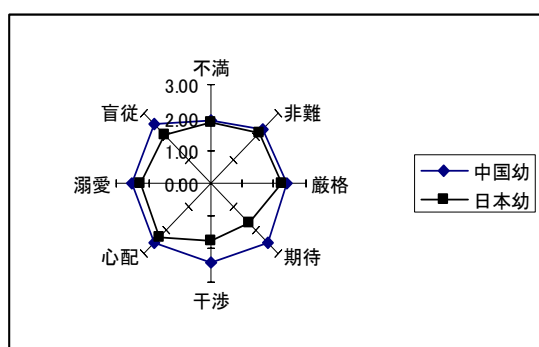


Fig. 23 幼稚園児に対する養育態度

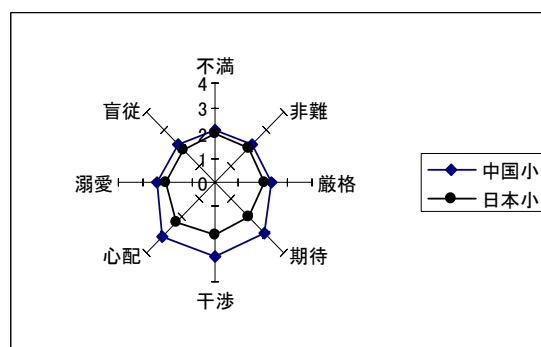


Fig. 24 小学生に対する養育態度

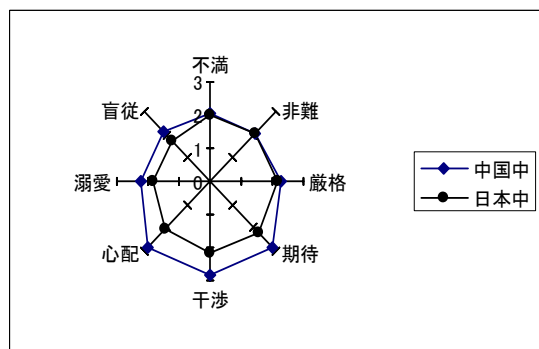


Fig. 25 中学生に対する養育態度

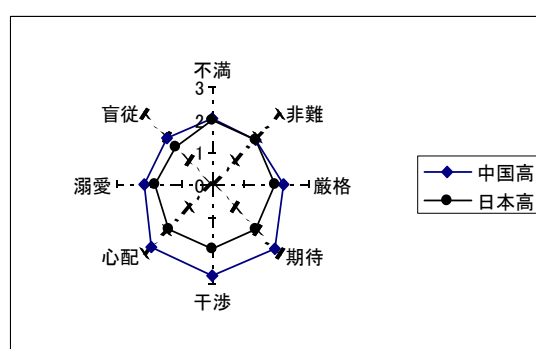


Fig. 26 高校生に対する養育態度

幼・小・中・高校生のいずれにおいても、中国の方の各尺度得点が高くなっている。また、両国間の得点差は各発達段階を通して、「期待、干渉、心配」において大きくなっている。分散分析の結果（一元配置：Tukey法、SPSS for Windows）、幼稚園年長児では、「不満」を除き全ての尺度において、中国の方が有意に高くなっている ($p < .001$)。小学生では全ての尺度において、中国の方が有意に高くなっている ($p < .001$)。中学生では「厳格、期待、干渉、心配、溺愛、盲従」の6尺度において中国の方が高く ($p < .001$)、「不満」においてその傾向が認められた ($p < .10$)。高校生では「厳格、期待、干渉、心配、溺愛、

盲従」の6尺度 ($p < .001$) 及び「不満」 ($p < .05$) において中国の方が高いことが認められた。

全体としてみると、中国においては日本に比べて、多くの面で子どもに働きかけていることが示唆される。養育態度の傾向別にみると、「不満、非難」といった「拒否」的態度においては両国間に大きな差異は認めず、「溺愛、盲従」といった「服従」的態度においては中国の方が高くなっている。今日の中国において「小皇帝」とか「小太陽」などと言われる中国の“一人っ子”の育て方の特徴とみることができるとも思われる。最も顕著な差異がみられるのは、「保護」的態度（「心配、干渉」）及び「支配」的態度（「厳格、期待」）の2側面であった。中国においては、親が「保護、支配」的であり、子どもを愛するだけでなく、望ましい方向に導くことが大切だと考えていることの反映と解釈することができる。

2. 両親の養育態度

Table54 及び Table56 に示したように、中国においても日本においても父母間に顕著な差異はみられない。統計的に有意差や傾向が見出された下位尺度は、中国も日本にも幼稚園年長児への態度において見られ、中国の「厳格、干渉」、日本の「干渉、溺愛、盲従」において、父親が母親より有意に高い。年少児に対して、中国も日本も父親の関わりが多いことが伺える。

一方、中国では、高校生の「期待」においてのみ母親の方が高い傾向にあった ($p < .10$)。日本では、中学生の「心配」において母親の方が有意に高く、高校生の「心配」及び中学生の「干渉」において母親が父親より高い傾向が見られた ($p < .10$)。

本研究においては、両親双方に対する反応でなく、自分に影響が大きい養育者一人に対する評定を回答するという方法を用いた。従って、上の結果は影響の大きい養育者の態度に関するものである。

3. 養育態度における子どもの性差

Table55 及び Table57 にみられるように、中国においては性差を示す項目は少ない。一方、日本では性差を示す項目数は比較的多くなっている。

中国の養育態度における性差の特徴は、性差のみられる下位尺度の数が少なく、性差がある場合には男子の方が高く、活発に動き回る男子に対して関わる人が多いことが示唆される。日本の場合は、「非難、厳格、期待、干渉」などの「厳しさ」の態度は男子の方に対して高く、「心配、溺愛、盲従」などの「甘さ」は、中学生を除き女子の方が高くなっている。また、中学生に対しては、厳しい「干渉」的態度も甘い「溺愛、盲従」的態度も男子に対しての方が高くなっている。

4. 発達的变化に関する検討

Fig. 21 及び Fig. 22 に示したように、子どもの発達に伴う養育態度の変化は中国と日本の間に差異がみられた。中国では、厳しさや甘さに関係なく、いずれの態度においても発達に伴って得点が減少している。また、その親子関係のパターンは類似しており、いずれの発達段階においても「期待、干渉、心配」が高くなっている。中国における養育態度は、

子どもから大人になるまで徐々に自立を促しながら、厳格と柔軟のバランスを維持しつづ一貫性を保っていることが示唆される。

一方、日本においては、厳格と柔軟の2側面において養育態度の変化が異なっている。「心配、溺愛、盲従」などの柔軟さにおいては中国と同様に発達に伴って得点が減少しているが、「不満、非難、厳格、期待、干渉」など厳格さにおいては中学生で高くなっている。日本における養育態度の特徴として、厳格の面において、中学生に対して高い関心や注意を注いでいることが示唆される。

第5節 親子関係と社会的問題解決方略の相関関係

社会的問題解決方略に関する調査では、幼稚園年長児と小・中・高校生は、調査の方法も回答集計の方法も異なるため、社会的問題解決方略と親子関係（親の養育態度）の相関を見るには、両者を区分して分析したほうが妥当であると判断した。ここでは、小・中・高校生の回答を元に、社会的問題解決方略と親子関係（親の養育態度）の相関について検討する。

1. 全体としての相関

全体の社会的問題解決方略と親子関係の相関は Table58 に示したとおりである（相関係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している）。

Table58 から、以下のことが見てとれる。

①全体的には、本研究において、親子関係のよくない傾向として取り上げた親の拒否的態度（不満、非難）、支配的態度（厳格、期待）、保護的態度（干渉、心配）、服従的態度（親が逆に子どもに従順する態度：溺愛、盲従）は、殆どの社会的問題解決方略と有意な相関を示している。

親子関係、親が子どもに接している態度が、子どもの問題解決行動や対人関係に何らかの影響を及ぼしていることは統計的に裏付けられている。

②親の「不満、非難、厳格」の態度は、子どもの攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）と正の相関を示している。親の拒否的態度は子どもの攻撃性を高まってしまう傾向が示されている。一方、親の「干渉、心配、溺愛」の態度は、子どもの背後的攻撃、断絶的攻撃と弱い負の相関を示している。親の保護的態度は子どもの欲求不満や人間関係における抑圧を解き、子どもが背後的に人を攻撃したり、人との関係を安易に絶ったりすることを抑制する傾向があるのではないかと考えられる。

③親の「心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの先生頼りと正の相関を示している。親の保護的態度は子どもの自立を妨げ、子どもの問題解決において権威者（先生）に依頼する傾向が高くなると考えられる。

④親子関係の全ての下位尺度、特に親の「厳格、期待、干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、他人を推薦する「間接的主張2」と正の相関を示している。親の拒否的態度（不満、非難）、支配的態度（厳格、期待）、保護的態度（干渉、心配）、服従的態度（溺愛、盲従）は、いずれも子どもの問題解決において、推薦された相手の気持ちや相手との関係を配慮

せず、安易に自分が逃れるよう他人を推薦し、他人を引きずりこむことに頼ってしまう傾向が見られる。

⑤親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの騒ぎ回避抑制、非故意性抑制、自己責任抑制、と正の相関を示している。親の保護的、子どもに服従的態度は、子どもの問題解決に立ち向かう積極性や相手との対決を抑制し、子どもの自己抑制を高める傾向が見られる。

Table58 全体の社会的問題解決方略と親子関係の相関係数

	不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従
直攻	.107(**)	.124(**)	.114(**)	.069(**)	.053(**)	.031(**)	.056(**)	.080(**)
表情攻	.125(**)	.125(**)	.121(**)	.093(**)	.062(**)	.023(**)	.035(**)	.065(**)
背後攻	.120(**)	.138(**)	.098(**)	.035(**)	-.019(*)	-.052(**)	-0.004	.026(**)
断絶攻	.113(**)	.135(**)	.095(**)	-.024(**)	-.064(**)	-.087(**)	-.021(**)	0
直主	.018(*)	.035(**)	.041(**)	.056(**)	.059(**)	.048(**)	.035(**)	.042(**)
間主	.068(**)	.077(**)	.072(**)	.047(**)	.036(**)	.026(**)	.043(**)	.051(**)
先生	.057(**)	.068(**)	.071(**)	0.012	.040(**)	.091(**)	.146(**)	.123(**)
ジャン	.053(**)	.052(**)	.049(**)	0.023	.030(*)	.040(**)	.070(**)	.081(**)
間主2	.093(**)	.084(**)	.148(**)	.253(**)	.268(**)	.225(**)	.138(**)	.177(**)
関係抑	.070(**)	.037(**)	.045(**)	.024(**)	.036(**)	.055(**)	.087(**)	.082(**)
騒ぎ抑	.099(**)	.057(**)	.074(**)	.098(**)	.118(**)	.127(**)	.136(**)	.140(**)
非故意抑	0.032	-0.016	0.008	.087(**)	.104(**)	.120(**)	.088(**)	.048(*)
自己責抑	.056(**)	0.03	.046(*)	.069(**)	.090(**)	.127(**)	.109(**)	.103(**)
無意義抑	.060(**)	0.036	.051(**)	.079(**)	.080(**)	.041(*)	0.021	.037(*)

** は相関係数が 1% 水準で、* は相関係数が 5% 水準で有意である。

2. 国別の相関

中国と日本の社会的問題解決方略と親子関係の相関は Table59 に示したとおりである（相関係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している）。

Table59 から、以下のことが見てとれる。

①日本は中国より、社会的問題解決方略と親子関係の相関が高い。日本は中国より、親の態度が子どもの問題解決行動や対人関係に与える影響が大きいことが特徴的である。これは 2 点のことが考えられる。一つは Fig. 23、Fig. 24、Fig. 25、Fig. 26 に示されたように、中国は日本より、親の拒否的態度（不満、非難）以外、親の支配的態度（厳格、期待）、保護的態度（干渉、心配）、子どもへの服従的態度（溺愛、盲従）がいずれも強く、多くの面で子どもに働きかけていることが示唆される。中国においては、あまりにもつぎつぎと親から指示や干渉が伝えられるので、それに一々反応してはたまらない。そこで、親の言うことを右から左へと流れてしまい、親の態度に対して、一種の感情や反応の鈍麻が生じ、親の態度が自らの行動への影響を薄めたのではないかと考えられる。もう一つは、級友との意見対立場面における対応から見られるように、中国では自分の意志を貫くほうが優先であるが、日本では相手との関係が発達に伴って重要視され、自分の意志を貫くことと拮

抗している。日本は「察しの文化」、日本人は「自己がない」とよく言われているように、日本人は相手の気持ちや場の雰囲気を感じ察し、それに合わせて行動する傾向が存在する。一方、中国は徹底的な個人主義と言われているように、中国人は自分独自の考えを持ち、流れに流されない強い「自己」を持つことが評価される傾向が存在する。それと同様に、日本の子どもは親の態度を敏感に察知し、自分の行動を親の期待とおりに合わせ、親の態度に多く影響を受けるが、中国の子どもは親の態度を配慮するよりも自分の内在的欲求を重視するため、親の態度の影響も日本より薄いのではないかと思われる。

Table59 中国と日本の社会的問題解決方略と親子関係の相関係数

		不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従
直攻	中国	.099(**)	.119(**)	.124(**)	.101(**)	.055(**)	.039(**)	.054(**)	.055(**)
	日本	.123(**)	.133(**)	.124(**)	.118(**)	.136(**)	.088(**)	.089(**)	.146(**)
表情攻	中国	.077(**)	.073(**)	.088(**)	.060(**)	0.01	-0.019	-0.003	.024(*)
	日本	.173(**)	.175(**)	.158(**)	.171(**)	.158(**)	.089(**)	.084(**)	.124(**)
背後攻	中国	.094(**)	.097(**)	.093(**)	.055(**)	-0.015	-.037(**)	-0.003	.031(**)
	日本	.168(**)	.189(**)	.149(**)	.177(**)	.139(**)	.068(**)	.067(**)	.114(**)
断絶攻	中国	.086(**)	.094(**)	.097(**)	.030(**)	-.025(*)	-.038(**)	-0.007	0.017
	日本	.180(**)	.195(**)	.171(**)	.163(**)	.152(**)	.085(**)	.083(**)	.129(**)
直主	中国	-0.018	-0.011	0.018	.059(**)	.060(**)	.036(**)	0.013	0.017
	日本	.053(**)	.079(**)	.064(**)	.081(**)	.094(**)	.085(**)	.064(**)	.076(**)
間主	中国	.030(**)	.038(**)	.049(**)	.073(**)	.045(**)	0.013	.021(*)	.043(**)
	日本	.120(**)	.123(**)	.121(**)	.131(**)	.149(**)	.142(**)	.115(**)	.120(**)
先生	中国	.051(**)	.050(**)	.074(**)	.072(**)	.091(**)	.111(**)	.164(**)	.149(**)
	日本	.085(**)	.094(**)	.110(**)	.098(**)	.168(**)	.242(**)	.209(**)	.194(**)
ジャン	中国	0.032	.039(*)	.059(**)	.056(**)	.061(**)	.080(**)	.111(**)	.103(**)
	日本	.087(**)	.072(**)	.069(**)	.097(**)	.126(**)	.116(**)	.084(**)	.126(**)
間主2	中国	0.006	0.005	0.037	.065(**)	0.048	0.025	-0.008	0.009
	日本	.125(**)	.139(**)	.147(**)	.150(**)	.177(**)	.122(**)	.116(**)	.157(**)
関係抑	中国	.030(**)	0.015	.034(**)	.042(**)	.047(**)	.062(**)	.079(**)	.090(**)
	日本	.116(**)	.063(**)	.070(**)	.065(**)	.097(**)	.119(**)	.126(**)	.112(**)
騒ぎ抑	中国	.047(**)	.025(*)	.029(**)	.052(**)	.048(**)	.059(**)	.090(**)	.098(**)
	日本	.137(**)	.082(**)	.089(**)	.078(**)	.127(**)	.140(**)	.149(**)	.146(**)
非故意抑	中国	-0.036	-.071(**)	-0.046	-0.022	0.024	.053(*)	0.049	0.01
	日本	.073(**)	0.025	0.004	0.037	0.019	0.046	0.047	-0.014
自己責抑	中国	.063(*)	0.043	.082(**)	.068(**)	.076(**)	.092(**)	.062(*)	.084(**)
	日本	0.035	0.008	-0.013	0.002	0.037	.114(**)	.124(**)	.081(**)
無意義抑	中国	0.015	-0.007	-0.003	0.001	0.015	-0.009	-0.002	0.027
	日本	.094(**)	.074(**)	.075(**)	.083(**)	.067(*)	0.005	-0.003	-0.008

** は相関係数が 1% 水準で、* は相関係数が 5% 水準で有意である。

②日本において、親子関係の各下位尺度ともに、子どもの直接的攻撃、間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃）、間接的主張、先生頼り、他人を推薦する「間接的主張2」と正の相関を示している。日本において、親と子どもの関わりが多いことは子どもの問題解決における攻撃性、主張性を高める傾向が見られる。

③日中共に、親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どものジャンケン志向と正の相関を示している。親の保護的態度（干渉、心配）、服従的態度（親が逆に子どもに従順する態度：溺愛、盲従）は、子どもの相手の気持ちや相手との関係に傷つけず、安易に葛藤を解決できるジャンケンの使用を高める傾向が見られる。

④中国において、親の「干渉、心配」の態度が子どもの背後的攻撃、断絶的攻撃と、親の「非難」の態度が子どもの非故意性抑制（相手への寛恕）と弱い負の相関を示しているが、日本では反対に正の相関を示している。これは興味深く理解しがたい傾向であるが、推測としては、親の保護的態度（干渉、心配）と「非難」は、強い自己を持つ中国の子どもには攻撃性を弱め、相手への理解を高める牽制的作用があるが、弱い自己を持つ日本の子どもには逆に親の後ろ盾で主張性を高めたのではないかと考えられる。

3. 男女別の相関

男子と女子の社会的問題解決方略と親子関係の相関は Table60 に示したとおりである（相関係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している）。

Table60 から、以下のことが見てとれる。

①男子と女子の社会的問題解決方略と親子関係の相関は極めて類似している。男女共に、親の「不満、非難、厳格」の態度は、子どもの攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）と正の相関、親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制、自己責任抑制）と正の相関を示している。

②一方、親の「干渉、心配、溺愛」の態度は、女子の背後的攻撃と負の相関を示しているが、男子では反対に弱い正の相関を示している。断絶的攻撃との相関も、女子が男子より高い負の相関を示している。これも興味深く理解しがたい傾向であるが、推測としては、親の保護的態度（干渉、心配）は、社会的問題解決における社会性の発達が早く、強い自己を持つ女子には攻撃性を弱める牽制的作用があるが、社会的問題解決における社会性の発達が遅く、そもそも背後的攻撃、断絶的攻撃があまり取らない男子には影響が少ないのではないかと考えられる。

③男子は女子より、先生頼りと親子関係の相関が高い。男子は社会的問題解決における社会性の発達が遅く、先生頼りを多用すると同様に、権威者である親の影響も大きく受けているのではないかと考えられる。

Table60 男子と女子の社会的問題解決方略と親子関係の相関係数

		不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従
直攻	男	.118(**)	.138(**)	.115(**)	.055(**)	.026(*)	.024(*)	.044(**)	.067(**)
	女	.090(**)	.102(**)	.102(**)	.069(**)	.055(**)	.031(**)	.050(**)	.080(**)
表情 攻	男	.133(**)	.121(**)	.127(**)	.111(**)	.098(**)	.070(**)	.098(**)	.105(**)
	女	.119(**)	.137(**)	.120(**)	.084(**)	.040(**)	-.026(*)	-.029(**)	.024(*)
背後 攻	男	.160(**)	.149(**)	.123(**)	.085(**)	.049(**)	.023(*)	.057(**)	.075(**)
	女	.084(**)	.137(**)	.081(**)	-0.004	-.068(**)	-.130(**)	-.062(**)	-0.021
断絶 攻	男	.152(**)	.160(**)	.129(**)	0.016	-.022(*)	-.042(**)	0.008	.030(**)
	女	.074(**)	.109(**)	.060(**)	-.064(**)	-.107(**)	-.139(**)	-.055(**)	-.035(**)
直主	男	.033(**)	.043(**)	.055(**)	.069(**)	.070(**)	.063(**)	.047(**)	.045(**)
	女	0.004	.032(**)	.031(**)	.045(**)	.051(**)	.032(**)	.023(*)	.037(**)
間主	男	.096(**)	.102(**)	.107(**)	.084(**)	.084(**)	.068(**)	.075(**)	.082(**)
	女	.043(**)	.062(**)	.043(**)	0.016	-0.001	-0.018	0.013	0.02
先生	男	.102(**)	.124(**)	.135(**)	.057(**)	.069(**)	.132(**)	.151(**)	.155(**)
	女	0.013	0.007	0.001	-.040(**)	-0.001	.043(**)	.135(**)	.085(**)
ジャ ン	男	.062(**)	.058(**)	.053(**)	.044(*)	.048(**)	.059(**)	.082(**)	.092(**)
	女	.045(*)	.048(*)	.044(*)	-0.004	0.007	0.015	.053(**)	.062(**)
間主2	男	.105(**)	.093(**)	.144(**)	.227(**)	.264(**)	.233(**)	.181(**)	.181(**)
	女	.088(**)	.082(**)	.157(**)	.282(**)	.278(**)	.214(**)	.088(**)	.172(**)
関係 抑	男	.075(**)	.048(**)	.054(**)	.033(**)	.054(**)	.074(**)	.115(**)	.104(**)
	女	.068(**)	.029(**)	.040(**)	0.02	.028(*)	.036(**)	.063(**)	.058(**)
騒ぎ 抑	男	.098(**)	.053(**)	.077(**)	.095(**)	.124(**)	.147(**)	.179(**)	.178(**)
	女	.103(**)	.060(**)	.072(**)	.101(**)	.114(**)	.106(**)	.092(**)	.095(**)
非故 意抑	男	0.05	-0.006	0.024	.119(**)	.152(**)	.163(**)	.160(**)	.091(**)
	女	0.019	-0.023	-0.003	.058(*)	.065(*)	.070(**)	0.012	-0.006
自己 責抑	男	0.025	0.003	0.047	.063(*)	.089(**)	.143(**)	.149(**)	.145(**)
	女	.092(**)	.062(*)	.055(*)	.087(**)	.115(**)	.119(**)	.080(**)	.065(*)
無意 義抑	男	.058(*)	0.038	0.031	.066(*)	.064(*)	0.036	0.039	0.042
	女	.064(*)	0.035	.072(**)	.099(**)	.106(**)	0.047	0.006	0.032

** は相関係数が1%水準で、* は相関係数が5%水準で有意である。

4. 場面別の相関

(1) 持物の損害場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関

持物の損害場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関はTable61に示したとおりである(相関係数が0.1以上の値はゴシック体で、0.2以上の値は斜体字で示している)。

Table61から、持物の損害場面において、親の「不満、非難、厳格」の態度は、子どもの攻撃的方略(直接的攻撃、間接的攻撃)と正の相関、親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの抑制的方略(関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制)と正の相

関、子どもの背後的攻撃、断絶的攻撃と負の相関を示している。親の拒否的態度は子どもの攻撃性を高め、親の保護的態度は子どもの自己抑制を高めながら、不満によって背後的に人を攻撃したり、相手との関係を絶ったりすることも抑制する傾向が見られる。

Table61 持物の損害場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関係数

	不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従
直攻	.080(**)	.121(**)	.113(**)	.060(**)	0.021	0.014	.042(*)	.068(**)
表情攻	.092(**)	.100(**)	.097(**)	.089(**)	.049(**)	0.007	0.021	0.028
背後攻	.088(**)	.114(**)	.066(**)	0.006	-.070(**)	-.114(**)	-.043(*)	-0.021
断絶攻	.090(**)	.110(**)	.087(**)	-0.019	-.060(**)	-.084(**)	-0.005	0.011
直主	.045(*)	.066(**)	.042(*)	0.019	0.008	-0.025	0.023	0.035
間主	.056(**)	.078(**)	.085(**)	0.01	-0.005	0	.050(**)	.043(*)
先生	0.033	.047(*)	.038(*)	-.038(*)	-0.017	.044(*)	.122(**)	.089(**)
関係抑	.045(*)	0.006	0.01	0.022	0.025	.048(**)	.048(**)	.043(*)
騒ぎ抑	.074(**)	0.026	0.026	.060(**)	.071(**)	.073(**)	.078(**)	.074(**)
非故意抑	0.032	-0.016	0.008	.087(**)	.104(**)	.120(**)	.088(**)	.048(*)

** は相関係数が 1% 水準で、* は相関係数が 5% 水準で有意である。

(2) 級友との意見対立場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関

級友との意見対立場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関は Table62 に示したとおりである（相関係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している）。

Table62 級友との意見対立場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関係数

	不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従
直攻	.142(**)	.136(**)	.152(**)	.201(**)	.207(**)	.178(**)	.138(**)	.160(**)
表情攻	.115(**)	.109(**)	.115(**)	.095(**)	.100(**)	.088(**)	.108(**)	.118(**)
背後攻	.105(**)	.106(**)	.067(**)	0.007	-0.009	-0.004	.081(**)	.090(**)
断絶攻	.107(**)	.131(**)	.123(**)	.057(**)	.040(*)	.042(*)	.069(**)	.090(**)
直主	0.024	0.019	.050(**)	.120(**)	.113(**)	.099(**)	0.023	.042(*)
間主	.045(*)	.040(*)	.039(*)	0.032	0.017	0.01	0.029	0.02
ジャン	.067(**)	.062(**)	.066(**)	.038(*)	.056(**)	.047(*)	.085(**)	.093(**)
関係抑	.065(**)	0.033	0.013	-.059(**)	-.068(**)	-.052(**)	0.019	0.018
騒ぎ抑	.103(**)	.062(**)	.079(**)	.091(**)	.102(**)	.111(**)	.126(**)	.131(**)

** は相関係数が 1% 水準で、* は相関係数が 5% 水準で有意である。

Table62 から、級友との意見対立場面において、他の場面と反対に、親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの直接的攻撃、表情攻撃と正の相関、子どもの関係重視抑制と弱い負の相関を示している。また、名誉の侵害場面以外の他の場面より、親の「期待、

干渉、心配」と子どもの直接的主張との相関が高いことも特徴的である。

意見の対立において、自分の意志を貫くことは強い自己の現れと思われる。このように、親の保護的態度は子どもの自己形成を助長し、意見の対立において、自分の意志を貫くための攻撃性、主張性を高める傾向が窺える。

(3) 権利の侵害場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関

権利の侵害場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関は Table63 に示したとおりである(相関係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している)。

Table63 から、権利の侵害場面は持物の損害場面と同様に、親の「不満、非難、厳格」の態度は、子どもの攻撃的方略(直接的攻撃、間接的攻撃)と正の相関、親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの抑制的方略(関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、自己責任抑制)と正の相関、子どもの背後的攻撃、断絶的攻撃と負の相関を示している。親の拒否的態度は子どもの攻撃性を高め、親の保護的態度は子どもの自己抑制を高めながら、不満によって背後的に人を攻撃したり、相手との関係を絶ったりすることも抑制する傾向が見られる。

Table63 権利の侵害場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関係数

	不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従
直攻	.121(**)	.135(**)	.130(**)	.066(**)	.038(*)	-0.008	0.024	.057(**)
表情攻	.121(**)	.133(**)	.145(**)	.120(**)	.078(**)	0.031	0.012	.044(*)
背後攻	.135(**)	.152(**)	.106(**)	0.035	-0.023	-.068(**)	-0.028	0.011
断絶攻	.126(**)	.141(**)	.097(**)	-0.01	-.064(**)	-.092(**)	-0.029	-0.008
直主	0.026	.048(*)	0.033	-0.003	-0.02	-0.032	0.001	0.002
間主	.093(**)	.096(**)	.074(**)	0.027	0.011	-0.02	0.03	0.027
先生	.066(**)	.088(**)	.079(**)	0.004	0.023	.043(*)	.102(**)	.097(**)
ジャン	.042(*)	.045(*)	0.034	0.011	0.008	0.034	.057(**)	.072(**)
関係抑	.070(**)	0.036	.060(**)	.079(**)	.102(**)	.126(**)	.112(**)	.098(**)
騒ぎ抑	.100(**)	.052(**)	.088(**)	.157(**)	.174(**)	.186(**)	.173(**)	.161(**)
自己責抑	.056(**)	0.03	.046(*)	.069(**)	.090(**)	.127(**)	.109(**)	.103(**)

** は相関係数が 1% 水準で、* は相関係数が 5% 水準で有意である。

(4) 名誉の侵害場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関

名誉の侵害場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関は Table64 に示したとおりである(相関係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している)。

Table64 から、名誉の侵害場面において、級友との意見対立場面と類似した傾向が見られた。他の場面と反対に、親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの直接的攻撃、表情攻撃、直接的主張、間接的主張と正の相関を示している。一方、親の「期待、干渉、心配、溺愛、盲従」、特に「干渉、心配」の態度は、他の場面より子どもの断絶的攻撃と高い負の相関を示している。

名誉の侵害に対する対決は、自尊心が高く、社会的自己を意識し、自分を取り巻く環境

における自分の体面守る行為である。親の保護的態度は子どもの社会的自己の形成を助長し、子どもの自己防衛のための攻撃性、主張性を高めると同時に、子どもが安易に短絡的に相手との関係を絶つことも抑制する傾向が窺える。

Table64 名誉の侵害場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関係数

	不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従
直攻	.092(**)	.121(**)	.121(**)	.094(**)	.110(**)	.111(**)	.143(**)	.145(**)
表情攻	.145(**)	.146(**)	.141(**)	.131(**)	.109(**)	.055(**)	.047(*)	.088(**)
背後攻	.111(**)	.138(**)	.104(**)	.056(**)	0.008	-0.023	0.014	0.035
断絶攻	.096(**)	.131(**)	.068(**)	-.098(**)	-.139(**)	-.171(**)	-.088(**)	-.079(**)
直主	0.016	0.036	.070(**)	.149(**)	.208(**)	.228(**)	.188(**)	.197(**)
間主	.065(**)	.073(**)	.101(**)	.163(**)	.173(**)	.144(**)	.094(**)	.124(**)
先生	.044(*)	.053(**)	.070(**)	0.012	.062(**)	.127(**)	.189(**)	.152(**)
関係抑	.092(**)	.054(**)	.050(**)	-0.017	0	0.006	.067(**)	.049(**)
騒ぎ抑	.099(**)	.053(**)	.060(**)	.048(**)	.077(**)	.097(**)	.116(**)	.105(**)
無意義抑	.060(**)	0.036	.051(**)	.079(**)	.080(**)	.041(*)	0.021	.037(*)

** は相関係数が 1% 水準で、* は相関係数が 5% 水準で有意である。

(5) 役割の怠惰場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関

役割の怠惰場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関は Table65 に示したとおりである(相関係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している)。

Table65 役割の怠惰場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関係数

	不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従
直攻	.136(**)	.149(**)	.162(**)	.146(**)	.133(**)	.100(**)	.087(**)	.120(**)
表情攻	.136(**)	.135(**)	.117(**)	.056(**)	0.034	-0.017	0.021	.066(**)
背後攻	.145(**)	.166(**)	.125(**)	0.03	-0.024	-.054(**)	-0.004	0.036
断絶攻	.138(**)	.166(**)	.125(**)	-0.018	-.048(**)	-.063(**)	0.01	0.036
直主	0.011	0.029	.051(**)	.079(**)	.091(**)	.091(**)	.042(*)	0.034
間主	.061(**)	.084(**)	.057(**)	0.003	0.012	0.028	.056(**)	.058(**)
先生	.091(**)	.087(**)	.103(**)	.077(**)	.098(**)	.152(**)	.173(**)	.159(**)
関係抑	.080(**)	.049(**)	.046(*)	0.027	.037(*)	.053(**)	.107(**)	.113(**)
騒ぎ抑	.099(**)	.064(**)	.075(**)	.087(**)	.117(**)	.111(**)	.152(**)	.167(**)

** は相関係数が 1% 水準で、* は相関係数が 5% 水準で有意である。

Table65 から、役割の怠惰場面は持物の損害、権利の侵害場面と同様に、親の「不満、非難、厳格」の態度は、子どもの攻撃的方略(直接的攻撃、間接的攻撃)と正の相関、親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの抑制的方略(関係重視抑制、騒ぎ回避抑制)と正の相関、子どもの背後的攻撃、断絶的攻撃と弱い負の相関を示している。一方、

親の「期待、干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの直接的攻撃と正の相関も示している。

親の拒否的態度は子どもの攻撃性を高め、親の保護的態度は子どもの自己抑制を高めながら、不満によって背後的に人を攻撃したり、相手との関係を絶ったりすることも抑制する傾向が見られる。一方、役割の怠惰に対する対決は、役割の遂行を強く求める社会の要求に応えることであり、親の保護的態度が子どもの直接的攻撃を高めることは、子どもの社会性を高めることでもあると考えられる。

(6) 先生との意見対立場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関

先生との意見対立場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関は Table66 に示したとおりである（相関係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している）。

葛藤の相手は権威者の先生であるゆえに、社会的問題解決方略と親子関係の相関も他の場面と異なる傾向が見られた。他の場面と正反対に、親の「期待、干渉、心配、溺愛、盲従」、特に「期待、干渉、心配」の態度は、子どもの直接的攻撃と高い負の相関を示しており、子どもの直接的主張とも弱い負の相関を示している。親の「厳格、期待、干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、他の場面より、子どもの抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）と高い正の相関を示している。

先生に対して、直接的に攻撃しない、主張しない、先生との関係を保ちたいことは先生の権威性が高いことの現れである。親の保護的、子どもへの従順的な態度は、先生の権威性を高めることにつながる結果である。これも一見理解しがたいが、子どもの成長における「同一視」の対象を考えると納得いくかもしれない。つまり、親の保護的、子どもへの従順的な態度は、親が子どもの尊敬する「同一視」の対象になることが難しくなり、代わりに先生を「同一視」の対象として求めることになり、先生の権威性が高くなったのではないかと考えられる。

Table67 先生との意見対立場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関係数

	不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従
直攻	.090(**)	.107(**)	0.024	-.145(**)	-.181(**)	-.206(**)	-.088(**)	-.055(**)
表情攻	.164(**)	.151(**)	.135(**)	.084(**)	0.02	-0.012	0.017	.065(**)
背後攻	.152(**)	.172(**)	.130(**)	.073(**)	0	-.047(*)	-0.027	0.026
断絶攻	.159(**)	.170(**)	.109(**)	-.045(*)	-.107(**)	-.155(**)	-.069(**)	-0.024
直主	-0.008	0.02	0.014	-0.009	-0.026	-.055(**)	-.059(**)	-.053(**)
間主	.091(**)	.093(**)	.077(**)	.048(**)	0.009	-0.004	0.003	0.034
間主2	.093(**)	.084(**)	.148(**)	.253(**)	.268(**)	.225(**)	.138(**)	.177(**)
関係抑	.077(**)	.052(**)	.098(**)	.100(**)	.127(**)	.162(**)	.182(**)	.182(**)
騒ぎ抑	.124(**)	.088(**)	.120(**)	.150(**)	.174(**)	.189(**)	.184(**)	.215(**)

** は相関係数が 1% 水準で、* は相関係数が 5% 水準で有意である。

5. 発達段階別の相関

各発達段階における社会的問題解決方略と親子関係の相関は Table67、Table68、Table69 に示したとおりである（相関係数が 0.1 以上の値はゴシック体で、0.2 以上の値は斜体字で示している）。

Table67、Table68、Table69 から、以下のことが見てとれる。

① 各発達段階における社会的問題解決方略と親子関係の相関は類似した傾向を示している。親の「不満、非難、厳格」の態度は、子どもの攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）と正の相関、親の「期待、干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制、自己責任抑制）と正の相関、子どもの背後の攻撃、断絶的攻撃と弱い負の相関を示している。親の拒否的態度は子どもの攻撃性を高め、親の保護的態度は子どもの自己抑制を高めながら、不満によって背後的に人を攻撃したり、相手との関係を絶ったりすることも抑制する傾向が見られる。

② 発達に伴い、親の「不満、非難、厳格」の態度と子どもの攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）、無意義抑制との相関が低くなる傾向が見られる。発達に伴い、子どもの自己が徐々に形成し、親の拒否的態度への耐性も徐々に高くなり、親の影響も薄くなったのではないかと考えられる。

③ 発達に伴い、親の「期待、干渉、心配、溺愛、盲従」、特に「期待、干渉、心配」の態度と子どもの他人を推薦する「間接的主張 2」との相関が高くなる傾向が見られる。発達に伴い、親の支配的態度（厳格、期待）、保護的態度（干渉、心配）、服従的態度（親が逆に子どもに従順する態度：溺愛、盲従）は、いずれも子どもの問題解決において、推薦された相手の気持ちや相手との関係を配慮せず、安易に自分が逃れるよう他人を推薦し、他人を引きずりこむことを助長してしまう傾向があると考えられる。

Table67 小学生における社会的問題解決方略と親子関係の相関係数

	不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従
直攻	.125(**)	.137(**)	.144(**)	.071(**)	.045(**)	0.018	.030(*)	.049(**)
表情攻	.150(**)	.162(**)	.171(**)	.138(**)	.122(**)	.092(**)	.090(**)	.102(**)
背後攻	.173(**)	.163(**)	.138(**)	.089(**)	.059(**)	.038(**)	.055(**)	.072(**)
断絶攻	.136(**)	.148(**)	.128(**)	0.01	-0.02	-.038(**)	0.013	.041(**)
直主	.032(*)	.040(**)	.049(**)	0.02	.062(**)	.067(**)	.077(**)	.065(**)
間主	.108(**)	.099(**)	.099(**)	0.026	.042(**)	.049(**)	.083(**)	.086(**)
先生	.062(**)	.058(**)	.040(*)	-.056(**)	-.061(**)	-0.031	.053(**)	.046(**)
ジャン	.057(*)	0.035	0.037	0.04	0.039	0.041	.057(*)	.064(**)
間主 2	.137(**)	.136(**)	.173(**)	.184(**)	.233(**)	.201(**)	.161(**)	.171(**)
関係抑	.064(**)	.038(**)	.050(**)	.048(**)	.062(**)	.073(**)	.100(**)	.082(**)
騒ぎ抑	.097(**)	.058(**)	.066(**)	.096(**)	.105(**)	.109(**)	.127(**)	.117(**)
非故意抑	0.049	0.001	0.022	.087(**)	.116(**)	.126(**)	.133(**)	0.053
自己責抑	-0.01	-0.036	-0.015	0.045	.101(**)	.159(**)	.107(**)	.071(*)
無意義抑	0.056	0.05	.094(**)	.145(**)	.169(**)	.030(*)	.133(**)	.107(**)

** は相関係数が 1% 水準で、* は相関係数が 5% 水準で有意である。

Table68 中学生における社会的問題解決方略と親子関係の相関係数

	不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従
直攻	.080(**)	.099(**)	.062(**)	0.006	0.004	-0.015	.048(**)	.072(**)
表情攻	.126(**)	.117(**)	.107(**)	.058(**)	.031(*)	0.002	.043(**)	.066(**)
背後攻	.122(**)	.165(**)	.134(**)	.033(*)	-0.018	-.044(**)	.026(*)	.051(**)
断絶攻	.134(**)	.167(**)	.140(**)	0.008	-0.02	-.058(**)	0	0.016
直主	0.011	.026(*)	.036(**)	.087(**)	.092(**)	.075(**)	.042(**)	.048(**)
間主	.054(**)	.085(**)	.077(**)	.075(**)	.077(**)	.057(**)	.077(**)	.068(**)
先生	0.022	.060(**)	.086(**)	.074(**)	.097(**)	.079(**)	.126(**)	.090(**)
ジャン	.071(**)	.072(**)	.100(**)	.064(**)	.060(**)	0.039	.048(*)	.070(**)
間主2	.071(*)	0.046	.127(**)	.274(**)	.298(**)	.268(**)	.183(**)	.189(**)
関係抑	.077(**)	.054(**)	.068(**)	.051(**)	.054(**)	.052(**)	.068(**)	.075(**)
騒ぎ抑	.096(**)	.056(**)	.091(**)	.118(**)	.148(**)	.144(**)	.147(**)	.169(**)
非故意抑	0.002	-0.015	0.021	.117(**)	.133(**)	.157(**)	.094(**)	.073(*)
自己責抑	0.052	0.062	.069(*)	.102(**)	.103(**)	.145(**)	.111(**)	.121(**)
無意義抑	.109(**)	.077(*)	.081(*)	.089(**)	.109(**)	.065(*)	0.033	.068(*)

** は相関係数が 1% 水準で、* は相関係数が 5% 水準で有意である。

Table69 高校生における社会的問題解決方略と親子関係の相関係数

	不満	非難	厳格	期待	干渉	心配	溺愛	盲従
直攻	.097(**)	.116(**)	.108(**)	.104(**)	.083(**)	.050(**)	.063(**)	.097(**)
表情攻	.128(**)	.113(**)	.105(**)	.077(**)	.065(**)	.068(**)	.063(**)	.102(**)
背後攻	.101(**)	.111(**)	.046(**)	-.026(*)	-.061(**)	-.041(**)	0.015	.044(**)
断絶攻	.084(**)	.098(**)	.029(*)	-.093(**)	-.133(**)	-.118(**)	-.028(*)	-0.018
直主	0.014	.031(*)	.029(*)	.038(**)	0.024	.037(**)	0.023	.039(**)
間主	.060(**)	.059(**)	.054(**)	.038(**)	0.015	.044(**)	.039(**)	.054(**)
先生	.037(*)	.068(**)	.065(**)	.047(**)	.041(**)	.058(**)	.113(**)	.126(**)
ジャン	0.006	0.034	-0.016	-.053(*)	-0.04	-0.015	.062(**)	.074(**)
間主2	.087(**)	.066(*)	.144(**)	.286(**)	.302(**)	.302(**)	.169(**)	.256(**)
関係抑	.073(**)	.025(*)	0.024	-0.014	-0.005	.040(**)	.091(**)	.088(**)
騒ぎ抑	.106(**)	.061(**)	.071(**)	.092(**)	.110(**)	.134(**)	.141(**)	.141(**)
非故意抑	.060(*)	-0.026	-0.006	.064(*)	.085(**)	.133(**)	.079(**)	0.056
自己責抑	.143(**)	.073(*)	.095(**)	.069(*)	.064(*)	.094(**)	.102(**)	.116(**)
無意義抑	0.054	0.004	0.008	0.015	0.016	0.026	0.004	0.024

** は相関係数が 1% 水準で、* は相関係数が 5% 水準で有意である。

第6節 考察とまとめ

中国と日本における親の養育態度に関して、以下のような特徴が浮かび上がってくる。

1. 中国では「両親が共に参加する子育て」、日本では「母親を中心とした子育て」の図式として捉えることができる。この点については、日本青少年研究所（2001）にも同様の指摘がみられる。中国では、新中国の成立後（1949）、男女の平等、男女の共働きが提唱され、半世紀を過ぎた近年、男女共同参画の意識が深く浸透し、大半の成人女性が職を持つようになり、出産後も仕事を継続する者が多い。陳雁（2005）によると、社会労働人口の中に女性の占める割合は、1978年は43.3%、1990年は45%、1995年は45.7%である。2002年の人口調査では、男性の就職率は82.47%、女性は71.52%である。こうした女性の就労の増加に伴い、家事や子育ての分担も現実的な方法として取り入れられ、定着してきていると考えられる。一方、日本では、「企業戦士」として残業の疲れをみせる父親を支えるには、母親が家に留まって子育ての中心役を担うことはやむを得ない現状である。総務庁（1995）は、「女性は子どもが小さい時は育児に専念し、子どもが大きくなったら就業する方が良い」と考える人が多い（56.4%）ことを報告している。

2. 子どもへの態度には中国でも日本でも両親間に顕著な差異はみられない。儒教文化圏に属する中国と日本が長い歴史の中で育まれた「厳父慈母」という両親役割分担の考え方は現代社会ではもはや崩れ、家庭に影響力を持つ親の養育態度には大きな差異がないと考えられる。日本で「父権の失墜」と言われているように、旧来の「家父長制」の下でイメージされた厳しい父親像は今日の日本では変貌を遂げ、むしろ父親が幼稚園年長児などの年少児には良きになりつつである。同じ時代に生きる父親と母親であり、子育てにおける意識に大差がみられないのも当然であろう。

3. 子どもが男子であるか女子であるかによる養育態度の違いは中日間に差異がみられる。中国では養育態度における性差は顕著でない傾向にある。一方、日本では性差の存在が示唆され、一般に男子に厳しく女子に甘いという傾向がみられる。中国では就職も男女平等であり、将来の社会進出を考えると、子育てにおいては子どもの性による差異は考えられない。日本では女子の社会進出はまだそれほど進展しておらず、社会的競争の厳しさは中国ほどでないという背景が反映しているのかもしれない。

4. 子どもの発達に伴う養育態度の変化については、両国間に顕著な差異が認められた。中国では、発達に伴って子どもへの対応が厳しい面も甘い面も同様に減少する傾向にある。しかし、全体としての態度や考え方には各発達段階を通して大きな変動はみられず、一貫した態度で接していることが示唆される。一方、日本では、甘さの側面において、中国と同様に、発達に伴って減少しているが、厳しさの側面においては中学生に対する働きかけが最も多く、発達段階の特質に合わせたいわば柔軟な対応となっているようである。

5. 養育態度の多くの下位尺度において中国の方が高くなっており、特に「期待、干渉、心配」における差は顕著である。中国では様々な面で子どもに対して関与することが多く、子どももそれを明確に認識していると思われる。Fig. 26は日本青少年研究所（2001）の調査によるものである。当該調査は、中国の北京市、武漢市、鄭州市、湖南省衡陽市、西安市、青島市の6地域の小学校6校、中学校6校、高校6校、合計1239人、日本の東京都、愛知県、静岡県、群馬県、長野県の5地域の小学校4校、中学校4校、高校3校、合計1371

人を対象としている。日本に比べて、中国の親達が子育てにおいて子ども達に多くの命令や禁止的働きかけをしているかを見てとれる。本研究の農村部においてだけでなく、都市部においても、中国の親が日本の親より子どもに関わることが多いと考えられる。

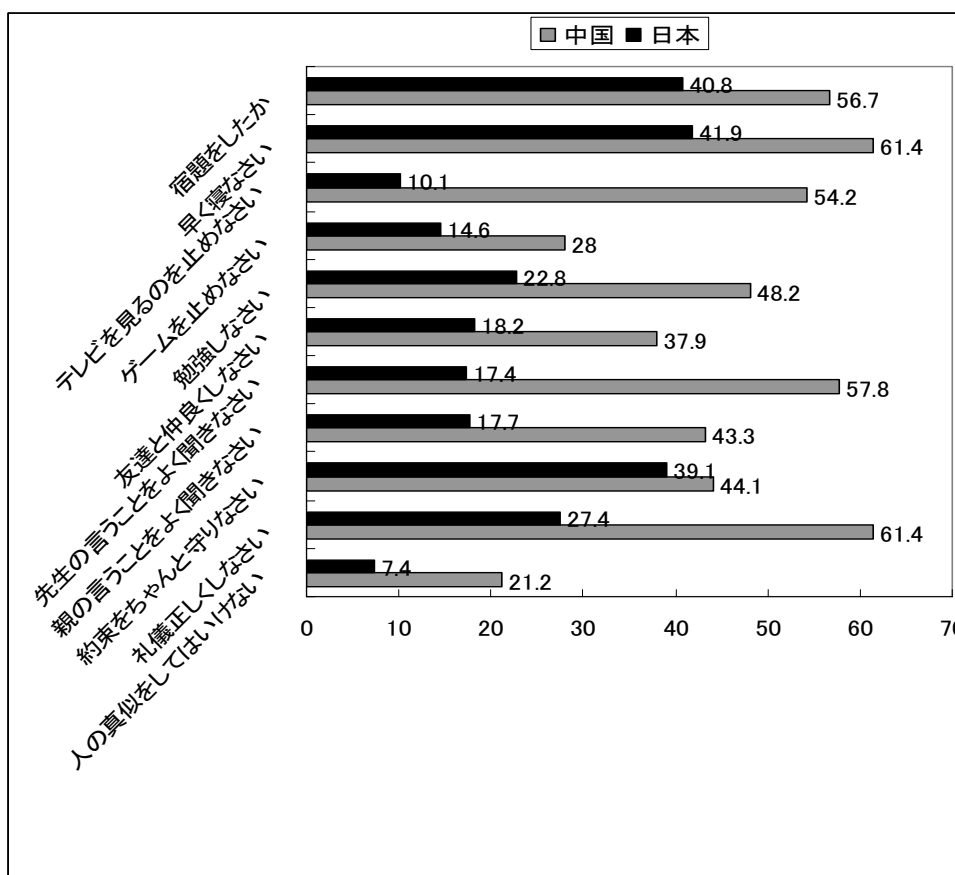


Fig. 27 子どもによく言うこと (日本青少年研究所、2001)

6. 本研究において、親子関係のよくない傾向として取り上げた親の拒否的態度(不満、非難)、支配的態度(厳格、期待)、保護的態度(干渉、心配)、服従的態度(親が逆に子どもに従順する態度:溺愛、盲従)は、子どもの社会的問題解決方略とは、以下のような相関関係が見られる。

(1) 全体的には、殆どの社会的問題解決方略が親子関係の各下位尺度と有意な相関を示している。親子関係、親が子どもに接している態度が、子どもの問題解決行動や対人関係に何らかの影響を及ぼしていることは統計的に裏付けられている。

親の「不満、非難、厳格」の態度は、子どもの攻撃的方略(直接的攻撃、間接的攻撃)と正の相関を示している。親の「干渉、心配、溺愛」の態度は、子どもの背後的攻撃、断絶的攻撃と弱い負の相関を示している。親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの先生頼り、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制、自己責任抑制、と正の相関を示している。

親の拒否的態度(不満、非難)は子どもの攻撃性を高める傾向、親の保護的態度は子どもの自立を妨げ、問題解決において権威者(先生)に頼り、子どもの問題解決に立ち向かう積極性を抑制し、子どもの自己抑制を高める傾向が見られる。

親子関係の全ての下位尺度、特に親の「厳格、期待、干渉、心配、溺愛、盲従」の態度

は、他人を推薦する「間接的主張2」と正の相関を示している。親の拒否的態度（不満、非難）、支配的態度（厳格、期待）、保護的態度（干渉、心配）、服従的態度（親が逆に子どもに従順する態度：溺愛、盲従）は、いずれも子どもの問題解決において、推薦された相手の気持ちや相手との関係を配慮せず、安易に自分が逃れるよう他人を推薦し、他人を引きずりこむことに頼ってしまう傾向が見られる。

（2）国別で見ると、日本は中国より、社会的問題解決方略と親子関係の相関が高く、日本は中国より、親の態度が子どもの問題解決行動や対人関係への影響が大きいと考えられる。中国の社会的問題解決方略と親子関係の相関が低いことは、2点のことが考えられる。一つは中国の子どもは、日本の親よりはるかに多い中国の親の期待、干渉、保護、溺愛などに対して、一種の感情や反応の鈍麻が生じ、親の態度が自らの行動への影響を薄めたのではないかと考えられる。もう一つは、中国の子どもは、日本の子どもより強い「自己」を持っているため、外部（親）による影響が小さくなったのではないかとと思われる。

日本において、親子関係の各下位尺度ともに、子どもの直接的攻撃、間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃）、間接的主張、先生頼り、他人を推薦する「間接的主張2」と正の相関を示している。日本において、親と子どもの関わりが多いことは子どもの問題解決における攻撃性、主張性を高める傾向が見られる。

日中共に、親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どものジャンケン志向と正の相関を示している。親の保護的態度（干渉、心配）、服従的態度（親が逆に子どもに従順する態度：溺愛、盲従）は、子どもの相手の気持ちや相手との関係に傷つけず、安易に葛藤を解決できるジャンケンの使用を高める傾向が見られる。

（3）男女別で見ると、男子と女子の社会的問題解決方略と親子関係の相関は極めて類似している。男女共に、親の「不満、非難、厳格」の態度は、子どもの攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）と正の相関、親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制、自己責任抑制）と正の相関を示している。

一方、男子は女子より、先生頼りと親子関係の相関が高い。男子は社会的問題解決における社会性の発達が遅く、先生頼りを多用すると同様に、権威者である親の影響も大きく受けているのではないかと考えられる。

（4）場面別で見ると、持物の損害、権利の侵害、役割の怠惰場面における社会的問題解決方略と親子関係の相関は極めて類似している。親の「不満、非難、厳格」の態度は、子どもの攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）と正の相関、親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制、自己責任抑制）と正の相関、子どもの背後的攻撃、断絶的攻撃と負の相関を示している。

級友との意見対立場面において、他の場面と反対に、親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの直接的攻撃、表情攻撃と正の相関、子どもの関係重視抑制と弱い負の相関を示している。また、名誉の侵害場面以外の他の場面より、親の「期待、干渉、心配」と子どもの直接的主張との相関が高いことも特徴的である。意見の対立において、自分の意志を貫くことは強い自己の現れと思われる。親の保護的態度は子どもの自己形成を助長し、意見の対立において、自分の意志を貫くための攻撃性、主張性を高める傾向が窺える。

名誉の侵害場面において、級友との意見対立場面と類似した傾向が見られた。他の場面

と反対に、親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの直接的攻撃、表情攻撃、直接的主張、間接的主張と正の相関を示している。一方、親の「期待、干渉、心配、溺愛、盲従」、特に「干渉、心配」の態度は、他の場面より、子どもの断絶的攻撃と高い負の相関を示している。名誉の侵害に対する対決は、自尊心が高く、社会的自己を意識し、自分を取り巻く環境における自分の体面を守る行為である。親の保護的態度は子どもの社会的自己の形成を助長し、子どもの自己防衛のための攻撃性、主張性を高めると同時に、子どもが安易に短絡的に相手との関係を絶つことも抑制する傾向が窺える。

先生との意見対立場面において、葛藤の相手は権威者の先生であるゆえに、社会的問題解決方略と親子関係の相関も他の場面と異なる傾向が見られた。他の場面と正反対に、親の「期待、干渉、心配、溺愛、盲従」、特に「期待、干渉、心配」の態度は、子どもの直接的攻撃と高い負の相関を示しており、子どもの直接的主張とも弱い負の相関を示している。親の「厳格、期待、干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、他の場面より、子どもの抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）と高い正の相関を示している。先生に対して、直接的に攻撃しない、主張しない、先生との関係を保ちたいことは先生の権威性が高いことの現れである。親の保護的、子どもへの従順的な態度は、先生の権威性を高めることにつながる結果である。親の保護的、子どもへの従順的な態度は、親が子どもの成長過程における子どもの尊敬する「同一視」の対象になることが難しくなり、代わりに先生を「同一視」の対象として求め、先生の権威性が高くなったのではないかと考えられる。

（5）発達段階別で見ると、各発達段階における社会的問題解決方略と親子関係の相関は類似した傾向を示している。親の「不満、非難、厳格」の態度は、子どもの攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）と正の相関、親の「期待、干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制、自己責任抑制）と正の相関、子どもの背後的攻撃、断絶的攻撃と弱い負の相関を示している。

発達に伴い、親の「不満、非難、厳格」の態度と子どもの攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）、無意義抑制との相関が低くなる傾向が見られる。発達に伴い、子どもの自己が徐々に形成し、親の拒否的態度への耐性も徐々に高くなり、親の影響も薄くなったのではないかと考えられる。

発達に伴い、親の「期待、干渉、心配、溺愛、盲従」、特に「期待、干渉、心配」の態度と子どもの他人を推薦する「間接的主張2」との相関が高くなる傾向が見られる。発達に伴い、親の支配的態度（厳格、期待）、保護的態度（干渉、心配）、服従的態度（親が逆に子どもに従順する態度：溺愛、盲従）は、いずれも子どもの問題解決において、推薦された相手の気持ちや相手との関係を配慮せず、安易に自分が逃れるよう他人を推薦し、他人を引きずりこむことを助長してしまうと考えられる。

第4章 社会的問題解決方略に影響する社会環境的要因（2）：

学校生活

学校は、もともと人間の社会生活の発展に伴い、「意識的に一定の目的をもって、計画的に教育を実施するための特別の場所」（三枝，1961）として、成立してきたものと言われる。現代の学校は子供が通らなければならない人生の道程であり、学校教育は文化伝達の制度・慣行・過程であり、人間形成の過程でもある。したがって、中国と日本の学校生活を考察することによって、中国と日本の学校の性格、学校に何が求められ、何が期待されているか、どの教育意図が最も優先しているかなどを具体的に捉えることができ、中国と日本で育った子どもの価値観、倫理観の形成の背景を窺うこともできると考えられる。

以下は、ディリープログラム、年間行事、運動会の三つの角度から、中国と日本の幼稚園、小学校、中学校、高校について比較検討する。

第1節 中国と日本の保育園生活

本研究に調査協力してくれたのは中国江西省吉安県の保育園1園と宇部市内の幼稚園・保育園10園である。

吉安県は、江西省の中央部に位置し、古来「庐陵」と称し、秦（紀元前221年）の時代から県として設立された。1914年吉安県と改称し、現在に至る。1979年10月県庁を敦厚鎮に移し、県庁所在地の敦厚鎮は人口5万人。敦厚鎮では、就学前の児童を扱う施設は、公立幼稚園2ヶ所、私立幼稚園13ヶ所があり、幼児の入園率80%以上である。名称は「保育園」「幼稚園」「幼児園」などあるが、実質上は違いがない。

調査を行ったのは県内で最も規模の大きい公立幼稚園である。公立幼稚園は地方政府の各専門機関によって共同で管理されている。幼児教育に関しては県教育委員会、栄養衛生に関しては県衛生局、費用基準の設定は県財務局によって定められる。就職の有無による制限、収入による保育費の違いがなく、入園人数の制限まで、3歳以上の児童は自由に入園可能となっている。学校と同様に夏休みや冬休みもあるが、唱歌、ダンス、お絵描き、英語などの夏季クラブの募集も行っており、実質上は自由参加の夏季保育である。小学校入学までにある程度の基礎知識や技能を修めるようにとの小学校からの要請で、保育園は「学前班」という就学前クラスがあり、3・4歳の時に就園していない子どもも大抵参加している。園長の話によると、全国の保育園は、基本的には『幼稚園工作規程』に基づいて保育活動を展開しており、どこも類似した保育活動を行っている。

宇部市では、人口17万人で、就学前の児童を扱う施設は幼稚園、保育園、託児所の三種があり、入園率90%以上である。この内、幼稚園は文部科学省に認可を受け、市教育委員会によって管理される。宇部市には全部で19ヶ所あり、その内1ヶ所（博愛幼稚園）のみ公立である。3歳以上の幼児は自由に入園できる。学校と同様に夏休みや冬休みもあるが、夏季保育を行う幼稚園もある。保育園は厚生労働省に認可を受け、市児童家庭課によ

って管理される。宇部市には全部で28ヶ所あり、公立は6ヶ所のみで、他の22ヶ所は民間の社会福祉法人である。就労や病気などの事情で家庭での保育ができない幼児が入園できる。0歳から入園でき、夏休み、冬休みもない。

日本で調査を行ったのは幼稚園と保育園であったが、中国の保育園の「保教并重」(保育、教育ともに重視する)という理念や保育時間の類似性から、以下は主に保育園1所を取り上げ、中国の保育園生活と比較する。園長の話によると、全国の保育園は、基本的には『ハンディー保育所保育指針』に基づいて保育活動を展開しており、類似した保育活動を行っている。

1. 保育方針

(1) 中国の『幼稚園工作規程』に見られる保育方針

中国の教育委員会が出した『幼稚園工作規程』には以下のような構成となっている。

第一章 总则（総則）

第二章 幼儿入园和编班（幼児の入園とクラス分け）

第三章 幼儿园的卫生保障（幼稚園の衛生基準）

第四章 幼儿园的教育（幼稚園における教育）

第五章 幼儿园的园舍、设备（幼稚園の園舎と設備）

第六章 幼儿园的工作人员（幼稚園のスタッフ）

第七章 幼儿园的经费（幼稚園の経費）

第八章 幼儿园、家庭和社区（幼稚園、家庭と地域社会）

第九章 幼儿园的管理（幼稚園の管理）

第十章 附则（附則）

総則においては、以下の七条が提示されている。

第一条 为了加强幼儿园的科学管理，提高保育和教育质量，依据《中华人民共和国教育法》制定本规程。（幼稚園の科学的な管理を強め、保育と教育の質を高めるよう、《中华人民共和国教育法》に従い、本規定を制定する。）

第二条 幼儿园是对三周岁以上学龄前幼儿实施保育和教育的机构，是基础教育的有机组成部分，是学校教育制度的基础阶段。（幼稚園は3歳以上就学前の幼児に対して保育と教育を行う場所であり、基礎教育の一部分で、学校教育制度の基礎的段階である。）

第三条 幼儿园的任务是：实行保育与教育相结合的原则，对幼儿实施体、智、德、美诸方面全面发展的教育，促进其身心和谐发展。幼儿园同时为家长参加工作、学习提供便利条件。（幼稚園の任務は、保育と教育を結合する原則に従い、幼児に対して、幼児の身体、知力、道徳、芸術的感性の全面的な教育を行い、幼児の心身の協調的発達を促進するとともに、親の就職や学習に便宜を図る。）

第四条 幼儿园适龄幼儿为三周岁至六周岁（或七周岁）。幼儿园一般为三年制，亦可设一年制或二年制的幼儿园。（幼稚園に適齢するのは3歳から6歳或いは7歳の幼児である。幼稚園は基本的には三年制で、一年制或いは二年制の幼稚園を設立することも許可する。）

第五条 幼儿园保育和教育的主要目标是：促进幼儿身体正常发育和机能的协调发展，增

強体质，培养良好的生活习惯、卫生习惯和参加体育活动的兴趣。发展幼儿智力，培养正确运用感官和运用语言交往的基本能力，增进对环境的认识，培养有益的兴趣和求知欲望，培养初步的动手能力。萌发幼儿爱家乡、爱祖国、爱集体、爱劳动、爱科学的情感，培养诚实、自信、好闻、友爱、勇敢、爱护公物、克服困难、讲礼貌、守纪律等良好的品德行为和习惯，以及活泼、开朗的性格。培养幼儿初步的感受美和表现美的情趣和能力。（幼稚園の保育と教育の主な目標は、幼児の身体の正常な発育及び全身の機能の協調的発達を促進し、身体の素質を高め、良好な生活習慣、衛生習慣、体育活動への興味を育成する。幼児の知的能力を発展させ、正しく五感と言語を生かして交流する基礎的な能力を育成し、生活環境への認識を促進させ、良い趣味や探求心を育成し、基礎的な操作能力を育成する。幼児の故郷、祖国、所属集団、労働、科学を愛する感情を芽生えさせ、誠実、自信、豊かな好奇心、優しい、勇敢、公の物を大切にすること、困難を克服できる、礼儀正しい、規則を守るなどの良好な人徳と習慣、及び活発で明るい性格を育成する。幼児の美への基礎的な感受性と表現力を育成する。）

第六条 尊重、爱护幼儿，严禁虐待、歧视、体罚和变相体罚、侮辱幼儿人格等损害幼儿身心健康的行為。（幼児を尊重と愛護し、幼児への虐待、差別視、体罰、形を変えた体罰、幼児の人格を侮辱することなどなど、幼児の心身の健康に損害をきたす行為を厳禁する。）

第七条 幼儿园可分为全日制、半日制、定时制、季节制和寄宿制等。上述形式可分别设置，也可混合设置。（幼稚園は全日制、半日制、定時制、季節制或いは寄宿制などの形態に分け、これらの形態は単独或いは混合に設置することができる。）

（2）日本の『ハンディー保育所保育指針』見られる保育方針

日本全国保育士会が策定した『ハンディー保育所保育指針』は、以下のような構成になっている。

- 第1章 総則
- 第2章 子どもの発達
- 第3章 6か月未満児の保育の内容
- 第4章 6か月から1歳3か月未満児の保育の内容
- 第5章 1歳3か月から2歳未満児の保育の内容
- 第6章 2歳児の保育の内容
- 第7章 3歳児の保育の内容
- 第8章 4歳児の保育の内容
- 第9章 5歳児の保育の内容
- 第10章 6歳児の保育の内容
- 第11章 保育の計画作成上の留意事項
- 第12章 健康・安全に関する留意事項
- 第13章 保育所における子育て支援及び職員の研修など

総則においては、以下のような内容が掲げられている。

保育所は、児童福祉法に基づき保育に欠ける乳幼児を保育することを目的とする児童福

祉施設である。したがって、保育所における保育は、ここに入所する乳幼児の最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進することに最もふさわしいものでなければならない。

保育所は、乳幼児が、生涯にわたる人間形成の基礎を培う極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごすところである。保育園における保育の基本は、家庭や地域社会と連携を図り、保護者の協力の下に家庭養育の補完を行い、子どもが健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境を用意し、自己を十分に発揮しながら活動できるようにすることにより、健全な心身の発達を図るところにある。そのために、養護と教育が一体になって、豊かな人間性を持った子どもを育成するところに保育所における保育の特性がある。また、子どもを取り巻く環境の変化に対応して、保育所には地域における子育て支援のために、乳幼児などの保育に関する相談に応じ、助言するなどの社会的役割も必要となってきた。このような理念や状況に基づき、保育を展開するにあたって必要な基本的事項をあげれば次のとおりである。

①保育の原理

・保育の目標

子どもは豊かに伸びていく可能性をそのうちに秘めている。その子どもが、現在を最もよく生き、望ましい未来を作り出す力の基礎を培うことが保育の目標である。このため、保育は次の諸事項を目指して行う。(以下略)

・保育の方法

保育においては、保育士の言動が子どもに大きな影響を与える。したがって、保育士は常に研修などを通して、自ら、人間性と専門性の向上に努める必要がある。また、倫理観に裏付けられた知性や技術を備え、豊かな感性と愛情を持って、一人一人の子どもに関わらなければならない。(以下略)

・保育の環境

保育の環境には、保育士や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、さらには、自然や社会の事象などがある。そして、人、物、場が相互に関連し合って、子どもに一つの環境状況を作り出す。こうした環境により、子どもの生活が安定し、活動が豊かなものとなるように、計画的に環境を構成し、工夫して保育することが大切である。(以下略)

②保育の内容構成の基本方針

・ねらい及び内容

「ねらい」は、保育の目標をより具体化したものである。「内容」は、これらのねらいを達成するために、子どもの状況に応じて保育士が適切に行うべき基礎的な事項及び保育士が援助する事項を子どもの発達の側面から示したものである。(以下略)

・保育の計画

保育の計画は、全体的な計画と具体的な計画について作成する必要があり、その作成に当たっては柔軟で発展的なものとなるように留意することが重要である。(以下略)

(3) 中国と日本の比較

中国の『幼稚園工作規程』と日本の『ハンディー保育所保育指針』から、以下のことが

窺えよう。

- ① 中国の『幼稚園工作規程』は幼稚園の管理上、行政上に関する内容が中心的で、幼児への具体的な保育や教育内容に触れることが少ない。幼稚園の保育と教育の主な目標においては、理想的な児童像を描いており、それを達成できるよう、幼稚園の教師が主体的に取り組み、幼児をリードしていくことが要求されている。全体的には、行政や教育者の意志が強く反映され、教育者主導型の保育・教育理念が窺える。
- ② 日本の『ハンディー保育所保育指針』には、保育の手引書のような内容が書かれている。全体的に子どもの発達の特徴を提示した上に、乳児から年長児までの各発達段階の乳幼児の発達の主な特徴、保育士の姿勢と関わりの視点、ねらい、内容、配慮事項が具体的に詳しく書かれている。その保育原理に書かれているように、日本では、「子どもは豊かに伸びていく可能性をそのうちに秘めている」という考えから、「子どもの生活が安定し、活動が豊かなものとなるように、計画的に環境を構成し」、「人間性と専門性」の高い教育者が「倫理観に裏付けられた知性や技術を備え、豊かな感性と愛情を持って、一人一人の子どもに関わる」ことが要求されている。全体的には、子どもの心理や発達を理解し、それに合せて態勢や環境を整え、子どもに自ら潜めた可能性を伸びさせる、という子ども主体型の保育・教育理念が窺える。
- ③ このような「工作規程」や「保育指針」に見られる幼児保育・教育における中国と日本の違いは、保育園のクラスのネーミングからも窺える。中国の保育園のクラスのネーミングは、年少・年中・年長組をそれぞれ、小1班・小2班・・・、中1班、中2班・・・、大1班・大2班・・・としており、ドライで合理的な印象である。日本の幼稚園や保育園は、子どもに親しい動物の名前でクラスをネーミングするところ、花の名前でクラスをネーミングするところが中心であり、幼児の心理に基づく優しい心配りを感じさせる。

2. デイリープログラム

(1) 中国において

調査した中国の保育園のデイリープログラムは以下の通りである。

7:40 登園児を迎え、朝の自由遊び

8:30 朝の体操

9:00 教育活動（数字、知識、技能）

10:20 遊戯或いは戸外遊び或いは地域社会活動

11:00 給食

12:00～14:30 午睡（夏季は15:30まで）

15:00 おやつ

15:30～17:00 遊戯、体育活動

17:00～17:30 お帰りの準備をし、お迎えを待つ。

教育活動は、語言（計算と文字）、科学（実験活動：磁石、沈むなど）、芸術、健康、自然の5領域に渡り行われている。

土日保育はないが、土曜日の午前中には唱歌、舞踊、絵画、短い出し物、漫才などの趣味グループ活動がある。ほとんどの園児がいずれかのグループに参加しており、実質上半

日保育が行われている。

(2) 日本において

幼稚園の登園時間は9:00からのことが多い。保育園にも園によって、登園、離園時間がやや異なっているが、働く親をサポートする目的が同じであるため、違いが少ない。保育園の中から一園を取り上げてみると、そのディリープログラムは以下の通りである（平成18年度）。

7:00 登園とともに健康視診を受ける。自由遊び（混合保育）

9:30 保育（5領域カリキュラムによる保育）、体操、お集まり（朝の歌、保育園の歌、季節の歌）、読み聞かせ

10:30 保育、自由遊び（室内・室外）

11:30 給食準備、給食

13:00～14:30 3歳児：午睡、4・5歳児：保育・自由遊び（7・8月の夏季は午睡）

15:00 おやつ、自由遊び（戸外遊び）、お帰り（季節の歌、お帰りの歌）

16:30～19:00 お帰りの準備をし、お迎えを待つ。（18:00～19:00は延長保育）

5領域カリキュラムとは、健康（心身の健康に関する領域）、人間関係（人とのかかわりに関する領域）、環境（身近な環境との関わりに関する領域）、言葉（言葉の獲得に関する領域）、表現（感性と表現に関する領域）である。「養護と教育が一体になって、豊かな人間性を持った子どもを育成するところに保育所における保育の特性がある」の具現化と考えられよう。

土曜日の保育があり、日曜日・祝日にも年度の初めにおける申請により、個別的に特殊に対応している。

(3) 中国と日本の比較

中国と日本の保育園のディリープログラムから、2点のことが見てとれる。

- ① 日本の保育園の保育時間が中国より長い。これは中国と日本の勤務時間や勤務形態の違いを反映した結果と思われる。中国では企業も公務員も残業が少ない。残業をすることは、社会的にも求められてなく、私生活に多くの影響を来す（例えば、子どもの迎え）ため、当事者自身も好まない。また、日本では2交替、3交替の仕事が多く、フリーターやパートタイムの勤務者が担っており、会社における朝の始業時間と夜の終業時間という角度から見ると、日本の会社のほうが中国より勤務時間が長いのではないかと思われる。それに合せて、日本の保育園が保育時間を前後に延長したと思われる。
- ② 中国の保育園における午睡時間が日本より長い。午睡をする子どもも日本より多い。日本では夏季以外午睡のない年中・年長児は、中国では年少児と同様に、長時間に渡る午睡をしている。これは、中国においては、日本と異なり、成人社会でも午睡が提唱され、昼にちょっとした午睡は体にも頭にもよいという漢方医学の考え方が強く残っているからだと思われる。一方、二・三時間に渡って静かにしなければならぬ午睡は、子どもにとって苦痛ではないかとも思われる。子どもへの察し、子どもの発達上の要求に合せて対応する子ども主体型の保育・教育は、日本ほどできていないとも考えられる。

3. 年間行事

(1) 中国において

調査した中国の保育園は、年間を通して全体的にみると、以下のような行事が行われている。

① 慶祝行事

9月10日：教師の日

10月1日：建国記念日

1月1日：元旦、親子参加の遊園会（灯謎などのゲーム、景品つき）

3月8日：女性の日、母親にプレゼントする、母子交流活動

5月1日：メーデー、各クラスで労働に参加する

6月1日：こどもの日、総合文芸活動（クラスの合唱など）

7月：卒業式（卒業児親子と教師が参加する。①園長挨拶、②児童代表・保護者代表・教師代表挨拶、③慶祝会：個人やクラスによる物語語り・唱歌・踊り・芸術体操などの公演、ゲームや遊戯活動、という流れである。）

② 競技活動

毎年、唱歌・舞踊・物語語り・童謡・絵画・パズル・ピアノ・ハーモニカ・切り紙絵・折紙・粘土遊びなどから、約3種目を取り上げて競技を行う。まずはクラスで予選し、教師の評価を通過した幼児が教師の指導を受けた上、園のコンテストに出る。3位まで表彰される。

運動会も3日間に渡って毎年行われている。

③ 地域社会との連携

毎年1～2回にわたり、消防署や武装警察署や老幹部活動センターから関係者を招待し、建国記念日に国旗掲揚儀式に参加するなどの軍幼、老幼の交流活動を行う。

このほかに、地域の名所へ春のピクニックや革命烈士記念館などの参観活動も行っている。保護者が自由に保育活動を見ることが出来る参観日週間も設けている。

学習と生活の両面から小学校に近づくよう、「学前班（就学前クラス）」において、幼学（幼稚園と小学校）のつなぎ活動が行われている。

④ 具体的な年間行事

具体的にみると、入手した2005年9月～2006年1月の行事暦に主に以下のことが書かれている。

9月：新入生健康診断（全面的な体格検査）

各クラスでPTA会を開く

建国記念日に合わせて、幼児に共産党・国・故郷への愛の教育を行う

10月：秋の運動会

11月：参観日週間

12月：保護者へのアンケート調査

元日慶祝行事

・積み木組み合わせ競技（年少組）

・プラスチック玩具の崩し競技（年中・年長組）

・粘土で物づくり競技（就学前組）

・唱歌コンテスト（個人賞と団体賞）

1月：家庭訪問（問題児童を重点に）

優秀児童、紅花児童（日常生活に花丸という評価を多くもらっている児童）、進歩児童、文明児童などの選出（教師による）

（2）日本において

日本の保育園の一園を取り上げてみると、年間に幼児が参加する主な行事は以下の通りである（平成18年度）。

4月：入園・進級式、花祭り

6月：保育参観日（保育参観、PTA会総会、バザー）

7月：夏祭り、お泊り保育

9月：祖父母参観日

10月：運動会、秋のバス遠足

12月：音楽発表会、お誕生日会（クリスマス会）

3月：生活発表会、お別れ遠足、卒園式

以上の園の行事のほかに、幼児の歯の検査（歯の良い幼児への表彰がある）、お父さん・お母さんの似顔絵、バスの絵のコンクールなど市や県が主催する行事への参加もある。

（3）中国と日本の比較

中国と日本の保育園の年間行事から、以下のことが窺えよう。

- ① 中国と日本の保育園の年間行事は、似通っているところが多くみられる。例えば、運動会、参観日、保育園における親子の触れ合い（中国の遊園会、日本の夏祭り）など、幼児の保育・教育における理念に共通しているところが多いと考えられる。
- ② 中国の保育園において、競技活動が多く行われ、個人賞が設けられていること、一年の締めくくりとして、優秀幼児を選出することが特徴的である。幼児の間の競技だけでなく、教師の間においても、書道・スピーチ・公開授業・教育論文・幼児活動計画などの園内或いは県や市のコンテストが設けられており、教師の参加が求められている。
- ③ 日本の保育園においては、運動会・音楽発表会・生活発表会・秋のバス遠足など全園児親子が参加する行事が多いこと、個人による発表がなく、グループによる団体演技が中心的事であること、お泊り保育が行われていることが特徴的である。日本の保育園の幼児の数が中国より少ないことにも影響があると思われるが、主には中国と日本における幼児の保育・教育理念の違いによるのではないかと考えられる。

4. 運動会

（1）中国において

毎年1回、秋の10月頃、PTA委員の協力を受けて、運動会が行われている。幼児の数が多いため、年少児・年中児・年長児に分けてそれぞれ1日、合せて3日である。

競技種目は、個人種目と団体種目に分かれている。個人種目は縄跳び、ボールつけ、砂袋投げ宛て、歩く・走る・飛ぶ・くぐる・はいはいする・投げるなどの動作の発達に合せた遊戯活動、親子共同参加する遊戯などあり、3位まで表彰する。団体種目はリレー、綱引きがあり、1位を表彰する。個人賞、団体賞のほかに、運動会の後は幼児全員に参加賞もある。

幼児一人につき2つの個人種目に参加でき（リレーを除き）、最終的に参加する種目は自薦と教師による調整や指定で決められる。運動会期間中、芸術体操など一部の幼児の特技の公演も行われている。

（2）日本において

日本の保育園の中から、乳児部も含めたやや規模が大きい一園を取り上げて、運動会の様子を考察することにした。当該保育園は年少・年中・年長組をそれぞればんだ組・きりん組・ぞう組でネーミングしており、プログラムにもその呼称が使用されているが、ここでは年少・年中・年長に改めて表示した。

Table70は18年度の運動会のプログラムであるが、実際のところ、入手できた16年度・17年度の流れも18年度と全て一致しており、最初の1・2番と最後の18・19・20・21は毎年同じで、真中の競技や演技の具体的な内容は毎年変わっているのみである。

Table70 日本の保育園の運動会のプログラム

開会式	9:00	1. 園長挨拶	2. PTA 会長挨拶	3. 園児挨拶	4. 運動会の歌
	1	団体	準備体操		全園児
	2	競技	はしれ！はしれ！		全園児
	3	遊戯	ハッピー・ジャムジャム		乳児
	4	競技	ここまでおいで		未就園児
	5	競技	アニメっこに大変身		乳児親子
	6	遊戯	Dear Woman		年少組
	7	競技	クラス対抗リレー		父母職員
午前	8	競技	ちびまるこちゃん		年長親子
の部	9	遊戯	学園天国		年中組
	10	競技	爆弾にきをつける！！		祖父母
	11	競技	2人で1つ		年少親子
	12	競技	お久しぶりね		卒園児
	13	遊戯	よさこいエイサー琉球王		年長組
	14	競技	トンネルくぐって回して回して		年中親子
	15	競技	日本沈没！？日本を救え！！		父母職員
	16	団体	鼓隊パレード		年長・年中
	17	遊戯	アンパンマン音頭		幼児親子
	18	競技	色別リレー		年長組
午後	19	競技	綱引き		幼児
の部	20	競技	玉入れ		幼児
	21	競技	綱引き		父母職員
閉会式		1. 園長挨拶	2. PTA 副会長挨拶	3. 園児挨拶	4. 園歌

運動会のパンフレットには「楽しい運動会」という表題の下に、「乳児部：先生やお父さん・お母さんと一緒に楽しく参加する。幼児部：一人ひとりの個性を出して最後まで力い

っばいがんばる」という「ねらい」も書かれている。

運動会の各種目において、基本的には年齢別で競技を行っているが、各年齢別の組の中では、赤と白に分かれており、幼児全員参加する競技には赤と白の勝負になる。年長が主体、年中が協力する赤白応援合戦も設けており、人気種目となっている。最終的には、個人賞、団体賞（クラスや赤白）がなく、運動会の後は幼児全員に参加賞を与えている。

（３）中国と日本の比較

中国と日本の保育園の運動会から、年間行事と同じように、以下のことが窺えよう。

- ① 中国と日本の保育園の運動会における種目の設定は、似通っているところが多い。幼児の発達に合せた対応が見られ、幼児の保育・教育における理念に共通しているところが多いと考えられる。
- ② 中国の保育園においては、遊戯的な競技活動にも個人賞・団体賞が設けられていることが特徴的である。優勝戦で参加者のやる気を煽ぎ、運動会を盛り上げようというねらいが窺える。
- ③ 日本の保育園においては、よちよちの乳児・未就園児・卒園児・祖父母・父母職員共同参加の種目が多く設けていることが特徴的である。運動会の来場者全員が楽しめるよという心配り、「皆で楽しむ」「幼児部は最後までがんばる」というねらいが窺える。

第２節 中国と日本の小学校生活

１．ディリープログラム（校時表）

（１）中国において

調査した中国の小学校の校時表は以下の通りである（2005年9月～2006年7月）。小学校においては40分授業を行っている。

8:00～8:40 朝学（朗読）

8:50～9:30 1校時

9:30～10:00 中間タイム（ラジオ体操）

10:00～10:40 2校時

10:50～11:30 3校時

11:30～14:10 昼休み

14:20～15:00 4校時

15:00～15:20 目の保健体操

15:20～16:00 5校時

16:10～16:50 6校時

16:50～17:00 終わりの会

17:10 下校

ただし、月曜日の6校時は職員会議で、木曜日の6校時はクラス活動となっている。火曜日の朝学は朗読でなく、思想政治教育となっている。また、1年生は金曜日の6校時がない。

中国の小学校の授業科目は、各学年に共通する国語・算数・文化体育活動・思想道徳・

音楽・美術・科学・体育の8科目のほかに、1・2年生は書写、3年生以降は英語・自然・情報・実践活動が付け加えている。一週間で見ると、4年生においては、国語が7、算数が6、英語・音楽・体育・自然・社会がそれぞれ2、美術・思想道徳・実践活動（科学技術、総合活動）・情報・文化体育活動がそれぞれ1校時で、合計28校時である。

ただし、調査によると、実際の授業時間数はこれを超えている。国の政策としては、週休二日で、土日は休みとなっているが、実際においては、「素質教育」（音楽、芸術などの感性教育）の名義の下で、土曜日にも登校させ、国語や算数などの中学校入試科目の授業となっている。宿題も日本よりはるかに多く出されている。その背景には、共同試験を通して県内の学校間、校内のクラス間において、児童の平均得点数が比較され、校長や教師の評価に影響するからと言われている。県、市、省、全国におけるコンテスト（例えば数学のオリンピックコンテスト）での児童の優秀成績も校長や教師の評価に大変プラスになると言われている。

裕福の家庭や知識層において、子どもに楽器、書道、絵画などを習わせることが多くなっているが、子どもの学習の負担が大きいこと、勉強一筋で十分であるという意識から、全体的にはまだ非常に少ない。

（2）日本において

学校によって、児童の登下校時間が少しずれたり、授業の時間（45分授業が多いが、30分授業をするところもある）が違ったりするところもあるが、各学校とも文部省の小学校学習指導要領に定められた基準でカリキュラムを組んでいるため、基本的には極めて類似している。その中から、45分授業を行っている一校を取り上げてみると、校時表は以下の通りである（平成18年度）。

8:15 登校

8:25～8:40 健康観察、朝の会、連絡、朝学（スキルタイム、読み聞かせ）

8:45～9:30 1校時

9:35～10:20 2校時

10:20～10:35 中間タイム

10:40～11:25 3校時

11:30～12:15 4校時

12:15～13:00 給食

13:05～14:05 清掃、昼休み

14:10～14:55 5校時

15:00～15:45 6校時

15:45～16:00 下校指導

16:05 下校

ただし、水曜日は職員会議や研修会などで、5・6校時がなく、13:30下校となっている。1年生などの低学年は月曜日において5・6校時がなく、13:30下校となっている。また、参観日などで短縮授業（40分）になることもある。

日本の小学校の授業科目及び時間数はTable71に示したとおりである。一週間で見ると（当該小学校18年度の日課表による）、4年生においては、国語が6.5、算数が4.5、体育と総合学習がそれぞれ3、社会と理科がそれぞれ2.5、音楽と図工がそれぞれ1.5、道徳と

学級活動がそれぞれ1校時で、合計27校時である。

ただし、小学校高学年は野球、サッカー、書道などのクラブ活動があり、低学年でもスポーツ少年団のバスケット、バレーボール、野球、サッカーなどに参加できる。また、ピアノ、絵画、書道、弓道などの習い事、公文などの学習塾に参加する子どもが多いため、実際において、日本でも下校後、子ども達は多岐に渡って忙しくなっている。

Table71 小学校の各教科の授業時数（平成10年文部省告示第175号：小学校学習指導要領による）

学年	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	道徳	特別活動	総合的な学習	総授業時数
1年	272		114		102	68	68		90	34	34		782
2年	280		155		105	70	70		90	35	35		840
3年	235	70	150	70		60	60		90	35	35	105	910
4年	235	85	150	90		60	60		90	35	35	105	945
5年	180	90	150	95		50	50	60	90	35	35	105	945
6年	175	100	150	95		50	50	55	90	35	35	105	945

注：この表の授業時数の1単位時間は、45分とする。

（3）中国と日本の比較

中国と日本の小学校のディリープログラム（校時表）から、以下のことが見てとれる。

- ① 中国と日本の小学校の校時数の差が少なく、日中同様に児童の発達に合せた対応と考えられる。
- ② 保育園と同様に、中国の小学校の昼休みの時間が日本より長くなっている。また、中国の小学校は中間タイムにラジオ体操があり、目の保健体操も行っている、児童の運動時間の不足の現実から、強制的、行政的に遂行させたと思われる。
- ③ 日本の小学校は給食があるが、中国の小学校は各家庭で昼食をとることになっている。これは、中国の小学校は児童数が多く（約2600人）、対応しにくいことが背景にあるとも思われるが、中国の中学校・高校が小学校以上に生徒数が多いにも拘らず、学校食堂で対応していることに照らして考えると、中国においては、親や教育者が小学生に対して、子どもの自立性（自ら良い食事をする）への心配、子どもの個性への尊重或いは子どもへの溺愛（家庭においては個別に対応できる）も窺えるのではないかと思われる。勿論、小学校はほとんど家に近いことがあり、保護者は昼食の対応に大変でありながら、様々な工夫によって対応できることも背景にあると思われる。
- ④ 授業科目からみると、中国では3年生以降英語教育が行われ、算数における授業時数が日本より多いことが特徴的である。日本では、総合的な学習時間を設けており、授業時数も多いことが特徴的である。

2. 年間行事

（1）中国において

調査した中国の小学校の児童が参加する主な行事は以下の通りである（2005年9月～

2006年7月)。

9月：入学式

当直活動の展開（3～6年の優秀学生が担当）、各趣味クラブ活動の展開
「教師の日」慶祝活動（壁新聞）
スピーチコンテスト

10月：物語を説くコンテスト

県運動会への出場、秋の運動会

11月：冬の集い（各学校の担任が推薦した優秀学生、特技学生やクラス委員を対象）
手書き新聞・書道・絵画コンテスト、全国英語能力コンテスト

12月：高学年現場作文コンテスト、パソコン作品制作コンテスト

パソコン操作技術の任意抽出テスト（3～6年を対象）
三好学生（人柄・学力・身体ともに優秀な学生）、特技学生の選出
公益労働への参加

1月：元旦慶祝活動

期末テスト

2月：冬休み

各趣味クラブの設立（週末に活動を展開）

3月：学校の「文体隊」（文化芸術グループ）の設立

小学校英語聴解力コンテスト、小学生学習道具運用操作コンテスト

4月：3年生識字・作文・書道コンテスト、4年生算数コンテスト

小学校自然実験操作コンテスト、県数学オリンピックコンテスト予選

5月：5・6年英会話コンテスト、国語経典著作の朗読コンテスト

6月：「こどもの日」を慶祝する書道・絵画コンテスト

「こどもの日」を慶祝する文芸公演会
卒業テスト（6年生）、期末テスト
コンピューター知識コンテスト（学校内→県内→市→省）
三好学生（人柄・学力・身体ともに優秀な学生）の選出
公益労働

（2）日本において

日本の小学校の1校の年間行事表を取り上げてみると、年間に児童が参加する主な行事は以下の通りである（平成18年度）。

4月：始業式・入学式

成長測定、視力検査、尿検査、ぎょう虫検査、聴力検査、歯科検査
参観日、懇談会

5月：全校集会、クラブ活動

耳鼻科検診、眼科検診、ぎょう虫再検査、内科検診

6月：4年社会見学、プール開き

クラブ活動（4～6年生）、委員会活動（5・6年生）、代表委員会（4年生）

7月：代表委員会、参観日・懇談会、終業式

8月：夏休み、水泳記録会、環境整備作業

- 9月：2学期始業式
委員会活動、代表委員会
秋の大運動会
- 10月：科学発表会
委員会活動、クラブ活動、全校集会
参観日・懇談会、PTA バザー
1・2・3・5年社会見学、6年修学旅行
- 11月：演劇教室、市音楽祭（合唱、合奏）
全校集会（音楽祭発表）、委員会活動、代表委員会
避難訓練、校内持久走大会
- 12月：クラブ活動、終業式
- 1月：3学期始業式
委員会活動、クラブ活動、代表委員会
- 2月：クラブ活動、代表委員会、避難訓練
参観日・懇談会
- 3月：委員会活動（防犯教室）、全校集会
6年奉仕活動、卒業証書授与式、中学校仮入学
修了式

（3）中国と日本の比較

中国と日本の小学校の年間行事から、以下の特徴が窺えよう。

中国では、学習におけるコンテストが多く、あらゆる方面において行われている。書道・絵画コンテスト、スポーツ競技も見られるが、分野が狭く、回数も少ない。実際のところ、児童における学習コンテストだけでなく、教師の間においても、公開授業・優秀教案・スピーチ・教育論文などの県や市のコンテストが設けられており、教師の参加が求められている。また、一学期の締めくくりとして、「三好学生」（優秀児童）を選出することも中国の特徴である。

日本では、成長測定や様々な検診が学年の始まりの大きな行事として挙げられている。児童主体のクラブ活動、委員会・代表委員会活動も年間通して取り上げられている。学校と保護者との連携を促進する行事として、年に5回の参観日と懇談会、PTA バザーの開催が見られる。児童の社会や地域への関心や関わりを促す行事として、小学校において毎年
の社会見学、6年の修学旅行なども見られる。日本の小学校においては、地域や保護者との連携をとりながら、児童と全面的に関わり、児童が心身ともに成長していくという教育理念が窺える。

3. 運動会

（1）中国において

調査した中国の小学校の運動会は、「田徑運動会」（陸上競技運動会）であり、3日に渡って行われている。児童数が多いため、県運動会と同様に、大型運動会と小型運動会が入れ替わるような形で、毎年行われている。大型運動会の場合は、競技種目が多く、参加児童数も多く、6年生も各種目に参加している。小型運動会の場合は、6年生は体力テスト

に要求されている縄跳びなど（体力テスト兼ねて、全員参加）とリレーのみに参加している。

今回の調査で入手したのは小型運動会（2007年11月2日～4日）であり、運動会のプログラムから以下のことが示されている。

● 運動会期間中の校時表

7:30～12:00 競技（1日目は7:30開会式、9:00競技開始）

12:00～14:00 昼休み

14:00～17:00 競技

● 開会式の流れ

①選手・審判員入場（演壇を通る際、スローガンを高く叫ぶことが求められている。）

②礼砲、国歌放送

③校長挨拶

④審判員代表宣誓

⑤選手代表宣誓

⑥審判員・選手退場、試合開始

● 競技の種目

1・2年生：男女混合10×60m向かいリレー、各学年4位まで表彰する。

3・4・5年生：年齢によって男子甲組（年長組）、男子乙組（年少組）、女子甲組（年長組）、女子乙組（年少組）の4つのグループに分けて、100m走、200m走、400m走、800m走、走り高跳び、走り幅跳び、砲丸投げ、ソフトボール、1500m走（男子甲・女子甲）、60m走（男子乙・女子乙）の個人種目において競い合う。8位まで表彰される。

各学年において、クラス間で、男子4×100mリレー、4×200mリレー、女子4×100mリレー、4×200mリレーの団体種目において競い合う。各学年4位まで表彰する。

6年生：男女別に縄跳び、立ち幅跳び、上体起こしの個人種目を競い合う。

クラス間で、男子4×100mリレー、4×200mリレー、女子4×100mリレー、4×200mリレーの団体種目において競い合う。4位まで表彰する。

● 参加の方法

①クラス単位で出場選手を選抜し、各種目の競技に参加する。

②一人の選手は3つの種目まで参加できる（リレーを除き）。

③参加種目については、自己申告した上、担任が調整と指定する。

● 採点と奨励の方法

①個人競技種目においては8位まで表彰する（賞状）。8人以下参加する項目は、最下位者を除き、上位者を表彰する。1人が参加する項目は競技としない。各競技種目は1～8の順位に9、7、6、5、4、3、2、1の点数を所属クラスの総得点にプラスする。

②団体競技種目においては4位まで賞状を与え、1～4の順位に10、6、4、2の点数をクラスの総得点にプラスする。

③各クラスの総得点により、各学年（1～6年がそれぞれ6、6、7、9、9、10クラス）

それぞれ3位まで表彰する(賞状)。各学年総得点と同点の場合、競技種目に1位の多いほうのクラスが上位になる。

- ④「精神文明賞」を各学年それぞれ1クラスに与える。運動会の規律への順守の度合、運動会のためになることの多さ、宣伝用文章の寄稿数、競技の態度などによって判断される。

(2) 日本において

Table72 日本の小学校の運動会のプログラム

8:45	入場行進				
	開会式	1. はじめの言葉 2. 国旗・校旗・児童会旗掲揚 3. 優勝旗・準優勝杯返還 4. 校長挨拶 5. 児童代表挨拶 6. 赤白誓いのコール 7. 愛校歌『緑の芝に』 8. 終わりの言葉			
9:05	準備体操				
時刻	順	種別	演技種目	出場者	
9:15	1	個徒	ザ・ダッシュ 2007	3年	
	2	個徒	VICTORY 2007	5年	
	3	団競	だるまさん、走ってね!	2年	
	4	団競	台風の目	4年	
	5	個障	琴芝アドベンチャー	6年	
10:00 午 前 の 部 演 技 ・ 競 技	6	団競	キッズ 玉入れ	1年	
	7	個障	それいけ、スイミー!	2年	
	8	個徒	ようい ドン!	来年入校児	
	9	団演	LOVE SO HARD 2007	5年	
	10	個徒	かけっこ	1年	
	11	団演	HANAGASA	3・4年	
	12	団競	赤白玉入れ合戦	P T A	
	13	団演	私たちの1193日	6年	
	14	団競	赤白リレー	123年選手	
	15	全競	全校大玉送り	全児童	
13:00 午 後 の 部	16	団演	応援合戦	全児童	
	17	団演	ちびっこ ソイヤ!!	1・2年	
	18	個障	ようこそ先輩	卒業生	
	19	団競	ザ・鉄腕! 奪取!! 2007	5年	
	20	個障	ボールで勝負!	4年	
14:00	21	団競	綱引き 2007	3年	
	22	団競	全員リレー	6年	
	23	団競	白赤リレー	456選手	
14:35	整理体操				
14:40	閉会式	1. はじめの言葉 2. 成績発表 3. 優勝旗・準優勝杯授与 4. 児童代表挨拶 5. 校長挨拶 6. 赤白あいさつ 7. 校歌斉唱 8. 万歳三唱 9. 国旗・校旗・児童会旗降納 10. 終わりの言葉			

注: 個徒は個人徒競走、個障は個人障害走、団競は団体競技、団演は団体演技、全競は全員競技である。

調査した日本の小学校の運動会は、いずれの小学校とも1日で行われており、具体的な競技内容も似通っている。一校を例に挙げて、そのプログラムはTable72に示したとおりである（平成19年9月23日）。

幼稚園の運動会と同じように、各種目においては基本的には学年別で競い合っているが、各学年の各クラスは、赤組と白組に分かれており、個人種目の競技の結果も団体種目の競技の結果も赤組と白組の成績としてカウントされ、最終的には赤組と白組の勝負となっている。個人賞がなく、運動会の後は児童全員に参加賞を与えている。

（3）中国と日本の比較

中国と日本の小学校の運動会から、以下の特徴が窺えよう。

中国の小学校の運動会はスポーツ競技であり、その競技種目の設定も、運動会期間中の儀式的流れもスポーツ競技会に習っている。個人種目においては個人へ、団体種目においては団体へ表彰する。クラスの団結と榮譽感を促進するために、クラス単位で団体賞を競い合う。1・2年生は個人種目の競技に参加しないことは日本の習慣からみると格別に思われる。

日本の小学校の運動会は、スポーツ競技というよりも、スポーツを楽しむ集会といったほうが妥当であるように思われる。個人種目の競技においても個人賞がないこと、各学年ともに均等に個人競技、団体競技、団体演技があり、クラス全員が参加していること、来年入校児・卒業生の種目も設けていることが特徴的である。

第3節 中国と日本の中学校生活

1. ディリープログラム（校時表）

（1）中国において

調査した中国の中学校は寄宿制であるため（中国の農村部や小都市においては寄宿制中学校が中心的である）、夜の自習時間も設けている。中国の中学校は45分授業を行っており、その校時表は以下の通りである（2005年9月～10月の秋季の校時表）。

5:50～6:05	起床
6:05～6:15	ラジオ体操
6:20～6:50	早朝の朗読
6:50～7:30	朝食
7:30～8:00	朝の朗読
8:10～8:55	1校時
9:05～9:50	2校時
9:50～10:00	ラジオ体操
10:05～10:50	3校時
11:00～11:45	4校時
11:45～13:50	昼食（食堂や自宅で、給食がない）、昼休み
14:00～14:45	5校時
14:55～15:40	6校時

15:50～16:35 7校時
16:40～17:10 課外活動（クラス活動）
17:10～17:50 夕食
18:00～18:50 夜の自習（1）
19:00～19:50 夜の自習（2）
19:50～20:00 目の保健体操
20:00～20:50 夜の自習（3）
21:15 消灯、就寝

春夏秋冬の季節によって、起床時間などが微調整されている。冬季（11月～3月上旬）は秋季より起床時間を20分遅らせ、昼休みを20分短縮している。春季（3月下旬～5月上旬）は秋季より起床時間を10分遅らせ、昼休みを10分短縮している。夏季（5月下旬～7月）は秋季より起床時間を10分早くさせ、昼休みを10分延長している。

授業科目は、1年生は国語・数学・生物・技術・音楽・美術・体育・歴史・政治・英語・地理・工作・情報・自然の14科目。2年生は物理を付け加えて、15科目となっている。3年生は物理・化学を付け加えた上、技術・工作・情報・地理・生物を削除して、11科目となっている。

一週間で見ると、2年生においては、国語・数学が5、英語が4、歴史・地理・政治・物理・生物・体育・労働・工作・自然がそれぞれ2、音楽・美術・情報がそれぞれ1校時で、合計35校時である。

（2）日本において

日本の小学校と高校は45分授業を行うところが多いが（小学生は集中力がまだ足りない、高校は多くの授業をとる必要があるため）、日本の中学校は50分授業を行うところが多いと言われている。また、中学校も学校によって、生徒の登下校時間が少しずれたりするところがあるが、各学校とも文部省の中学校学習指導要領に定められた基準でカリキュラムを組んでいるため、基本的には極めて類似している。その中から一校を取り上げてみると、校時表は以下の通りである（平成18年度）。

8:10 登校
8:25～8:30 朝の学活（学級活動）
8:30～8:40 朝の読書
8:50～9:40 1校時
9:50～10:40 2校時
10:50～11:40 3校時
11:50～12:40 4校時
12:40～13:10 給食
13:10～13:45 昼休み
13:55～14:45 5校時
14:55～15:45 6校時
15:50～16:05 掃除
16:10～16:20 学活（学級活動）
16:30 一般下校

ただし、金曜日は6校時がない（学校によっては水曜日がないところもある）。まだ、参観日などで短縮授業（45分）になることもある。

日本の中学校の授業科目及び時間数はTable73に示したとおりである。一週間で見ると（当該中学校18年度の日課表による）、2年生においては、国語・社会・数学・理科・保健体育・英語がそれぞれ3、家庭・技術・総合学習がそれぞれ2、音楽・美術・道徳・学活・選択科目がそれぞれ1校時で、合計29校時である。

ただし、中学校の生徒の90%以上が野球、サッカー、陸上、ブラスバンドなどの何らかのクラブに入っているとされている。また、習い事や学習塾に参加する生徒も多いため、実際において、日本でも下校後生徒達は多岐に渡って忙しくなっている。土日や夏休みなどの長期休暇の場合でもクラブ活動や様々な試合に励んでいることが多いとされている。

Table73 中学校の各教科の授業時数（平成10年文部省告示第176号：中学校学習指導要領による）

学 年	国 語	社 会	数 学	理 科	音 楽	美 術	保健 体育	技術・ 家庭	外国 語	道 徳	特別 活動	選択教科	総合的 な学習	総授業 時数
1年	140	105	105	105	45	45	90	70	105	35	35	0~30	70~100	980
2年	105	105	105	105	35	35	90	70	105	35	35	50~85	70~105	980
3年	105	85	105	80	35	35	90	35	105	35	35	105~165	70~130	980

注：この表の授業時数の1単位時間は、50分とする。

（3）中国と日本の比較

中国と日本の中学校のディリープログラム（校時表）から、以下のことが見てとれる。

- ① 校時表からも、日課表からも、中国の校時数は日本より多いことが見られるが、日本の一校時の授業時間が中国より5分長いため、全体的には中国の中学校は日本の中学校より校時数がやや多いが、授業時間の差が少なく、日中同様に生徒の発達に合わせた対応と考えられる。
- ② 授業科目からみると、中国の中学校は、国語・数学・英語における授業時数が日本より多いこと、寄宿制のため自習時間が日本より長いこと、それに合わせて宿題も多く、目の保健体操時間が設けていることが特徴的である。日本の中学校は、総合的な学習時間と選択学科を設けており、授業時数も多いことが特徴的であり、生徒の多様性に合わせて柔軟に対応していることが窺える。
- ③ 日本の中学校は給食があるが（調査した山口県は、中学校に給食があるようになってから約十年といわれている）、中国の中学校は給食がなく、各自で食堂や自宅或いは学校の近くの店でとることになっている。食堂においてはおかずの種類が多いとはいえないが、毎食数種類はあるとされている。中国において、食堂がありながら、給食がないことは、生徒数が多く（約3千人）、政府の福祉で対応しにくいことが背景にあるとも思われるが、中国社会の実情から、もっと有力な要因は、親や生徒自身にとって、選択肢がなく、数千人が毎日同じようなものを食べなければならないことは、想像もつかない、受け入れがたいことだからではないかと思われる。

2. 年間行事

(1) 中国において

調査した中国の中学校は、年間を通して全体的にみると、上学期、下学期それぞれの期中テスト、期末テストのほかに、各学科、特に国語・算数・英語においてあらゆる方面にコンテストが行われている。入手した2005年9月～2006年1月行事表から、具体的にみると、生徒が参加する主な行事は以下の通りである。

9月：生徒会を設立

各学年の各学科の趣味クラブの設立

「教師の日」慶祝活動（壁新聞）

2・3年生スピーチコンテスト

10月：建国記念日書道・絵画展示、各クラスで建国記念特別号の刊行

秋の運動会

11月：期中テスト

学生座談会

1年生英語ロールプレーコンテスト、1年生国語口頭伝達能力コンテスト

12月：2年生英語読解力と穴埋め問題コンテスト、2・3年生国語作文コンテスト

1月：元旦書道・絵画展示、各クラスの元旦演芸公演

期末テスト

三好学生（道德・学力・体育の3つの方面ともに優秀な学生）、優秀クラス委員、優秀青年団委員及び優秀青年団団員の選出

(2) 日本において

日本の中学校の一枚を取り上げてみると、年間に生徒が参加する主な行事は以下の通りである（平成18年度）。

4月：新任式・始業式・入学式、1年オリエンテーション、交通教室（1年）

成長測定、聴力・視力検査、検尿、歯科検診、耳鼻科検診

生徒集会、生徒会補欠選挙

市春季体育大会（土日）、会長旗争奪野球大会（土日）、西部地区卓球大会（土）

5月：内科検診、心電図、検尿再検

生徒集会、1年社会見学、2年自然教室、3年修学旅行、6校時参観授業

中間テスト

近郷テニス大会（土）、西部県体育大会（土日）

6月：眼科検診

生徒集会、自由参観週間（外部の人向け）

近郷剣道大会（日）、県陸上競技選手権（土日）、市春季体育大会（水泳）

期末テスト

7月：生徒集会、終業式、夏休み

全国中学校水泳競技大会県予選、市秋季体育大会

8月：市バスケットボール錬成会、市卓球選手権大会、全日本卓球県予選、市1年生軟式

野球大会、市ソフトテニス大会、県体育大会（水泳）、会長杯争奪卓球大会

9月：始業式

運動会

市軟式野球大会（土）、市新人体育大会（水泳）（土）、県体育大会（土）

10月：市新人体育大会（土日）、中間テスト、文化祭

11月：県中学校総合文化祭（土日）

学力検査（県）

近郷駅伝大会、県駅伝大会、県新人卓球大会、市学年別ソフトテニス大会

12月：期末テスト

市剣道選手権大会、市バレーボール選手権大会

3年三者（担任、保護者、生徒）懇談、終業式

1月：始業式、市新人駅伝大会、英語検定（希望者のみ）

2月：市サッカー選手権大会（土日）

公立推薦面接、英語検定、学年末テスト

3月：公立学力検査

近郷軟式野球大会（土日）、宇部オープン卓球大会、市1年生卓球大会

卒業証書授与式、仮入学、終業式

（3）中国と日本の比較

中国と日本の中学校の年間行事から、以下の特徴が窺えよう。

中国の中学校では、小学校と同様に、学習におけるコンテストが多く、あらゆる方面において行われている。書道・絵画コンテスト、スポーツ競技も見られるが、分野が狭く、回数も少ない。また、一学期の締めくくりとして、「三好学生」（優秀生徒）を選出することも中国の中学校の特徴である。実のところ、調査した中学校においては、生徒に対して、「三好学生」や優秀クラス委員を選出するだけでなく、教師に対しても、「教師総合考核評価細則」（教師総合考査評価の基準細則）が作成されており、100点満点で、教師の人徳・勤務態度・出勤率・能力・教育成績・研究業績などあらゆる方面にわたり、細かく採点の基準を出し、教師を評価している。

日本の中学校では、小学校と同様に、成長測定や様々な検診が学年の始まりの大きな行事として挙げられている。生徒会活動が年間通して取り上げられており、生徒が主体的に行っている文化祭も見られる。学校と保護者との連携を促進する行事として、自由参観週間、生徒・保護者・担任による三者懇談も見られる。生徒の社会や地域や環境への関心や関わりを促す行事として、社会見学・自然教室・修学旅行なども見られる。学習においては、学期ごとに中間テスト、期末テスト或いは県の学力検査が取り上げられている。特に多く取り上げられているのは、市や県が主催し、土日に開催されているスポーツ競技や文化的活動への参加である。日本の中学校においては、生徒の学習の面だけでなく、健康やスポーツ、文化芸術、主体性（生徒会活動）などにおいても全面的に育成し、生徒が心身ともに成長していくようにという教育理念が窺える。

3. 運動会

（1）中国において

小学校と同様に、調査した中国の中学校の運動会も「田徑運動会」（陸上競技運動会）であり、3日に渡って行われている（2007年10月25日～27日）。運動会のプログラムか

ら以下のことが示されている。

● 運動会期間中の校時表

- 6:50 朝食
- 7:30 審判員・選手・スタッフ入場
- 8:00 競技開始
- 12:00 昼食
- 13:40 審判員・選手・スタッフ入場
- 14:00 競技開始
- 17:30 競技終了、夕食

● 開会式の流れ

- ①選手・審判員入場
- ②礼砲、国歌放送
- ③校長挨拶
- ④審判員代表宣誓
- ⑤選手代表宣誓
- ⑥審判員・選手退場、試合開始

● 競技の種目

100m走、200m走、400m走、800m走、1500m走、5000m走（女子は3000m）、
4×100mリレー、走り高跳び、走り幅跳び、三段跳び、砲丸投げ、110m障害走（女子は110m）、円盤投げ、槍投げ

* 砲丸投げにおいては、1・2・3年男子はそれぞれ4kg・4kg・5kgであり、1・2・3年女子はそれぞれ3kg・3kg・5kgである。

* 1年男子、1年女子、2年男子、2年女子、3年男子、3年女子の6つのグループに分けて競い合う。

● 参加の方法

- ①クラス単位で出場選手を選抜し、各種目の競技に参加する。各クラスの選手は男子15名、女子10名とする。
- ②一つの競技種目において、一つのクラスに3人まで参加できる。
- ③一人の選手は二つの種目まで参加できる（リレーを除き）。

● 採点と表彰の方法

- ①個人競技種目においては6位まで賞品を与え（賞品は順位によってやや異なる）、1～6の順位に7、5、4、3、2、1の点数を所属クラスの総得点にプラスする。
- ②団体競技種目においては4位まで賞状を与え、1～4の順位に10、6、4、2の点数をクラスの総得点にプラスする。
- ③学校の記録を破った場合は7点、県の記録を破った場合は14点をクラスの総得点にプラスする。
- ④運動会期間中、開会式の後に、ラジオ体操大会を行う。各学年6位まで表彰する。1～6の順位にそれぞれ12・10・8・6・4・2点をクラスの総得点にプラスする。選出基準は以下の通りである。
 - ・総得点は100点とする。各評議員の採点の平均値を最後の得点とする。

- ・動作が正しくきちんとできている（最高 20 点）。誤った動作がある場合、一人につき 0.1 点をマイナスする。
 - ・動作が音楽のリズムに乗っている（最高 10 点）。
 - ・クラス全員の動作が合致している（最高 10 点）。
 - ・精神状態が良い（最高 5 点）。
 - ・前に立ってリードしている学生の動作が正しくて美しい（最高 5 点）。
 - ・クラス全員が参加している（最高 10 点）。無断欠席した場合は一人につき 1 点をマイナスする。
 - ・各クラスが自ら整列する（最高 10 点）。
 - ・大会の際は服装が整然とし、学校の制服に統一する（最高 10 点）。制服を着ていない場合は一人につき 0.1 点をマイナスする。
 - ・入場と退場の様子、それぞれ最高 10 点とする。
- ⑤総得点により、各学年（1 年 10 クラス、2 年 14 クラス、3 年 16 クラス）男女それぞれ 2 名まで団体賞（賞状）を与える。総得点が同点の場合は記録を破った種目の多いほうに、記録を破った種目も数と同じ場合は競技項目に 1 位の多いほうのクラスが上位になる。
- ⑥「精神文明奨」を各学年それぞれ 1 クラスに与える。選出基準は以下の通りである。
- A 学校の運動会の規律を順守している。
- ・規律の守りが良い・まあ良い・普通・良くないの評価別に 5・4・2・0 点を与える。毎日午前中一回評価する。
 - ・クラスの人数をチェックし、欠席者一人につき 0.5 点をマイナスする。
 - ・指定されている観覧席に着席し、チェックする際クラス担任が不在の場合（審判を担当する場合を除く）、一回につき 1 点をマイナスする。
- B 運動会のためになることをしている。1 件につき 2～5 点をプラスする。
- C 宣伝文章を書いている。採用された文章は 1 篇につき 0.5 点、未採用の文章は 1 篇につき 0.1 点をプラスする。
- D 競技中は、友誼を第一にし、競技は第二としている。
- ・選手が無断欠席した場合、1 回につき 1 点をマイナスする。
 - ・選手が欠場した場合、1 回につき 0.2 点をマイナスする。
 - ・選手が競技中に途中棄権した場合、1 回につき 0.5 点をマイナスする。
 - ・選手がこけても競技を続けた場合、1 回ごとに 1 点をプラスする。
 - ・他人の競技を邪魔してはいけない。延べ人数一人につき 5 点をマイナスする。
 - ・選手に付き添って走ってはいけない。延べ人数一人につき 2 点をマイナスする。
- E 以下のことがあった場合、一票で否決になる（失格する）
- ・他人の名前をかたり、替え玉になる人がいる場合。
 - ・宣伝用文章の寄稿数が 50 篇未満の場合。
 - ・組織委員会の手配に従っていない場合。

（2）日本において

調査した日本の中学校の運動会は、いずれの中学校とも 1 日で行われており、具体的な競技内容も似通っている。その中から一校を例に挙げて、そのプログラムは Table74 に示

したとおりである（平成 19 年 9 月）。

Table74 日本の中学校の運動会のプログラム

8:30	グラウンド集合					
8:40	入場行進・開会式					
9:05	準備体操					
		順	種別	演技種目	出場者	
9:00		1	個	100m・最速 No.1 決定戦	A	
9:20		2	リ	百足リレー	B	
9:35		3	個	ちょっと借りるね	A	
9:50		4	個	三人息ぴったり	B	
10:05	午	5	リ	我等男前・出前レンジャー	男	
10:15	前	6	個	挑戦！障害に立ち向かえ	B	
10:35	の	7	リ	まわれまわれ	A	
10:50	部	8	団	大玉五郎	1 年全	
11:00	演 技 ・ 競 技	9	団	綱引き	後期全	
11:20		10	団	CHUTO ～ 男祭り ～	2・3 年全男	
11:35		11	リ	着せ替えモデル	女	
11:50		12	リ	スウェーデンリレー	男	
13:00		13		部活動対抗リレー	教職員・PTA	
13:30		14	団	玉入れ	1・2 年全	
13:40		午	15		平家踊り	全
13:50		後	16	団	応援合戦	後期男
14:20		の	17	リ	トライ！！マッスル・キャンプ	2・3 年全女
14:30		部	18	団	走れ！奪え！くぐれ！	後期・全女
14:45		19	団	騎馬戦	後期・全男	
15:00		20	団	棒上旗奪い	男女	
15:15		21	リ	隊別リレー		
15:30	閉会式					

注：Aは1・3・5 学年女子、2・4・6 学年男子であり、Bは2・4・6 学年女子、1・3・5 学年男子である。

当該中学校は中高一貫制であり、各学年は中学 1・2・3 年、高校 1・2・3 年という呼称でなく、一貫性・連続性を持つ 1・2・3・4・5・6 回生という呼称を用いており、1・2・3 回生は前期生、4・5・6 回生後期生と呼ばれている。従って、運動会も前期生、後期生ともに参加している。

当該学校は 6 学年が在籍し、人数が多いため、全員参加の運動会ではあるが、各競技種目とも、全員出場するのではなく、あらかじめ希望を取って出場種目を決めている。全校の各学年を通して、色別（3 色）に分かれて得点を争い、最終の勝者に優勝杯が与えられている。

(3) 中国と日本の比較

中国と日本の中学校の運動会は、小学校の運動会と同様な特徴が見られる。

中国の中学校の運動会はスポーツ競技であり、その競技種目の設定も、運動会期間中の儀式的の流れもスポーツ競技会に習っている。個人種目においては個人へ、団体種目においては団体へ表彰する。クラスの団結と榮譽感を促進するために、クラス単位で団体賞を競い合う。

日本の中学校の運動会は、スポーツ競技というよりも、スポーツを楽しむ集会といったほうが妥当であるように思われる。個人種目の競技においても個人賞がないこと、各学年ともに均等に個人競技、団体競技、リレーがあり、クラス全員が参加していることが特徴的である。

第4節 中国と日本の高校生活

1. ディリープログラム

(1) 中国において

調査した中国の高校は寄宿制であるため（中国の農村部や小都市においては寄宿制高校が中心的である）、夜の自習時間も設けている。中国の高校は45分授業を行っており、その校時表は以下の通りである（2005年9月～10月の秋季の校時表）。

6:00 起床

6:10～6:30 ラジオ体操、朝の鍛錬

6:30～7:10 朝学（月・水・金は国語、火・木は英語の朗読）

7:10～8:00 朝食

8:00～8:10 唱歌

8:10～8:55 1校時

9:05～9:50 2校時

10:00～10:45 3校時

10:55～11:40 4校時

11:40～12:05 昼食

12:05～12:30 英語テレビ放送

12:30～13:40 昼休み

14:10～14:55 5校時

15:05～15:50 6校時

16:00～16:45 7校時

16:55～17:40 8校時（月、木曜日は大掃除）

17:40～18:40 夕食

18:40～20:10 夜の自習（1）

（19:00～19:30 テレビニュース放送、20:05～20:10 目の保健体操）

20:20～21:50 夜の自習（2）

22:10 戸締り、消灯、就寝

高校も中学校と同様に、春夏秋冬の季節によって、起床時間、昼休みの時間などが微調整されている。冬季（11月～3月上旬）は秋季より起床時間を20分遅らせ、昼休みを20分短縮している。春季（3月下旬～5月上旬）は秋季より起床時間を10分遅らせ、昼休みを10分短縮している。夏季（5月下旬～7月）は秋季より起床時間を10分早くさせ、昼休みを10分延長している。

授業科目は、1年生は文理系が分れてなく、両方の授業をとっている。2年生以降に文科系と理科系が分かれている。文科系は国語・数学・英語・政治・歴史・地理・生物・化学・美術・体育・情報の11科目、理科系は国語・数学・英語・政治・物理・化学・生物・美術・体育・情報の10科目となっている。

一週間で見ると、2年生においては、文科系は国語・数学・英語がそれぞれ6、政治・歴史・地理がそれぞれ4、生物・体育がそれぞれ2、化学・物理・美術・情報がそれぞれ1校時で、合計38校時である。理科系は国語・数学・英語がそれぞれ6、物理が5、化学・生物がそれぞれ4、政治・体育がそれぞれ2、美術・情報がそれぞれ1校時で、自習1校時をプラスして、合計38校時である。

（2）日本において

学校によって、生徒の登下校時間が少しずれたり、授業の時間（45分授業が多いが、50分授業をするところもある）が違ったりするところもあるが、調査した高校はいずれも普通科の高校、或いは普通科を中心とした高校である。各学校とも文部省の普通科高校の学習指導要領に定められた基準でカリキュラムを組んでいるため、校時表や日課表から見ると、授業時間数や授業科目が基本的には類似している。その中から、いわゆる「進学校」の一枚を取り上げてみると、校時表は以下の通りである（平成18年度）。当該高校は中国と同様に、45分授業を行っている。

8:35	朝の会
8:50～9:35	1校時
9:45～10:30	2校時
10:40～11:25	3校時
11:35～12:20	4校時
12:20～13:00	昼休み
13:05～13:50	5校時
14:00～14:45	6校時
14:55～15:40	7校時
15:40～15:50	掃除

日本の高校は下校が早い、ほとんどの生徒がクラブ活動や学習塾に参加しているため、下校後も学校に残ってクラブ活動に参加したり、塾に通ったりして、多岐に渡って忙しくなっている。

日本において、高校卒業までに履修させる各教科に属する科目、特別活動及び総合的な学習の時間の単位数を含めて74単位以上が必要である。単位については、1単位時間を50分とし、35単位時間の授業を1単位として計算することが標準とされている。

普通科の高校の授業科目と標準単位数はTable75に示したとおりである。その中には基礎的なものとして、すべての生徒に履修させる各教科・科目も指定されている。

特別活動とは、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。」という教育の目標を達成するための活動であり、具体的にはホームルーム活動、生徒会活動及び学校行事である。

総合的な学習とは、地域や学校、生徒の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動である。卒業までに 105～210 単位時間を標準とし、そのねらいは、①自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。②学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにすること、とされている。

Table75 日本の普通科の高校の授業科目と標準単位数（高等学校学習指導要領より）

教科	科目（括弧内は標準単位数）
国語	国語表現 I(2)、国語表現 II(2)、国語総合(4)、現代文(4)、古典(4)、古典講読(2)
地理歴史	世界史 A(2)、世界史 B(4)、日本史 A(2)、日本史 B(4)、地理 A(2)、地理 B(4)
公民	現代社会(2)、倫理(2)、政治・経済(2)
数学	数学基礎(2)、数学 I(3)、数学 II(4)、数学 III(3)、数学 A(2)、数学 B(2)、数学 C(2)
理科	理科基礎(2)、理科総合 A(2)、理科総合 B(2)、物理 I(3)、物理 II(3)、化学 I(3)、化学 II(3)、生物 I(3)、生物 II(3)、地学 I(3)、地学 II(3)
保健体育	保健(2)、体育(7～8)
芸術	音楽 I(2)、音楽 II(2)、音楽 III(2)、美術 I(2)、美術 II(2)、美術 III(2)、工芸 I(2)、工芸 II(2)、工芸 III(2)、書道 I(2)、書道 II(2)、書道 III(2)
外国語	オーラル・コミュニケーション I(2)、オーラル・コミュニケーション II(4)、英語 I(3)、英語 II(4)、リーディング(4)、ライティング(4)
家庭	家庭基礎(2)、家庭総合(4)、生活技術(4)
情報	情報 A(2)、情報 B(2)、情報 C(2)

（３）中国と日本の比較

中国と日本の高校のディリープログラム（校時表）、日課表、学習指導要領から、以下のことが見てとれる。

- ① 中国の高校の校時数は日本より多い。中学校と同様に、寄宿制のため自習時間が日本より長く、それに合わせて宿題も多く、目の保健体操時間を設けている。
- ② 日本の高校は、普通科高校と農業・工業・商業・水産・家庭・看護・情報・福祉・理数・体育・音楽・美術・英語の各専門高校と大別している。中国の高校と最も性質の近い普通科高校も、中学校と同様に、総合的な学習時間を設けており、授業時数も多いことが特徴的である。

2. 年間行事

(1) 中国において

調査した中国の高校は、年間を通して全体的にみると、上学期、下学期それぞれの期中テスト、期末テストのほかに、2年生は毎月の小テスト、3年生は毎週の小テストが実施されている。また、2・3年生から、各学科（数学・物理・化学・生物）の全国コンテストへ出場する生徒の選抜と強化学習もあると言われている。小中学校と同様に、学期の終わりに「三好学生」（優秀生徒）の選出も行われている。他に大型行事として、3日に渡る全校運動会、各クラスでの元旦慶祝パーティーが取り上げられている。

具体的にみると、入手した2006年2月～4月の生徒が参加する主な行事は以下の通りである。

2月：冬休み、始業式（手続き、大掃除）

1年生法制教育

3年生週間テスト、3年生「百日ラストスパート」動員大会

生徒による「感謝の心」アナウンス

1年生数学・物理・化学・英語競技グループ活動開始

3月：2年生法制教育

2年生月間テスト、3年生9校共同テスト、3年生週間テスト

生徒による「感謝の心」アナウンス

各学年の各クラスで「雷鋒に学ぶ」壁新聞を刊行

4月：1・2年生「栄誉と恥辱の意識」をテーマにしたクラス新聞を発行

1・2年生書道・絵画コンテスト、1・2年生期中テスト、3年生週間テスト

2年生法制教育

『テスト期間中の不正行為を防ぐための規定』を学習した感想文、生徒全員の誓約書、これをテーマにしたクラス新聞の発行。

生徒による「感謝の心」アナウンス、「毎週一曲」の練習会

(2) 日本において

日本の高校の中から、中国の高校に最も近い、いわゆる「進学校」を取り上げてみると、生徒が参加する主な行事は以下の通りである（平成18年度）。

4月：着任式・始業式・入学式

1年オリエンテーション、1年スタディーサポート、交通教室

内科検診、心電図検診、歯科検診、検尿

5月：身体測定・新体力テスト、耳鼻科検診、眼科検診、胸部検診、再検尿

生徒総会

3年生学研模擬試験（土）、第1回考査

6月：高校総合体育大会（土日）、文化祭、高校総合文化祭

3年生進研マーク模擬試験（土）、第2回考査

7月：進研記述模擬試験（土）

総務会役員選挙、全校集会、夏休み

8月：修学旅行

全国高校総合文化祭、吹奏楽コンクール

3年生全統マーク模擬試験、全統記述模擬試験（1・2年生）、学校説明会

- 9月：全校集会、課題考査、頭髪服装検査、防災訓練、終業式（前期修了）
体育大会
代々木ゼミセンター模擬試験
- 10月：始業式、創立記念行事、読書会、後期人権学習
3年生進研記述模擬試験（土）、3年生全統記述模擬試験（土）、第3回考査
- 11月：家庭クラブ体験学習
3年生全統マーク模擬試験（土）、進研記述模擬試験（土）（1・2年生）、進研マーク模擬試験
- 12月：第4回考査、小論文模擬試験、アンサンプルコンテスト県大会
全校集会、3年三者面談
- 1月：全校集会、課題考査、頭髪服装検査
進研記述模擬試験（土）（1・2年生）、センター試験、3年生学研アンカー小論文（土）、学研ハイレベル模擬試験（1年）
- 2月：マラソン大会
推薦入学者選抜面接、センター早期対策（2年）、第5回考査
大掃除・会場準備、卒業式予行／同窓会入会式・授賞式
- 3月：全国・駿台マーク模擬試験（土）（1・2年生）
卒業式、合格発表、終業式

（3）中国と日本の比較

中国と日本の高校の年間行事から、以下の特徴が窺えよう。

中国の高校では、小中学校と同様に、学習におけるコンテスト・テストが多いことが特徴的である。また、高校生に対しては、法制教育・「感謝の心」アナウンス・「雷鋒に学ぶ」壁新聞・「テスト期間中の不正行為」しない誓約書などに見られるように、高校生の心へ関わりも多く見られ、高校生の道徳理念の形成に力を入れていることが窺える。

日本の高校では、小中学校と同様に、成長測定や様々な検診が学年の始まりの大きな行事として挙げられている。生徒会活動、懇談会、スポーツ競技や文化的活動、修学旅行なども見られる。また、年間行事に取り上げられた高校は「進学校」であるため、学習におけるテストも多く見られた。ただし、日本では、このような普通科高校以外に、農業・工業・商業・水産・家庭・看護・情報・福祉・理数・体育・音楽・美術・英語などの多くの専門高校があり、各高校の専門性に合せた学習指導要領が告示されている。高校によって、学校行事、特に学習に対する要求が異なっていると思われる。

3. 運動会

（1）中国において

調査した中国の高校の運動会も、小中学校と同様に、「田徑運動会」（陸上競技運動会）であり、3日に渡って行われている（2007年10月26日～28日）。運動会のプログラムから以下のことが示されている。

● 運動会期間中の校時表

7:00 朝食

7:40 審判員・選手・スタッフ入場

- 8:00 競技開始
- 11:30 昼食
- 14:00 審判員・選手・スタッフ入場
- 14:30 競技開始
- 17:30 競技終了

● 開会式

- ①入場式：国旗隊、宣伝画隊、彩色旗隊、花束隊、各クラスの選手の順に入場する。
各クラスが主席台（演壇、講壇）を通る際、「団結、友誼、進歩」「発展体育運動、
増強人民体質」「鍛錬身体、振興中華」「奮発学習、為校争光」「我運動、我陽光、
我運動、我快樂」のスローガンを高く叫ぶこととする。
- ②はじめの言葉（校長）、礼砲
- ③国歌放送、国旗掲揚
- ④校長助役挨拶
- ⑤審判員代表宣誓
- ⑥選手代表宣誓
- ⑦終わりの言葉、審判員・選手退場

● 競技の種目

- 100m走、200m走、400m走、800m走、1500m走、3000m走、4×100mリレー、走り高跳び、走り幅跳び、三段跳び、砲丸投げ、円盤投げ、槍投げ
- * 砲丸投げにおいて、女子は4kg、1年男子は5kg、2年男子は6kgである。女子は3000m走の種目を設けていない。
- * 大学入試に備えるため、3年生は参加していない。1年男子、1年女子、2年男子、2年女子の4つのグループに分けて競い合う。
- * 出演項目として、1・2年のクラス担任によるリレーが設けている。

● 参加の方法

- ①クラス単位で出場選手を選抜し、各種目の競技に参加する。
- ②一つの競技種目において、一つのクラスに3人まで参加できる。
- ③一人の選手は二つの種目まで参加できる（リレーを除き）。

● 採点と奨励の方法

- ①各種目に6位まで奨励する（個人種目は賞品、団体種目は賞状）。6人以下参加する項目は、一人を減って奨励する。1人が参加する項目は競技とせず、出演項目とする。各競技種目は1～6の順位に7、5、4、3、2、1の点数をクラスの総得点にプラスする（リレーの点数は倍に）。
- ②各クラスの総得点により、1年（22クラス）と2年（20クラス）それぞれ8位まで奨励する。総得点が同点の場合、競技種目に1位の多いほうのクラスが上位になる。
- ③「体育道徳風尚奨」を1年と2年それぞれ2クラスに与える。選出基準は以下の通りである。
 - ・学校の運動会の規律を順守し、遅刻・早退・欠席なく、時間通りに活動と休憩をしている。

- ・競技中、選手は時間通りに出場し、選手以外の方は各クラスに指定された観覧席で休憩し、応援する。選手に付き添って走ったり、野次馬見物したりしてはいけない。
- ・勇敢と努力の精神を発揮し、勝利しても傲慢せず、失敗しても落胆しない。良い風格と高いレベルの競技を追求している。
- ・団結と助け合う精神を発揮し、積極的に負傷者を救助する。選手以外の方は積極的に運動会や選手のためになることをしている。
- ・積極的にラジオ放送や壁新聞などの宣伝や報道を担当する組織に寄稿し、速やかに競技場の良い気風、良い人、良いことを表彰している。
- ・各競技項目において、他人の名前をかたり、替え玉になることをしてはならない。

④優秀審判員（教師）を全校2名、優秀選手を各クラス1名選出する。

（2）日本において

Table74 に例示した中高一貫制の高校の運動会は、中学校と共同で1日に行われているが、当該学校は運動会のほかに、生徒会が主催するチューター会対抗戦（クラスマッチ）も行っている。生徒へのアンケート調査の結果を元に、綱引き・30人31脚・バレーボール・サッカーなど、一つ取り上げて対抗戦を行っている。

調査したほかの高校はいずれも2日に渡って体育大会を行っている。その一校が平成19年9月に行われている体育大会では、1日目の午前は、開会式の後、3年生によるクラスパフォーマンスがあり、続いてはクラス対抗形式の男女混成（男子3名、女子3名）リレーの予選である。午後は、体育館においてはバスケットボール、グラウンドにおいてはフットベースボール（女子）、ソフトボール（男子と3年女子）、サッカー、テニスコートではバレーボール、ドッジボールが行われた。2日目は、1日目の球技の続きが行われ、大会の最終種目は、いっぱい足競争（30人31脚）とリレー決勝である。閉会式では、成績発表が行われ、校長が賞状を授与し、生徒会長がしめくくりのあいさつをして、大会全日程を終えた。

（3）中国と日本の比較

中国と日本の高校の運動会は、小中学校の運動会と同様な特徴が見られる。

中国の高校の運動会はスポーツ競技であり、その競技種目の設定も、運動会期間中の儀式的の流れもスポーツ競技会に習っている。個人種目においては個人へ、団体種目においては団体へ表彰する。クラスの団結と榮譽感を促進するために、クラス単位で団体賞を競い合う。

日本の高校の運動会は、スポーツ競技というよりも、スポーツを楽しむ集会といったほうが妥当であるように思われる。個人種目の競技においても個人賞がないことが特徴的である。

第5節 考察とまとめ

中国と日本の保育園・小学校・中学校・高校の生活に関する以上の調査結果から、主な特徴について以下のようにまとめることができる。

1. ディリープログラム（校時表）について

中国と日本の保育園・小学校・中学校・高校のディリープログラム（校時表）、及び日課表から、以下の特徴が見られる。

（1）日本の保育園の保育時間が中国より長く、日本の保護者の勤務時間や勤務形態に合わせて、柔軟に対応した結果と思われる。

（2）中国の保育園における午睡時間が日本より長く、小学校・中学校・高校における昼休みの時間も日本より長い。昼の休憩に対する両国の意識のズレが窺える。

（3）小学校において、中国と日本の授業時間の差が少ないが、中学校において、中国の授業時間が日本よりやや多くなり、高校において、中国の授業時間が日本よりさらに多くなっている。中国と日本は、同様に子どもの発達に合わせて対応している一方、中国のほうが日本より子どもの学習に対する要求や期待が高いことも窺える。それと呼応して、下校後の余暇時間において、中国の子どもは宿題や復習に追われて忙しくなっているが、日本の子どもはスポーツ活動、ピアノ・絵画・書道など文化芸術的活動、学習塾に参加し、多岐にわたって忙しくなっている。授業科目からも、中国は国語・数学・英語などの主要の科目において日本より授業時数が多いが、日本は子どもが「①自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。②学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする」というねらいから、総合的な学習の時間を小・中・高通して設けており、授業時数も多くなっている。

（4）保育園においては日中ともに給食があるが、小中学校においては、日本は給食があるが、中国は小学生が自宅で、中学生は学校の食堂で昼食をとることになっている。これは、日本において、保護者の負担を軽減する配慮、子どもの健康への科学的専門的な管理の要求から福祉の充実を果たしたと考えられる一方、中国において、子どもの個性への尊重或いは子どもへの溺愛から、子どもを全員同一のメニューに縛ることへの抵抗感が強いことも有力な要因であるとも考えられる。

2. 年間行事について

（1）中国と日本の年間行事は、運動会、参観日、保育園における親子の触れ合い活動、学校における学力検査など、似通っているところが多くみられる。幼児の保育、子どもの教育における両国の理念は共通しているところが多いと考えられる。

（2）中国の保育園や学校においては、競技活動が多く行われ、個人賞が設けられていること、一年の締めくくりとして、優秀幼児、児童、生徒を選出することが特徴的である。子ども間の競技だけでなく、教師に対しても、多くのコンテストが設けられており、また、あらゆる方面において細かく採点の基準を出して教師を評価している。中国では、競争を提唱し、あらゆる方面における個人への評価により、一人ひとりの才能や力を出し切るようにという教育理念が窺える。

（3）日本の保育園や学校においては、成長測定や様々な検診が学年の始まりの大きな行事として挙げられていること、運動会においても、音楽発表会・生活発表会・文化祭においても、個人による発表や表彰がなく、グループによる団体演技や団体賞が中心的事業であること、児童や生徒が主体的に行動しているクラブ活動・委員会活動・生徒会活動・学校文化

祭が年間通して展開していること、参観日・校区単位の文化祭・社会見学・修学旅行などに見られる地域社会との連携が多いことが特徴的である。日本では、地域や保護者との連携をとりながら、子どもの学習の面だけでなく、健康やスポーツ、文化芸術、主体性（生徒会活動）などにおいても全面的に育成し、生徒が心身ともに成長していくようにという教育理念が窺える。

3. 運動会について

(1) 中国と日本の保育園の運動会における種目の設定は、似通っているところが多く、日中ともに幼児の発達に合せて対応していることが見られる。

(2) 小学校以降においては、中国と日本の運動会における種目の設定は、リレー以外、大きく異なっている。中国の学校の運動会は、県主催の運動会と同様の「田徑運動会（陸上競技運動会）」であり、種目の設定も運動会の進行も、スポーツ競技に準じている。日本の学校の運動会は、スポーツ競技というよりも、皆が力を合せてスポーツを楽しむ集会といったほうが妥当であるように思われる。種目の設定には団体演技が多く取り入れ、競技の結果も各学年を込みにした色別競争の団体賞になっている。

(3) 中国の保育園や学校の運動会の特徴は、スポーツ競技であり、個人賞、クラス単位の団体賞、精神文明賞が設定しており、評価基準もきめ細かく立てている。競技の公平性、競技よりも助け合う・協力し合うことの大切さ、個人能力の最大限の発揮、所属集団への一体感・榮譽感の育成などのねらいが窺える。

(4) 日本の保育園や学校の運動会の特徴は、全員参加のスポーツを楽しむ集会であり、個人賞や所属クラスの団体賞がなく、最終の結果は各学年を込みにした色別の競争になっている。各学年の各クラスともに平等に出演し、来場者の参加も配慮されている。園や学校の全員が平等に参加できることの公平性、団体種目を通して集団生活や共同作業における協調性、学年を超えてより広い集団の形成及び集団内の協力・協調性の育成などのねらいが窺える。

(5) 中国においては、入学後、成績、個人及び担任教師の要望や事情により、小範囲の所属クラスの変更が見られるが、基本的には小学校の全段階、中学校の全段階、高校の全段階を通してクラス替えしないのである。日本においては、学級内では席替え、進級によってはクラス替え、校内では縦割り班（全校の児童が各学年ともにいくつかのグループに分けて、学年を超えて共同で行動する）があり、運動会では色別に分かれ、一人の子どもは流動的に様々な集団に属することが特徴的である。日本において、子どもに、より多くの人と触れ合い、より自由自在に多くの人と協調できる能力を身につけてほしいという教育のねらいがあるのではないかとと思われる。

4. 全体の特徴

全体的にみると、中国の幼稚園や学校は、学習の面に重みを置き、公平性を保ちながら、子ども一人ひとりの能力を最大限に発揮するような教育の態勢が窺える。日本の幼稚園や学校は、勉強だけでなく、子どもの人間性、特に人との協調性、集団内の協力意識を重点に置いて育成するような教育の態勢が窺える。

第5章 社会的問題解決方略に影響する社会環境的要因（3）：

葛藤解決目標

社会的問題解決に際して、性別、地位、親密さなどの当事者属性の影響要因のほかに、社会的動機付けとして、葛藤場面に出会った時、どのような結果や目標を期待するかという葛藤解決目標も、子どもの社会的問題解決方略に影響を与える社会環境的要因である。

社会的問題解決に関する研究において、近年、社会的動機付けを強調する多目標理論が提起された（Ohbuchi et al, 1996; Fukushima & Ohbuchi, 1996）。大淵ら（1996）は宮城・福島両県の学校に赴任していた ALT（自治体国際協会を通じて、各都道府県の中学校・高等学校の外国語補助教師として採用された外国人。英語を母国語とする大学卒、30歳未満の男女で、ほとんどはアメリカ、カナダ、イギリスの出身者である）と、同じ学校に勤務する日本人教師達を対象に、葛藤経験を想起させ、葛藤解決の目標、方略などについて調査した。ALT は日本人教師より公正目標、日本人教師は ALT より資源目標（経済的目標）と敵意目標（「相手の悪い行為を罰したかった」「相手を打ち負かしたかった」）を強く期待した、ALT は相対的に攻撃的方略を多用し、日本人教師は相対的に回避的方略（抑制方略）を用いることが多かった、という結果を明らかにした。

しかし、葛藤解決目標に関する比較研究は、依然東洋と西洋という文化の枠組みの中に止まっており、同じ東洋文化圏に属する中国と日本に関する比較研究がまだ展開されていない。日本と中国は地理歴史、言語文化、社会制度など様々な面において異なっており、社会的問題解決方略のみならず、葛藤解決目標にそれぞれ特徴があると思われる。

本研究では、葛藤解決目標を社会的問題解決方略に影響を与える社会環境的要因と考え、日本と中国の大学生を対象として、葛藤解決目標及び葛藤解決目標と社会的問題解決方略の相関関係について比較検討することにした。

葛藤解決目標については、大淵ら（1996）、大淵・福島（1997）に参照し、次の12項目を作成した。①私は、相手と良い関係を維持したい。②私は、相手の悪い行為を罰したい。③私は、相手から尊重され、丁寧に扱ってもらいたい。④私は、自分の名誉、体面、評判を回復したい。⑤私は、自分の自由やプライバシーを守りたい。⑥私は、金銭的に有利な結果を得たい。⑦私は、相手とお互いに理解し合いたい。⑧私は、相手の考えや行動を変えたい。⑨私は、相手から公平に扱われたい。⑩私は、自尊心やプライドを回復したい。⑪私は、自分の仕事、勉強、予定していたことを進めたい。⑫私は、弁償してもらいたい。

質問紙において、12項目の目標を提示し、それぞれの目標に対して、「強く望む（4点）」から「全く望まない（1点）」までの4件法により選択させた。

第1節 葛藤解決目標の因子構造

中国と日本の全対象者の12項目の葛藤解決目標に対して、因子分析を行った結果、Table76 に示したような3因子を抽出した（累積寄与率＝41.87%）。因子分析においては、

初期解は主因子法であり、共通性の初期値は SMC と指定し、因子の回転はバリマックス法とした。

「自尊心やプライドを回復したい」「相手から尊重され、丁寧に扱ってもらいたい」「自分の名誉、体面、評判を回復したい」などの項目を含めた第 1 因子は「社会的目標」因子、「金銭的に有利な結果を得たい」「弁償してもらいたい」の項目を含めた第 2 因子は「経済的目標」因子、「相手と良い関係を維持したい」「相手とお互いに理解し合いたい」の項目を含めた第 3 因子は「関係目標」因子と命名した。

Table76 葛藤解決目標に関する因子分析

3 私は、相手から尊重され、丁寧に扱ってもらいたい	0.690		
4 私は、自分の名誉、体面、評判を回復したい	0.679		
5 私は、自分の自由やプライバシーを守りたい	0.533		
9 私は、相手から公平に扱われたい	0.632		
10 私は、自尊心やプライドを回復したい	0.790		
11 私は、自分の仕事、勉強、予定を進めたい	0.506		
6 私は、金銭的に有利な結果を得たい		0.579	
12 私は、弁償してもらいたい		0.779	
1 私は、相手と良い関係を維持したい			0.633
7 私は、相手とお互いに理解し合いたい			0.559
因子負荷量の 2 乗和	2.834	1.227	0.964
因子の寄与率 (%)	23.614	10.221	8.035
累積寄与率 (%)	23.614	33.835	41.870

第 2 節 中国と日本における葛藤解決目標

社会的目標、経済的目標、関係目標の 3 因子について、それぞれの因子に含まれている項目の評定値を平均し、日中別、男女別で集計した (Fig. 28)。

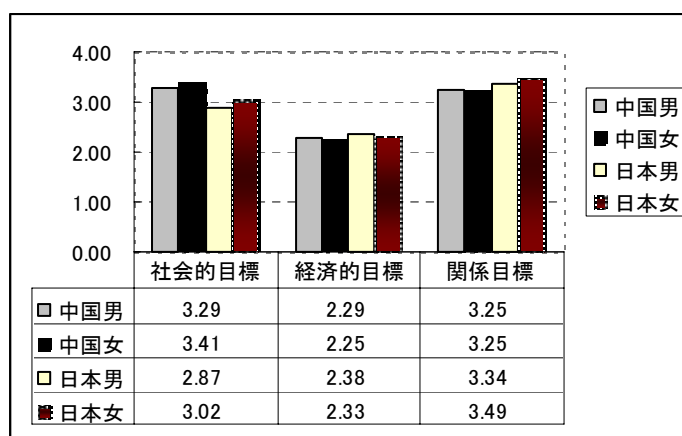


Fig. 28 中国男女、日本男女の葛藤解決目標の評定値

Fig. 28 から見られるように、中国においても日本においても、社会的目標、関係目標が強く望まれ、経済的目標はあまり望まなかった。社会的目標において、中国男女ともに日本男女より大きく上回り、関係目標においては、日本男女が中国男女より上回った。

国(2)×性(2)の多変量分散分析(ANOVA4)及びt検定の結果、社会的目標においては、中国男女ともに日本男女より有意に高い($p < .001$)。中国女子が中国男子より、日本女子が日本男子より、有意に高い($p < .001$)。関係目標においては、全体的に日本が中国より有意に高く($p < .001$)、下位検定の結果、日本女子が中国女子より有意に高く($p < .005$)、日本男子が中国男子より高い傾向が見られた($p < .10$)。日本女子が日本男子より有意に高い($p < .01$)。経済的目標においては、日中間、男女間差が少なく、全体的に日本が中国より高い傾向が見られた($p < .10$)。国×性の交互作用は有意でなかった。

第3節 社会的問題解決方略と葛藤解決目標の相関関係

葛藤解決目標と各場面の社会的問題解決方略の相関を日中、男女別で分析し、相関が見られた項目(相関係数0.2以上)はTable77に示したとおりである。全体的に高い相関は見られなかった。

Table 77 社会的問題解決方略と葛藤解決目標の相関

	社会的目標				経済的目標				関係目標	
	中国男	中国女	日本男	日本女	中国男	中国女	日本男	日本女	中国女	日本男
直攻	-0.31	-0.23					0.24	0.27		
表情攻			0.20				0.22			
背後攻			0.27	0.23						
断絶攻			0.28		0.21	0.31	0.25	0.23		
直主		0.34	0.27	0.23		0.22	0.23	0.24	0.20	0.22
間主		0.25	0.32	0.27		0.22				0.27
ジャン	-0.24									
非故意抑							-0.24	-0.20	0.21	
重要度	0.30	0.38	0.40	0.33		0.22	0.26	0.21		

社会的目標は、中国男女の直接的攻撃、中国男子のジャンケンと弱い負の相関を示した。中国大学生において、「自尊心やプライドを回復したい」「相手から尊重され、丁寧に扱ってもらいたい」「自分の名誉、体面、評判を回復したい」という「社会的目標」を強く望めば、直接的攻撃も、安易に解決に至る「ジャンケン」も取らない傾向が見られる。社会的目標は、日本男子の表情攻撃、断絶攻撃、日本男女の背後攻撃、日本男女及び中国女子の直接的主張、間接的主張と弱い正の相関を示した。日本大学生において、「社会的目標」を強く望めば、間接的攻撃や主張的方略をとる傾向が見られる。中国大学生女子においては、主張的方略を通して「社会的目標」を達成する傾向が見られる。社会的目標は、日中

男女の重要度といずれも弱い正の相関を示した。「社会的目標」を強く望めば、葛藤を重要視する傾向が窺える。

経済的目標は、日本男女の直接的攻撃、日本男子の表情攻撃、日中男女の断絶攻撃、日本男女及び中国女子の直接的主張、中国女子の間接的主張と弱い正の相関を示した。経済的目標を強く望めば、積極的に主張したり、損害を与えてきた相手に不満のあまり絶交したり、直接的に攻撃したりする傾向が見られる。経済的目標は、日本男女の「非故意性抑制」（相手が与えてきた損害が故意でないため抑制する）と弱い負の相関を示した。経済的目標を強く望めば、相手が非故意であれ、抑制せず弁償を求める傾向が見られる。経済的目標は、日中男女の重要度とも弱い正の相関を示した。経済的目標を強く望めば、葛藤を重要視する傾向が窺える。

関係目標は、日本男子の直接的主張と間接的主張、中国女子の直接的主張と弱い正の相関を示した。「相手と良い関係を維持したい」「相手とお互いに理解し合いたい」という「関係目標」と強く望めば、一方的に自己抑制するより、むしろ積極的に主張することによって達成しようとする傾向が見られる。関係目標は、重要度と相関が見られなかった。

いずれの葛藤解決目標も関係重視抑制、騒ぎ回避抑制と相関を示さなかった。

第4節 考察とまとめ

中国と日本における大学生の葛藤解決目標及び社会的葛藤場面における問題解決方略に関する今回の結果から、主な特徴について以下のようにまとめることができる。

1. 葛藤解決目標について

「自尊心やプライドを回復したい」「相手から尊重され、丁寧に扱ってもらいたい」「自分の名誉、体面、評判を回復したい」などの項目を含めた「社会的目標」においては、中国男女ともに日本男女より、大きく上回っている。中国人は「愛面子」（メンツ重視）と言われているが、「メンツ」いわば世間への顔でありプライドである。この調査結果もその一端を表わしていると言えよう。第2章に明らかになったように、問題解決方略において、中国大学生は、名誉の侵害場面における表情攻撃、断絶攻撃、間接的主張が他の全ての場面より最も高くなっている。このことも自分の名誉、体面、評判を重視することの現われと考えられよう。一方、「社会的目標」においては、中国女子が中国男子より、日本女子が日本男子より有意に高い。女子は男子より社会性が発達し、相手からの扱い態度により敏感で、より自分のプライドを守る傾向が強いと思われる。

関係目標においては、日本が中国より有意に高い。日本が西洋圏のアメリカ（大淵ら、1996）だけでなく、東洋圏に位置する中国に比べてもより関係志向が強いことの反映と見ることもできる。しかし、葛藤解決目標は問題解決方略と明瞭な相関は見られない。葛藤解決の関係目標と関係重視抑制の相関係数は、日本男女ともに0.19である。大淵・福島（1997）も、日本人の回避（抑制）の使用は関係目標に動機付けられたものと予想し検討したが、支持されなかった。むしろ、日本人の葛藤回避が同一性目標（「自分の名誉、体面、評判を回復したかった」「自尊心やプライドを回復したかった」）に関連していることが示され、「同一性目標とは肯定的な社会的印象を維持しようという願望である。個人主義的文

化においては、人々は自己主張によって積極的に体面維持をはかろうとするであろうが、日本のような集団主義文化ではむしろ、物事を荒立てないことによって体面を保とうとする傾向があるのではないかと考察している。また、「日本人にとって関係維持の動機づけは内発的なものではなく、社会的圧力に従って志向された社会規範に過ぎなかったという可能性がある（大淵ら, 1996）」のように、名誉の侵害場面において日本の大学生が断絶攻撃が高いという本研究の結果から考えると、日本人の関係重視は、葛藤相手との関係よりも自分を取り巻く周囲の人に与える印象、周囲の人々との人間関係を強く意識していることの反映かもしれない。

2. 葛藤解決目標と社会的問題解決方略との相関について

全体的にみると、葛藤解決目標は社会的問題解決方略と高い相関が見られなかった。特に関係目標と関係重視抑制とは相関が高いのではないかと予想していたが、上に述べたように、大淵・福島（1997）と同様、相関が見られなかった。問題解決の時取る方略は、達成目標よりも別の要因、例えば相手が同性か異性か、相手との上下関係など、によって決定されているかもしれない。

社会的目標と経済的目標は、多くの方略と弱い相関を示した。特に社会的目標と中国男女の直接的攻撃、中国男子のジャンケンと弱い負の相関を示したことが興味深い。大淵ら（1996）はALTは日本人教師より公正目標を強く期待し相対的に攻撃的方略を多用する結果であったが、中国大学生では逆に、社会的目標を強く望みながら、直接的攻撃をしない傾向が見られた。これは、中国大学生は直接的攻撃によって物事を荒立てると、逆に自尊心やプライド、自分の体面や評判を傷つくことになるという思いが強いからではないかと思われる。これは、今回の調査で明らかになったように、小・中・高・大学生いずれの発達段階の中国対象者も日本対象者より「騒ぎ回避抑制」が高いこととも関連しているであろう。

また、ジャンケンが、双方下がらず安易に解決できることから日本で愛用されているが、中国大学生では逆に、「社会的目標」を強く望めば、「ジャンケン」を取らない傾向が見られる。ジャンケンは双方を傷つけない良い解決法とみなさず、むしろ自分のプライドや体面、自分の正義性を犠牲にする曖昧な結末であり、すっきりならない結末である。常に「真」を求める中国社会では、ジャンケンは意見の対立や葛藤の解決において、良い手段とは思わないであろう。

関係目標は、関係重視抑制と相関せず、主張的方略と正の相関を示したことも興味深い。一方的に自己抑制することは双方の関係に貢献せず、むしろ積極的な主張によって合理的に解決することが双方の関係を維持するになるという人間の本心の表れであろう。

いずれの葛藤解決目標も関係重視抑制、騒ぎ回避抑制と相関を示さなかった。抑制することは、社会的目標、経済的目標を達成できないのみならず、上に述べたように、関係目標さえ貢献しないためであろう。

終章 総合考察と今後の課題

本研究は、幼児期、児童期、青年前期、青年中期、青年後期という発達段階に位置する、中国と日本の幼稚園年長児、小学校4年生、中学2年生、高校2年生、及び大学3年生を対象に、仮想的な対人葛藤場面を設定し、各発達段階における社会的問題解決方略について比較分析した。また、子どもの社会的問題解決方略に影響を与える文化的社会的背景要因として、親子関係、学校生活(保育園生活)と葛藤解決目標についても比較分析した。

第1節 社会的問題解決方略について

1. 性差について

(1) 幼稚園年長児における調査では、実際に取る方略においても、理想とする方略(最もよいと思われる方略)の選択においても、中国の男女間にも日本の男女間にも、違いが見られた。

持物の損害、名誉の侵害など自らの力で効果的に解決できない(面接の時、「言っても無駄」という反応が見られた)葛藤に対して、幼稚園女児が男児より一歩進んで、先生の権威を借りて間接的に主張するようになっている。級友との意見対立に対して、幼稚園女児が男児より一歩進んで、相手との関係、相手の気持ちを考慮し、他人の意見を許容したり、直接的な対決を避けて間接的に不満を発散したりするようになっている。発達に伴い、間接的方略、抑制的方略が多く取り入れられていること(柏木, 1988; 山本, 1994, 1995b; 羅・堂野, 2007; 羅・名島・堂野, 2008)に照らして考えると、幼稚園年長児という発達段階では、女児の社会的問題解決方略における社会性が男児より発達していると言えよう。

(2) 小学生・中学生・高校生・大学生における調査では、全体を通してみると、男子は直接的攻撃と先生頼りにおいて女子より高く、女子は間接的攻撃(表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃)、主張的方略(直接的主張、間接的主張)、抑制的方略(関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制、自己責任抑制、無意義抑制)において、男子より高くなっている。各場面の葛藤の重要度においても、女子が男子より高くなっている。

発達に伴い、男女間に有意差の見られる方略が多くなっている。発達に伴い、葛藤の重要度、間接的攻撃(表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃)、間接的主張、抑制的方略(関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、無意義抑制)における男女間の開きが大きくなっている。

各場面で最も高くなっている方略を比較してみると、級友との意見対立、権利の侵害、役割の怠惰、先生との意見対立の4場面において、男女共に直接的主張が最も高くなっているが、持物の損害及び名誉の侵害の2場面において、男女間で異なっている。持物の損害場面では、男子は相手が故意でないため抑制する非故意性抑制が最も高くなっているが、女子は間接的主張も非故意性抑制に近い値で高くなっている。名誉の侵害場面では、男子は直接的主張が最も高くなっているが、女子は断絶的攻撃が最も高くなっている。

発達に伴い、男女共に間接的方略、抑制的方略が高くなり、先生頼りが低くなるという発達の变化的傾向と照らして考えると、小学生・中学生・高校生・大学生のそれぞれの発

達段階も、女子の社会的問題解決方略における社会性が男子より発達していると言えよう。

(3) 社会的問題解決方略における性差は、幼稚園年長児に既に存在し、発達に伴い大きくなっている。女子（特に日本女子）は男子より、幼稚園においては、積極的に権威者（先生）の力を借りて問題解決し、小学生以降は、早く権威者に頼る解決から、自ら状況を見極めて、直接的に主張したり、間接的に対応したり、抑制したりするようになり、社会的スキルをより早く身につけていると考えられる。道徳性や社会性の発達において女子のほうが早い（荒木，1988、山岸，1976、1995）、女兒が男児より対人交渉の発達水準が高く、対人交渉方略のレベルが高い（金城・梅本，1991；渡部，1995；柏木，1998）ことを本研究において再確認されている。

2. 場面差について

(1) 幼稚園年長児における調査では、各方略の各場面における使用を見ると、直接的攻撃、間接的攻撃は、いずれの場面においてもきわめて低く、各場面間に顕著な差がない。直接的主張は役割の怠惰場面において、先生頼りは名誉の侵害場面において、抑制的方略は先生との意見の対立場面、続いては持物の損害場面において、最も高くなっている。

各場面で最も高くなっている方略をみると、実際にとる方略においても、理想とする方略（最もよいと思われる方略）の選択においても、場面により、方略の使用に差が見られた。

持物の損害場面においては、実際にとる方略は抑制的方略、理想とする方略は先生頼りが中心的によい方略として最も多く選択されている。幼稚園年長児という発達段階では、実際の行動においては、非故意により受けた損害に対しては、謝ってもらうことに止まり、弁償してもらう要求はまだ形成されていない。親がカバーしてくれる（買ってくれる）ことを予測しており、金銭的損害に対する心理的ダメージが低く、主張性も低く、金銭的損害に対する解決方略はまだ身につけていない。意識の上では、金銭的損害に対する主張性が芽生えてきており、一方的に自己抑制するよりも、先生に頼ったり、自己主張したりして解決することを望んでいると考えられる。

級友との意見対立場面においては、実際にとる方略では、中国は直接的主張が最も高く、続いては抑制的方略であり、日本は抑制的方略が最も高く、続いては直接的主張である。理想とする方略では、日中共に抑制的方略が最も高くなっている。幼稚園年長児という発達段階では、既に相手との関係、相手の気持ちを考慮するようになったが、自分の意見を押し通そうとする意識も強く、主張と抑制の二極に揺れており、中国では自分の意志を貫くことが優先で、日本では相手の気持ちへの配慮が優先されていると考えられる。

権利の侵害場面においては、実際にとる方略は直接的主張、理想とする方略は直接的主張、先生頼り、抑制的方略が共に高くなっている。幼稚園年長児という発達段階では、順番を守るべきだという意識が形成しており、主張性も高いが、喧嘩にならないよう、順番を抜かされるような些細な損害に対する相手への許容、自己抑制も高くなっていると考えられる。

名誉の侵害場面においては、実際にとる方略も、理想とする方略も、中国は先生頼り、日本は直接的主張と先生頼りが最も高くなっている。幼稚園年長児という発達段階では、悪口を言われるという精神的な侵害に対して、不快や防衛反応が強く、自分の名誉を守る

意識が高く、直接的に主張するほか、「(自分が)言ってもムダ」という自己主張の無力感から先生に頼ったりもすると思われる。

役割の怠惰場面においては、実際に取る方略も、理想とする方略も、日中共に直接的主張が最も高くなっており、主張性が全ての場面において最も高くなっている。幼稚園年長児という発達段階で、社会的役割が遂行すべきだという価値観が浸透しており、その社会的正当性から堂々と主張するようになったと思われる。

先生との意見対立場面においては、実際に取る方略も、理想とする方略も、中国は直接的主張が最も高く、続いては抑制的方略であり、日本は抑制的方略が最も高く、続いては直接的主張である。中国では自分の意志を貫くことが優先で、日本では先生の気持ちへの配慮が優先されている。

(2) 小学生・中学生・高校生・大学生における調査では、全体を通してみると、葛藤の重要度においては、名誉の侵害が最も高く、続いては持物の損害で、役割の怠惰場面が最も低くなっている。間接的主張、騒ぎ回避抑制は、各場面間に差が少ない。各場面の方略の使用は次の特徴が見られる。

持物の損害場面においては、各方略の各場面における使用を見ると、抑制的方略(関係重視抑制、騒ぎ回避抑制)が各場面で最も高くなっている一方、間接的攻撃(表情攻撃、背後の攻撃)、間接的主張、先生頼りも各場面で最も高くなっている。この場面で最も高くなっている方略をみると、中国では、非故意性抑制が最も高く、続いては表情攻撃と関係重視抑制であるが、日本では、間接的主張が最も高く、続いては表情攻撃、背後攻撃、非故意性抑制である。持物の損害に対して、相手の非故意性が考慮され、金銭的利益よりも友人関係を重要視する意識、金銭的トラブルに恥じる意識が芽生え、直接的に対決することがしにくくなる一方、葛藤の重要度が高く、不満の捌け口として、間接的攻撃、間接的主張、先生頼りを多用するようになったとみられる。相手の敵意(故意性)の有無により解決方略が異なることは6歳児からすでに見られる(丸山、1999)。偶発によって生じた葛藤は、6歳児が4・5歳児よりも消極的反応(場面からの逃避、回避、無視或いは無反応)、いわば自己抑制的な対応を多く行っている。

級友との意見対立場面においては、各方略の各場面における使用を見ると、攻撃的方略(直接的攻撃、間接的攻撃)が各場面で最も低く、主張的方略(直接的主張、間接的主張)、抑制的方略(関係重視抑制、騒ぎ回避抑制)が持物の損害場面に続いて最も高くなっている。この場面で最も高くなっている方略をみると、中国では直接的主張が最も高くなっている。日本では、直接的主張も最も高くなっているが、関係重視抑制、間接的主張も近い値で高くなっている。級友との意見対立に対して、攻撃性が低く、自己主張性が高い一方、相手との関係への配慮も見られ、自己抑制も高くなっている。

権利の侵害場面においては、各方略の各場面における使用を見ると、攻撃的方略(直接的攻撃、間接的攻撃)が各場面において高いほうであるが、直接的主張、抑制的方略(関係重視抑制、騒ぎ回避抑制)が各場面において中間にあり、間接的主張、先生頼りが各場面で最も低くなっている。この場面で最も高くなっている方略をみると、日中ともに直接的主張が最も高くなっている。権利の侵害に対して、不満が高く、高い攻撃性と主張性を示している。

名誉の侵害場面においては、各方略の各場面における使用を見ると、間接的攻撃(表情

攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃)、間接的主張が各場面で最も高くなっているが、直接的攻撃、抑制的方略(関係重視抑制、騒ぎ回避抑制)も各場面において中間に位置している。この場面で最も高くなっている方略をみると、中国では、直接的主張と間接的主張が近い値で最も高くなっている。日本では断絶的攻撃が最も高くなっている。名誉の侵害に対して、日中共に最も重要視されているが、直接対決では効果も少なく喧嘩を招く可能性が予測できるため、間接的攻撃や間接的主張が多く用いられている。

役割の怠惰場面においては、各方略の各場面における使用を見ると、重要性を最も低く評価しているにも関わらず、直接的攻撃、直接的主張が各場面で最も高くなっている。この場面で最も高くなっている方略をみると、日中ともに直接的主張が最も高くなっている。役割の遂行は社会的に要求されており、その怠惰が自分に迷惑を及ぼし、社会的にも認められないため、攻撃や主張しやすくなると考えられる。

先生との意見対立場面においては、各方略の各場面における使用を見ると、攻撃的方略(直接的攻撃、間接的攻撃)は級友との意見の対立場面に続いて低く、抑制的方略(関係重視抑制、騒ぎ回避抑制)も役割の怠惰場面に続いて低くなっている。直接的主張は役割の怠惰場面に続いて高くなっている。この場面で最も高くなっている方略をみると、中国では直接的主張と他人を推薦する間接的主張が極めて近い値で最も高くなっている。日本では直接的主張が最も高くなっている。先生との意見対立に対して、相手が先生であるゆえに、攻撃性が低い一方、自分の要求を受け入れてくれる甘えの願望も働き、主張性を高く示しているのではないかと考えられる。

3. 発達的变化について

幼稚園年長児と小学生以上の対象者は、調査方法も方略の分類も異なっているため、発達的变化は小・中・高・大学生を対象にして検討した。

(1) 全体的には、発達に伴い、葛藤の重要度、間接的攻撃(表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃)、間接的主張、抑制的方略(関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制、無意義抑制)が高くなり、直接的攻撃、先生頼り、ジャンケン、自己責任抑制が低くなり、直接的主張が中学生をピークに急上昇した後低くなる傾向が見られる。

中学生では、葛藤を最も重要視し、直接的攻撃が各発達段階で最も高くなっている。中学生という発達段階は、思春期を迎え、疾風怒濤のいわば心身の安定性を欠く時期であり、過敏・衝動的になりやすいことを反映した結果と考えられる。

小学生では、中・高・大学生の発達的变化の傾向に反して、直接的主張が各発達段階で最も低く、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制が大学生に続いて高くなっている。小学生という発達段階は、まだ未熟で、社会的規範意識、自己主張能力が十分形成していないと考えられる。

(2) 各方略の使用の発達的变化については、中国と日本はほとんど類似し、全体の発達的变化と一致しているが、騒ぎ回避抑制と自己責任抑制において、中国と日本の発達的变化がやや異なっている。騒ぎ回避抑制においては、中国では小中高の間に有意差が見られないが、日本では小学生が大学生に続いて中高生より有意に高くなっている。自己責任抑制においては、中国と日本が正反対の発達的变化を呈している。中国では中学生が最も高く、大学生が最も低くなっているが、日本では逆転し、中学生が最も低く、大学生は最

も高くなっている。

(3) 男子と女子の社会的問題解決方略と重要度の発達的变化は、非故意性抑制、自己責任抑制以外、ほとんど同様な傾向が見られる。

非故意性抑制においては、高校生までは、男女間の開きが徐々に大きくなりながら、男女共に発達に伴って高くなっている。大学生では、女子が大きく下がり、男子が大きく上がり、男女間の開きがなくなった。

自己責任抑制においては、男子と女子が正反対の発達的变化を呈している。女子では高校生までは発達に伴って徐々に高くなっているが、大学では大きく下がっている。男子では高校生までは発達に伴って大きく下がっているが、大学では再び高くなっている。

4. 日中間の相違について

(1) 幼稚園年長児における調査では、以下のことが明らかになった。

① 社会的問題解決における社会性の発達は、日本の幼稚園年長児が中国の幼稚園年長児より早いと思われる。

② 級友及び先生との意見対立、名誉の侵害に対する解決方略は、中国と日本の幼稚園年長児が異なる傾向を示している。

級友との意見対立場面においては、中国は直接的主張が最も高く、続いては抑制的方略であり、日本は抑制的方略が最も高く、続いては直接的主張である。また、中国の直接的主張が日本より高く、日本の抑制的方略が中国より高くなっている。中国の幼稚園年長児は自分の意志を貫く傾向が高く、日本の幼稚園年長児は相手に同調する傾向が高いと思われる。

名誉の侵害場面においては、中国は先生頼り、日本は直接的主張と先生頼りが最も高くなっている。日本の幼稚園年長児は中国の幼稚園年長児より一歩進んで、先生頼りのみならず、自らも主張できるように発達していると考えられる。

先生との意見対立場面においては、中国は直接的主張が最も高く、続いては抑制的方略であり、日本は抑制的方略が最も高く、続いては直接的主張である。中国では自分の意志を貫くことが優先で、日本では先生の気持ちへの配慮が優先されていると思われる。

③ 中国の幼稚園年長児は日本の幼稚園年長児より先生頼りを多用し、中国の幼稚園年長児における先生の権威性は日本の幼稚園年長児より高い。儒教の発祥地である中国は、現在において依然として、家では親の言うこと、学校（幼稚園）では先生の言うことをよく聞くようと強く要求されているため、次第に先生の権威性が高くなっているのではないかと思われる。

(2) 小学生・中学生・高校生・大学生における調査では、以下のことが明らかになった。

① 全体を通してみると、日本は、葛藤の重要度、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）、間接的主張、先生頼り、ジャンケンが中国より高いと共に、関係重視抑制も中国より高くなっている。中国は、自分の代わりに他の適切な人を推薦する「間接的主張2」、騒ぎ回避抑制、持物の侵害場面において相手が故意に損害を与えたのではないため抑制的方略を取る「非故意性抑制」、悪口を言う人には何も言う必要がないという「無意義抑制」が日本より高くなっている。直接的主張は日中間に有意差が見られなかった。

日本の対象者が中国の対象者より、対人葛藤を重要視し、攻撃性、主張性が高く、積極的に問題解決に臨んでいる姿勢が窺える一方、葛藤相手との関係も中国の対象者より重要視している。静かで穏やかな日本とにぎやかでトラブルの多い中国の一般的なイメージに反して、日本の対象者のほうが積極的に問題解決したり、自己防衛したり、相手との関係を保つため抑制したりする傾向が強い。日本の子どもの社会的スキルがより発達しているため、大人社会でも喧嘩せず穏便に事を運ぶことができ、穏やかな人間関係を築けたのではないかと考えられる。中国では、個性を重視し、自分の独自の考えや意志を持つことが評価される一方、衝突を抑えるため、些細なことでは波風を立てないことも社会的に大変評価されている。このような社会的価値観が子ども達の騒ぎ回避意識に結びついたのでないかと思われる。

② 級友との意見対立場面と名誉の侵害場面における日中間の相違は、他の4場面（持物の損害、権利の侵害、役割の怠惰、先生との意見対立）と異なっている。

級友との意見対立場面は、葛藤の重要度において、他の全ての場面は日本が中国より有意に高いが、級友との意見対立場面は中国が日本より高くなっており、中国の中では名誉の侵害に続いて高くなっている。直接的攻撃において、持物の損害、権利の侵害、先生との意見対立場面は日本が中国より有意に高いが、級友との意見対立場面は中国が日本より高くなっている。表情攻撃と直接的主張において、持物の損害、権利の侵害、役割の怠惰、先生との意見対立場面は日本が中国より有意に高いが、級友との意見対立場面は中国が日本より高くなっている。他の場面とは反対に、級友との意見対立場面において、中国のほうが日本より攻撃性、主張性が高いことが見られる。

名誉の侵害場面は、間接的主張において、他の全ての場面は日本が中国より有意に高いが、名誉の侵害場面は中国が日本より高くなっている。直接的主張において、級友との意見対立場面と同様に、持物の損害、権利の侵害、役割の怠惰、先生との意見対立場面は日本が中国より有意に高いが、名誉の侵害場面は中国が日本より高くなっている。表情攻撃においても同様な傾向が見られる。直接的攻撃において、持物の損害、権利の侵害、先生との意見対立場面は日本が中国より有意に高いが、名誉の侵害場面は日中間に有意差が見られなかった。他の場面とは反対に、名誉の侵害場面において、中国のほうが日本より攻撃性、主張性が高いことが見られる。

役割の怠惰場面は、先生頼りと関係重視抑制は日中間に有意差がないことが特徴的である。役割の怠惰に対する対応や社会的規範意識は日中間に差が少なくと考えられよう。

関係重視抑制は場面によって、日中間の相違が異なっている。級友との意見対立と名誉の侵害場面は、日本が中国より有意に高い。持物の損害と役割の怠惰場面は、日本が中国より高いが、有意差が見られなかった。権利の侵害と先生との意見対立場面は逆転し、中国が日本より高くなっている。言い換えれば、中国は級友との意見対立、名誉の侵害に対して、相手との関係への配慮が低く、対決性が高いが、日本は権利の侵害、先生との意見対立に対して、相手との関係への配慮が低く、対決性が高いといえよう。

③ 各場面で最も高くなっている方略は日中間で大きく異なっている。その背景にはそれぞれ中国と日本の社会的価値観が作用していると思われる。

持物の損害場面においては、中国では各発達段階男女ともに非故意性抑制が最も高くなっているが、日本では、小学生は男女ともに先生頼り、中学生男子は直接的主張、女子は

間接的主張、高校・大学生は男女ともに間接的主張、全体的には間接的主張が最も多く用いられている。耐えられる範囲内の損害を受けた際、中国では相手の非故意性が大きく受け止められていることが窺える。それと同様に、自分の非故意によって他人や社会にかけた迷惑に対しても、自分は悪意がないと思って、大目に甘く見てしまう傾向がある。「中国人は謝らない」という日本人が抱いているイメージは、このような中国人の価値観が一因を働いているのではないかと考えられる。

級友との意見対立場面においては、中国では、各発達段階男女ともに直接的主張が最も高くなっているが、日本では、小学生男子は関係重視抑制、女子は直接的主張、中・高校生は男女ともに直接的主張、大学生男子は関係重視抑制、女子は直接的主張が最も高くなっている。全体的には直接的主張も最も高いものの、関係重視抑制とは差が少なく、主張と抑制が拮抗している様子が窺える。また、中国においては、級友との意見対立場面が他の全ての場面より重要視され、直接的攻撃、直接的主張が日本より有意に高く、他の場面の結果とは逆転している。中国は広大な国土に56民族が混住しており、各民族がそれぞれの言語と文化を持っている。そうした背景を持つ中国の人々は確固たる自己を持つことが大切とされ、「個性」には高い評価が与えられ、「個性がない者」には価値が認められない。したがって、意見の対立の場合、自分の考えや意見を貫く態度が形成されやすいと考えられる。一方、日本では上手に他人の意見に同調することが人間関係を円滑にするための必要なスキルと考えられている。

名誉の侵害場面においては、中国では、小・中学生は男女ともに直接的主張、高校・大学生は男女ともに間接的主張、全体的には直接的主張と間接的主張が最も高くなっているが、日本では、小学生は男女ともに先生頼り、中学・高校・大学生は男女ともに断絶的攻撃が最も多く用いられている。日本では不満を持つ相手に対して、対決して関係を打ち壊すよりも、波風を立てずに淡々と関係を絶つことが好まれるのであろう。

先生との意見対立場面においては、中国では、小学生男子は関係重視抑制、女子は直接的主張、中学・高校・大学生は男女ともに直接的主張と他人を推薦する間接的主張が極めて近い値で最も高くなっているが、日本では、小学生男子は他人を推薦する間接的主張、女子は直接的主張、中学・高校・大学生は男女ともに直接的主張が最も多く用いられている。日本では他の適任と思われる人を推薦する効果的な方略を避けていることは、推薦されている人との人間関係への影響、推薦することが相手への迷惑だという思いがあるからではないかと思われる。

④ 各方略の使用における各場面の順位については、中国と日本は極めて類似しているが、級友との意見の対立場面、先生との意見の対立場面への対応方略は日中間で大きく異なっている。

級友との意見対立に対して、日本では、葛藤の重要度は各場面で最も低く、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）が各場面で最も低く、関係重視抑制が各場面で最も高く、騒ぎ回避抑制も各場面において高い方である。中国では、葛藤の重要度は名誉の侵害に続いて最も高く、間接的攻撃は各場面で最も低く、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）も各場面において低い方であるが、直接的攻撃、直接的主張が各場面において高い方である。日本では、意見の対立に対して、他の侵害ほど重要視されていなく、相手との関係が最も配慮されていると思われる。中国では、意見の対立に対して、他の侵害より重要視し、

相手との関係への配慮よりも自分の意志を貫くことが大切にされていると思われる。

先生との意見対立に対して、日本では、級友との意見対立より、葛藤の重要度が高く、攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）、直接的主張が高く、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）が低くなっている。中国では、正反対に、級友との意見対立より、葛藤の重要度が低く、直接的攻撃、断絶的攻撃、直接的主張が低くなっている。抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）は両場面間有意差が見られなかった。中国は先生への配慮、先生の権威性が高いが、日本は級友との関係をより重視していると考えられよう。

名誉の侵害に対して、日中共に葛藤の重要度が各場面で最も高くなっているが、対応の方略に相違が見られた。直接的攻撃、直接的主張は、値も各場面間での順位も中国が日本より高く、抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）は、値も各場面間での順位も中国が日本より低くなっている。特に表情攻撃において、中国では、名誉の侵害場面が各場面で最も高くなっているが、日本では、名誉の侵害場面が各場面で中間に位置している。間接的主張において、中国では、名誉の侵害場面が各場面で最も高くなっているが、日本では、名誉の侵害場面が各場面で最も低くなっている。名誉の侵害場面において、中国のほうが日本より攻撃性、主張性が高いことが見られる。

⑤ 小学生において日本のほうが有意に高い直接的攻撃、直接的主張は発達に伴い、大学生では日中間有意差が見られなくなった。小学生で有意差が見られなかった背後的攻撃は、発達に伴い、大学生では日本のほうが有意に高くなった。小学生で日本のほうが有意に高い断絶的攻撃、間接的主張は、発達による変化がなく、大学生でも日本のほうが有意に高い。発達に伴い、直接的方略において、日中間に差がなくなるが、間接的方略においては差を開く一方である。

また、各場面で最も高くなっている方略は、中国においては抑制的方略以外、ほとんど直接的主張であるが、日本は抑制的方略、直接的主張以外、間接的主張、断絶的攻撃が最も高くなっている場面もあり、葛藤の性質によって柔軟に対応し、多様化を見せている。

このように、中国の対象者は直接的方略を好み、日本の対象者は状況に応じて間接的方略を優先する傾向が窺える。中国では、心のうちを隠さないことが「光明磊落」(公明正大、磊落)と言われ、社会的に大変評価されている。直接的方略を好むのはこの価値観が背景に働いているのではないかと考えられる。一方、日本では「察しの文化」として、相手の気持ちを配慮し、相手への不快感を最小限に抑えようと、婉曲的に間接的方略で問題解決に臨んでいるのではないと思われる。

⑥ ジャンケンにおいては、日本は中国を上回りながら、同様の発達的变化を示している。小学生から高校生までは徐々に低くなり、大学生では再び高くなる傾向が見られる。中学生は日中間に有意差が見られなかったが、他の発達段階はいずれも日本のほうが中国より有意に高くなっている。日本のジャンケン志向は中国に比べて多用されていることが見られる。

ジャンケンの結果が自分に有利になるかどうか不明であり、ジャンケンで勝っても自分の権利を主張する正当性を意味しないため、直接的方略を好む中国の対象者には好まないであろう。日本においてジャンケンが志向される理由として、「早く決まるから」、「喧嘩にならないから」、「公平、平等だから」といった反応が顕著であった（金城・梅本，1991）。このことから、ジャンケン志向が大学生で再び高くなるのは、大学生では相手との関係を

良好のままに維持したいためではないかと考えられる。

⑦ 自己責任抑制においては、中国と日本が正反対の発達的变化を呈している。中国では中学生で高ピークになってから、大学まで大きく下がっているが、日本では中学生で低ピークになってから、大学生まで大きく上がっている。小中高校生は中国のほうが日本より高く、日本の中学生と中国の中学生の間に有意差が見られた。大学生は逆転し、日本のほうが中国より有意に高くなっている。問題解決における自己責任の反省において、中国と日本は中学生を境に正反対の発達的变化の傾向を示していると考えられよう。

5. 社会的問題解決方略における国、発達段階、性の影響

場面の要因を統制し、社会的問題解決方略における国、発達、性の影響は重回帰分析により明らかになった。

(1) 国・性・発達の要因別で全体的に見ると、最も影響を与えているのは国の要因であり、いずれの発達段階でも標準化係数が最も高く、最も影響を与えている。続いては発達の要因で、小学生～中学生にかけて最も影響を与えている。性の要因は小学生～中学生にかけて影響が少なく、中学生～高校生、高校生～大学生にかけては影響が大きくなる。

(2) 方略別でみると、直接的攻撃と表情攻撃においては、性の要因が最も影響を与えており、続いては中学生～大学生の発達が影響を与えている。

背後の攻撃においては、国、性、発達がいずれも大きく影響を与えている。

断絶的攻撃、他人を推薦する間接的主張、騒ぎ回避抑制においては、国の要因が最も影響を与えている。

直接的主張、先生頼り、無意義抑制においては、発達の要因が最も影響を与えている。

間接的主張においては、高校生～大学生の発達と性の要因が最も影響を与えている。

ジャンケンにおいては、中学生～高校生では主に発達の要因、高校生～大学生では主に国の要因が影響を与えている。

非故意性抑制と自己責任抑制においては、国の要因が最も影響を与えており、続いては性の要因が影響を与えている。

関係重視抑制と重要度においては、国、性、発達の影響はあるものの、交互作用が多く見られ、全体的には重相関係数 (R)、各要因の標準化係数が低く、国・性・発達の3変数による重回帰式の当てはまりが良くない。場面ごとの重回帰分析では重相関係数 (R) が高く、重回帰式の当てはまりがよくなった。葛藤の重要度は、国の要因が最も影響を与えている。

6. 重要度と社会的問題解決方略との相関

(1) 全体的に見ると、重要度は攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）、主張的方略（直接的主張、間接的主張）先生頼りと弱い正の相関を示し、抑制的方略と弱い負の相関を示している。重要度と間接的攻撃（背後の攻撃、断絶的攻撃）、非故意性抑制、自己責任抑制、無意義抑制との相関が強く、ジャンケン、他人を推薦する間接的主張、騒ぎ回避抑制との相関が低い。葛藤を重要と判断するほど、攻撃性、主張性が高く、自己抑制が低くなると思われる。

(2) 男女別で見ると、男子と女子における重要度と社会的問題解決方略との相関の違

いが少ないが、国別で見ると、中国における重要度と社会的問題解決方略との相関が日本より低い。中国の対象者は日本の対象者より、社会的問題解決における社会性の発達が遅く、理性的に状況や葛藤の重要性を判断した上で相応しい方略を取ることがまだできていないのではないかと考えられよう。

(3) 発達段階別で見ると、小学生における重要度と抑制的方略との相関が弱い。場面別で見ると、名誉の侵害場面における重要度と関係重視抑制、騒ぎ回避抑制との相関が弱い。小学生の自己抑制は葛藤の重要度の判断によらないで、名誉の侵害場面における自己抑制も葛藤の重要度の判断によらないで、相手が権威者（先生）であるかどうか、或いは「言う必要がない」「言ってもムダ」という無力感などに影響されてしまうのではないかと考えられる。

7. 最もよい方略の選択について

(1) 持物の損害場面における最もよい方略の選択は、非故意性抑制が最も多くなっている。また、発達に伴い、権威者に頼る方略から自立性の高い直接的主張へ変化する傾向も見られる。

国別で比較してみると、中国では、理想としても、実際にしても非故意性抑制が最も高い。日本では、理想とする方略においては、小中学生は先生頼り、高校・大学生は直接的主張、続いては非故意性抑制が最も多く選択されている。実際取る方略においては、間接的主張が最も多く、続いては表情攻撃、背後的攻撃、非故意性抑制が同じ値で用いられている。日本では、理想とする方略は直接的主張が好まれるが、実際取る方略は相手の気持ちを配慮し、間接的主張が多く取られている。

男女別で比較してみると、男子では、理想としても、実際にしても非故意性抑制が最も高い。女子では、理想とする方略においては、非故意性抑制が最も多く、小中学生の先生頼り、高校・大学生の直接的主張が続いている。実際取る方略においては、間接的主張も非故意性抑制に近い値で高くなっている。女子では、理想とする方略は直接的主張が好まれるが、実際取る方略は相手の気持ちを配慮し、間接的主張が多く取られる。

(2) 級友との意見対立場面における最もよい方略の選択は、各発達段階共に直接的主張が最も多く選択されている。高校生・大学生では間接的主張も直接的主張に続いて多く選択されている。

国別で比較してみると、中国では直接的主張が最も高くなっているが、日本では直接的主張も最も高いものの、関係重視抑制とは差が少なく、主張と抑制が拮抗している様子が窺える。中国と日本の実際取る方略と比較してみると、日中ともに理想と実際の間には差が少ない。

男女別で比較してみると、男女共に同様な傾向を示している。小中学生では直接的主張が最も多く選択されている。高校生・大学生では直接的主張が最も多く選択されており、間接的主張も直接的主張に続いて多く選択されている。男子と女子の実際取る方略と比較してみると、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高くなっており、理想と実際の間には差が少ない。

(3) 権利の侵害場面における最もよい方略の選択は、全体的には、小学生では自己責任抑制、中学生以降では直接的主張が最も多く選択されている。

国別で比較してみると、日中共に、小学生では自己責任抑制、中学生・高校生では直接的主張が最も多く選択されている。大学生において、中国では直接的主張が最も多く選択され、間接的主張が直接的主張に続いて多く選択されている。日本では直接的主張が最も多く選択され、自己責任抑制が直接的主張に続いて多く選択されている。中国と日本の実際を取る方略と比較してみると、全体的には、日中共に、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高く、理想と実際の間には差が少ない。

男女別で比較してみると、男女共に、小学生では自己責任抑制、中学生以降では直接的主張が最も多く選択されている。ただし、中学生において、女子は自己責任抑制も直接的主張に続いて多く選択されている。男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、全体的には、男女共に、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高く、理想と実際の間には差が少ない。

(4) 名誉の侵害場面における最もよい方略の選択は、発達段階によって、侵害を受けた人の関係によって、大きく異なっている。各発達段階ともに、自分自身が受けた名誉の侵害、親友が受けた名誉の侵害、兄弟が受けた名誉の侵害の順に、攻撃性、主張性が高くなっている。自分自身よりも、親友や兄弟を大切し、親友や兄弟を守るという姿勢が見られる。国別でみると、日本と中国は全体の傾向と類似しながら、日本の対象者は中国の対象者より、徒党意識が強く、親友をかばう姿勢が強いことも窺える。男女別でみると、男女間は類似した傾向を示しながら、小学生女子が小学生男子より、徒党意識が強く、親友をかばう姿勢が強いことも窺える。

自分自身が受けた名誉の侵害に対して、国別で比較してみると、中国では、小学生は無意義抑制、中学生は直接的主張、高校生・大学生は無意義抑制、直接的主張及び間接的主張に近い値で最も多く選択されている。日本では、小学生は先生頼り、中学生・高校生は直接的主張、大学生は無意義抑制、直接的主張及び間接的主張に近い値で最も多く選択されている。中国と日本の実際を取る方略を比較してみると、中国では、実際にとる方略は直接的主張と間接的主張が最も高くなっているが、理想とする方略は対決することが無意義で自己抑制する「無意義抑制」も高くなっている。日本では、実際にとる方略は、中学・高校・大学生は断絶的攻撃が最も高くなっているが、理想とする方略は直接的主張が最も多く選択されている。実際を取る方略は理想とする方略より、日中共に特に日本において、名誉の侵害を強く受け止め、対決性が強い傾向が見られる。

男女別で比較してみると、男女ともに、小学生は先生頼り、中学生は直接的主張、高校生・大学生は直接的主張、無意義抑制及び間接的主張に近い値で最も多く選択されている。男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、男子は、理想としても、実際にしても、直接的主張が最も高くなっている。女子は実際にとる方略において断絶的攻撃が最も高くなっており、実際を取る方略は理想とする方略より、名誉の侵害を強く受け止め、対決性が強い傾向が見られる。

(5) 役割の怠惰場面における最もよい方略の選択は、各発達段階、日中、男女共に直接的主張が最も多く選択されている。中国と日本の実際を取る方略、男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、日中共に、男女共に、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高くなっており、理想と実際の間には差が少ない。

役割の遂行への要求という社会的規範意識は、日中間共に小学生低学年までに既に形成

しており、意識のみならず、行動まで執行できていると思われる。

(6) 先生との意見対立場面における最もよい方略の選択は、各発達段階共に直接的主張が最も多く選択されている。発達に伴い、直接的主張の占める割合も高くなっている。発達に伴い、先生の権威性が低くなったことの反映と思われる。

国別で比較してみると、日中共に各発達段階を通して直接的主張が最も多く選択されているが、中国において、各発達段階共に、他の適切な人を推薦する「間接的主張2」も高い割合で選択されていることが特徴的である。中国と日本の実際を取る方略と比較してみると、実際を取る方略においても、中国では直接的主張と他人を推薦する間接的主張が極めて近い値で最も高くなっているが、日本では直接的主張が最も多く用いられ、他人を推薦する間接的主張の選択が少ない。理想としても、実際にしても、日中間にこの方略に対する考え方の違いが存在すると思われる。

男女別で比較してみると、男女共に各発達段階を通して直接的主張が最も多く選択され、同様の傾向を示している。男子と女子の実際を取る方略と比較してみると、理想としても、実際にしても直接的主張が最も高くなっており、理想と実際の間には差が少ない。

第2節 親子関係について

1. 中国と日本の親子関係の特徴

(1) 中国では「両親がともに参加する子育て」、日本では「母親を中心とした子育て」の図式が見られた。子どもが男子であるか女子であるかによる養育態度の違いは中国では顕著でないが、日本では男子に厳しく女子に甘いという傾向がみられる。

(2) 子どもの発達に伴う養育態度の変化については、両国間に顕著な差異が認められた。中国では、発達に伴って子どもへの対応が厳しい面も甘い面も同様に減少する傾向にある。しかし、全体としての態度や考え方には各発達段階を通して大きな変動はみられず、一貫した態度で接していることが示唆されている。一方、日本では、甘さの側面において、中国と同様に、発達に伴って減少しているが、厳しさの側面においては中学生に対する働きかけが最も多く、発達段階の特質に合わせたいわば柔軟な対応となっているようである。

(3) 養育態度の多くの下位尺度において中国の方が高くなっており、特に「期待、干渉、心配」における差は顕著である。中国では様々な面で子どもに対して関与することが多く、子どももそれを明確に認識していると思われる。

2. 親子関係と社会的問題解決方略との相関

本研究において、親子関係の好ましくない傾向として取り上げた親の拒否的態度（不満、非難）、支配的態度（厳格、期待）、保護的態度（干渉、心配）、服従的態度（親が逆に子どもに従順する態度：溺愛、盲従）は、子どもの社会的問題解決方略と、以下のような相関関係が見られる。

(1) 全体的には、殆どの社会的問題解決方略が親子関係の各下位尺度と有意な相関を示しており、親の養育態度が子どもの問題解決行動や対人関係に影響を及ぼしていることは統計的に裏付けられている。

親の拒否的態度（不満、非難）は子どもの攻撃性を高める傾向、親の保護的態度（干渉、心配）は子どもの自立を妨げ、問題解決において権威者（先生）に頼り、子どもの問題解決に立ち向かう積極性を抑制し、子どもの自己抑制を高める傾向が見られる。

親の拒否的態度（不満、非難）、支配的態度（厳格、期待）、保護的態度（干渉、心配）、服従的態度（溺愛、盲従）は、いずれも他人を推薦する「間接的主張2」と正の相関を示しており、子どもの問題解決において、推薦された相手の気持ちや相手との関係を配慮せず、安易に自分が逃れるよう他人を推薦し、他人を引きずりこむことに頼ってしまう傾向が見られる。

（2）国別で見ると、日本は中国より、社会的問題解決方略と親子関係の相関が高く、親の態度が子どもの問題解決行動や対人関係への影響が大きいことが特徴的である。中国の社会的問題解決方略と親子関係の相関が低いことは、2点のことが考えられる。一つは中国の子どもは、日本の親よりはるかに多い中国の親の期待、干渉、保護、溺愛などに対して、一種の感情や反応の鈍麻が生じ、親の態度が自らの行動への影響を薄めたのではないかと考えられる。もう一つは、中国の子どもは、日本の子どもより強い「自己」を持っているため、外部（親）による影響が小さくなったのではないかとと思われる。

日本において、親子関係の各下位尺度ともに、子どもの直接的攻撃、間接的攻撃（表情攻撃、背後的攻撃、断絶的攻撃）、間接的主張、先生頼り、他人を推薦する「間接的主張2」と正の相関を示している。日本において、親と子どもの関わりが多いことは子どもの問題解決における攻撃性、主張性を高める傾向が見られる。

（3）男女別で見ると、男子は女子より、先生頼りと親子関係の相関が高いことが特徴的である。男子は社会的問題解決における社会性の発達が遅く、先生頼りを多用すると同様に、権威者である親の影響も大きく受けているのではないかと考えられる。

（4）場面別で見ると、級友との意見対立場面において、他の場面と反対に、親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの直接的攻撃、表情攻撃と正の相関、子どもの関係重視抑制と弱い負の相関を示している。また、名誉の侵害場面以外の他の場面より、親の「期待、干渉、心配」と子どもの直接的主張との相関が高いことも特徴的である。意見の対立において、自分の意志を貫くことは強い自己の現れと思われる。親の保護的態度は子どもの自己形成を助長し、意見の対立において、自分の意志を貫くための攻撃性、主張性を高める傾向が窺える。

名誉の侵害場面において、級友との意見対立場面と類似した傾向が見られた。他の場面と反対に、親の「干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、子どもの直接的攻撃、表情攻撃、直接的主張、間接的主張と正の相関を示している。一方、親の「期待、干渉、心配、溺愛、盲従」、特に「干渉、心配」の態度は、他の場面より、子どもの断絶的攻撃と高い負の相関を示している。名誉の侵害に対する対決は、自尊心が高く、社会的自己を意識し、自分を取り巻く環境における自分の体面を守る行為である。親の保護的態度は子どもの社会的自己の形成を助長し、子どもの自己防衛のための攻撃性、主張性を高めると同時に、子どもが安易に短絡的に相手との関係を絶つことも抑制する傾向が窺える。

先生との意見対立場面において、葛藤の相手は権威者の先生であるゆえに、社会的問題解決方略と親子関係の相関も他の場面と異なる傾向が見られた。他の場面と正反対に、親の「期待、干渉、心配、溺愛、盲従」、特に「期待、干渉、心配」の態度は、子どもの直接

的攻撃と高い負の相関を示しており、子どもの直接的主張とも弱い負の相関を示している。親の「厳格、期待、干渉、心配、溺愛、盲従」の態度は、他の場面より、子どもの抑制的方略（関係重視抑制、騒ぎ回避抑制）と高い正の相関を示している。先生に対して、直接的に攻撃しない、主張しない、先生との関係を保ちたいことは先生の権威性が高いことの現れである。親の保護的、子どもへの従順的な態度は、先生の権威性を高める結果である。これは、親の保護的、子どもへの従順的な態度は、親が子どもの成長過程において、子どもの尊敬する「同一視」の対象になり難く、代わりに先生が「同一視」の対象として求められ、先生の権威性が高くなったのではないかと考えられる。

（５）発達段階別で見ると、発達に伴い、親の「不満、非難、厳格」の態度と子どもの攻撃的方略（直接的攻撃、間接的攻撃）、無意義抑制との相関が低くなる傾向が見られる。発達に伴い、子どもの自己が徐々に形成し、親の拒否的態度への耐性も徐々に高くなり、親の影響も薄くなったのではないかと考えられる。

発達に伴い、親の支配的態度（厳格、期待）、保護的態度（干渉、心配）、服従的態度（溺愛、盲従）、特に保護的態度（干渉、心配）は、いずれも他人を推薦する「間接的主張２」との相関が高くなり、子どもの問題解決において、推薦された相手の気持ちや相手との関係を配慮せず、安易に自分が逃れるよう他人を推薦し、他人を引きずりこむことを助長してしまうことが考えられる。

第３節 学校生活（保育園生活）について

１．ディリープログラム（校時表）について

中国と日本の保育園・小学校・中学校・高校のディリープログラム（校時表）、及び日課表から、以下の特徴が見られる。

（１）日本の保育園の保育時間が中国より長く、日本の保護者の勤務時間や勤務形態に合わせて、柔軟に対応した結果と思われる。

（２）中国の保育園における午睡時間が日本より長く、小学校・中学校・高校における昼休みの時間も日本より長い。昼の休憩に対する両国の意識のズレが窺える。

（３）小学校において、中国と日本の授業時間の差が少ないが、中学校において、中国の授業時間が日本よりやや多くなり、高校において、中国の授業時間が日本よりさらに多くなっている。中国と日本は、同様に子どもの発達に合わせて対応している一方、中国のほうが日本より子どもの学習に対する要求や期待が高いことも窺える。それと呼応して、下校後の余暇時間において、中国の子どもは宿題や復習に追われて忙しくなっているが、日本の子どもはスポーツ活動、ピアノ・絵画・書道など文化芸術的活動、学習塾に参加し、多岐にわたって忙しくなっている。授業科目からも、中国は国語・数学・英語などの主要の科目において日本より授業時数が多いが、日本は子どもが「①自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。②学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする」というねらいから、総合的な学習の時間を小・中・高通して設けており、授業時数も多くなっている。

(4) 保育園においては日中ともに給食があるが、小中学校においては、日本は給食があるが、中国は小学生が自宅で、中学生は学校の食堂で昼食をとることになっている。これは、日本において、保護者の負担を軽減する配慮、子どもの健康への科学的専門的な管理の要求から福祉の充実を果たしたと考えられる一方、中国において、子どもの個性への尊重或いは子どもへの溺愛から、子どもを全員同一のメニューに縛ることへの抵抗感が強いことも有力な要因であるとも考えられる。

2. 年間行事について

(1) 中国と日本の年間行事は、運動会、参観日、保育園における親子の触れ合い活動、学校における学力検査など、似通っているところが多くみられる。幼児の保育、子どもの教育における両国の理念は共通しているところが多いと考えられる。

(2) 中国の保育園や学校においては、競技活動が多く行われ、個人賞が設けられていること、一年の締めくくりとして、優秀幼児、児童、生徒を選出することが特徴的である。子ども間の競技だけでなく、教師に対しても、多くのコンテストが設けられており、また、あらゆる方面において細かく採点の基準を出して教師を評価している。中国では、競争を提唱し、あらゆる方面における個人への評価により、一人ひとりの才能や力を出し切るようにという教育理念が窺える。

(3) 日本の保育園や学校においては、成長測定や様々な検診が学年の始まりの大きな行事として挙げられていること、運動会においても、音楽発表会・生活発表会・文化祭においても、個人による発表や表彰がなく、グループによる団体演技や団体賞が中心的事であること、児童や生徒が主体的に行動しているクラブ活動・委員会活動・生徒会活動・学校文化祭が年間通して展開していること、参観日・校区単位の文化祭・社会見学・修学旅行などに見られる地域社会との連携が多いことが特徴的である。日本では、地域や保護者との連携をとりながら、子どもの学習の面だけでなく、健康やスポーツ、文化芸術、主体性（生徒会活動）などにおいても全面的に育成し、生徒が心身ともに成長していくようにという教育理念が窺える。

3. 運動会について

(1) 中国と日本の保育園の運動会における種目の設定は、似通っているところが多く、日中ともに幼児の発達に合せて対応していることが見られる。

(2) 小学校以降においては、中国と日本の運動会における種目の設定は、リレー以外、大きく異なっている。中国の学校の運動会は、県主催の運動会と同様の「田徑運動会（陸上競技運動会）」であり、種目の設定も運動会の進行も、スポーツ競技に準じている。日本の学校の運動会は、スポーツ競技というよりも、皆が力を合せてスポーツを楽しむ集会といったほうが妥当であるように思われる。種目の設定には団体演技が多く取り入れ、競技の結果も各学年を込みにした色別競争の団体賞になっている。

(3) 中国の保育園や学校の運動会の特徴は、スポーツ競技であり、個人賞、クラス単位の団体賞、精神文明賞が設定されており、評価基準もきめ細かく立てている。競技の公平性、競技よりも助け合う・協力し合うことの大切さ、個人能力の最大限の発揮、所属集団への一体感・荣誉感の育成などのねらいが窺える。

(4) 日本の保育園や学校の運動会の特徴は、全員参加のスポーツを楽しむ集会であり、個人賞や所属クラスの団体賞がなく、最終の結果は各学年を込みにした色別の競争になっている。各学年の各クラスともに平等に出演し、来場者の参加も配慮されている。園や学校の全員が平等に参加できることの公平性、団体種目を通して集団生活や共同作業における協調性、学年を超えてより広い集団の形成及び集団内の協力・協調性の育成などのねらいが窺える。

(5) 中国においては、入学後、成績、個人及び担任教師の要望や事情により、小範囲の所属クラスの変更が見られるが、基本的には小学校の全段階、中学校の全段階、高校の全段階を通してクラス替えしないのである。

(6) 日本においては、学級内では席替え、進級によってはクラス替え、校内では縦割り班(全校の児童が各学年ともにいくつかのグループに分けて、学年を超えて共同で行動する)があり、運動会では色別に分かれ、一人の子どもは流動的に様々な集団に属することが特徴的である。日本において、子どもに、より多くの人と触れ合い、より自由自在に多くの人と協調できる能力を身につけてほしいという教育のねらいがあるのではないかと思われる。

河合(1994)は、日本は場の倫理文化であり、場の中に存在する人々の絶対的平等に価値を置き、与えられた「場」の平衡状態の維持に最も高い倫理性を与えている。場の中においては、全ての区別が曖昧にされ、全て一様の灰色になると指摘している。このような場の倫理は、まさにこのような学校生活、学校教育によって形成されたのではないかと思われる。

4. 全体の特徴

全体的にみると、中国の幼稚園や学校は、学習の面に重みを置き、公平性を保ちながら、子ども一人ひとりの能力を最大限に発揮するような教育の態勢が窺える。日本の幼稚園や学校は、勉強だけでなく、子どもの人間性、特に人との協調性、集団内の協力意識を重点に置いて育成するような教育の態勢が窺える。

第4節 葛藤解決目標について

1. 中国と日本の葛藤解決目標

葛藤解決において、中国では、「自尊心やプライドを回復したい」「相手から尊重され、丁寧に扱ってもらいたい」「自分の名誉、体面、評判を回復したい」などの項目を含めた「社会的目標」が最も高く、「相手とよい関係を維持したい」「相手とお互いに理解し合いたい」の項目を含めた「関係目標」がそれに続き、「金銭的に有利な結果を得たい」「弁償してもらいたい」の項目を含めた「経済的目標」が最も低くなっている。

日本では、「関係目標」が最も高く、続いては「社会的目標」であり、「経済的目標」が最も低くなっている。

「社会的目標」において、中国男女ともに日本男女より、大きく上回っている。中国人は「愛面子」(メンツ重視)と言われているが、「メンツ」いわば世間への顔でありプライ

ドである。この調査結果もその一端を表わしていると言えよう。問題解決方略において、中国大学生は、名誉の侵害場面における表情攻撃、断絶攻撃、間接的主張が他の全ての場面より最も高くなっている。このことも自分の名誉、体面、評判を重視することの現われと考えられよう。一方、「社会的目標」においては、中国女子が中国男子より、日本女子が日本男子より有意に高い。女子は男子より社会性が発達し、相手からの扱い態度により敏感で、より自分のプライドを守る傾向が強いと思われる。

関係目標においては、日本が中国より有意に高い。日本が西洋圏のアメリカ（大淵ら, 1996）だけでなく、東洋圏に位置する中国に比べても関係志向が強いと見ることできる。しかし、葛藤解決の関係目標と関係重視抑制との相関係数は、日本男女ともに 0.19 であり、強い相関が見られなかった。大淵・福島（1997）も、日本人の回避（抑制）の使用は関係目標に動機付けられたものと予想し検討したが、支持されなかった。むしろ、日本人の葛藤回避が同一性目標（「自分の名誉、体面、評判を回復したかった」「自尊心やプライドを回復したかった」）に関連していることが示され、「同一性目標とは肯定的な社会的印象を維持しようという願望である。個人主義的文化においては、人々は自己主張によって積極的に体面維持をはかろうとするであろうが、日本のような集団主義文化ではむしろ、物事を荒立てないことによって体面を保とうとする傾向があるのではないか」と考察している。また、「日本人にとって関係維持の動機づけは内発的なものではなく、社会的圧力に従って志向された社会規範に過ぎなかったという可能性がある（大淵ら, 1996）」と言われているように、名誉の侵害場面において日本の大学生が高い関係目標を期待しながら、断絶的攻撃を多くとるという矛盾性に照らして考えると、日本人の関係重視は、葛藤相手との関係よりも自分を取り巻く周囲の人に与える印象、周囲の人々との人間関係を強く意識し、重視していると考えたほうが矛盾が少ないのであろう。

2. 葛藤解決目標と社会的問題解決方略との相関

葛藤解決目標と社会的問題解決方略との相関は、全体的にみると、葛藤解決目標は社会的問題解決方略と高い相関が見られなかった。特に関係目標と関係重視抑制とは相関が高いのではないかと予想していたが、相関が低かった。問題解決の時の自己抑制は、相手との関係を重視し、維持したい関係目標よりも別の要因、例えば相手が同性か異性か、同じ集団であるか否か、相手との上下関係など、によって決定されているかもしれない。

関係目標は、関係重視抑制と相関せず、主張的方略と正の相関を示したことも興味深い。一方的に自己抑制することは双方の関係維持に貢献せず、むしろ積極的な主張によって合理的に解決することが双方の関係を維持するにつながるという人間の本心の表れであろう。

社会的目標と経済的目標は、多くの方略と弱い相関を示した。特に社会的目標と中国男女の直接的攻撃、中国男子のジャンケンと弱い負の相関を示したことが興味深い。大淵ら（1996）は ALT は日本人教師より公正目標を強く期待し相対的に攻撃的方略を多用する結果であったが、中国大学生では逆に、社会的目標を強く望みながら、直接的攻撃をしない傾向が見られた。これは、中国大学生は直接的攻撃によって物事を荒立てると、逆に自尊心やプライド、自分の体面や評判を傷つくことになるという思いが強いからではないかと思われる。これは、今回の調査で明らかになったように、小・中・高・大学生いずれの発達段階の中国対象者も日本対象者より「騒ぎ回避抑制」が高いこととも関連しているの

であろう。

また、ジャンケンは、双方下がらず安易に解決できることから日本で愛用されているが、中国大学生では逆に、「社会的目標」を強く望めば、「ジャンケン」を取らない傾向が見られる。ジャンケンは双方を傷つけない良い解決法とみなさず、むしろ自分のプライドや体面を犠牲にする曖昧な結末であり、すっきりならない結末である。物事を明確にはっきりさせることを好む中国では、ジャンケン意見の対立や葛藤の解決において、良い手段とは思わないであろう。

いずれの葛藤解決目標も関係重視抑制、騒ぎ回避抑制と相関を示さなかった。葛藤問題に直面する際、一方的に自己抑制することは、社会的目標、経済的目標を達成できないのみならず、関係目標さえ達成できない結果を示している。

第5節 総合考察と結論

以上まとめてきたように、中国と日本の社会的問題解決方略、親子関係、葛藤解決目標は、それぞれ特徴的な様相を呈している。

場面の要因を統制したうえ、社会的問題解決方略に最も影響を与えているのは国の要因であり、続いては小学生～中学生にかけての発達、最後には高校生・大学生における性差である。言い換えれば、発達や性差より、中国と日本の国による違いが最も顕著であると言えよう。

中国と日本の対象者の社会的問題解決方略における違いは、両国の親子関係と社会的規範意識や価値観の違いが背景に影響を与えているのではないかと思われる。

1. 親子関係の影響

(1) 親子関係については、日本青少年研究所(2001)、雷・堂野(2003)も本研究と同様に、中国のほうが日本より子どもへの親のかかわりや働きかけが多いことが明らかになっている。中国において親の子どもへの働きかけが多いことは、中国社会における家族観に由来しているのではないかと思われる。

中国においては、家族の一体感が極めて強く、親子の癒着も極めて高いである。長い歴史において中国社会の思想理論をリードしてきた儒教は、人間の理想として、「修身」(身を修める、人格を磨き修養を積む)、「齐家」(家庭を修める、家族の睦和と成功を導く)、「治国」(国を修める、君主に忠誠を尽くし民衆に幸福を与える)、「平天下」(天下を修める、国を超え世界中の民衆に幸福を与える)の順に上げており、知識者の人生の指針として甚大な影響を与えてきた。この儒教の教えからも、中国における家族の重要性、家族の連帯感の強さを窺える。今の中国社会においても、家族は人々の社会に立ち向かう際の最後のより所であり、心の港であるという考えはきわめて強く、親子関係も一生に渡り世界中においても極めて緊密である。子どもの栄光は自分の栄光、子どもの失敗は自分の失敗に等しいため、次第に子どもに多くの期待をかけ、自分の理想通りに子どもを導きたいであろう。本調査において、親の「期待」は小中学生において高く、高校生において低くなっていることは、親の「期待」は子どもの特性を見据えた結果ではなく、このような家

族観によって盲目的に寄せたものと考えられよう。

儒教の教えからも、巷間に広く行き渡る常套句「養不教父之過」（養いて教えざるは父の過なり）からも、中国において子どもの教育は家庭の責任である意識の強さを窺わせる。生理的養育、社会的教育を共に担っている中国の親は、自然に子どもに多くの働きかけをするのであろう。

(2) 社会的問題解決方略と親子関係の相関関係から、親の拒否的態度（不満、非難）は子どもの攻撃性を高める、親の保護的態度（干渉、心配）は子どもの自立を妨げ、問題解決において権威者（先生）に頼り、子どもの問題解決に立ち向かう積極性を抑制し、子どもの自己抑制を高める傾向が見られる。また、親の拒否的態度（不満、非難）、支配的態度（厳格、期待）、保護的態度（干渉、心配）、服従的態度（溺愛、盲従）は、いずれも他人を推薦する「間接的主張2」と正の相関を示しており、子どもの問題解決において、推薦された相手の気持ちや相手との関係を配慮せず、安易に自分が逃れるよう他人を推薦し、他人を引きずりこむことに頼ってしまう傾向が見られる。

一方、級友との意見対立、名誉の侵害場面において、親の保護的態度は子どもの自己形成を助長し、意見の対立において、自分の意思を貫く、自分の体面守るための攻撃性、主張性を高める傾向が窺える。

幼児・保育者・保護者を対象とした森下（2000a, 2000b, 2001, 2002a, 2002b, 2003a, 2003b）の一連の研究でも、自己抑制の高い子どもの父母の態度は共に受容的であるのに対して、低い子どもの父母の場合は共に拒否的であった、父母が共に受容的な場合、女兒は自己抑制が高く、父母が共に拒否的な場合、男女児共に攻撃性が高いという結果を示した。

中国と日本の親は、拒否的態度（不満、非難）においては差が少ないが、支配的態度（厳格、期待）、保護的態度（干渉、心配）、服従的態度（溺愛、盲従）においては、中国の親が日本の親よりはるかに強い傾向を示している。この親子関係における日中間の相違は、社会的問題解決方略において、日本の子どもの社会性の発達に中国より早い一方、級友との意見対立、名誉の侵害場面において中国の子どものほうが攻撃性、主張性が高い結果に影響を与えたのではないかと考えられる。

本研究の調査結果からも、中国と日本の社会生活の実態、巷間によく耳にする言葉からも、子どもの養育における親の態度を一つのキーワードでまとめるとすれば、中国の親は「教孩子」（子どもを教育する）であり、日本の親は子どもを「見守る」と言えるのではないかとと思われる。子育てという人生の道案内は、実生活の道案内と同様に、「見守る」姿勢のほうが、案内された人が自ら道端の風景を眺め、自ら考え、自ら道を選択する余裕ができ、自主性を育てるのではないかとと思われる。幼稚園年長児から、社会的問題解決における社会性の発達は日本が中国より高いのは、このような親の態度に大きく影響されたのではないかとと思われる。

2. 社会的規範意識や価値観の影響

社会的問題解決方略と葛藤解決目標に関する日中比較研究は、まだ見当たらないが、同じ東アジアに属する日韓比較研究は見られた。徐（2004）は日本と韓国の小学生を対象に比較調査した結果、韓国の児童は日本の児童より全体的に直接的主張、直接的攻撃、間接的主張、間接的攻撃（本稿の「表情攻撃」に相当）、回避的攻撃（本稿の「断絶的攻撃」に

相当)、背後の非難(本稿の「背後的攻撃」に相当)を多く用い、日本の児童は韓国の児童より抑制的受容を多く用いる傾向が見られた。日中間の結果とは正反対である。日本と韓国のこの結果は、「韓国の児童が対人葛藤場面で自分の感情を直接或いは間接に多く表出しているが、日本の児童は自分の感情を抑制する傾向があることを示す」(徐, 2004)。その背景には、韓国は「親愛的相互協調の文化」、日本は「思いやりの相互協調の文化」であるからと考えられる(徐, 2005)。中国と日本の結果は、中国と日本の親子関係の相違によるほかに、中国と日本の風土と歴史による文化的信念、倫理観や価値観の相違にも大きく影響を受けていると思われる。

文化は、人間がそこで生きていくにあたっての物理的・社会的環境の大枠を決めるだけでなく、そこでどう振舞うのが良いか、行動の準則を与えるものである。子どもは特定の文化の中で育つうちに、その文化で適切とされている行動の規範を自分自身の中に取り込んで、「こういう状況では、このように行動すればよい」というスクリプトを形成していく。本研究の結果は、あくまでも中国江西省、日本の山口県における調査により、国民性や文化について考察することに限界があるが、あえて考察するとすれば、可能性としては以下のことが考えられよう。

日本人ほど、自国の文化や自国民に対する関心の高い国民はいないと言われる。日本文化に関しては、欧米文化との比較から、日本は「高コンテクスト文化」、「集団主義文化」(西洋は「低コンテクスト文化」、「個人主義文化」)であることは世間一般に知り渡っている。また、日本は「察しの文化」、「和」の文化、「内」と「外」の文化であり、「母性文化」が優位で、「場」の倫理に支配されていると言われてるように、数多くの先学がそれぞれの角度から日本文化について言及し、日本人論は常に盛んである。

本研究の調査結果からも、日本の社会生活の実態からも、日本人の問題解決行動を支配しているのは「場の倫理」ではないかと思われる。場の倫理としては、場の中に存在する人々の絶対的平等に価値を置き、与えられた「場」の平衡状態の維持に最も高い倫理性を与えている。場の中においては、全ての区別が曖昧にされ、全て一様の灰色になるのであるが、場の内と外とは白と黒のはっきりとした対立を示す(河合, 1994)。場の中では、「察し」を必要とし、不注意で同じ場の中にいる他の人と「ぶつかったり」、他の人と異なる行動を取ったりすることは、場の平衡を壊す行為として、罪とみなし、「村八分」とされ、場から追い出されるはめになる。会合など一時的な「場」において、個人から受けた「ぶつかり」に対して、立ち向かって対決すると、その場の雰囲気、その場の平衡を壊すことになるため、直接的に対決するよりも背後に非難したり、相手との関係を絶ったりして相手をその「場」にしばらくさせるほうが妥当とされる。

本研究の葛藤相手は「クラスの同性の友達」であり、共有の「場」をもつ人間同士である。従って、その問題解決行動は「場の倫理」に支配される。意見の対立場面以外、いずれの場面も葛藤の重要度、攻撃性、間接的主張、先生頼り、ジャンケンが日本のほうが高いこと、特に持物の侵害場面において、中国では相手の与えた損害が故意ではないための「非故意性抑制」が最も高く、日本では間接的主張が最も多く用いられていることは、日頃「場」の平衡、共有の場にいる人との関係や場の雰囲気を懸命に気を配り、ぶつかり合いを避けてきた日本人が反動的にぶつかり合いを深刻に受け止め、相手の行為が許しがたく、強い攻撃性、主張性を示したのではないかと思われる。また、日本は、関係重視抑制

が中国より高くなっている、葛藤解決目標の「関係目標」も中国より高くなっている一方、名誉の侵害に対しては男女ともに断絶的攻撃が最も多く用いられている矛盾性を理解するには、日本人の関係重視は、相手との真の個人的な友情関係ではなく、相手との共有の「場」における平衡関係を重視するのであり、そのため、相手との対立を避ける一方、相手との関係を絶つという奇妙な矛盾性を示しているのではないかと思われる。また、理想とする方略は、持物の損害場面も名誉の侵害場面も直接的主張が最も多く選択されているが、実際取る方略は、持物の損害場面においては間接的主張が最も高く、名誉の侵害場面においては断絶的攻撃が最も高くなっている。実際の行動において、相手との直接的対決を避けている傾向が窺えよう。

このように、「クラスの同性の友達」という共有の場を持つ人間同士の社会的問題解決の特徴を一言でまとめれば、日本は「ぶつかり合い回避の場の倫理文化」であると言えるのではないかと思われる。

一方、中国の風土と歴史から、中国の社会的問題解決の特徴は、「ぶつかり合い受容の個の倫理文化」であるのではないかと思われる。

風土と歴史からみると、平野の多い中国は交通の便利さに乗じて、常に外部の人々との交流を絶えなかったため、中国で「一方水土一方人」という言い方があるように、風土による生活や民風の違いの存在が早くも一般的に認識と受容されている。また、交通の便利さと交流の頻繁さに伴い、中国では戦争や民族の融和が絶えなかった。戦争まで頻繁に会わされる中国人は、ぶつかり合うことを寛恕的に受け捉えるほかないであろう。また、人ごみの中で生き抜くには、強い個が存在が必要とし、人ごみの中でのぶつかり合いもやむを得ないこととして人々に受容されている。人ごみの中で、人にぶつからないよう気を配ることだけでも精一杯で、それでは自分の事も公のことも、何事もできなくなる。それより、ぶつかられても動かない自己の強さ、多少ぶつかられても気にしない懐の深さと広さを持ったほうが社会にしても個人にしても効率がいい。次第に「包容力と能力」を求める「ぶつかり合い受容の個の倫理文化」は、中国において形成し、主流の文化として受け継がれているのではないかと思われる。

「ぶつかり合いの受容」と「個の主張」は矛盾しているため、どちらを優先するかは、二つのことが重要視させている。一つは相手の悪意の有無、もう一つは自分の主張が理にかなうかどうかである。中国では、「有理走遍天下、無理寸歩難行」（理が通ればどこにも勝ち抜ける、理が通らなかつたら、一步も踏み込めない）という言葉で表わしているように、理にかなうことが葛藤解決の決め手になるため、自己主張の際、自分には「理がある」ことをあらゆる角度で主張や説明しなければ周りから有利な判断をしてもらえない。そこで、「講理」（理を説く）という言葉は葛藤解決の時頻繁に出てくる。また、「個の文化」である以上、気性の分かち合いのできる甘えの「場」の存在もない以上、「理」で勝負する世界においては、自分の名誉、自分の世間への顔の大切さは想像つくものであろう。

中国は、名誉の侵害、級友との意見対立場面における葛藤の重要度、攻撃性、主張性が最も高くなっている。葛藤解決目標の「社会的目標」も日本より高くなっている。中国の対象者が自己としての存在をいかに重視するかを窺わせる。また、自分の代わりに他の適切な人を推薦することは、中国の対象者が自己主張の効率性を優先し、相手の気持ちや相手との関係を二の次にする姿勢も窺わせる。

自己責任抑制においては、中学生を境に中国では発達に伴い大学まで大きく下がっているが、日本では発達に伴い大学まで大きく上がっている。「ぶつかり合い回避の場の倫理文化」の日本では、発達に伴い、「場」への察し、配慮や自粛が高くなり、問題解決における自己責任の反省も高くなるのであろうが、「ぶつかり合い受容の個の倫理文化」の中国では、「ぶつかり合いの受容」と「個の主張」の平衡は発達に伴い、中学生以降は「個の主張」のほうに傾けており、自己責任抑制が低くなったのではないかと考えられよう。

このような中国と日本の価値観・倫理観の違いは、中国と日本の学校生活に照らしてみると、いかに一致しているかが窺える。学校生活、学校教育を通して、中国社会と日本社会の価値観・倫理観が両国の子どもに受け継がれ、中国と日本の子どもの社会的問題解決方略に影響を及ぼしたのではないと思われる。

3. 今後の課題

本研究においては、調査対象の地域として、中国・日本ともに農村部を含めた小都市を取り上げた。これらの地域は生活様式や文化の中に伝統的な意識や考え方が色濃く残されているものと考えられる。対象者の社会的問題解決方略の特徴は、日中ともに「伝統型」或いは「農村型」と考えたほうが妥当であろう。

今後の課題として、東京や上海などの大都市の地域を対象とした「現代型」或いは「都市型」研究による検討、大学生の質問紙を参照し、社会人を対象とした研究による検討が待たれるところである。

References

- 相川充・佐藤正二・佐藤容子・高山巖 1993 社会的スキルという概念について—社会的スキルの生起過程モデルの提唱—宮崎大学教育文化学部紀要, 社会科学, 74, 1-16.
- Alberti, R. E. & Emmons, M. L. 1970 *Your perfect right: A guide to assertive behavior*. San Luis Obispo, California: Impact Publishers, Inc. (菅沼憲治・ミラーハーシャル訳 1994 自己主張トレーニング 東京図書)
- 荒木紀幸 1988 道徳教育はこうすればおもしろい—コールバーグ理論とその実践 北大路書房
- 朝生あけみ・斉藤こずゑ・荻野美佐子 1991 0~1歳児クラスのいざこざにおける保母の介入の変化, 山形大学紀要, 教育科学, 10(2), 217-228.
- 東敦子 1989 幼児の社会的問題解決に関する最近の研究 同志社心理, 36, 57-68.
- 東敦子 1992 幼児の社会的問題解決における自己認知と他者認知が社会的コンピテンスに及ぼす影響 同志社心理, 38, 37-48.
- 東敦子・野辺地正之 1992 幼児の社会的問題解決能力に関する発達的研究—けんか及び援助状況の解決と社会的コンピテンス 教育心理学研究, 40(1), 64-72.
- 東洋 1994 日本人のしつけと教育—発達の日米比較にもとづいて 東京大学出版会
- 東洋・柏木恵子・R. D. Hess 1981 母親の態度・行動と子どもの知的発達 東京大学出版会
- Dodge, K. A. 1990 A information processing model of children's social adjustment. The 3rd Workshop of International Society for the Study of Behavioral Development: *Social and inter personal cognition*. Tokyo.
- 江村理奈・岡安孝弘 2003 中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究 教育心理学研究, 51(3), 339-350.
- 深田博己・山根弘敬 2003 大学生の対人葛藤解決方略に関する研究 広島大学心理学研究, 3, 31-49.
- 福永光司 1996 「馬」の文化と「船」の文化 人文書院
- Fukushima, O. & Ohbuchi, K. 1996 Antecedents and effects of multiple goals in conflict resolution. *International Journal of Conflict Management*, 7, 191-208.
- 二神多栄・神谷ゆかり 2004 中学生の対人葛藤場面における処理方法の理由付け 安田女子大学大学院文学研究科紀要 教育学専攻, 9, 151-165.
- 呉美喜 2001 幼児の社会的問題解決方略と教師(教諭)の仲裁の役割—日本の幼稚園での事例研究 政治学研究論集, 14, 99-115.
- 濱口佳和・新井邦二郎 1991 児童の社会的コンピテンスへの接近法についての考察—場面特殊的—内潜在的過程アプローチの提唱 筑波大学心理学研究, 13, 185-202.
- 平井美佳 2000 問題解決場面における自己と他者の調整 教育心理学研究, 48(4), 462-472.
- 費孝通 1981 生育制度(再版) 天津人民出版社(横山廣子訳 1985 生育制度: 中国の家族と社会 東京大学出版社)
- 本郷一夫 1992 子ども間の関係を媒介する保母の働きかけに関する研究—トラブル場面

- における子どもの拒否・NRの分析 鳴門教育大学研究紀要, 教育科学編, 7, 369-381.
- 本郷一夫 1994 子ども間のトラブルに対する保母の働きかけと意図に関する研究—トラブルの内容に基づく保母の対応の違いと個人差を中心に 鳴門教育大学研究紀要, 教育科学編, 9, 261-274.
- 本郷一夫 2000 子ども間のトラブルに対する保育者の働きかけと意図に関する研究(2)—1歳児クラス担当保育者に対する調査 東北教育心理学研究, 7, 43-52.
- 本郷一夫・杉山弘子・玉井真理子 1991 子ども間のトラブルに対する保母の働きかけの効果—保育所における1~2歳児のものをめぐるトラブルについて 発達心理学研究, 1(2), 107-115.
- 伊藤篤 2002 幼稚園児の自己主張・自己抑制の発達的变化(2)横断データと縦断データの比較 人間科学研究, 10(1), 37-48.
- 梅根悟・海後宗臣監修 1961 三枝孝弘「学校」 現代教育事典 明治図書
- 徐甫潤 2004a 児童の社会的問題解決方略における文化差—日韓比較研究 神戸大学発達科学部研究紀要, 12(1), 165-173.
- 徐甫潤 2004b 小学生の社会的問題解決方略における日韓比較 人間科学研究, 11, 49-64.
- 徐甫潤 2005 対人葛藤場面における社会的問題解決方略に関する発達的研究 神戸大学発達・臨床心理学研究, 4, 1-11.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学(第2版) 東京大学出版会
- 嘉数朝子 1987 児童の対人葛藤解決能力と仲間と自己についての概念 琉球大学教育学部紀要, 第一部・第二部, 31, 391-397.
- 嘉数朝子・前原武子・金城洋子 1991 児童の社会的問題解決能力—社会測定的地位や親和動機づけとの関係 琉球大学教育学部紀要, 第一部・第二部, 38, 339-346.
- 金城洋子・梅本堯夫 1991 児童における対人交渉能力の発達 発達研究, 7, 115-134.
- 金山宣夫 1978 日本人と中国人 三省堂
- 柏木恵子 1986 自己制御(self-regulation)の発達 心理学評論, 29, 3-24.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に 東京大学出版会
- 河合隼雄 1994 日本社会とジェンダー 河合隼雄著作集第10巻 岩波書店
- 清水幾太郎 1969 社会的人間論 角川文庫
- 邱永漢 1996 中国人と日本人 中央公論新社
- 小森千世・宮本正一 1992 相手の性別・年齢が対人的葛藤解決に及ぼす効果 岐阜大学教育学・心理学研究紀要, 11, 181-192.
- 子安増生・鈴木亜由美 2002 幼児の社会的問題解決能力と「心の理論」の発達 京都大学大学院教育学研究科紀要, 48, 63-83.
- Krasnor, L. R. & Rubin, K. H. 1983 Preschool information processing in child psychiatric populations. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 12, 471-490.
- 倉持清美 1992 幼稚園の中のものめぐる子ども同士のいざこざ—いざこざで使用される方略と子ども同士の関係 発達心理学研究, 3(1), 1-8.
- 雷秀雅・堂野佐俊 2003 思春期の子どもを持つ親の養育態度とその規定要因: 中国及び

- 日本における実態分析 東アジア研究, 2, 55-66.
- 丸山(山本)愛子 1999 対人葛藤場面における幼児の社会的認知と社会的問題解決方略に関する発達的研究 教育心理学研究, 47 (4), 451-461.
- 松本一男 1987 日本人と中国人 サイマル出版会
- 森下正康 2000a 幼児期の自己制御機能の発達(1)—思いやり、攻撃性、親子関係との関連 和歌山大学教育学部紀要, 教育科学, 50, 9-24.
- 森下正康 2000b 幼児期の自己制御機能の発達(2)—親子関係と幼稚園での子どもの特徴 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 10, 117-128.
- 森下正康 2001 幼児期の自己制御機能の発達(3)—父親と母親の態度パターンが幼児にどのような影響を与えるか 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 11, 87-100.
- 森下正康 2002a 幼児期の自己制御機能の発達(4)—園と家庭における縦断的研究 和歌山大学教育学部紀要, 教育科学, 52, 1-12.
- 森下正康 2002b 幼児期の自己制御機能の発達(5)—親子関係が家庭と園での子どもの行動パターンに及ぼす影響 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 12, 47-62.
- 森下正康 2003a 幼児期の自己制御機能の発達(6)—保育の特徴と子どもの行動特徴 和歌山大学教育学部紀要, 教育科学, 53, 23-38.
- 森下正康 2003b 幼児の自己制御機能の発達研究 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 13, 47-56.
- 長峰伸治 1996 青年期の対人的交渉方略に関する研究—INS モデルの検討と対人的文脈による効果 名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学科, 43, 175-186.
- 長峰伸治 1999 青年の対人葛藤場面における交渉過程に関する研究—対人交渉方略モデルを用いた父子・母子・友人関係での検討 教育心理学研究, 47(2), 218-228.
- 中台佐喜子・金山元春 2002 幼児の自己主張, 自己抑制と問題行動 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部, 51, 297-302.
- 中里至正 2000 日本の親子関係の問題点—7 カ国調査の結果から 白山社会学研究, 8, 11-24.
- 中嶋嶺雄 1990 日本人と中国人ここが大違い ネスコ(日本映像出版株式会社)
- 日本青少年研究所(編) 2001 子どものしつけに関する調査報告書 日本青少年研究所
- Ohbuchi, K., Chiba, S., & Fukushima, O. 1996 Mitigation of interpersonal conflicts: Politeness and time pressure. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 1035-1042.
- 大淵憲一・菅原郁夫・Tyler, T. R.・Lind, E. A. 1996 葛藤における多目標と解決方略の比較文化的研究: 同文化葛藤と異文化葛藤 東北大学文学部研究年報, 45, 187-202.
- 大淵憲一・福島治 1997 葛藤解決における多目標—その規定因と方略選択に対する効果 心理学研究, 68(3), 155-162.
- 大対香奈子・松見淳子 2002 幼児の社会的スキルと対人葛藤場面における問題解決方略 人文論究, 52 (2) , 70-91.
- 王少鋒 2000 日・韓・中三国の比較文化論: その同質性と異質性について 明石書店
- Phelps, S. & Austin, N. 1975 *The assertive woman*. San Luis Obispo, California:

- Impact Publishers, Inc.
- Richard, B. A. & Dodge, K. A. 1982 Social maladjustment and problem solving in school-aged children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 50, 2, 226-233.
- 羅蓮萍・堂野佐俊 2005 社会的問題解決に関する発達心理学的研究：日本における研究の動向 山口大学教育学部研究論叢, 55, 171-187.
- 羅蓮萍・堂野佐俊 2007 中国における社会的問題解決方略の発達の变化 山口大学教育学部研究論叢, 56, 151-169.
- 羅蓮萍 2007a 親子関係の発達の变化—日中の比較研究より 第4回山口県家庭教育学会研究大会紀要—子育て文化の創造をめざして 5-20.
- 羅蓮萍 2007b 中国と日本における親子関係の発達の变化 東アジア研究, 5, 55-66.
- 羅蓮萍・名島潤慈・堂野佐俊 2008 社会的問題解決方略に関する中国と日本の比較 山口大学教育学部研究論叢, 57, 15-30 (初校校正済み)
- 箕浦康子 1990 文化の中の子ども 東京大学出版会
- 佐藤正二 2000 幼児の社会的スキル訓練について 幼年教育研究年報, 22, 3-91.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山巖 1993a 引っ込み思案幼児の社会的スキル訓練—社会的孤立行動の修正 行動療法研究, 19 (1), 1-12.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山巖 1993b 攻撃的な幼児に対する社会的スキル訓練—コーチング法の使用と訓練の般化性 行動療法研究, 19 (1), 13-27.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山巖 2000 引っ込み思案児の社会的スキル訓練—自然場面でのコーチングによる長期的維持 宮崎大学教育文化学部紀要, 教育科学, 2, 147-156.
- 佐藤淑子 1991 英国在住の日本人就学前幼児の異文化学習—社会的場面に於ける「自己制御」の発達の日英比較 発達研究, 7, 145-165.
- 佐藤淑子 1993 英国在住の日本人就学前幼児の異文化学習—社会的場面に於ける「自己制御」の発達の日英比較—結果と考察 発達研究, 9, 41-60.
- 佐藤淑子 1994 英国在住の日本人就学前幼児の異文化学習—社会的場面に於ける「自己制御」の発達の日英比較—母親の質問紙の分析結果 発達研究, 10, 17-29.
- 佐藤淑子 2001 イギリスのいい子・日本のいい子 中央公論新社
- 佐藤淑子・目良秋子・柏木恵子 1998 就学前児の社会的認知的発達に関する縦断的研究(1)—社会的場面における自己制御機能の発達 発達研究, 13, 52-62.
- 佐藤淑子・目良秋子・田矢幸江・柏木恵子 1999 就学前児の社会的認知的発達に関する縦断的研究(1)-2—社会的場面における自己制御機能の発達 発達研究, 14, 27-36.
- 佐藤淑子・目良秋子・田矢幸江・柏木恵子 2001 就学前児の社会的認知的発達に関する縦断的研究(1)-3—社会的場面における自己制御機能の発達 発達研究, 16, 33-51.
- 佐藤淑子・目良秋子・柏木恵子 2003 就学前児の社会的認知的発達に関する縦断的研究(1)-4—社会的場面における自己制御機能の発達 発達研究, 17, 25-38.
- 首藤敏元 1995 幼児の向社会的行動と自己主張—自己抑制 発達臨床心理学研究, 7, 77-86.
- Shure, M. B., Spivack, G & Jaeger, M. 1971 Problem-solving thinking and adjustment among disadvantaged preschool children. *Child Development*, 42, 1791-1803.

- Spivack, G & Shure, M. B. 1974 *Social adjustment of young children: A cognitive approach to solving real life problems*. San Francisco: Jossey-Bass.
- 総務庁青少年対策本部(編) 1995 子供と家族に関する国際比較調査報告書
- 鈴木亜由美 2003 幼児の自己調整機能の注意ならびに認知的メカニズム—自己抑制と自己主張の二側面からの検討 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 338-349.
- 鈴木亜由美・子安増生・安寧 2004 幼児期における他者の意図理解と社会的問題解決能力の発達:「心の理論」との関連から 発達心理学研究, 15 (3), 292-301.
- 陳雁 2005 “大跃进”与 1950 年代中国城市妇女的职业发展 上海婦女, 5 月号, <http://www.modern-family.com/shanghaiwomen/article.asp?id=1050>
- 高木秀明・張日昇 1990 日中青年の親子関係に関する比較研究
- 田島信元・柏木恵子・氏家達夫 1988 幼児の自己制御機能の発達—絵画自己制御能力テストにおける4-6の縦断的变化について 発達研究, 4, 45-63.
- 玉井真理子・本郷一夫・杉山弘子 1992 集団保育場面における子ども間のトラブルと保育者の働きかけ—1~2歳児クラスにおける物をめぐるトラブルについて 東北教育心理学研究, 5, 45-60.
- 田村毅 1996 子どものしつけに関する国際比較 教育と情報, 5月号, 20-25.
- 田中教育研究所 1972 TK式診断的新親子関係検査(子供用)
- 田中教育研究所 1992 TK式幼児用親子関係検査
- 陳舜臣 1971 日本人と中国人 祥雲社
- 中国教育委員会 2000 幼稚園工作規程
- 渡部玲二郎 1993a 児童における対人交渉方略の発達—社会的情報処理と対人交渉方略の関連性 教育心理学研究, 41(4), 452-461.
- 渡部玲二郎 1993b 人気を指標とした対人交渉方略測度の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 5, 49-53.
- 渡部玲二郎 1995 仮想的対人葛藤場面における児童の対人交渉方略に関する研究—年齢, 性, 他者との相互作用, 及び人気の効果 教育心理学研究, 43(3), 248-255.
- 渡部玲二郎・稲川洋美 2002 児童用自己表現尺度の作成, および認知的変数と情緒的変数が自己表現に及ぼす影響について カウンセリング研究, 35, 198-207.
- 利根川智子・首藤敏元 1997 幼児の愛着表象と社会的問題解決との関係 埼玉大学紀要, [教育学部] 教育科学, 46 (2), 1-16.
- 山岸明子 1976 道徳判断の発達 教育心理学研究, 24, 29-38.
- 山岸明子 1995 道徳判断の発達に関する実証的・理論的研究 風間書房
- 山岸明子 1997 児童における対人的交渉方略と適応感、仲間からの評定の関連 順天堂医療短期大学紀要, 8, 32-43.
- 山岸明子 1998 小・中学生における対人交渉方略の発達及び適応感との関連—性差を中心に 教育心理学研究, 46(2), 163-172.
- 山本愛子 1994 対人葛藤場面における幼児の問題解決方略に関する発達の研究 広島大学教育学部研究紀要 第1部 心理学, 43, 241-249.
- 山本愛子 1995a 幼児の自己主張と対人関係—対人葛藤場面における仲間との親密性および既知性 心理学研究, 66(3), 205-212.

- 山本愛子 1995b 幼児の自己調整能力に関する発達的研究—幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について 教育心理学研究, 43(1), 42-51.
- 山中康裕 1985 親子関係と子どものつまずき—子どもと教育を考える 22 岩波書店
- 山崎晃・深田昭三・細田和雅・柏本和子・米神博子・井田晴彦・湯地由美・原孝成 1994 幼児の自己実現と自己主張及び自己抑制(II) 広島大学教育学部, 学部附属共同研究体制研究紀要, 22, 11-20.
- 山崎晃・上原貞雄・柏本和子・柏本和子・米神博子・井田晴彦・菅田直江 1993 幼児の自己実現と自己主張及び自己抑制(I) 広島大学教育学部, 学部附属共同研究体制研究紀要, 21, 11-20.
- 安松昭子・濱野恵一 2002 自己受容と社会的問題解決能力に関する研究 児童臨床研究所年報, 15, 83-96.
- Yeates, K. O. & Selman, R. L. 1989 Social competence in the school: Toward an developmental model for intervention. *Developmental Review*, 9, 64-100.
- 吉野絹子 1987 対人的葛藤の解決過程の分析(1)—葛藤に対する反応パターンとその類型化 社会心理学研究, 2(2), 35-44.
- 吉武久美子 1991 ひくことが持つ優位性—自己主張と対人関係円滑化を両立させるための対人的コミュニケーション方略 心理学研究, 62(4), 229-234.
- 全国社会福祉協議会・全国保育士会(編) 1999 ハンディー保育所保育指針

アンケートのお願い

これは小学校入学前のお子さんに対する親の態度に関するアンケートです。あなたのお子さんに対する態度を客観的に知ることによって、すばらしい親子関係を築き上げると思います。

調査の結果は研究目的以外には使いません。また、無記名となっておりますので、今後ともあなたにご迷惑をおかけするようなことはありません。気軽に自分が**実際**に行っていることを、ありのままに教えてください。

● **お子様の** 性別： 男 ・ 女 （該当の所に○をつけてください）
 年齢： _____ 歳 _____ 月

● 回答方法

まず、ご両親、あるいは他の保護者の中から、子どもと関わりが多く、子どもに最も影響を及ぼしている人を選んで、アンケートを答えます。

次に、アンケートの記入者と、お子様との関わり方について、教えてください。

あまり深く考えると、答えにくくなりますから、始めに浮かんだ答えを書いてください。

それぞれの質問に4つの選択項目があります。あなたの実情に一番近いものを、1つ選んで○をつけてください。

アンケートの記入者 （該当の人に○をつけてください）

父 ・ 母 ・ 祖父 ・ 祖母 ・ おじ ・ おば
 ・ その他（ _____ ）

ぜんぜん当てはまらない
 あまり当てはまらない
 だいたい当てはまる
 ぴったり当てはまる

1. 子どもに、まつわりつかれるのを、うるさいと思いますか。.....
2. 子どもをしかる時、たたくことがありますか。.....
3. 何かさせる時、わけを話さずにさせることがありますか。.....
4. よその子に負けないようにと、励ましていますか。.....
5. 子どもの身の回りのことを、見ていられなくて世話をやくことがありますか。.....
6. 子どものちょっとした怪我や病気でも、大げさに手当をするほうですか。.....
7. 子どもを友達と遊ばせるよりも、大人が相手をしてやるほうが多いですか。.....
8. 子どもの言い分をよく通してやるほうですか。.....
9. この子とは何となく、気が合わないと思いますか。.....
10. 子どもに口やかましいほうですか。.....
11. 親が良いと思うことは、子どもがいやがってもさせていますか。.....
12. 子どものことで、一番力を入れているのは、将来の勉強に役立つことですか。.....
13. 子どもが食事をする時に、余計な世話をやきますか。.....
14. 子どもの手足や衣服の清潔について、かなり気を配るほうですか。.....
15. 子どもを抱いたり、おんぶしたり、ほおずりしたりなどすることが多いですか。.....
16. 子どもがだだをこねれば、親が負けるほうですか。.....
17. 「この子がいなければいいのに」と思うことがありますか。.....
18. 子どもの作品にケチをつけますか。.....
19. 子どものしたがることでも親がよくないと思えば、禁止することが多いですか。.....
20. よその子と比べて劣る点を口やかましく言いますか。.....
21. 子どもの遊び方に口を出しますか。.....
22. 子どもを一人で外に出せないほうですか。.....

23. 子どもだけが、生きがいだと思っていますか。
24. 子どもに頼まれれば、すぐ手伝ってやるほうですか。
25. 子どものために恥ずかしい思いをすることがありますか。
26. 「あれはだめ」、「これはいけない」などと禁止することが多いですか。
27. 子どもの言い分は認めないほうですか。
28. 子どもの能力に不満を感じますか。
29. 子どもが書いたり作ったりしている時、頼まれなくても手を貸してやりますか。
30. 子どもが友達にいじめられているのではないかと、心配で確かめますか。
31. 友達にいじわるされたり、先生に注意されたりした時、いつも子どもをかばってやりますか。
32. 子どもに何かさせる時、「お願い」と頼んでさせていますか。
33. 子どもがどこでどんな遊びをしても気にしないほうですか。
34. 子どもだけを残して両親が遊びに行くことがありますか。
35. 大人から見て、くだらないと思われるものは、ほしがっても与えないことにしていますか。 .
36. おけいごとが多くて、子どもの遊び時間が少ないですか。
37. 子どもが自分で着たり脱いだりしようとしているのに、手伝うことがありますか。
38. 子どもに万一のことが起こったらと思っていつも心配していますか。
39. 子どものためなら犠牲を払っても満足していられますか。
40. 決めてあることでも、子どもがいやがれば許してやるほうですか。
41. 子どもとの約束を軽く考えて、つい忘れることがありますか。
42. 親の言うとおりにさせるために脅かすことがありますか。
43. マナーについて、やかましくしつけしていますか。
44. 子どもをのばすために、年齢や能力以上のことをさせていますか。
45. 子どもが失敗しないようにと、先回りして気をつけてやりますか。
46. 事故の恐ろしさを大げさに話して聞かせますか。
47. 子どもが家にいる時は、いつも子どものそばにいますか。
48. 子どものほしがるものは無理をしても買ってやるほうですか。
49. 子どもの欠点ばかりが目につくほうですか。
50. 子どもを怒鳴りつけることがありますか。
51. 親をこわい人と思わせるようにしていますか。
52. 親ができなかった望みを、子どもに達成してもらいたいと思っていますか。
53. トイレの始末が一人でできるのに、親が世話をやきますか。
54. 風邪を引かないようにと厚着をさせがちですか。
55. 友達との遊びに、親も仲間入りするほうですか。
56. 何かさせる時に、子どものきげんを取るほうですか。
57. 子どものいうことを取り合わなかったり、聞き流したりすることがありますか。
58. 子どもに八つ当たりすることがありますか。
59. 親の思い通りにさせようとしていますか。
60. 子どものすることを、物足りなく思うことがありますか。
61. 子どもを年齢以下に扱いますか。
62. もっと子どもが食べてくれれば良いと思っていますか。
63. あなたは他人から、子どもをかわいがりすぎると言われますか。
64. とかく子ども本位にすることが多いですか。

以上です。ご協力ありがとうございました。

★ 記入漏れがあるかどうか、一度みてください。ありがとうございました。

アンケートのお願い

山口大学大学院
東アジア研究科（博士課程）
羅 蓮萍

私達は、家族や友達など多くの人と関わり合いながら暮らしています。このような中で、難しい問題に出くわすこともあります。このような際にとる方法は人により年齢により様々だと思います。あなたの場合はどうでしょうか。

また、日常生活の中で、あなたはどのように考え、どのようにしているのでしょうか。

以下にいくつかの質問があります。それぞれの質問には、正しいか間違っているかを問うものではありません。また、無記名式となっておりますので、今後ともあなたにご迷惑をおかけするようなことはありません。

気軽にあなたの本当の考えや気持ちを、ありのままに回答してください。

● あなたのプロフィール

性別： 男 ・ 女 （該当の所に○をつけてください）

年齢： 満 _____ 歳

● 回答方法

回答に当たっては、以下の方法によってご記入ください。

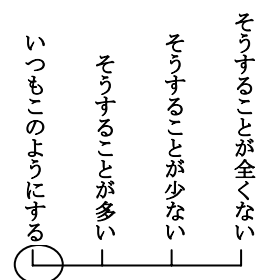
それぞれの質問について、4つの選択肢があります。その中から、あなたの考えや気持ちに一番近いものを、1つ選んで○をつけてください。書き間違いのある時は、×をつけて、正しい所に新たに○をつけてください。

例： ① 落ち込んだ時には好きな本を読む。・・・・・・・・・・・・・・・・

（「いつもこのようにする」ならば、右の図のように、そこに○をつけます。）

② きげんが悪い時には、人に八つ当たりする。・・・・・・・・・・・・・・・・

（最初は「そうすることが多い」と思って、そこに○をつけたが、後に「そうすることが少ない」と考え直した。その時は右の図のように、「そうすることが多い」のところに×をつけて、新たに「そうすることが少ない」の所に○をつけます。）



★ 他の質問項目も同じようなやり方で答えてください。

【付録 2】

同性の友達や先生との問題場面で、現在のあなたの行動傾向についてお聞きします。中には実際に出会ったことがないような場面もあるかもしれませんが、出会った場合を想定してください。また、ここで言う「友達」は、「親友」という意味ではなく、一般的に普通に話せる友人のこととしてイメージしてください。

あまり考えすぎると決められなくなりますから、大体の感じで答えてください。

【場面 1】 ろうかに立っていたあなたにクラスの友達がぶつかってきて、あなたのメガネを落とし、壊れてしまいました。友達は「すみません」と言ってから、立ち去ろうとしました。

1. この後、あなたは以下のように行動する可能性は、それぞれどれくらいありますか。

- ①怒った顔で「弁償しろ！」とどなる。.....
- ②何も言わないが、不満な表情や態度を出す。.....
- ③他の人に不満を言う。.....
- ④その人がいやになって、徐々に付き合わないようにする。.....
- ⑤「ちょっと待って。何とかして」と言う。.....
- ⑥「どうしよう……」と困った顔を見せる。.....
- ⑦先生に話し、解決してもらう。.....
- ⑧今後の二人の関係を考えて、気にしないようにふるまう。.....
- ⑨騒ぎになると恥ずかしいので、気にしないようにふるまう。.....
- ⑩故意ではないと考え、気にしないようにふるまう。.....

いつもこのようにする
 そうすることが多い
 そうすることが少ない
 そうすることが全くない

2. メガネが壊れたことは、あなたにとってどのくらい重要ですか？

- ①とても重要だ ②やや重要だ ③あまり重要じゃない ④全然重要じゃない

3. あなたは、上の①～⑩の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番

【場面 2】 昼休み、好きな本を借りて読んでいると、クラスの友達がそばに来て、「本はやめて、外で遊ぼう」と言いました。あなたは本が読みたくて、一度断りましたが、その人がまだ誘い続けました。

1. この後、あなたは以下のように行動する可能性は、それぞれどれくらいありますか。

- ①怒った顔で「自分で行け！」とどなる。.....
- ②外に出るが、不満な表情や態度を出す。.....
- ③他の人に不満を言う。.....
- ④その人がいやになって、徐々に付き合わないようにする。.....
- ⑤「本が読みたいから、他の人を誘って」と言う。.....
- ⑥「これは今日中に返さないといけない」などと、外で遊べない理由を言う。.....
- ⑦ジャンケンをして、本を読むか外で遊ぶかを定める。.....
- ⑧今後の二人の関係を考えて、本をあきらめて外に出る。.....
- ⑨騒ぎになると恥ずかしいので、本をあきらめて外に出る。.....

いつもこのようにする
 そうすることが多い
 そうすることが少ない
 そうすることが全くない

2. 自分が思うように本を読めないことは、あなたにとってどのくらい重要ですか？

【付録 2】

- ①とても重要だ ②やや重要だ ③あまり重要じゃない ④全然重要じゃない

3. あなたは、上の①～⑨の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番

【場面 3】 あなたはクラスのコンピュータを使うために長い間待ち、やっとあなたの番になりました。あなたはコンピュータを動かし始めましたが、資料を探しに、少しの間離れました。戻ってくると、次の番の友達が、コンピュータの前に座り、「もう僕(私)が使っているのだから、じゃまをしないでよ」と言いました。

そうすることが全くない
 そうすることが少ない
 そうすることが多い
 いつもこのようにする

1. この後、あなたは以下のように行動する可能性は、それぞれどれくらいありますか。

- ①怒った顔で「まだ使っているよ。どけ!」とどなる。.....
- ②何も言わないが、不満な表情や態度を出す。.....
- ③他の人に不満を言う。.....
- ④その人がいやになって、徐々に付き合わないようにする。.....
- ⑤自分が終わってからその人に代わると要求する。.....
- ⑥「自分は後に用事がある」などと、待てない理由を言う。.....
- ⑦ジャンケンして、どちらが先に使うかを決める。.....
- ⑧先生に話し、解決してもらう。.....
- ⑨今後の二人の関係を考えて、何も言わずに待つ。.....
- ⑩騒ぎになると恥ずかしいので、何も言わずに待つ。.....
- ⑪自分が離れたことが悪いので、何も言わずに待つ。.....

2. 割り込まれてコンピュータが使えないことは、あなたにとってどのくらい重要ですか？

- ①とても重要だ ②やや重要だ ③あまり重要じゃない ④全然重要じゃない

3. あなたは、上の①～⑪の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番

【場面 4】 ある日、あなたは教室に入ろうとすると、クラスの友達があなたの悪口を言っているのが聞こえました。

そうすることが全くない
 そうすることが少ない
 そうすることが多い
 いつもこのようにする

1. この後、あなたは以下のように行動する可能性は、それぞれどれくらいありますか。

- ①怒った顔で「うそつき! 謝れ!」とどなる。.....
- ②何も言わないが、不満な表情や態度を出す。.....
- ③他の人に不満を言う。.....
- ④その人がいやになって、徐々に付き合わないようにする。.....
- ⑤その場に行って真実を説明し、その人に謝ってもらう。.....
- ⑥他の時にさりげなく真実を話す。.....
- ⑦先生に話し、解決してもらう。.....
- ⑧今後の二人の関係を考えて、聞こえなかったふりをする。.....
- ⑨騒ぎになると恥ずかしいので、聞こえなかったふりをする。.....
- ⑩悪口を言う人には何も言う必要がないと考え、聞こえなかったふりをする。.....

2. 悪口を言われることは、あなたにとってどのくらい重要ですか？

- ①とても重要だ ②やや重要だ ③あまり重要じゃない ④全然重要じゃない

3. あなたは、上の①～⑩の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番

【付録 2】

4. もしその人が言っているのは、あなたの悪口ではなく、あなたの親友の悪口の場合、あなたは、上の①～⑩の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番
5. もしその人が言っているのは、あなたの悪口ではなく、あなたのきょうだいの悪口の場合、あなたは、上の①～⑩の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番

【場面 5】 あなたのクラスでは、教室のそうじを放課後 2 人で当番することになっています。今日、あなたはもうそうじを始めたのに、相手の友達はまだ知らないふりで他の人と遊んでいます。

1. この後、あなたは以下のように行動する可能性は、それぞれどれくらいありますか。

- ①怒った顔で「早くそうじしろ！」とどなる。・・・・・・・・・・・・・・・・
- ②何も言わないが、不満な表情や態度を出す。・・・・・・・・・・・・・・・・
- ③他の人に不満を言う。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- ④その人がいやになって、徐々に付き合わないようにする。・・・・・・・・
- ⑤「もう時間だよ、早くそうじしよう」と声をかける。・・・・・・・・
- ⑥他の人や他の事を通して、そうじを始めたことを気づかせる。・・・・・・・・
- ⑦先生に話し、解決してもらおう。・・・・・・・・・・・・・・・・
- ⑧今後の二人の関係を考えて、何も言わずに一人でそうじする。・・・・・・・・
- ⑨騒ぎになると恥ずかしいので、何も言わずに一人でそうじする。・・・・・・・・

そうすることが全くない
 そうすることが少ない
 そうすることが多い
 いつもこのようにする

2. 相手がそうじしないことは、あなたにとってどのくらい重要ですか？

- ①とても重要だ ②やや重要だ ③あまり重要じゃない ④全然重要じゃない

3. あなたは、上の①～⑩の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番

【場面 6】 クラスで役割分担を決める時、先生から体育係をやってくれと頼まれた。あなたは他の係りになりたいと思っているので、「ぼく（私）には無理だ」と遠慮しましたが、先生は「君ならできる」と言いました。

1. この後、あなたは以下のように行動する可能性は、それぞれどれくらいありますか。

- ①怒った顔で「いやだ。できない」などと言う。・・・・・・・・
- ②反論はしないが、不満な表情や態度を出す。・・・・・・・・
- ③他人に不満を言う。・・・・・・・・・・・・・・・・
- ④先生がいやになって、徐々に避けていく。・・・・・・・・
- ⑤別の係りになりたいことを先生に伝え、希望通りにしてもらおう。・・・・・・・・
- ⑥体育係になれない理由などを言う。・・・・・・・・
- ⑦他の適任と思う人を先生にすすめる。・・・・・・・・
- ⑧今後の先生との関係を考えて、快く体育係を引き受ける。・・・・・・・・
- ⑨騒ぎになると恥ずかしいので、快く体育係を引き受ける。・・・・・・・・

そうすることが全くない
 そうすることが少ない
 そうすることが多い
 いつもこのようにする

2. 自分の希望通りの係りになれないことは、あなたにとってどのくらい重要ですか？

- ①とても重要だ ②やや重要だ ③あまり重要じゃない ④全然重要じゃない

3. あなたは、上の①～⑩の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番

★ 記入もれがあるかどうか、確かめてください。ありがとうございました。

まず、あなたのご両親、或いは他の保護者の中から、あなたとかかわりが多く、あなたに最も影響を及ぼしている人を、一人選んでください。下に該当する人がない場合は、()内に具体的に記入してください。

次に、その方と、現在のあなたとのかかわり方について、答えてください。

あまり考えすぎると決められなくなりますから、大体の感じで答えてください。

あなたが選んだ保護者 (該当の人に○をつけてください)

父 ・ 母 ・ 祖父 ・ 祖母 ・ おじ ・ おば

・ その他 ()

(以下の質問項目は「親」を取り上げていますが、「親」をあなたが選んだ人に入れ替えて、答えてください)

びつたり当てはまる
 だいたい当てはまる
 あまり当てはまらない
 ぜんぜん当てはまらない

1. 私よりも、他の兄弟(又は友達)のほうが親にほめられると思います。.....
2. 私の親は、私によく小言を言います。.....
3. 親がいいと思うことは、私がいやがってもさせます。.....
4. 私の親は成績のことで、よその子と比べて文句をいいます。.....
5. 自分でできるのに親は、私の身の回りの事を、手伝ってくれます。.....
6. 私の親は、ちょっとしたケガや病気でも、とても心配して手当をしてくれます。.....
7. 私の親は、何かしている時でも、私が頼めばすぐにしてくれます。.....
8. しつこくねだると、私の親は何でも買ってくれます。.....
9. 私の親は、私のために恥ずかしい思いをしていると思います。.....
10. 私の親は、私の成績物や作品を悪く言ったり、笑ったりします。.....
11. 私の親は、私のしたいことを「いけません」とよく言います。.....
12. テストを見せた時、親から「もっと良い成績を取りなさい」と言われます。.....
13. 私の親は、食事の時「たくさんおあがり」「好き嫌いはいけない」
 などやかましく言います。.....
14. 私の親は、手足をきれいにすることや、食物の衛生について、やかましく言います。.....
15. 私の親は、私を小さい子にするように、かわいらがります。.....
16. 私がきげんを悪くすると、親はやさしくしてくれます。.....
17. 私の親は、私との約束をよく忘れます。.....
18. 何かやろうとしても、「あれはだめ」「これはいけない」と親に止められます。.....
19. 私のすることを、親は「ああだ」「こうだ」と悪く言います。.....
20. 私の親は、私が見たいと思うマンガやテレビよりも「もっとよいもの
 を見なさい」と言います。.....
21. 私の宿題や、作ったものには、親が必ず目を通したり、手伝ったりします。.....
22. 私の親は、「外で危ない遊びをしないように」とたびたび言います。.....
23. 私の親は、私が頼めばどんなことでも、いやがらずにやってくれます。.....
24. 私がねだれば、親がどんな高いものでも買ってくれます。.....
25. 私の親は、私の言うことを本気で聞いてくれません。.....
26. 私の親は、私をどなることがあります。.....
27. 私の親は、私のおこづかいを自由に使わせてくれません。(おこづかいを
 もらっていない人は「だいたい当てはまる」に○をつける).....

28. 親がしたくてできなかったことを、私にさせようとしています。
29. 私の親は、学校のことをこまかく私に聞きます。
30. 私の帰りが、いつもより遅いと、親は心配して探しに来ます。
31. 私の親は、私がいないとさびしがります。
32. 勉強したり、お手伝いをしたりすると、親は私にお金や物をくれます。
33. 私の親は、私の成績や作品について何もいいません。
34. 親は私に向かって、私の欠点（悪いところ）を悪く言います。
35. 私は、親の言うとおりにしないと怒られます。
36. 私は、親から「勉強しなさい」とよく催促されます。
37. 私の親は、私のことをいろいろと世話を焼きます。
38. 私の親は、風邪を引かないようにと心配して、注意したりたくさん着物を
着せたりします。
39. 私の親は病気が治ってからも長く大事にかばってくれます。
40. 親はたいいてい、私の意見に賛成してくれます。
41. 私の親は「忙しいからね」などと言って、あまり相手になってくれません。
42. 私の親は、きげんの悪い時、私に当り散らします。
43. 私の親は、こわい人だと思えます。
44. 私は、これ以上できないと思うのに、親は「もっとやれ」と言います。
45. 私が自分であろうと思っているのに、親がしなさいと言います。
46. 私の親は、私の睡眠時間や食事の量が少ないと言って、心配しています。
47. 私の親は、勉強でも遊びでも、私のすることは何でも相手になってくれます。
48. 私の親は、相談しなくてもよいことでも、私に相談してから決めます。
49. 私の親は、私の気持ちをわかってきていないと思えます。
50. 私の家では、バツとして買ってくれなかったり、やってくれなかったりする
ことがあります。
51. 私の親は、言葉遣いや生活の決まりをやかましく言います。
52. 私の親は、私のくせや欠点（悪いところ）を気にして、口うるさく注意します。
53. 私のことで、親が一番熱心になるのは勉強のことです。
54. 私の親は、私に「子どもだけで、遠いところへ行っはいけない」と言います。
55. 私は、親からかわいがられすぎていると思えます。
56. 私の親は、私に何か手伝ってもらいたい時、私のきげんを取ります。
57. 私の親は、私の悪いところばかり見えています。
58. 「あなたは、どうせダメなんだから」と言いながら、親は成績が悪いとしかります。
59. 私の親は、言い訳を聞いてくれません。
60. 私の親は「早く、早く」とよく私を急かせます。
61. 私の親は、私が悪い友達と、悪い遊びをしないようにとうるさく言います。
62. 私の親は、自分でやりなさいと言いながら、最後は手を貸してくれます。
63. 私が苦しんでいる時や、悲しんでいる時は、親は一緒になって心配してくれます。
64. 家で何かするとき、親はたいいてい私の言うとおりにします。

以上です。ご協力ありがとうございました。

★ 記入漏れがあるかどうか、もう一度みてください。ありがとうございました。

アンケートのお願い

山口大学大学院
東アジア研究科（博士課程）
羅 蓮萍

私達は、家族や友達など多くの人と関わり合いながら暮らしています。このような中で、難しい問題に出くわすこともあります。このような際にとる方法は人により年齢により様々だと思います。あなたの場合はどうでしょうか。

以下にいくつかの質問があります。それぞれの質問は、正しいか間違っているかを問うものではありません。結果は研究目的以外には使いません。また、無記名式となっておりますので、今後ともあなたにご迷惑をおかけするようなことはありません。

気軽にあなたの**本当**の考えや気持ちを、ありのままに回答してください。

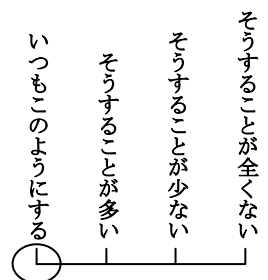
● あなたのプロフィール （該当の所に○をつけてください）

専攻： 文科系 ・ 理科系
性別： 男 ・ 女
年齢： 満 _____ 歳

● 回答方法

回答に当たっては、以下の方法によってご記入ください。

それぞれの質問について、4つの選択肢があります。その中から、あなたの考えや気持ちに一番近いものを、1つ選んで○をつけてください。書き間違いのある時は、×をつけて、正しい所に新たに○をつけてください。



例： ① 落ち込んだ時には好きな本を読む。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
（「いつもこのようにする」ならば、右の図のように、そこに○をつけます。）

② 機嫌が悪い時には、人に八つ当たりする。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
（最初は「そうすることが多い」と思って、そこに○をつきましたが、後に「そうすることが少ない」と考え直した。その時は右の図のように、「そうすることが多い」のところに×をつけて、新たに「そうすることが少ない」の所に○をつけます。）

★ 他の質問項目も同じようなやり方で答えてください。

【付録3】

同性の友達との問題場面で、現在のあなたの行動傾向についてお聞きします。中には実際に出会ったことがないような場面もあるかもしれませんが、出会った場合を想定してください。また、ここで言う「友達」は、「親友」という意味ではなく、一般的に普通に話せる友人のこととしてイメージしてください。

あまり考えすぎると決められなくなりますから、大体の感じで答えてください。

【場面1】 廊下に立っていたあなたにクラスの友達がぶつかってきて、あなたのメガネを落とし、壊れてしまいました。友達は「すみません」と言うてから、立ち去ろうとしました。

1. この後、あなたは以下のように行動する可能性は、それぞれどれくらいありますか。

- | | | | | |
|------------------------------------|------------|-----------|------------|-------------|
| ①怒った顔で「弁償しろ！」と怒鳴る。・・・・・・・・・・・・・・・・ | いつもこのようにする | そうすることが多い | そうすることが少ない | そうすることが全くない |
| ②何も言わないが、不満な表情や態度を出す。・・・・・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ③他の人に不満を言う。・・・・・・・・・・・・・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ④その人がいやになって、徐々に付き合わないようにする。・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑤「ちょっと待って。何とかして」と言う。・・・・・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑥「どうしよう……」と困った顔を見せる。・・・・・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑦今後の二人の関係を考えて、気にしないように振舞う。・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑧騒ぎになると恥ずかしいので、気にしないように振舞う。・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑨故意ではないと考え、気にしないように振舞う。・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |

2. メガネが壊れたことは、あなたにとってどのくらい重要ですか？

- ①とても重要だ ②やや重要だ ③あまり重要じゃない ④全然重要じゃない

3. あなたは、上の①～⑨の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番

【場面2】 昼休み、好きな本を借りて読んでいると、クラスの友達がそばに来て、「本はやめて、外で遊ぼう」と言いました。あなたは本が読みたくて、一度断りましたが、その人がまだ誘い続けました。

1. この後、あなたは以下のように行動する可能性は、それぞれどれくらいありますか。

- | | | | | |
|---|------------|-----------|------------|-------------|
| ①怒った顔で「自分で行け！」と怒鳴る。・・・・・・・・ | いつもこのようにする | そうすることが多い | そうすることが少ない | そうすることが全くない |
| ②外に出るが、不満な表情や態度を出す。・・・・・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ③他の人に不満を言う。・・・・・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ④その人がいやになって、徐々に付き合わないようにする。・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑤「本が読みたいから、他の人を誘って」と言う。・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑥「これは今日中に返さないといけない」などと、外で遊べない理由を言う。・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑦ジャンケンをして、本を読むか外で遊ぶかを定める。・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑧今後の二人の関係を考えて、本をあきらめて外に出る。・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑨騒ぎになると恥ずかしいので、本をあきらめて外に出る。・・・・ | _____ | _____ | _____ | _____ |

2. 自分が思うように本を読めないことは、あなたにとってどのくらい重要ですか？

- ①とても重要だ ②やや重要だ ③あまり重要じゃない ④全然重要じゃない

3. あなたは、上の①～⑨の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番

【付録 3】

【場面 3】 あなたはクラスのコンピュータを使うために長い間待ち、やっとあなたの番になりました。あなたはコンピュータを動かしました、資料を探しに、少しの間離れました。戻ってくると、次の番の友達が、コンピュータの前に座り、「もう僕(私)が使っているのだから、じゃまをしないでよ」と言いました。

いじめるようにする
そうすることが多い
そうすることが少ない
そうすることが全くない

1. この後、あなたは以下のように行動する可能性は、それぞれどれくらいありますか。

- ①怒った顔で「まだ使っているよ。どけ!」と怒鳴る。.....
- ②何も言わないが、不満な表情や態度を出す。.....
- ③他の人に不満を言う。.....
- ④その人がいやになって、徐々に付き合わないようにする。.....
- ⑤自分が終わってからその人に代わると要求する。.....
- ⑥「自分は後に用事がある」などと、待てない理由を言う。.....
- ⑦ジャンケンして、どちらが先に使うかを決める。.....
- ⑧今後の二人の関係を考えて、何も言わずに待つ。.....
- ⑨騒ぎになると恥ずかしいので、何も言わずに待つ。.....
- ⑩自分が離れたことが悪いので、何も言わずに待つ。.....

2. 割り込まれてコンピュータが使えないことは、あなたにとってどのくらい重要ですか？

- ①とても重要だ ②やや重要だ ③あまり重要じゃない ④全然重要じゃない

3. あなたは、上の①～⑩の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番

【場面 4】 ある日、あなたは教室に入ろうとすると、クラスの友達があなたの悪口を言っているのが聞こえました。

いじめるようにする
そうすることが多い
そうすることが少ない
そうすることが全くない

1. この後、あなたは以下のように行動する可能性は、それぞれどれくらいありますか。

- ①怒った顔で「嘘つき! 謝れ!」と怒鳴る。.....
- ②何も言わないが、不満な表情や態度を出す。.....
- ③他の人に不満を言う。.....
- ④その人がいやになって、徐々に付き合わないようにする。.....
- ⑤その場に行って真実を説明し、その人に謝ってもらう。.....
- ⑥他の時にさりげなく真実を話す。.....
- ⑦今後の二人の関係を考えて、聞こえなかった振りをする。.....
- ⑧騒ぎになると恥ずかしいので、聞こえなかった振りをする。.....
- ⑨悪口を言う人には何も言う必要がないと考え、聞こえなかった振りをする。.....

2. 悪口を言われることは、あなたにとってどのくらい重要ですか？

- ①とても重要だ ②やや重要だ ③あまり重要じゃない ④全然重要じゃない

3. あなたは、上の①～⑨の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番

4. もしその人が言っているのは、あなたの悪口ではなく、あなたの親友の悪口の場合、あなたは、上の①～⑨の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番

5. もしその人が言っているのは、あなたの悪口ではなく、あなたのきょうだいの悪口の場合、あなたは、上の①～⑨の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番

【付録 3】

【場面 5】 あなたのコースでは、実験室の後片付けは 2 人で当番することになっています。今日、あなたはもう片付け始めたのに、相手の友達はまだ知らない振りです。他の人と遊んでいます。

1. この後で、あなたは以下のように行動する可能性は、それぞれどれくらいありますか。

- ① 怒った顔で「早く片付け！」と怒鳴る。.....
- ② 何も言わないが、不満な表情や態度を出す。.....
- ③ 他の人に不満を言う。.....
- ④ その人がいやになって、徐々に付き合わないようにする。.....
- ⑤ 「もう時間だよ、早く片付けしよう」と声をかける。.....
- ⑥ 他の人や他の事を通して、片付け始めたことを気づかせる。.....
- ⑦ 今後の二人の関係を考えて、何も言わずに一人で片付ける。.....
- ⑧ 騒ぎになると恥ずかしいので、何も言わずに一人で片付ける。.....

い	ち	ち	そ	そ
い	ち	ち	そ	そ
い	ち	ち	そ	そ
い	ち	ち	そ	そ
い	ち	ち	そ	そ
い	ち	ち	そ	そ
い	ち	ち	そ	そ
い	ち	ち	そ	そ

2. 相手が片付けないことは、あなたにとってどのくらい重要ですか？

- ① とても重要だ ② やや重要だ ③ あまり重要じゃない ④ 全然重要じゃない

3. あなたは、上の①～⑧の行動の中で、どれが最も良いと思いますか。 () 番

あなたは、人との葛藤場面に出会った際、以下のような様々な結果について、一般的にはどの程度に望みますか。

- ① 私は、相手と良い関係を維持したい。.....
- ② 私は、相手の悪い行為を罰したい。.....
- ③ 私は、相手から尊重され、丁寧に扱ってもらいたい。.....
- ④ 私は、自分の名誉、体面、評判を回復したい。.....
- ⑤ 私は、自分の自由やプライバシーを守りたい。.....
- ⑥ 私は、金銭的に有利な結果を得たい。.....
- ⑦ 私は、相手とお互いに理解し合いたい。.....
- ⑧ 私は、相手の考えや行動を変えたい。.....
- ⑨ 私は、相手から公平に扱われたい。.....
- ⑩ 私は、自尊心やプライドを回復したい。.....
- ⑪ 私は、自分の仕事、勉強、予定を進めたい。.....
- ⑫ 私は、弁償してもらいたい。.....

強	ち	あ	全
く	よ	ま	く
望	つ	り	望
む	と	望	ま
	望	ま	な
	む	な	い

以上です。ご協力ありがとうございました。

★ 記入漏れがあるかどうか、もう一度みてください。ありがとうございました。

问 卷 调 查

这是一个关于对待孩子的方式和意识的调查。通过调查，可以客观地了解自己对待孩子的态度，以利于建立更好的亲子关系。

调查的结果仅供研究所用。请轻松自在地、实事求是地回答你真正的态度和想法。

谢谢合作！

回答时，请按以下方法填写

首先，在家人中选择一位与孩子交流多，影响大的人填表。如果是下面没有列举出来的人，请在括号中具体写出来。

然后，请就填表人对在幼儿园的这位孩子的态度和想法予以回答。

考虑太多的话会难以决定，所以请根据大致的感觉回答。

每一个问题有4个选择项，请从中选出与你的最接近的一个，并画上圈。

填表人：（请在相应的地方打√）

父 · 母 · 爷爷 · 奶奶 · 外公 · 外婆
· 其他（ ）

	几乎完全符合	有点符合	不太符合	几乎完全不符合
1. 被孩子缠着时觉得烦吗？				
2. 批评孩子时会打孩子吗？				
3. 让孩子做事时会不说明理由直接让孩子做吗？				
4. 鼓励孩子不要落后于人吗？				
5. 对于孩子的日常生活，因看不过眼而帮忙吗？				
6. 孩子的一点小伤小病，也会小题大做吗？				
7. 你的孩子，大人陪着的时候比和小朋友一起玩的时候多吗？				
8. 经常满足孩子的要求吗？				
9. 总觉得和这个孩子不投缘吗？				
10. 爱对孩子唠叨吗？				
11. 你认为好的事，孩子不愿意也会叫他做吗？				
12. 孩子的事，最花精力在对将来的学习有用的地方吗？				
13. 孩子吃饭的时候，你会照顾过多吗？				
14. 你相当注意孩子的个人卫生吗？				
15. 你常常抱孩子、背孩子、或和孩子脸贴脸吗？				
16. 孩子撒娇的话，你就会投降吗？				
17. 你有过“没这个孩子的话就好了”的念头吗？				
18. 你会对孩子制作的东西泼冷水吗？				
19. 即使孩子想做的事，父母觉得不好的话，也会常常禁止吗？				
20. 对孩子不如别人的地方，你会再三唠叨吗？				
21. 对孩子的游戏方法，你也会插嘴吗？				
22. 你不敢放孩子一个人出去玩吗？				
23. 你认为只有孩子才是你生存的意义吗？				
24. 孩子一要求，你就会马上予以帮助吗？				
25. 你为孩子感到过丢脸吗？				

【付録4】

26. “那个不行”“这个不可以”等，对孩子的行动予以禁止的时候多吗？ . . .
27. 你不会听孩子的辩解吗？ . . .
28. 你对孩子的能力感到不满吗？ . . .
29. 孩子书写或制作的时候，即使他不要求，你也会主动帮助他吗？ . . .
30. 你总是担心孩子会被欺负而经常询问吗？ . . .
31. 孩子被小朋友欺负，或受老师批评的时候，你总是护着孩子吗？ . . .
32. 叫孩子做事的时候，会对他说“请帮帮忙”吗？ . . .
33. 不管孩子在哪里，不管孩子玩什么，你都不会介意吗？ . . .
34. 有过只把孩子留下，而父母出去玩的时候吗？ . . .
35. 大人看来毫无价值的东西的话，即使孩子想要也不会给吗？ . . .
36. 因为学习或训练，孩子玩的时间少吗？ . . .
37. 有过孩子要自己穿脱衣服，你却去帮忙的时候吗？ . . .
38. 你总是担心孩子会有什么意外吗？ . . .
39. 为了孩子即使牺牲自己也很满足吗？ . . .
40. 即使定好的事，孩子不愿意的话也会顺着他吗？ . . .
41. 你不太重视和孩子的约定，以至于忘掉吗？ . . .
42. 为了让孩子听话，你威吓过吗？ . . .
43. 你严格要求孩子的言行举止吗？ . . .
44. 为了孩子的发展，你让他做超过其年龄或能力的事吗？ . . .
45. 为了孩子不要失败，你会事先提醒吗？ . . .
46. 你会把事故的可怕之处，夸大其词说给孩子听吗？ . . .
47. 孩子在家的时候，你总是陪在他身边吗？ . . .
48. 孩子想要的东西，即使有困难也会买给他吗？ . . .
49. 你总是只盯着孩子的缺点吗？ . . .
50. 你大声责骂过孩子吗？ . . .
51. 你让孩子怕你吗？ . . .
52. 自己没有实现的心愿，希望孩子来完成吗？ . . .
53. 孩子已经会自己上厕所了，可你还是去帮他吗？ . . .
54. 为了孩子不要感冒，你老是让他多穿衣服吗？ . . .
55. 孩子和小朋友玩的时候，你也会参加吗？ . . .
56. 让孩子做事的时候，你会哄孩子开心吗？ . . .
57. 对于孩子的要求，你会不加理会或听而不闻吗？ . . .
58. 你拿孩子撒过气吗？ . . .
59. 你让孩子按你期待的那样做吗？ . . .
60. 你觉得孩子做得还不够吗？ . . .
61. 你总把孩子当更小的孩子对待吗？ . . .
62. 你总希望孩子吃得更多点吗？ . . .
63. 别人说你太宠爱孩子吗？ . . .
64. 总是以孩子为中心吗？ . . .

非常感谢您的合作！最后，请检查一下是否有漏答。谢谢！

请答问卷

在日常生活中，我们经常要与家人或朋友等许多人交往。在交往中，也会碰到各种各样的问题。这时应对的方式会因人、因年龄而异。对你来说，你会怎样做呢？

问卷采用不记名方式，调查的结果供研究所用。请轻松自在地、实事求是地回答你真正的想法和感受。

谢谢合作！

● 你的简介

性别： 男 · 女 （请在相应的地方打√）

年龄： 满 _____ 岁

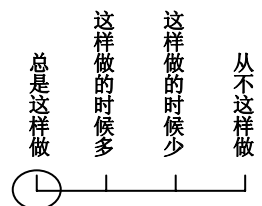
● 回答方法

回答时，请按以下方法填写。

每一个问题有4个选择项，请从中选出与你的想法和感受最接近的一个，并画上圈。如果画错的话，打上×，再在正确的地方重新画上圈。

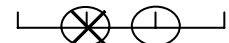
例： ① 情绪消沉的时候读喜欢的书。.....

（如果“总是这样做”的话，如右图所示，在该处画上圈。）



② 心情坏的时候，会迁怒人。.....

（最初认为“这样做的时候多”，在该处画了圈。后来改变了想法，认为“这样做的时候少”。这时就如右图所示，在“这样做的时候多”的地方打上×，再在“这样做的时候少”的地方画上圈。）



* 其他问题，也请用同样方式回答。谢谢！

与同性同学或老师的冲突场面时，现在的你，会怎样做？其中有些场面，也许你实际上不会遇到，请假设你遇上之时。这里说的“同学”，不是指“亲密好友”，请以一般的能聊在一起的普通同学为准。

考虑太多的话会难以决定，所以请根据大致的感觉回答。

【场面 1】 你站在走廊上，被班上的一个同学撞了一下，你的眼镜掉到地上，摔坏了。那个同学说了“对不起”后，准备离开。

1. 之后，你采取下面各种行动的可能性，各是怎样？

- ① 生气地喊“你赔!”。.....
- ② 什么也不说，但表情或态度很是不满。.....
- ③ 跟其他人表示自己的不满。.....
- ④ 不喜欢那个人，渐渐地不再交往。.....
- ⑤ 说“等一下。你想个办法吧。”.....
- ⑥ 做出为难的表情“怎么办呀……”。.....
- ⑦ 跟老师说，让老师解决。.....
- ⑧ 考虑到今后两人的关系，所以表现出不介意的样子。.....
- ⑨ 觉得吵吵闹闹的话不好意思，所以表现出不介意的样子。.....
- ⑩ 那个人不是故意的，所以表现出不介意的样子。.....

	总是这样做	这样做的时候多	这样做的时候少	从不这样做
①				
②				
③				
④				
⑤				
⑥				
⑦				
⑧				
⑨				
⑩				

2. 眼镜被摔坏的事，对你来说有多重要？（请在相应的地方打√）

- ① 非常重要
- ② 比较重要
- ③ 不太重要
- ④ 完全不重要

3. 你认为上面①——⑩项的行动中，哪项最好？ 第（ ）项

【场面 2】 中午休息，正借了喜欢的书在看时，班上的一个同学过来说“别看书了，去外面玩吧”。你想看书，拒绝了。但那个同学还接着叫你去。

1. 之后，你采取下面各种行动的可能性，各是怎样？

- ① 生气地喊“你自己去!”。.....
- ② 虽然出去玩，但表情或态度很是不满。.....
- ③ 跟其他人表示自己的不满。.....
- ④ 不喜欢那个人，渐渐地不再交往。.....
- ⑤ 说“我想看书，你叫别人吧”。.....
- ⑥ 说“这本书必须在今天之内还”之类不能出去玩的理由。.....
- ⑦ 划拳来决定看书还是出去玩。.....
- ⑧ 考虑到今后两人的关系，所以放弃看书一起出去玩。.....
- ⑨ 觉得吵吵闹闹的话不好意思，所以放弃看书一起出去玩。.....

	总是这样做	这样做的时候多	这样做的时候少	从不这样做
①				
②				
③				
④				
⑤				
⑥				
⑦				
⑧				
⑨				

2. 不能按自己的意愿看书的事，对你来说有多重要？（请在相应的地方打√）

- ① 非常重要
- ② 比较重要
- ③ 不太重要
- ④ 完全不重要

3. 你认为上面①——⑨项的行动中，哪项最好？ 第（ ）项

【付録 5】

【场面 3】 为了使用班里的计算机你等了好长时间。轮到你后，刚启动计算机，却为了拿笔记本，稍稍离开了一下。返回的时候，下一个同学坐在计算机前，说“我已经在用了，不要妨碍我！”

1. 之后，你采取下面各种行动的可能性，各是怎样？

- | | 总是这样做 | 这样做的时候多 | 这样做的时候少 | 从不这样做 |
|--------------------------|-------|---------|---------|-------|
| ①生气地喊“我还在用呢。让开！”。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ②什么也不说，但表情或态度很是不满。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ③跟其他人表示自己的不满。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ④不喜欢那个人，渐渐地不再交往。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑤要求自己用完之后再换那个人。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑥说“等一下有事”之类不能等待的理由。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑦跟老师说，让老师解决。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑧划拳来决定谁先使用。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑨考虑到今后两人的关系，所以什么也不说等着。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑩觉得吵吵闹闹的话不好意思，所以什么也不说等着。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑪只怪自己不该离开，所以什么也不说等着。 | _____ | _____ | _____ | _____ |

2. 被插队不能使用电脑的事，对你来说有多重要？（请在相应的地方打√）

- ①非常重要 ②比较重要 ③不太重要 ④完全不重要

3. 你认为上面①——⑪项的行动中，哪项最好？ 第（ ）项

【场面 4】 有一天，正要进教室的时候，听见你班上的同学正在说你的坏话。

1. 之后，你采取下面各种行动的可能性，各是怎样？

- | | 总是这样做 | 这样做的时候多 | 这样做的时候少 | 从不这样做 |
|-----------------------------------|-------|---------|---------|-------|
| ①生气地喊“你撒谎！快道歉！”。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ②什么也不说，但表情或态度很是不满。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ③跟其他人表示自己的不满。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ④不喜欢那个人，渐渐地不再交往。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑤走过去说明真相，要求那个人道歉。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑥在别的时候不经意地说明事实的真相。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑦跟老师说，让老师解决。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑧考虑到今后两人的关系，因此装作没听见的样子。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑨觉得吵吵闹闹的话不好意思，因此装作没听见的样子。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑩觉得对喜欢说人坏话的人，任何话都不值得说，因此装作没听见的样子。 | _____ | _____ | _____ | _____ |

2. 被人说坏话的事，对你来说有多重要？（请在相应的地方打√）

- ①非常重要 ②比较重要 ③不太重要 ④完全不重要

3. 你认为上面①——⑩项的行动中，哪项最好？ 第（ ）项

4. 如果那个人说的不是你的坏话，而是你的好友的坏话的时候，你认为上面①——⑩项的行动中，哪项最好？

第（ ）项

5. 如果那个人说的不是你的坏话，而是你的兄弟姐妹的坏话的时候，你认为上面①——⑩项的行动中，哪项最好？

第（ ）项

【付録 5】

【场面 5】 在你的班上，每天下课后都安排两个人值日打扫教室。今天，你已经开始打扫了，可另外那个同学好像没看见似的，还在跟其他的人玩。

1. 之后，你采取下面各种行动的可能性，各是怎样？

- ①生气地喊“快点打扫!”。.....
- ②什么也不说，但表情或态度很是不满。.....
- ③跟其他人表示自己的不满。.....
- ④不喜欢那个人，渐渐地不再交往。.....
- ⑤招呼一声“到时间啦，快点打扫吧。”.....
- ⑥通过别的人或者别的事，来引起那个人的注意。.....
- ⑦跟老师说，让老师解决。.....
- ⑧考虑到今后两人的关系，所以什么也不说一个人打扫。.....
- ⑨觉得吵吵闹闹的话不好意思，所以什么也不说一个人打扫。.....

	总是这样做	这样做的时候多	这样做的时候少	从不这样做
①				
②				
③				
④				
⑤				
⑥				
⑦				
⑧				
⑨				

2. 对方不好好扫地的事，对你来说有多重要？（请在相应的地方打√）

- ①非常重要 ②比较重要 ③不太重要 ④完全不重要

3. 你认为上面①——⑨项的行动中，哪项最好？ 第（ ）项

【场面 6】 在班上决定班委的时候，老师要你担任体育委员。因为你想担任的别的班委，所以客气地拒绝说“我干不了”。可是老师说“你一定干得好的”。

1. 之后，你采取下面各种行动的可能性，各是怎样？

- ①生气地说“不!当不了!”。.....
- ②不再反驳，但表情或态度很是不满。.....
- ③跟其他人表示自己的不满。.....
- ④不喜欢那个老师，渐渐地避开。.....
- ⑤向老师说明想担任别的班委，要求老师答应自己。.....
- ⑥提出各种不能担任体育委员的理由。.....
- ⑦向老师推荐其他合适的人。.....
- ⑧考虑到今后和老师的关系，所以爽快地答应当体育委员。.....
- ⑨觉得吵吵闹闹的话不好意思，所以爽快地答应当体育委员。.....

	总是这样做	这样做的时候多	这样做的时候少	从不这样做
①				
②				
③				
④				
⑤				
⑥				
⑦				
⑧				
⑨				

2. 不能担任自己希望的班委的事，对你来说有多重要？（请在相应的地方打√）

- ①非常重要 ②比较重要 ③不太重要 ④完全不重要

3. 你认为上面①——⑨项的行动中，哪项最好？ 第（ ）项

请检查一下是否有漏答。 谢谢！

首先，在你父母或其他监护人中，选择一位与你交流多，对你影响大的人。如果是下面没有列举出来的人，请在括号中具体写出来。
然后，请回答那个人与现在的你相处的方式。
考虑太多的话会难以决定，所以请根据大致的感觉回答。

你所选择的监护人（请在相应的地方打√）

父 · 母 · 爷爷 · 奶奶 · 外公 · 外婆
· 其他（ ）

	完全符合	大致符合	不太符合	完全不符合
1. 我认为我的兄弟姐妹(或朋友)比我更得到父母的表扬。				
2. 我的父母常常责备我。				
3. 父母认为好的事，即使我不喜欢也叫我做。				
4. 我的父母拿我的成绩与别的孩子比，并对我表示不满。				
5. 尽管我自己能做，但我的父母也会帮我料理生活起居的事。				
6. 一点小伤小病，我的父母也会很担心，帮我处理。				
7. 我的父母，即使在做事时，只要我提出要求马上就会帮我。				
8. 执拗地要求的话，我的父母无论什么都会买给我。				
9. 我认为我的父母因为我而感到丢脸。				
10. 我的父母对于我的成绩或作品会挖苦笑话。				
11. 我的父母对我想做的事常说“不许”。				
12. 给父母看试卷的时候，父母总是说“要取得更好的成绩”。				
13. 我的父母，吃饭的时候总是唠叨着“多吃点”“不要偏食”等。				
14. 我的父母，对洗净手脚或食物的卫生等，总是唠叨不停。				
15. 我的父母把我当小小孩一样地宠着。				
16. 我心情不好的时候，我的父母对我体贴和善。				
17. 我的父母常常忘记与我的约定。				
18. 无论我想作什么，都被父母“那个不行”“这个不可以”而阻止。				
19. 对于我做的事，我的父母总是“这个”“那个”地说难听的话。				
20. 对我想看的漫画或电视节目，父母总是说“去看点别的更有意义的东西”。 . . .				
21. 对于我的作业或制作的东西，我的父母一定会过目或帮我。				
22. 我的父母常常说“不要在外边玩危险的游戏”。				
23. 我的父母，只要我要求，无论怎样的事都乐于帮我做。				
24. 执拗地要求的话，无论怎样贵的东西我的父母都会买给我。				
25. 我的父母不会认真倾听我说话。				
26. 我的父母，有过冲我嚷叫的事。				
27. 我的父母，不让我自由地使用我的零花钱。 (没有零花钱的人在“大致符合”的地方打上圈)				
28. 父母没有完成的愿望，希望我来实现。				

【付録 5】

- 29. 我的父母，会详细地询问我学校的事。 | | | | |
- 30. 我回家比平时晚的时候，父母就会担心而来找我。 | | | | |
- 31. 我不在的话，我的父母会感到寂寞。 | | | | |
- 32. 我学习或帮做家务的话，我的父母就会给我钱或东西。 | | | | |
- 33. 对于我的成绩和作品，我的父母从来不说什么。 | | | | |
- 34. 对于我的缺点，我的父母会当我的面说得很难听。 | | | | |
- 35. 我不照父母说的做的话，他们会很生气。 | | | | |
- 36. 我经常被父母催促“快去学习”。 | | | | |
- 37. 我的父母对我多方照顾。 | | | | |
- 38. 我的父母为了不让我感冒，经常提醒我或让我多穿衣服。 | | | | |
- 39. 我的父母在我病好之后好长一段时间都对我大加爱护。 | | | | |
- 40. 我的父母，一般都会赞成我的意见。 | | | | |
- 41. 我的父母总说忙，不太陪我。 | | | | |
- 42. 我的父母，心情不好的时候会拿我撒气。 | | | | |
- 43. 我很怕我父母。 | | | | |
- 44. 我觉得已经尽了最大努力了，父母却要我“更加努力”。 | | | | |
- 45. 我自己已经准备做了，我的父母还说“快去做”。 | | | | |
- 46. 我的父母，常说我的睡眠时间或饭量少，而担心着。 | | | | |
- 47. 无论是学习还是玩，我的父母总会陪着我。 | | | | |
- 48. 我的父母，不必商量的事也会和我商量之后再决定。 | | | | |
- 49. 我认为我的父母不了解我的想法或感觉。 | | | | |
- 50. 在我家里，有过作为惩罚而不给我买东西或不帮我的事。 | | | | |
- 51. 我的父母，对我的语言谈吐或生活习惯唠叨不停。 | | | | |
- 52. 我的父母，很在意我的坏习惯或缺点，总是唠叨要我纠正。 | | | | |
- 53. 对于我的事，我的父母最热心的是学习。 | | | | |
- 54. 父母对我说“小孩子一个人不许去远的地方”。 | | | | |
- 55. 我认为父母对我过于宠爱。 | | | | |
- 56. 我的父母，想叫我帮忙的时候会哄我开心。 | | | | |
- 57. 我的父母光看我的缺点。 | | | | |
- 58. 我的父母一方面说“你反正不行”，一方面我成绩不好的话又会责备我。 | | | | |
- 59. 我的父母不会听我的辩解。 | | | | |
- 60. 我的父母经常催我“快点，快点”。 | | | | |
- 61. 我的父母总是唠叨我不要交坏朋友，不要玩不好的游戏。 | | | | |
- 62. 我的父母一方面说“你自己做”，最后却总是会帮我。 | | | | |
- 63. 我苦恼或伤心的时候，我的父母会陪我一起承担。 | | | | |
- 64. 家里要做什么的时候，我的父母一般会按我说的那样做。 | | | | |

非常感谢你的合作！

最后，请检查一下是否有漏答。谢谢！

请答问卷

在日常生活中，我们经常要与家人或朋友等许多人交往。在交往中，也会碰到各种各样的问题。这时应对的方式会因人、因年龄而异。对你来说，你会怎样做呢？

问卷采用不记名方式，调查的结果供研究所用。请轻松自在地、实事求是地回答你真正的想法和感受。

谢谢合作！

● 你的简介 (请在相应的地方打√)

专业： 文史类 · 理工类

性别： 男 · 女

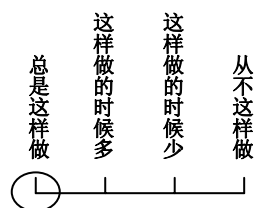
年龄： 满 _____ 岁

● 回答方法

回答时，请按以下方法填写。

每一个问题有4个选择项，请从中选出与你的想法和感受最接近的一个，并画上圈。如果画错的话，打上×，再在正确的地方重新画上圈。

例： ① 情绪消沉的时候读喜欢的书。
(如果“总是这样做”的话，如右图所示，在该处画上圈。)



② 心情坏的时候，会迁怒人。
(最初认为“这样做的时候多”，在该处画了圈。后来改变了想法，认为“这样做的时候少”。这时就如图右图所示，在“这样做的时候多”的地方打上×，再在“这样做的时候少”的地方画上圈。)



*** 其他问题，也请用同样方式回答。谢谢！**

与同性同学的冲突场面时，现在的你，会怎样做？其中有些场面，也许你实际上不会遇到，请假设你遇上之时。这里说的“同学”，不是指“亲密好友”，请以一般的能聊在一起的普通同学为准。考虑太多的话会难以决定，所以请根据大致的感觉回答。

【场面1】 你站在走廊上，被班上的一个同学撞了一下，你的眼镜掉到地上，摔坏了。那个同学说了“对不起”后，准备离开。

1. 之后，你采取下面各种行动的可能性，各是怎样？

- | | 总是这样做 | 这样做的时候多 | 这样做的时候少 | 从不这样做 |
|--------------------------------|-------|---------|---------|-------|
| ①生气地喊“你赔!”..... | | | | |
| ②什么也不说，但表情或态度很是不满..... | | | | |
| ③跟其他人表示自己的不满..... | | | | |
| ④不喜欢那个人，渐渐地不再交往..... | | | | |
| ⑤说“等一下。你想个办法吧。”..... | | | | |
| ⑥做出为难的表情“怎么办呀……”..... | | | | |
| ⑦考虑到今后两人的关系，所以表现出不介意的样子..... | | | | |
| ⑧觉得吵吵闹闹的话不好意思，所以表现出不介意的样子..... | | | | |
| ⑨那个人不是故意的，所以表现出不介意的样子..... | | | | |

2. 眼镜被摔坏的事，对你来说有多重要？（请在相应的地方打√）

- ①非常重要 ②比较重要 ③不太重要 ④完全不重要

3. 你认为在上面的行动中，哪项最好？ 第（ ）项

【场面2】 中午休息，正借了喜欢的书在看时，班上的一个同学过来说“别看书了，去外面玩吧”。你想看书，拒绝了。但那个同学还接着叫你去。

1. 之后，你采取下面各种行动的可能性，各是怎样？

- | | 总是这样做 | 这样做的时候多 | 这样做的时候少 | 从不这样做 |
|--------------------------------|-------|---------|---------|-------|
| ①生气地喊“你自己去!”..... | | | | |
| ②虽然出去玩，但表情或态度很是不满..... | | | | |
| ③跟其他人表示自己的不满..... | | | | |
| ④不喜欢那个人，渐渐地不再交往..... | | | | |
| ⑤说“我想看书，你叫别人吧”..... | | | | |
| ⑥说“这本书必须在今天之内还”之类不能出去玩的理由..... | | | | |
| ⑦划拳来决定看书还是出去玩..... | | | | |
| ⑧考虑到今后两人的关系，所以放弃看书一起出去玩..... | | | | |
| ⑨觉得吵吵闹闹的话不好意思，所以放弃看书一起出去玩..... | | | | |

2. 不能按自己的意愿看书的事，对你来说有多重要？（请在相应的地方打√）

- ①非常重要 ②比较重要 ③不太重要 ④完全不重要

3. 你认为在上面的行动中，哪项最好？ 第（ ）项

【付録6】

【场面3】 为了使用班里的计算机你等了好长时间。轮到你后，刚启动计算机，却为了找资料，稍稍离开了一下。返回的时候，下一个同学坐在计算机前，说“我已经在用了，不要妨碍我！”

1. 之后，你采取下面各种行动的可能性，各是怎样？

- | | 总是这样做 | 这样做的时候多 | 这样做的时候少 | 从不这样做 |
|------------------------------------|-------|---------|---------|-------|
| ①生气地喊“我还在用呢。让开！”。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ②什么也不说，但表情或态度很是不满。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ③跟其他人表示自己的不满。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ④不喜欢那个人，渐渐地不再交往。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑤要求自己用完之后再换那个人。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑥说“等一下有事”之类不能等待的理由。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑦划拳来决定谁先使用。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑧考虑到今后两人的关系，所以什么也不说等着。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑨觉得吵吵闹闹的话不好意思，所以什么也不说等着。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑩只怪自己不该离开，所以什么也不说等着。 | _____ | _____ | _____ | _____ |

2. 被插队不能使用电脑的事，对你来说有多重要？（请在相应的地方打√）

- ①非常重要 ②比较重要 ③不太重要 ④完全不重要

3. 你认为在上面的行动中，哪项最好？ 第（ ）项

【场面4】 有一天，正要进教室的时候，听见你班上的同学正在说你的坏话。

1. 之后，你采取下面各种行动的可能性，各是怎样？

- | | 总是这样做 | 这样做的时候多 | 这样做的时候少 | 从不这样做 |
|---|-------|---------|---------|-------|
| ①生气地喊“你撒谎！快道歉！”。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ②什么也不说，但表情或态度很是不满。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ③跟其他人表示自己的不满。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ④不喜欢那个人，渐渐地不再交往。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑤走过去说明真相，要求那个人道歉。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑥在别的时候不经意地说明事实的真相。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑦考虑到今后两人的关系，因此装作没听见的样子。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑧觉得吵吵闹闹的话不好意思，因此装作没听见的样子。 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑨觉得对喜欢说人坏话的人，任何话都不值得说，因此装作没听见的样子。 | _____ | _____ | _____ | _____ |

2. 被人说坏话的事，对你来说有多重要？（请在相应的地方打√）

- ①非常重要 ②比较重要 ③不太重要 ④完全不重要

3. 你认为在上面的行动中，哪项最好？ 第（ ）项

4. 如果那个人说的不是你的坏话，而是你的好友的坏话的时候，你认为在上面的行动中，哪项最好？

第（ ）项

5. 如果那个人说的不是你的坏话，而是你的兄弟姐妹的坏话的时候，你认为在上面的行动中，哪项最好？

第（ ）项

【付録6】

【场面5】 在你班上，实验室的善后整理是两人一组，大家轮值的。今天，你已经开始整理了，可另外那个同学好像没看见似的，还在跟其他人玩。

1. 之后，你采取下面各种行动的可能性，各是怎样？

- | | | | | |
|-----------------------------|-------|---------|---------|-------|
| | 总是这样做 | 这样做的时候多 | 这样做的时候少 | 从不这样做 |
| ① 生气地喊“快点整理!” | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ② 什么也不说，但表情或态度很是不满 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ③ 跟其他人表示自己的不满 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ④ 不喜欢那个人，渐渐地不再交往 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑤ 招呼一声“到时间啦，快点整理吧。” | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑥ 通过别的人或者别的事，来引起那个人的注意 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑦ 考虑到今后两人的关系，所以什么也不说一个人打扫 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑧ 觉得吵吵闹闹的话不好意思，所以什么也不说一个人打扫 | _____ | _____ | _____ | _____ |

2. 对方不好好整理的事，对你来说有多重要？（请在相应的地方打√）

- ① 非常重要 ② 比较重要 ③ 不太重要 ④ 完全不重要

3. 你认为在上面的行动中，哪项最好？ 第（ ）项

遇上和人冲突的时候，对于以下的各种结果，一般来说你是怎样期待的？

- | | | | | |
|----------------------|-------|-------|-------|-------|
| | 非常期待 | 比较期待 | 不太期待 | 完全不期待 |
| ① 我希望和对方保持良好关系 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ② 我希望惩罚对方的恶劣行为 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ③ 我希望得到对方的尊重和礼貌对待 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ④ 我希望恢复自己的名誉、体面和评介 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑤ 我希望拥有自己的自由和隐私 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑥ 我希望得到金钱方面的有利结果 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑦ 我希望和对方达到相互理解 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑧ 我希望改变对方的想法或行为 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑨ 我希望得到对方的公平对待 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑩ 我希望恢复自尊心或自豪感 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑪ 我希望继续自己的工作、学习和原定计划 | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ⑫ 我希望得到赔偿 | _____ | _____ | _____ | _____ |

非常感谢你的合作！

最后，请检查一下是否有漏答。谢谢！

あ と が き

今回、博士課程に入り、学位論文の執筆に当たるようになったのは、数多くの方々のご理解とご支援のおかげにほかならない。以下遅まきながら、記して感謝を申し上げたい。

とりわけ、本論文の主体をなす調査に解答してくださった幼稚園児の親、児童、生徒、学生の皆様、調査にご理解、ご協力してくださった方々に、衷心より厚く御礼申し上げます。調査にご協力いただいた諸団体や関係者のお名前を記し、改めて感謝の意を表したいと存じます。

- * 中国： 江西省吉安県立保育園
江西省吉安県城関小学
江西省吉安県文山学校
江西省吉安県立中学
江西省南昌大学

中国の保育園から高校までの調査においては、私の姉の羅安萍があらかじめ幼稚園や学校の協力を得てくれました。大学の調査においては、南昌大学外国語学院の刘琼教授がアンケートの配布と回収をしてくださいました。

- * 日本： 幼稚園（保育園）： 宇部市立博愛幼稚園（園長：由井桂子）
宇部市聖和幼稚園（園長：原田真道）
宇部市慈光幼稚園（園長：阿川明子）
宇部市第二慈光幼稚園（園長：阿川明子）
宇部市小羽山幼稚園（園長：藤田広子）
宇部市公立神原保育園（園長：浅野安子）
宇部市公立新川保育園（園長：福本真理子）
宇部市私立琴崎保育園（園長：白石正典）
宇部市私立命信寺保育園（園長：小幡睦子）
宇部市私立あそか保育園（園長：兼安英乗）

- 小学校： 光市山口大学附属光小学校（校長：森田俊介）
宇部市立藤山小学校（校長：徳永幸枝）
宇部市立新川小学校（校長：由井桂子）
宇部市立琴芝小学校（校長：坪井憲一）
宇部市立上宇部小学校（校長：渡邊哲郎）
宇部市立神原小学校（校長：木村芳則）

- 中学校： 山口市山口大学附属光中学校（校長：武田賢治）
山口市立平川中学校（校長：徳本忠嗣）
下関市山口県立中等教育学校
(初代校長：町田政勝、二代校長：永富康文)
宇部市立常磐中学校（校長：白石千代）

- 高校： 宇部高等学校（校長：金田重之）
宇部中央高等学校（校長：橋田章）
下関第一高等学校（校長：町田政勝）

大学： 国立山口大学

下関第一高等学校における予備調査は、町田政勝校長と原本悦美先生がアンケートの配布と回収をしてくださいました。下関市山口県立中等教育学校と下関第一高等学校における本調査も原本悦美先生がアンケートの配布と回収をしてくださいました。

大学生へのアンケート配布と回収は、ほとんど次に記した山口大学の各学部の各コースやゼミの主任先生方がしてくださいました。教育学部の堂野佐俊、福田隆眞、古賀和利、澤本章、松田信夫、池田孝夫、糸長雅弘、高橋俊章、杉山緑、関口靖広、吉村誠、岩崎好成、杉浦崇夫、桑原昭徳、友定啓子、人文学部の古荘真敬、真木隆行、辻正二、瀬瀬厚、更科慎一、高木智見、小谷典子、湯川洋司、阿部泰記、林伸一の各先生方、理学部の内藤博夫、原純一郎、松野浩嗣、村上柳太郎、石黒勝也、宮田雄一郎の各先生方、経済学部の塚田広人、寺地伸二、橋本寛、成富敬、有村貞則、中田範夫、澤喜司郎、尹春志、陳禮俊、李海峰、豊嘉哲、平中貫一、柳澤旭、三間地光宏、石龍潭の各先生方、工学部の佐伯隆、牧野哲、樋口隆哉、河原利江（真木利江）の各先生方でした。

つきましては、アンケートの翻訳に大きな力を戴いた中国上海交通大学外国語学院の計鋼さん、日本山口大学医学部の崔丹さん、本研究科の先輩の周彬さんの諸氏に御礼を申し上げます。

そして、何より、博士論文の執筆に当たるようになったのは、偏に一、二年次の主指導教官堂野佐俊先生、三年次の主指導教官名島潤慈先生、副指導教官の福田隆眞先生、西村正登先生のご寛恕、ご指導のお蔭にほかならない。入学まで心理学に触れていなかった私に、辛抱強く研究の方法、論文の書き方などきめ細かいご指導をしてくださったり、精神的に辛いときにはカウンセリングをしてくださったり、怠惰や弱気を吐く時には叱咤激励をしてくださったり、ご多忙にも拘らず、いつも快く拙稿に赤ペンで訂正してくださったり、世間知らずで、あわてんぼうの私のミスや不本意な失礼などを大目に見てくださったりなど、何から何までお世話になり、心から深く感謝申し上げます。

また、基盤演習、プロジェクト演習、特別講義の授業でご指導をいただいた東アジア研究科の諸先生方、心理学や統計学について色々教えてくださった教育学部の福田廣、熊谷信順、田邊敏明の諸先生方、手取り足とりで研究の姿勢や論文の書き方を叩き込んでくださった修士課程の指導教官林伸一先生、範培培をはじめ東アジア研究科の学生の方々、修士の時から今日に至るまで様々な面で支えてくださった学務課、留学生課、図書館や資料室の方々に、ここに紙面を借りて、皆様に心からの御礼を申し上げます。

修士課程の時から、数え切れないほどの方々の暖かいご支援をいただき、私がここまで歩んでまいりました。今後とも自己実現とともに微力ながら社会に恩返ししていきたいと思っております。これからも夢を追いつつ、引き続き皆様のご支援、ご指導を賜りたいと思います。

最後に、故郷で私の帰りを辛抱強く待っている両親、私の代わりに息子を愛し、息子を幸せに育てられている姉一家、懸命に自立し、研究に明け暮れた私を暖かく見守ってくれ、心の支えになってくれている息子たちに、心より感謝し、この論文を捧げたい。